THE KAIZO

改造

貳月号

1922

ロマン・ロオラン作

クレランボオ

野尻清彦氏譯
古田清次氏装

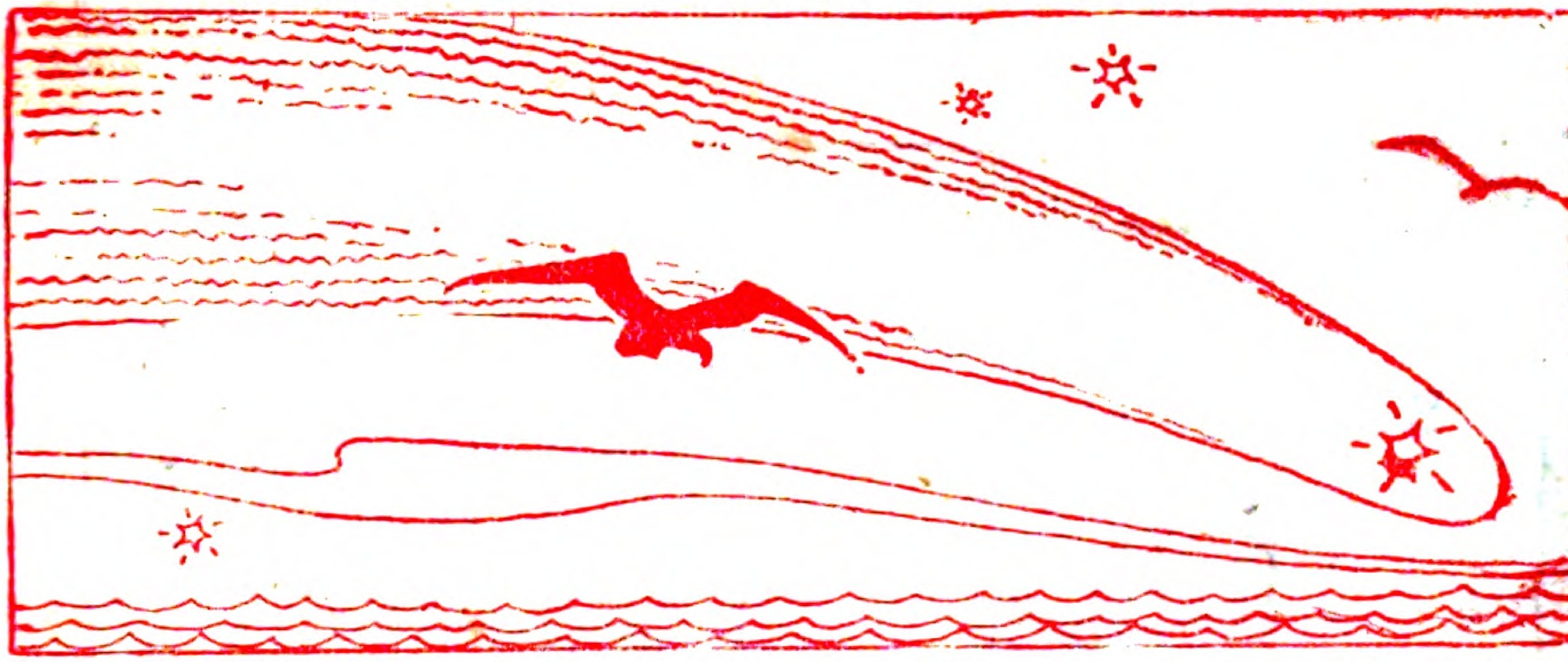
◇四六判四二九頁◇
◇定價壹圓九拾錢◇
◇送料金拾錢◇

新刊

著者が瑞西に亡命中五ケ年の星霜を閲して完成したものが此長篇である。著者はその序文に於て『自叙傳としての穿鑿は御免を蒙る』と辯明を余儀なくしてゐる程に本書は彼れの思想と人格とを全的に、如實に盛つてゐる。『自由を信づるもの、戰爭中に於ける閲錄』として歐洲大戰はその陰影を投げて本書を蔽ふてゐるが、本書の主題は集群的精神の深淵に於ける個人精神の痲痺である。苦惱の裡に在る自由なる魂の告白、錯迷、苦悶、爭闘の歴史である。飜譯は素より原文直譯で原文にあるリトムとニユアンスを移し入れることにも細心の注意を拂つてゐる。

東京牛込神樂町二
叢文閣
電話番町四八一二番
振替東京四二八八九





改造 二月號 目次



ニストルレム・ハミルトン夫人著　原田實氏譯

（最新刊）

愛の使徒エレン・ケイ

定價貳圓拾錢
送料金拾五錢

「戀愛と結婚」「兒童の世紀」の著者として世界的名聲を博して居るエレン・ケイ女史の詳細なる傳記である。豐純珠玉の如く而かも勇健活達にして眞に新しき婦人の理想的代表者たる面目が躍如として窺はれる。本書を讀む者にして始めてエレン・ケイの思想を正解することが出來よう。

（最新刊）

エミール・ゾラ原著　松本泰氏譯

アベ・ムウレの罪

（四六判細活字印刷 定價貳圓也送料金拾五錢）

持戒堅固の青年美僧、朝な夕な聖壇上に額づきて祈禱を捧ぐ。而かも冷たき聖壇果して何を齎らすか。異性の血汐に生きて意義ある人生に眼覺めんと血の滲む意志の爭鬪をつづけ、自由の天地に翺翔して遂には征服しがたき大自然力に結末を告ぐ。蓋しゾラが傑作中の傑作なり。

片上伸氏著

思想の勝利

デモクラシーの思想的意義を闡明し、文藝思想上の新精神を高唱して親切透徹を極む

價壹圓八拾錢　送料金拾五錢

田中王堂氏著

創造と享樂

人生何をか創造し何をか享樂すべき王堂先生深邃の學識を以て其大思想を吐露せらる

價貳圓參拾錢　送料金拾五錢

ウエスターマーク著　島村民藏氏譯

人間結婚史

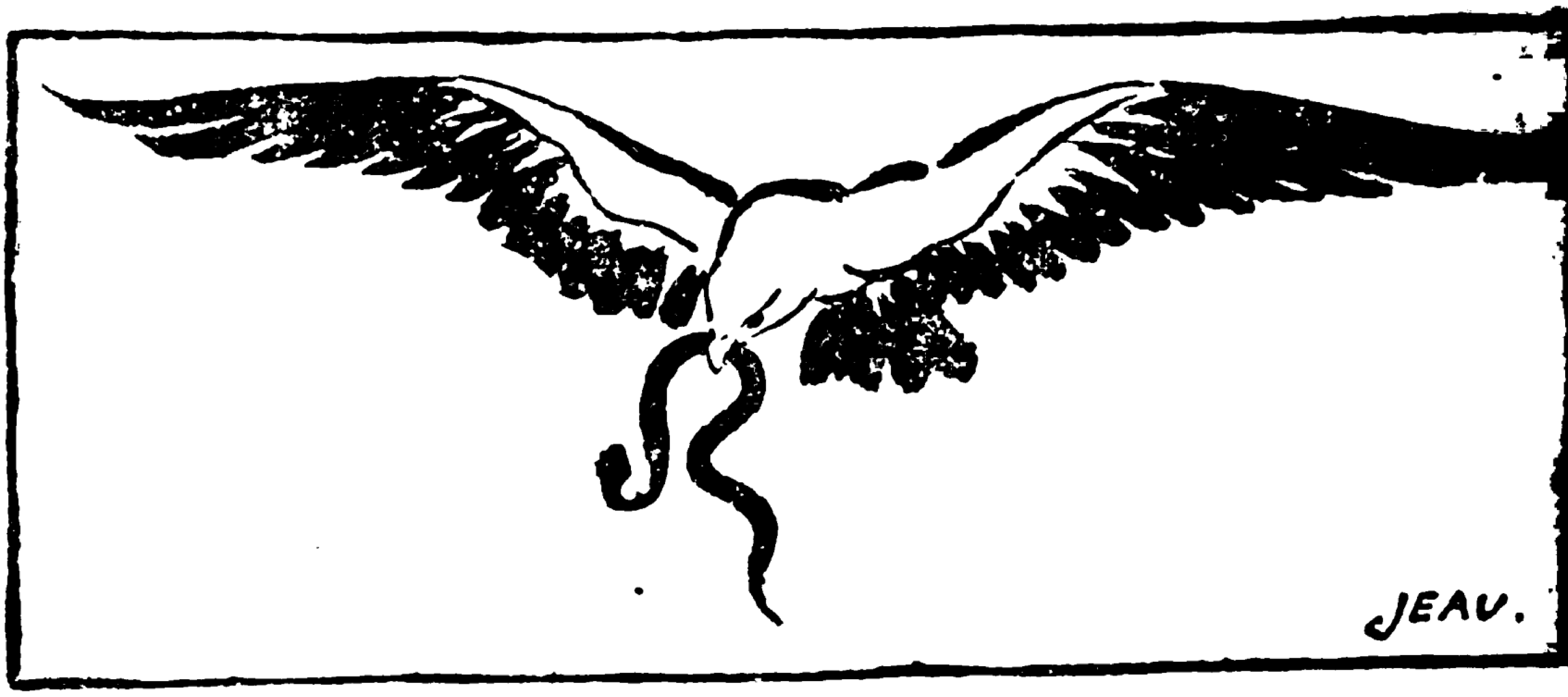
倫敦大學の敎授たりし著者が、該博の學識を以て人間結婚の發達を叙述せる名著なり

價參圓貳拾錢　送料金拾九錢

東京市麴町區飯田町壹の貳　株式會社　天佑社　（電話九段長一一七三番　振替東京一〇一二八番）

神戸又新日報

高知新聞



二(改造二月號)二

判官の思想生活につき

裁判官は人情本を讀まぬもの、近代の思想から孤立しておるものと思はれておる、そして無知の代表であり、冷酷の標本の如き觀があり、そしてそれが現行法に忠實なるものと誤解されておる、輿論を尊重し、人情の機微に觸れた判決をすればそれが社會に阿媚追從したものと擯斥せらるるが如き傾向がある、頃者發表せられたる中岡艮一の豫審調書を一讀して吾人は少からず動かさるゝものがあつた、それは山崎豫審判事の調べ方がこの思想未熟の青年に對して懇切を極め、殆んど人情の機微を穿ち得たかの情理兼ね具はるものであつた事である、東洋哲學通有の惻隱の至情に達したものであつた。我々は嗜みある山崎氏の風懷に對して少からず敬意を表する。

しかしながら、山崎氏と云はず、一般の司法官が此の惻隱の情以上に進展し得るかが疑問である、儒教の感化、佛教の感化から我國人はこの惻隱の情あるものに酷く傾斜しておるが我々は惻隱の心、即ち一段も二段も智德の劣れるものに對して起さるる情操と混同さるる事がなくば幸だと思ふ、現代社會組織の幾多の誤謬と、偏狹な教に囚はれたる思想から出發した刑罰觀は現代人の期待を裏切ることが多い、殺人が人類の悲慘事であると共に死刑及其他の斷罪が人生に及ぼす影響はどんなであるかも考へて見なくてはならぬ。我々はあらゆる意味に於て判官諸氏が現行法を了解する以上に、宗教の三大主流たる佛、耶、儒の思想を一通り研究し、そして現代思想の大要には通曉して貰はなくては眞理と、現行法と、人道とに依據した徹底な、公平な裁判が出來ないと思ふからである、大學を出て、人情本を漁つた位では人々の神とも頼む裁きは出來かねる。

すべての人權を左右する位置にある司法官の採擇は行政官その他以上に嚴選し待遇も從つて一般官吏の上におくべきた、それだけ判官諸氏も自重と自[illegible]、それだけ社會に重大なる影響を及ぼす事を鑑みて、自己の思想生活に於ける落伍者とならざる樣に深甚の注意をして貰ひたい。

佛蘭西文學論



ポオル・クロオデル

諸君。

有ゆる學校、有ゆる大學の委員等によつて代表せられたる東京の教養ある青年の士が、今日、私を繞つて示めされたる深厚なる歡迎の表顯に對して、私は無用な謙遜の常例的な抗言をもつてお答へはしまい。諸氏が文學者ポオル・クロオデルをして佛蘭西大使へ報ずることを許るさるゝ喜悦と、深き感動の謝意との表示をもつてしようとする。

青年諸士、諸士のみが寛厚にも卒先發意せられたるこの賀會へ、諸士が密集列席せらるゝことは、佛

蘭西文學が單なる故人等の殘骸でもなく、圖書館の沈默の裡で人々が物好きに探し求むる既往の時運の文書でもなく、佛蘭西はなほ諸士に對して、生きたる心靈が他の生きたる心靈となすべき一つの使命を持つてゐることを示し、而してこの使命は、海の彼方より、中間の有ゆる障碍を越えて、此處に、東方文明がその至上の華を咲かしめたこの日本に、既にその使命を聽く可く用意せられたる耳を見出したことを證するのである。

諸君、諸君の知らるゝ如く、文學は單なる消閑の娛樂ではない、我々の夢想の發露でもない、綴字の幻術でもない。文學は科學と同じく我々の心意の本質的要求に應じ、我々を取卷く過去現在の事象の外觀へ、或る一定の秩序を與ふるものである。我の生活であるこの日常の生活の中に於て、我々は原因を見ずして、結果を見る。我々は、各自がその個人的經驗よりは遠き根源を終ひには構成し得可きが如く案配する消散し易き感覺や、纖小なる事實やの不斷の流れに運び去らるゝのである。文學の第一の目的は何によりも先きに、この永久遁避の狀態にある世界を定住せしめる。我々の把持を脫るゝこの流轉境に代うるに、心意の徐々に探究し得べき畫面をもつてすることである。かくて第二段としては、この畫面を制限することである、同種の秘なる連鎖が之れ等の間に在ると思はるゝ若干の事柄を、私が形象と呼ぶところのものをそれ等の間に構成するところの事柄を、それ等を取り卷き、それ等に先立ち、また續くものより引き離し、かくして、それ等の堆積よりして、心意の一見して掴み得る如き統合をつくる

ことである。最後に、文學者の技巧は、寧ろ我々が、希臘の語源に從つて、一層正當に、「詩人」と呼び、創造者と呼ぶものゝ、技巧は、この畫面の內部に於て、本質を明瞭に据えることであり、この光點を繞つて、相互に從屬してゐる陰翳の全調を綿密に案配し、かくして「意義」を構成することであり、終ひには、現實の原始料笨な筆趣に代うるに、組笨立つた眞實の完成したる表現をもつてすることである。官能によつて實證せられたる外觀より、心意によつて鑑味せらるゝ「意義」が解脫せられて、こゝに世界は「讀む」べきものとなる。

諸君。私がいま用ひたこの形容詞こそは、有ゆる文學の目的を略說してゐるのである。文學の目的は我々に讀むことを教えることである。一の文句を作らんがために、主格と動詞と補足語を苦しんで綴り合はせる小學兒童の勉强より、美妙な階調をつくり出すために、宇宙の四方から物象影像を探し求むる大詩人の仕事に到るまで、作家の目的は同一である。即ち秩序を構成することであり、動物的感覺に代うるに、整理者の、支配者の、創造者の眼を以てすることであり、我々をして各の物象より、その意味を、犧牲によりて爾後脫出せしめられたるその影像を、それ等に意義を與ふる語を、解放せしめることである。かくて我々の無限の語彙のを構成する他の各語に對するこの移動的な創生的な影像の効果を實驗することである。我々が讀むことを學ぶのは書物の中に於てゞある。而して若し佛蘭西の書物が、世界の總ての人々の中に於て、等しき愛好に遭遇するとするならば、また若し他の國語の中で、特に佛蘭西の書物が、有ゆる年齡、有ゆる階級、有ゆる時代の人々に持てはやさるゝとするならば、それは、そ

れ等の書物が、たゞにみそれ等の著者の技能や、それ等が論ずる題目、それ等が提供する畫面の興味、異質性・魅力に負ふのではなく、一般的の素質に負ふてゐるのであるといふ事を想像すべきである。この素質、これは、何よりも以上に、それ等の書物が人間の心意の滋料であるといふことであり、それ等の書物が讀者に、單に一の光景を示めすのみでなく、一の法式を供するといふことであり、それ等の書物が讀者をして、その著者が一時たりとも實現した秩序の中に融合せしめて、讀者に秩序を立てるを敎へるといふことである。

總てを包括し思惟し、有ゆる結果（語の二重の意味に於て）の階列し來る連絡を辿つて、一つの原因または原理に溯らうとする佛蘭西精神のこの傾向、これは恐らく、我々が、希臘羅馬の典型に從つて爲した我々の古典の構成に負ふてゐるといふよりは、寧ろ我々の地理學上また人種學上の位置に負ふてゐるのであらう。佛蘭西はその國土の上で有ゆる氣候の見本を綜括してゐる。そして、その歷史は、その周圍の種々なる國民及び、自己に及ぼす樣々な相反する傾向のたゞ中で、或る劇作家が有ゆる「地位」と呼んだところの、自づと、自己の傳來した所有を防ぎ擴張せずにはゐられなかつた政治上、敎理上、軍事上の有ゆる結合を研究し、想像する手段を給し、必要を課したのであつた。佛蘭西は與へられたる地位の、前もつて定められたる運命の、機具でも奴隷でもなかつた。佛蘭西は活動してゐる文明の有ゆる變化と斷えず和合して行かねばならなかつた。この文明に對するその使命はいつも調和と均衡とを持

ち來たすことであつた。また他方面から、佛蘭西人は心からの個人主義者である、總ての權威を忍ぶことが出來ないで、それとは、明示的であれ、暗示的であれ、常に改廢すべき一つの契約をも結びはしなかつたといふことを注示してもそれはまさしく眞實である。佛蘭西革命は民主的な運動ではなかつた。それは貴族の特權階級への全人民の合法的昇達であつた。我々の國民的融合の中へ吸收せられたる數多き不和合な人種の繼承者たる各佛蘭西人は、常に各自に一つの小さい統治權を確立して、人々が「意見」と呼ぶ、散在はしては居れど全く力強き、一種の法廷的權威の下で、隣接せる統治權等と外交上、法理上の不斷の處理の途に立つた。而してこの「意見」の存在してゐたことは、第一カペティクアンの時代に於て、百年戰爭の時代に於て旣に立證することが出來る。この佛蘭西の及び佛蘭西市民の二重の地位が我々の文學に影響を及ぼしたとて駭くには當らない。また佛蘭西文學が各人をして學理に心を用ひしめ、極端に紛糾した問題に解決を供するため、可成り寛大な原理を解放せしめるやうになさしめたとて、これまた駭くを要しない。文學は我々にあつては優秀者の一の遊戲ではなかつた。文學は全人民の必須物であつた、總てに對しまた總ての前に開かれたる不斷の討議であつた。丁度智力の樣々な能力の間に行はるゝ討議と同じであつた。

これ等の考察は、十六世紀の終りより、十九世紀の初めに到るその發達の初期に於ける我々の思考的作物が持つた殆ど全く道德的であり、智的であるところの性質を了解せしめるに足りる、佛蘭西の著作

家にとつては、いつもその關するところは、說明することよりは描き出すことの方が遙かに少ない。複雜せる社會のたゞ中に置かれ、異常に豐富な美妙な行動の連續の中で、その周圍の境遇によつて解脫せしめられたる佛蘭西人にとつて、第一に大切なることは、自己自身に於て明かに觀ることであつた。この硏究はいつも一つの實行目的を持つてゐた、そして二世紀の間、我々の文學全體は、行動の一つの廣大な論理を立てるためよりほかにはなかつたと言つてもさしつかへなからう。この時代の著作家等は三つのクラスに分けられた。第一は、モンテエニュよりジュベエル及びメエス・ドゥ・ビランへ、ブウルダルウよりジョゼフ・ドゥ・メエトルへの連續、ラ・ブルュイエールと、ヴォルナルギュを經過し、この繼續のなかには、パネカルや、モンテスキユや、ヴォルテエルや、ジャン・ジャック・ルウソオやの晴やかな樣々な稱名が輝いてゐる、これは人間と社會とを外部より判じたのであつた。これは何人かゞ目に見えぬ聽集の前で語ることであり、その思想を、我々の注意と、同意とを喚起し實例をもつて保持しつゝ、表示的秩序で啓表することである。その二は、言ふべくんば、比喩の手段によつて着手した。彼等は、我々の思想と情緒との爭ひを、我々の眼前へ、假想的行爲の中へ招致せられたる人物を用ひて、再現した。ラ・フォンテーヌの如き我々の詩人、我々の初期の物語作家、我々の古典劇の作家等、それ等の名はこゝにあげるまでもないことである。やがて第三の範疇に屬する作家等、我々の短き諺言格言の作家に似通つてゐる彼等は、或る思想或る情緒を、その有ゆる光景に於て、有ゆる角面に於て光彩陸離たらしむるために、

またそれ等に刺激強い、生々とした對照的の形式を與え、かくして自づとそれ等を人の心底へ深く刻み込まんがために考査の源泉を開いたこれが我々の先人等がまさしく詩歌と呼びなした領域である。この時代に於てこそ、幾代の努力はこの詩歌を、最も複雑した、最も美妙な情緒と思想との開發に使用せしめ、佛蘭西語をして今日廣く世界の使用に供せしめ、不思議にも輝く光りを得せしめたのである。何よりもまづ、一つの國語が明瞭であらんがためには、その國語の使用する素材即ち語が的確なる意義を持たねばならぬ、即ち公的に合法的に限定せられねばならぬ。第二には、章句が思想の順序階段を尊重するやうに構成せられねばならぬ、かくすれば主要命題は偶發命題のために閉息せらるゝ懼れはなく、また他方より見れば、言語の節調は變化多様にして、柔かみに富み、時の全調は豐富であつて、主想と、その主想を遺憾なく發揚せしめる從想とを結び付ける極端に複雑した關係に相應することが出來るのである。最後に、その章句の中で、智的精神的の要素が、準備の足りない不當な素材の含む障碍に遭遇してはならない、その音聲が意義を害ねてはならない。その思想が讀者の耳または呼吸を抱擁する生命と反撥してはならない。

十九世紀の初頭に於て我々の文學は一の革命を經過した。言語は、私は繰り返して言ふが、一團の作家等の必要に應ずる爲ではなく、ペンを手にして、幾代の間、思ひ煩つた全人民の必要に應ずるために精撰の高い度にまで到達し、十八世紀末の或る作家等と共に、衰落の徴候を呈し初め、全く異つた使用

に滿足せねばならなくなつた。事實上、我々の文學の舊來の德、私が先刻、說明的、學理的、心理的と呼んだそのものは存在を止めはせず、作物を、傑作を生むことを止めはしなかつた。アドルフを、ドミニクを、トックヴィルやテエヌの名を　ポオル・ブウルジエ氏の物語を、疑ひもなく諸君に知られてゐる現代作家マルセル・プルウスト氏の興味深い作物の全半を擧ぐれば足りる。併し他の需要が現はれて來た。十九世紀は特に發見の世紀であつた。そして、往時の狹き境界を越えて、それが發見したものは、世界である、幾多の世界でさへもある。地理上の世界、科學の世界、歷史の世界。事實　影像、新らしい文書などの此の集積の中に於て、文學的の精神活動は自己を見出さねばならなかつた。詩人或は物語作者は學者の如く因果の連鎖を打立てるやうに追究せねばならない筈はなかつた。けれど形をなさない一つの集積を想像的に取り更へて、的確な外劃で制限し粘定し、その總積が一の構想をなしてゐる主要特性に還元せしめた一の額面を作らねばならなかつた。特質ある概說を先取し得るがために、現實及び歷史より作り出したこの廣大な算表的勞作こそは、我々の浪漫派、パルナシアン、現實主義者等の意を用ひたところであり、それが近時に到るまで、最近過ぎ去つた世紀の主要なる課業であつた、我々の初期の歷史家、物語作家等の稍々速成的な古代衣裳より、我々の短詩(ソンネ)の作者等の細心な貴牌(メダイヨン)に到るまで、我々の想像の廻廊は徐々に飾具せられて來た。有ゆる光景は描寫せられ、分類せられ、我々の記憶の需要に順應せしめられた　佛蘭西語は、私が先刻指示したその同じ素性によつて、その章句の構成の柔順性に

負ふと同じく、その語彙の力強さと隆起力とのために、暫し不定な試みをなした後で、嘗てそれが情緒思想の表示に適して居つた如く、影像の喚起にも同じく適するものたるを證するに到つたのである。

私は、この短小時間に、諸君をして我々の文學の完全なる畫面を、とめしめることが出來たなぞとは、假りにも思ひはしない。私はたゞ、流派や時代の有ゆる變化を通じて、この廣大な肢體に生氣を與へることをやめなかつた共通精神を諸君に感ぜしめたいと思つたゞけである。これは探究と活動との精神であり、若し斷じて言ひ得べくんば、それは對象を支配し、それを了解しまた了解せしめ、總ゆる事象を心意に從屬せしめたき要求である。或る氣弱な讀者等は、我々の書籍の中をさまで廣くもなく涉獵して、懷疑と喪心との印象を持ち返へる。これくらゐ不當なことは有り得ない。確に、佛蘭西の作家は眞實に對しては遠慮はない。彼は自己の立てる企劃の、自己の主張する論題の究極まで行くことを專門的義務と見なす。併し佛蘭西文學は、若しそれが、人間の精神は物質に對しては權威を持ち、この地上はたゞに我々の動物的感覺の使行に屬するのみならず、我々の智力が再認すべき使命のために持つてゐるところのこの秩序に屬するといふ原理を基本としてゐないならば、存在しないでもあらう。

かくして、我々の文學より立ち現はるゝ精神は喜悅の精神である、そしてこの喜悅は人間の心情が包持し得る最高の喜悅であり、世界は一の意義を有するが故に、世界は人間に屬してゐると認むる人の喜悅である。

喜悦の精神、また信任の精神、而してこの信任の教訓をもつてこそ私は、日本を救ふために勇敢にも決意を示した人々の後繼者等に話掛け、また、舊き自國の傳習を斷つのに有ゆる自己等の利益を祟くも犧牲にしたその精神をもつてこそこの講演を終ふるべきが私には適當と思はれる　各國民の歷史に於て屢々或る時機がある、その時機には、その民族の精神と運命とに忠實であらんがためには、嘗てはその價値を有し效力を持つてゐた或る形式も、最早や生存を續けて行く可き生命の要求と合致しない場合、如何にしてそれ等を勇敢に破碎すべきかを知らなければならない。斯る時機は佛蘭西にとつては千七百八十九年に來たつた、日本にとつてはそれが千八百六十八年に來たつた。かくて、文學の歷史に於ても此種の時機があると私は思ふ。我々の祖先等に對して敬意を表し、彼等が我々に與えたる實例に忠實ならんための最上の方法は、我々が、勇氣に於て、我々の企劃の堅實偉大さに於て、彼等に劣らざるものたることを示すことである。我々は彼等と等しく、彼等が爲し得たことを評價する。我々もまたそれを等しく爲し能ふ。しかも何故にそれ以上は爲し得なからうか。確に、彼等が我々に與えた教訓は失はれはしない。併し、若し我々が、彼等の遺産で無力な寄食者として生活するに飽き足らず、彼等の教訓の中、最も大切なる「豪膽」を忽せにするならば、我々は斯る父祖の子孫とは言はれないであらう。

賀川豊彦著

死線を越えて

中巻 太陽を射るもの

◇四六版布装天金函入◇

◇寫眞「太陽を射るもの」壹葉◇

定價金貳圓八拾錢

◇書留送料金貳拾錢◇

東京芝櫻田備前町

改造社

振替東京八四〇二

『死線を越えて』の中巻として賀川豊彦氏の『太陽を射るもの』が改造社から出版された。私は新年劈頭に此者の批評を書くべく回り合せたを喜ぶ。

米國モント・クレーア公園に一基の銅像がある。それは亞米利加印度人の少年が太陽に向つて弓をひいてゐる像で、側に彼の父が見守つて居る。

百麥拾

其の意味は、亞米利加印度人は其の位を嗣ぐ者に必ず弓を射らしめる。そして其矢が太陽に屆くものでなければ位を嗣がせない。愛子は今太陽に向つて矢を放つた。緊張した父と子の目は矢が太陽に屆くか否かを視て居るのである。

賀川君は此の太陽を射るものを執つて此書の題とした。彼は此の如き理想を有つて奮闘して居る。彼が貧民窟に住んで、罪惡と墮落と貧困と病氣に圍まれながら、此現在の社會を明るい、幸福な社會となさんとする努力は、恰も亦印度人の少年が太陽を射る如く、到底實現されぬ理想であるかもしれぬ。彼は時としては絶望の叫びを禁じえぬ、『光明は何時來るであらうか？貧民窟の暗は、反つて、一層暗いてはないか？』と書いて居る。

此書は、賀川君が矢張り貧民の中に住んで、彼等を幾分なりとも助けて遣らんとする努力を描寫する事に始まり、中途彼が米國に留學し、米國に於ける勞働運動に關係した事を記し、最後に日本に歸つて、社會の惡組織から來る貧民窟は、勞働組合を作つて社會を改造する事に依つて始めて救ふ事が出來ると云

版發賣

ふ、結論に達する迄の記録である。彼が勞働運動の動機は貧民窟を救はねばならぬと云ふ決心から生れて居る。動機が貧民に對する愛であつて、資本家に對する憎悪でない。憎悪を生命とするマルクスの階級闘爭に對して、彼が基督教的の無抵抗主義もこゝから生れる。

無抵抗主義は其必然の論理として、憎悪の力よりは、寧ろ愛の力を信ずる。人間の醜き利己心、限りある爭闘力に依つて、成し遂げ得られざる事でも、貴き犠牲の精神、限りなき愛の力でなし遂げ得らるゝものと信ずる。例ひそれが太陽を射る如く殆どなし遂げ得られざものであつても、彼は、赤印度人の少年の如く緊張した心で不斷の努力を續けるのである。此處に人生を明るくする大なる希望が生れて來る。

マルクスの階級闘爭の行止まりは露西亞である。勞働者の利己心と、資本家に對する憎悪とを以て生命とする社會運動に採つては、此位の處が適當な落付き處であらう。マルクスの唯物主義に慊らぬ勞働運動者は新たなる理想を要求する。それは、

秋晴

新居格

數寄屋橋で新宿行の電車に乘つて四谷見附で降りた。四谷見附の夜景は私に冴え〴〵したいゝ氣持を與えて呉れた。取分け南の方を見た時堪らなくよかつた。電燈のきらめくのが如何にも鮮麗だつた。地上の星の散亂…そうした誇張した感情さえ浮んだ。東宮御所の上には下弦の月が淡いが、しかし清新な感じを以つて光つて居てそれが木立の黒い影といゝ對照を見せてゐた。私は毎日同じやうな時間に家を出て、同じやうな時間に、しかも電車さえ同じ交通系統のものを利用して單調な機械的な往復を繰返して居た事を思ひ出した。その所爲でもあつたものか久振りに見た夜の四谷見附が綺麗に見えて私の氣持を輕るくした知合ひのおでん屋で一本つけて貰つていゝ氣持になつて神樂坂まで來ると私が蕩兒であつた頃お稽古に行つてた哥澤の師匠の妻君にゆくりなくも逢つた。

「おや××さん、まあ、お久し振りですことどうして被居しつて」と彼女は調子よく切り出して師匠は丁度家に居ますからお立寄り下さいましと云ふのであつた。私も道樂をして居る時ならいざ知らず。今のやうに貧乏をして居る上に何と云つても時代の觸氣が遊藝なぞは勿論の事高雅な趣味を愛する事さえ氣が咎めるやうになつてはそんな遊藝の師匠の事なぞはとつくの昔に忘れて仕舞つて居たのだがほろ醉ののんびりした氣持が何と云ふ譯もなしに數年目に師匠の家の格子をまたがせたのであつた。

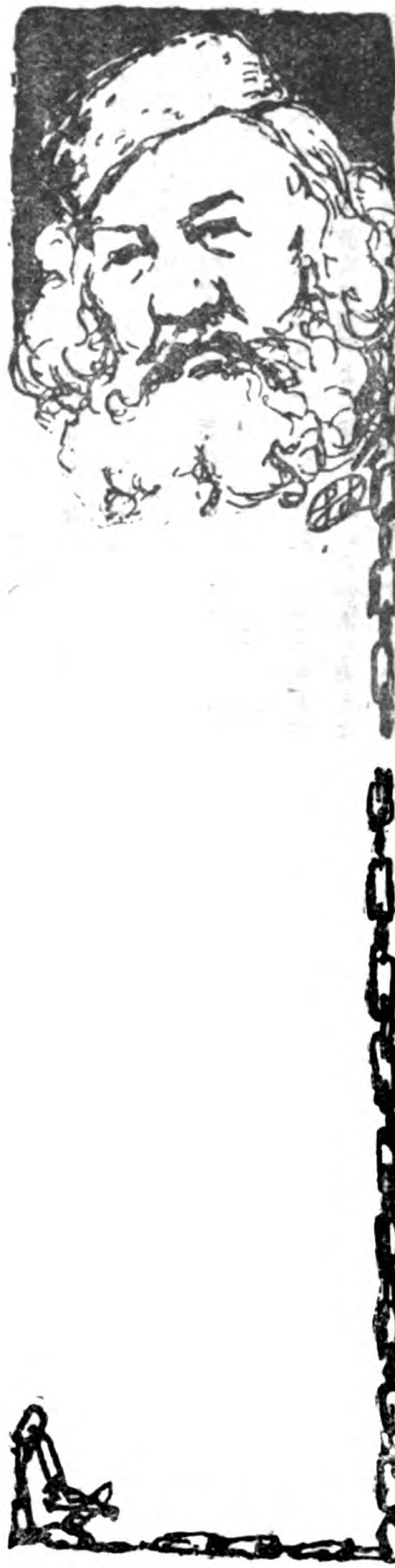
師匠は黒い襟のかゝつた着物を着た鳥渡小意氣な廿二三の女に「夜の雨」と云ふのを浚つて居た。其女は調子は低いが、でも透き通る氣持のいゝ聲で唄つて居た。私は幾年目かにこうした稽古所を覗いてみて今の時代にもまだ「夜の雨」もしや來るかと無算……たぞと云ふ文句を一生懸命に習つて居るものもあれば教えてゐるものもあるのかなあと私は今更ながら異樣な感じがした。

そこへ師匠のかみさんが用達しから歸つて來て私に告げた。「號外が出て居ましたわ。何でも原さんとか云ふ人が殺されたんですつて。

私は「原が殺された。本當だらうか、誰にだらうか」と思つたと共に今し方歸つて行つた若かい女の事を考えた、原と云ふ人が若し殺されたとすれば今の女が「丁字も飛んだ今時分氣紛れざんすエ、エ、主の聲」なぞといゝ氣になつて唄つて居る間に殺されたのかも知れないと思ふと生活の多樣なこと、世間の廣いことを感じずには居られなかつた。

私は直ぐ街頭に出て號外を買つて原敬氏の刺された事を確めた。政友會が狼狽　ごみ箱のやうな政治界が埃を立てゝ騷ぐことであらうとは思つたがそれだけでどうしたものか其の事件は私の思索圈にまで這入つて來なかつた

翌日、目が醒めると明かるい光線が障子を晴々と染めて居た。起きて椽端に出ると空は麗々しい琥珀色に晴れて小さな庭には淡紅色のコスモスの花が愛らしい微動を見せてゐた。自然の大きな花の美く　さ、生活の河の廣さの前には原氏の死の如きは微々たるもの大海の一滴にもならないのがハッキリして來た。誰だい、すぐ政界の偉人なんて云ふ男は。人の死は一樣に悲しめる。しかし原氏が死んだ事が國家の損失だとか見殺した所あの位のは一寸見當らんからねなぞと云ふ奴は。それは人類の侮辱ではないか。人類はいくらでも數限りなくえらい天分を生んで行くのだ。今だつて無數にすぐれた天分は居る。たゞごみ溜には居ない丈の話さ。大きな生活の河、人類意識の事を考えてくれ給へ。



農民問題に就ての一考察

大杉榮

一

『君の手紙を受取つた。なんだ！今大事件が窃かにやつて來ようとしてゐるのに、君は吾々の雜誌の案や君の論文の事なぞを心配してゐるのか。なんと云ふ哲學者だ！だが、君にはそれがよからうさ。君はただのロシア人だ。が、僕は世界人だ、從つて、今ヨオロツパに起きてゐる事實は僕に本當の情熱を沸かさせる。………』

これは、一八七〇年八月十一日、バクウニンがラテン諸國での無政府主義宣傳の本據としてゐた、スヰツルのロカル

ーからジュネエヴの友人オガレフに送つた手紙の一節である。

『今ヨオロツパに起きてゐる事實』と云ふのは、其の年ドイツとフランスとの間に勃發した、謂はゆる普佛戰爭の事である。

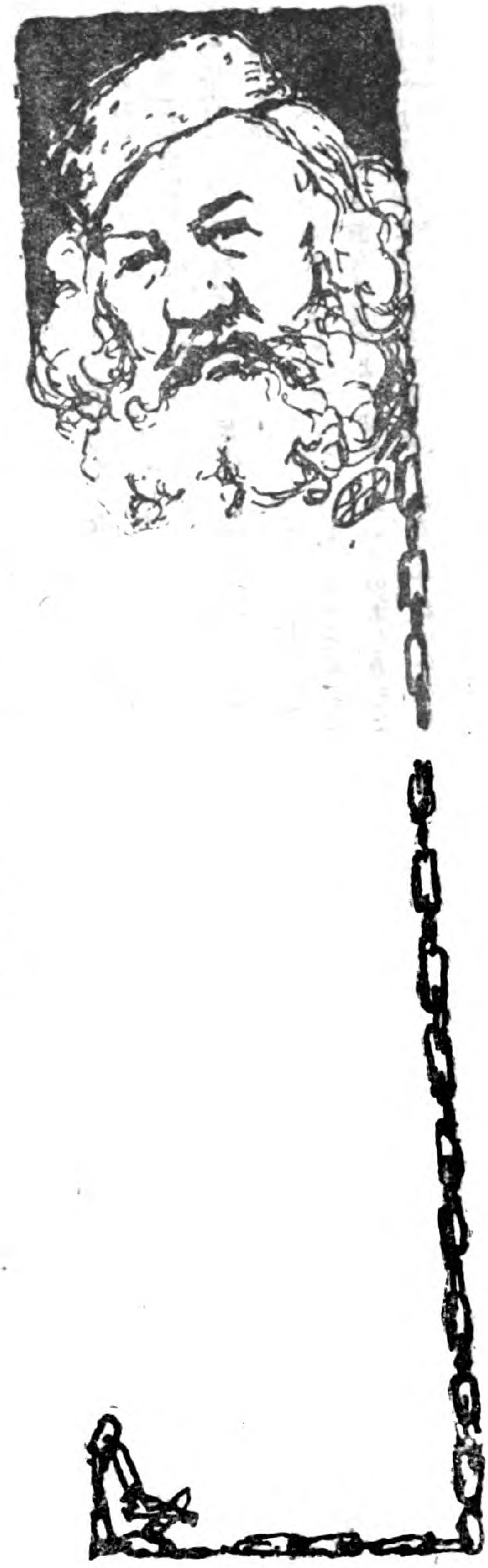
實際バクウニンは非常な熱心さで、其の一々の戰報、ドイツの勝報を追ふて行つた。世界大戰の際聯合國の無政府主義者がクロポトキンを殆め殆んど皆な、ドイツの勝利を以つて世界の文明の退歩であると見做して、極力ドイツ征伐論を主張した如く、バクウニンや其の友人等も亦、ビスマルクと其の鐵血政策との勝利が、世界の文明の上に、又一般社會主義の上に齎らす不幸を豫見したのであつた。彼れに取つては、自由と平等と博愛との大革命のフランスが、封建主義と軍國主義とのドイツに破滅される事は、即ち反革命の勝利であつたのだ。

が、バクウニンや其の友人等は、クロポトキンや其の友人等のやうには、此のドイツ災厄をブルジユワの政府と其の軍隊の力とによつて斥けようとはしなかつた。(以下三行缺)

バクウニンは猶其の手紙を續けて云ふ。

『三日間に僕は二十三通の長い手紙を書いた。そしてこれが其の二十四通目なんだ。それと云ふのは、僕は今一策を考へ出したんだ。O（オズロフ）が君に其の話をするだらう。或は、此の方がもつといゝんだが、僕の「一フランス人に與へる書」と云ふのをOが君に讀んで聞かすだらう。……』

此の『一フランス人に與へる書』と云ふのは、どうしたのか無くなつて、其の中の僅かに四十行ばかりが、八月二十日、スヰツル、ジユラ無政府主義同盟の機關『ソリダリテ』誌に發表された。それは、『フランスの救ひを、今まですら既にあれ程尨大な國家と云ふ機關を更にもつと强大にする事によつて、求めようとする』のを批難して、『正規の方



農民問題に就ての一考察

大杉榮

一

『君の手紙を受取つた。なんだ！今大事件が俄かにやつて來ようとしてゐるのに、君は吾々の雜誌の案や君の論文の事なぞを心配してゐるのか。なんと云ふ哲學者だ！だが、君にはそれがよからうさ。君はただのロシア人だ。が、僕は世界人だ、從つて、今ヨオロッパに起きてゐる事實は僕に本當の情熱を沸かさせる。………』

これは、一八七〇年八月十一日、バクウニンがラテン諸國での無政府主義宣傳の本據としてゐた、スヰツルのロカル

ーからジュネエヴの友人オガレフに送つた手紙の一節である。」

『今ヨオロッパに起きてゐる事實』と云ふのは、其の年ドイツとフランスとの間に勃發した、謂はゆる普佛戰爭の事である。

實際バクウニンは非常な熱心さで、其の一々の戰報、ドイツの勝報を追ふて行つた。世界大戰の際聯合國の無政府主義者がクロポトキンを始め殆んど皆な、ドイツの勝利を以つて世界の文明の退歩であると見做して、極力ドイツ征伐論を主張した如く、バクウニンや其の友人等も亦、ビスマルクと其の鐵血政策との勝利が、世界の文明の上に、又一般社會主義の上に齎らす不幸を豫見したのであつた。彼れに取つては、自由と平等と博愛との大革命のフランスが、封建主義と軍國主義とのドイツに破滅される事は、即ち反革命の勝利であつたのだ。

が、バクウニンや其の友人等は、クロポトキンや其の友人等のやうには、此のドイツ災厄をブルジュワの政府と其の軍隊の力とによつて斥けようとはしなかつた。(以下三行缺)

バクウニンは猶其の手紙を續けて云ふ。

『三日間に僕は二十三通の長い手紙を書いた。そしてこれが其の二十四通目なんだ。それと云ふのは、僕は今一策を考へ出したんだ。O（オズロフ）が君に其の話をするだらう。或は、此の方がもつといゝんだが、僕の「一フランス人に與へる書」と云ふのをOが君に讀んで聞かすだらう。……」

此の『一フランス人に與へる書』と云ふのは、どうしたのか無くなつて、其の中の僅かに四十行ばかりが、八月二十日、スヰツル、ジュラ無政府主義同盟の機關『ソリダリテ』誌に發表された。それは、『フランスの救ひを、今まですら既にあれ程尨大な國家と云ふ機關を更にもつと強大にする事によつて、求めようとする』のを批難して、『正規の方

法、正規の軍隊はもはやフランスを救ふ事は出來ない、フランスはもはや民衆的蜂起の中にでなければ其の救ひを見出す事は出來ない』と叫んだものであつた。そして猶彼れは、其の中に、『秩序を維持すると云ふたゞ一つの目的を持つ』政府、國防政府の創立を豫見した。

バクウニンの此の『一策』は、猶八月二十三日、彼れがロカルノからリオンの諸友人に送つた手紙に詳しい。

『君は、君等は、リオンにゐる君等は皆んな、あの絹商人（ビスマルク）の商賣に就いて、大變な誤解を持つてゐる。君等は馬鹿々々しく瞞されてゐる。此の商人の商賣は未曾有の大繁盛なんだ。そして其の反對に、其の競爭者の商賣は、見る見る破滅して行くんだ。

『バゼス』佛軍の大將は倒れて、プロシア人等はパリに進むだらう。そして若しフランスの國民がすべて蜂起しなかつたら彼等はパリを取るだらう。これは本當の眞實なんだ。僕はこれを僕の一番大事なものにかけて君に誓ふ。僕はこれを恥と怒りと絶望のどん底との中に、君に云ふ。しかしこれは混り氣のない、全くの眞實なんだ。若し君等に其の反對の事を云ふものがあれば、又た單に君等を慰めようとするものがあれば、又パリの新しく採つた方法がパリとフランスとを救ふだらうと君等に約束するものがあれば、これは實に馬鹿々々しい仕方で君等を瞞すものだ。

『パリとフランスとは廣大な民衆的蜂起によらなければ救はれる事は出來ない。到る處に民衆が武器を執つて、民衆自らが組織をつくつて、ドイツ人共の侵入者と決死の戰爭を始めなければならない。自稱首領共を仰がんではない。民衆自らがそれを選ぶんだ。君等は今裏切り者共にとりかこまれてゐる。敵は政府の中にもゐる。役所の中にもゐる。君等は四方八方から賣られてゐるんだ。ダントンが今日の時代や危險ほど激しくはなかつた時代と危險との中に立つた、「敵

に向つて進む前に、自分の後にゐる敵を撃ち破らなければならない」と云ふ言葉を思ひ出すがいゝ。そとのプロシア人共に向つて安心して進んで行く事の出來るために、先づうちのプロシア人共を倒さなければならない。

『一七九二年の愛國的運動も、諸君が今フランスを救ふためにしなければならない運動に較べれば、何んでもない事だ。されば、諸君(以下七十字缺)吾々は愛國のために働きつゝ世界の自由を救ふだらう。若し此の民衆の蜂起が全國的に行はれ、誠心誠意のものであり、そしてプロシア人共や又は彼等と事を共にするオルレアン官人共に買はれ或は買らうとしてゐる裏切り者共に指導されないで、民衆の首領に導かれて行くならば。

『ただこれだけの條件でフランスは救はれるのだ。されば一刻も遲れてはならない。もうパリの合圖を待つてはならない。パリはそれを脅やかしてゐる危險のために喘され痲痺されてゐる。そして殊には又、まづく指導されてゐる。諸君は自ら起て。武器を取れ。自ら組織せよ。諸君の後ろにもうたゞ一人の敵もゐないように、うちのプロシア人を滅せ。そしてパリの防衛に走れ。

『若し今後十日間に、フランスに民衆の蜂起がなければ、フランスは失はれるのだ。あゝ、若し僕が若かつたら、僕はこんな手紙なぞは書かずに、君等の中にゐるんだが。』

そして猶バクウニンは、此の民衆的蜂起を宣傳するために、其の『一フランス人に與ふる書』の續きを書き始めた。

僕は、恐らくは讀者諸君が怪まれたであらう如く、此の文章に掲げた題の『農民問題』とは餘りにかけ離れたやうな事柄ばかりを書き續けて來た。が、僕の此の『農民問題』と云ふのは、實はバクウニンの此の『一フランス人に與ふる書』の紹介なのだ。そして此の紹介を少しでも完全にするためには、其の書の書かれた由來にまで溯らなければならな

いのだ。何故なら、バクウニンの殆んどすべての著作は、何等かの事件に對して活動を始めようとする、一種の檄文であるからである。

しかし、もう本論にはいつてもいゝ時が來た。僕は直ぐそれにはいらう。が、其の前にもう一こと云つて置きたい事がある。それは、バクウニンの此の『一筆』が單なる獻策にとどまらないで、直ぐに彼れ自身をして其の實行に赴かしめた事である。『あゝ、若し僕が若かつたら……』なぞと云ふ空な嘆きを棄てさせて、直ぐに『諸君の中』へ走らした事である。從つて僕は、其の激文の紹介の後に、再び又其の活躍の事實に歸らなければならない。

二

九月三日のセダン落城と共に、ナポレオン三世は捕虜となつてドイツに送られ、翌四日パリに假政府が設けられて共和制が布告された。しかし『フランスの內情がそのために變つたか』と云ふに、バクウニンは『さうは考へない。』『彼れは此の假政府を全然無力であると斷言した。何故なら、それは從來の行政組織を根本的に變へる事も出來ず、又多少著しい程度に其の役員を變へる事も出來ない。從つてそれは帝制時代のフランスと何んの變りもない。フランスの救ひは其の新しい力は、『此の政府の機關を倒して、更に他の政府の機關をそれに代へようとする事はなく、フランスの各州各コムユンに最も完全な發意の自由を與へる事である。即ち現存の國家を解散する事である。』

が、此の行政機關を倒せば、共和主義の人々は、フランスを支配するために持つてゐた其の唯一の方法を奪はれて了ふ。そしてパリは官憲的命令權と布告による發意權とを失つて、此の國民的運動の先頭に立つて與へ得るだらうところの實例による發意權しか持たない事になるだらう。

けれども果してパリは此の役目を務める事が出來るだらうか。バクウニンはそれに對しても『否』と答へた。パリは

國民的運動を主動し組織するためには、餘りに自分自身の防衛に取りまぎれてゐる。ドイツ軍に包圍されてゐるパリは一大兵營になつて了ふだらう。其の全人口が一つの軍隊になつて了ふだらう。『が、軍隊は推理しない。主動的及び組織的からして働かない。それはたゞ戰ふだけだ。』

そこで各州はパリの命令も實例も待たずに、自ら任意に蜂起し、任意に組織しなければならない。が、こんどは、此各州の蜂起が果して出來るか。バクウニンは始めて『然り』と答へた。『若しリオンや、マルセイユや、セント・エテイエヌや、ルアンや、其他の大都市の勞働者が、其の血管に血を持つてゐ、其の心に意氣を持つてゐ、(十四字缺)そして又彼等が生きた人間であつて、(二十六字缺)

パリ假政府のガンベタも、やはりバクウニンと似て、フランスの救ひを此の各地方の蜂起に求めた。たゞガンベタに取つては、『巧みに實施された共和制度の下でなければ、安寧も平和も進歩もなかつた。』『有產階級に反對してフランスを支配する事は出來ない、無產階級との寛大な結合を保つ事なしにフランスを指導する事は出來な』かつた。『共和制は勞働者の正しい要求と神聖な所有權の尊敬との間の協調一致を許す唯一のもの』であつた(以下三行缺)けれども此の勞働者と農民とが直ぐ結合出來るかと云ふに、(十七字缺)大きな障害がある。それは勞働者が農民を馬鹿にし、農民が勞働者を憎む事だ。實際には彼等の間に何の利益の反する事もないのだが、其の間に大きな誤解がある事だ。此の誤解はどうにでもして取り除かなければならない。

前後六信より成る『一フランス人に與ふる書』の、第三信と第四信とは、勞働者と農民との間の此の誤解を說明して、バクウニンの謂はゆる總蜂起の前の一大障害を取り除かうとしたものである。

第三信は農民に對する勞働者側の主なる不服を述べたもので、バクウニンはそれを次ぎの三つの事に歸着させた。

第一には、『農民は無知で、迷信深くて、頑迷で、そして坊主共に指導されてゐると云ふ事である。』

第二には、『十六字缺』

そして第三には、『彼等が私有財産の氣違ひじみた信徒であると云ふ事である。』

しかし、農民が無知だと云ふ事は、それを侮蔑し酷遇する理由になるだらうか。ブルジュワの徒は、此の教育が優れてゐると云ふ事に基づいて、其の支配の權利と勞働者の服從の義務を主張する。けれども勞働者のブルジュワに對する强味は、其の教育ではなくして、其の正義の本能である。そして此の正義の本能は農民の中にも十分にある。彼等は無知であるが、深い常識も持つてゐる。驚くべき敏感を持つてゐる。そして又、無產階級の光榮であり救ひであるところの勞働の氣力を持つてゐる。

又農民の迷信は、一切のブルジュワ政府によつて人爲的にそして組織的に維持されて來た、其の無知の所產である。が、坊主共の勢力と云ふのは實はごく表白的のもので、それが農民の利害と衝突しない間の事である。で、一七八九年の大革命の後にも、農民の迷信は國家が教會の財產を沒收してそれを賣却する事に何んの妨げにもならなかつた。

バクウニンはこゝまで述べて、ちよつと餘談にはいつた。或は餘談と云ふよりも、此の方が却つて彼れに取つては本論であつたのかも知れない。それは、ジヤコビン黨の專制的革命家や、又其の影響を受けた社會主義者等が、將來の共和國は布告によつて一切の宗教を廢止し一切の僧侶を排除しなければならないと云ふ、バクウニンに取つては全く『反革命的な思想』に就いてゞあつた。彼れは此の『布告による革命』を、『革命國家』の思想、即ち革命の外觀の下に隱

されてゐる反動的思想の結果であり、適用であると見た。(以下四行缺)

何故なら、最も賢明であり最も大膽でありそして最も卒直な革命政府でも先同時に多くの問題や利害を抱き締める事は出來ない。一切の獨裁は、それが個人的又は集合的である限り、即ち一人の役人又は多くの役人によつて組織される限り、必然に其の眼界は極めて狭い極めて盲目的なもので、民衆生活の奥底にはいる事も出來ず、又其の全擴がりを蔽ふ事も出來ない。それは最も有力な船でも全太平洋の廣さと深さとを測る事が出來ないやうなものだ。そして次ぎには、(以下七行缺)

しかし餘談はおいて再び農民の問題に歸らう。(以下三行缺)

又、農民は確かに共産主義ではない。彼等は共産主義を恐れ且つ憎んでゐる。何故なら、彼等は保つてゐたい何物かを、少なくとも其の想像の中に持つてゐるから。そして何んにも持たない都會の勞働者は、農民よりも共産主義に傾き易い。これは自然の事である。農民を批難する事はない。又彼等に共産主義を望む事もない。要はたゞ(以下二行缺)

『それ以外には、農民に對する方法はたゞ一つしかない。それは農村に對する都會のテロリズムである。此の方法によるものは、革命をして勝たしめないで、却つてそれを殺すであらう。さすれば國家によつて組織された此の恐怖、此の暴力の古い武器、ジヤコビンズムから借りた武器は絶對に止さなければならない。それは一千萬のフランスの農民を反革命の陣屋につき放すだけの事である。』

そして『此の誤まつた思想、此の殺自由の希望が、強權的共産主義の根本的迷信となるのである。強權的共産主義は、それが規則正しく組織された暴力を必要とするところから國家を必要とし、そして此の國家を必要とするところから必

然に强權を再建し、國家の殺人と云ふ特權階級を再建する。』

三

斯くして農民に對する勞働者の不服を述べた後に、更にバクウニンは其の第四信に於て、農民の不服、農民の都會に對する憎惡の原因を說いた。（以下二行缺）

第二には、『農民はから思つてゐる。しかもそれは多くの理由がないのではなく、又それを證據立てる歷史上の多くの證據や經驗がないでもない。即ちそれは、都會が屢々彼等を支配し搾取し、そして又いつも彼等の望みもしない或る政治制度を彼等に無理强ひしようとすると云ふ事である。』

そして第三には、『猶農民は都會の勞働者を共產主義と見做して、社會主義者等が彼等の何物よりも以上に愛する土地を沒收しやしないかと恐れてゐると云ふ事である。』（以下二行缺）

…………………………勞働者に對する農民の憎しみは非常な危險になる。……………………………、主なる力となるのである。農民は、都會の勞働者が其の意志を彼等に無理强ひしないと分つた時、農村の最大幸福のために都會が發明したと云ふ或る政治的制度又は社會的制度を彼等に無理强ひしないと分つた時、都會の勞働者が彼等の土地を取らうと云ふつもりの少しもない事が確められた時、直ぐにも祖國を救ふために都會の勞働者と一緒に進むだらう。

『又、都會の勞働者は何んの權利があつて、或る政府の形式又は或る經濟組織の形式を農民に强ゆる事が出來よう。革命の權利によつて、と云ふ人があるかも知れない。しかし革命は、それが專制的に行動する時には、又民衆の中に自由を起させないで反動を生じさせる時には、それはもう革命ではない。…………（以下二行缺）

『それは晝のやうに明かな事だ。………然かるに、それを望みもしない一千萬の農民に、社會主義勞働者の政治的及び

社會的理想を强ひようと云ふ、そんな馬鹿げたそして傲慢な、不當なそして不幸な主張は、どこから出て來たか。それは明かにやはりブルジユワの遺産である。ブルジユワ革命の政治的遺産である。此の主張の基礎、說明、理論は何にか。それは、一言に云へば、農村の文明に對する都會勞働者の文明の、知識又は教育の謂ゆる若しくは實際の優越と云ふ事である。しかし諸君は、かう云つた理窟で一切の征服を是認し、一切の壓制を祝望する事が出來るのを知つてゐるブルジユワが勞働者を支配し、即ち又搾取するの使命と權利とを證據立てるのにも、やはりこれと同じ主張しか持たなかつたのだ。國民から國民に、そして又階級から階級に、(以下六行缺)

…………………………………………そして諸君は其時にどんな事が起るだらうかゞ分るか。農民は土地を皆んな彼等のものにしようとする。彼等は、其の廣い領地が彼等の田畑を狹めて行く大地主や富裕なブルジユワを、外國人のやうに掠奪者のやうに見てゐる。一七八九年の大革命は教會の土地を農民に與へた。彼等は更にブルジユワの土地をも得るために、或る他の革命に乘じようとするであらう。『が、若しそんな事が起きれば、若し農民がまだ彼等のものでない總ての土地に手を出すようになれば、それによつて私有財産の主義を强める事になりはしないか。そして農民は都會の社會主義勞働者に從來よりも更に敵意を持つようになりはしないか。決してそんな事はない。何故なら、國家の司法的及び政治的是認、所有權の保證が、農民にあるのではない。所有はもう權利ではなくなるだらう。單なる事實になつて了ふだらう。』『さうすれば、それは内亂ぢやないか。と云ふ人があるかも知れない。私有財産が何等の强權によつても保證されないで、たゞ其の持主の力によつて守るほかはないとなれば、皆ながめい〱他人の財産を奪はうとし、そして强いものが弱いものを掠奪するだらうぢやないかと。』(以下六行缺)

『又、官憲の一切の後見を離れて、たゞ物事の自然の勢から出來たさうした和解には、强いものや富んだものが支配的

な勢力をふるうだらうなど〻も考へるな。（以下二行缺）

『しかしこれはよく認めて置いてほしい。私はかくして下から上に組織され直されるだらう農村が、有らゆる點に於て吾々の夢想する組織と一致した理想的組織も、一擧にして創めるだらうとは云はない。私が信ずるのは、それが今日存在する組織よりも千倍も優れた生きた組織であるだらう事である。又、それが一方には都會の活潑なプロパガンダをよく受けいれ、そして他方には國家や法律の保護の下に固定され又は云はゞ化石されないところから、自由に發達して、無限に發達し完成して行くだらう事である。』（以下二行缺）

……………………そして、實際の文明の程度はヨオロツパ全體の各コムユンの間に於けると同じく、フランスの各コムユンの間に甚だしく違つてゐるのだから、其の結果は必然に非常な發達の差異を生ずるだらう。が、相互の合意、調和、お互ひの一致から生じた平衡が、國家の人爲的な統一に代るだらう。そしてそこに新しい生命が、新しい世界が生れるだらう。

『が、君は又かう云ふかも知れない。……………政治上や司法上の制度の破壞から必然に生じなければならない此の内部の闘爭は、國防を痲痺させないだらうが、プロシヤ人共を追ひ拂はないで、却つてフランスを侵略に任せる事にならないだらうかと』（以下二行缺）

……………………………………一七九二年のフランスと今日のフランスとを比較して見るがいゝ。フランスが内亂によつて紛糾してゐた事は、一七九二年と九三年ほどひどかつた事はない。運動、闘爭、死ぬか生きるかの闘爭が、共和國の有らゆる方面に行はれてゐた。そして、しかも

ランスは、ヨオロッパの殆んど全部を擧げて聯合して來た侵入を見事に押し除けて了つたのであつた。一八七〇年には、帝制の下に統一された平和なフランスがドイツの軍隊に擊破されて、共の存在のために戰慄しなければならないほどまでに士氣沮喪してゐる。』

四

バクウニンは、此の『一フランス人に與ふる書』のはじめにも云つたやうに、パリは自分を守る事のほかには何にも出來ないと思つた。そして其の謂はゆる國民的總蜂起の相圖がリオンかマルセイユから出なければならないと思つた。殊にリオンは、パリが包圍されてゐるので、フランスの最も重大な都市となつた。で、バクウニンは、そこから合圖が出れば、それが直ぐにフランスの全國に擴がるだらうと考へた。けれども時は迫つて來た。ドイツ軍がフランスの東南を占領しない前に、此の勝ち誇る侵略に對して民衆的革命の大きな堤を築かなければならなかつた。

そして殊に又、バクウニンは此のリオンに心を引きつけられて行つた。彼れはそこではよく知られてゐた。そこの有力な戰士達、殊にリシアルやブランやパリクスとは親しく交はつてゐた。國際勞働者同盟の運動は、此のリオンを『フランス社會主義の首府』と呼ばしめたほどに、そこに盛んだつた。勞働者は著しく革命的だつた。そして此の勞働者等は、既に幾度か集まつて、共の協議を重ねてゐた。バクウニンは、八月の末から、此の蜂起を說いた手紙をリシャルに送つてゐた。共の手紙は前に掲げた。

そして遂に、九月四日、フランス帝國の崩壞と共に彼れはリオンへ出かけて行く事に決心した。六日、彼れはベルンの友人アドルフ・フオクトに手紙を送つた。

『リオンの革命的社會主義の友人等が僕をリオンへ呼ぶ。僕はそこへ僕の老骨を携へて行つて、そして恐らくはそこで

僕の最後の役目を勤める事に決心した。が、例の通りで、一文もない。貸してくれとは云はないが、五百フランでも四百フランでもいゝ、或は三百フランでも二百フランそれとも又百フランでもいゝ、旅費をくれる事は出來ないか。出來るなら、君はくれるだらう。が、出來なかつたら……勿論くれるな。』

十一日、彼れはヌウシヤテルに着いて、ギヨオムと會つて、其の『一フランス人に與ふる書』の出版の相談をした。其時彼は其の最後の原稿を持つて行たのだつた。

十二日、バクウニンはジユネエヴへ行つた。そしてそこで二人の友人と會つて、十四日の夜其の二人と一緒にリオンへ出發した。其の二人と云ふのは、オズロフと、若いポオランド人のランキエヰチとであつた。此の後者は活版職工でリオン一揆の敗北の後翌年更にパリ一揆に投じて、前哨にあつてヴエルサイユ軍と戰つて死んだ。

しかし、實はもう、バクウニンは餘りに遲かつたのだ。

九月四日、公安委員會がリオンに組織された。そして此の委員會が市の全權を握つた。其の委員會は皆な極く進んだ思想を持つてゐた。しかし其の大部分は社會主義者ではなかつた。國際勞働者同盟に屬する五名の委員に對して、其思想に反對する六十名の諸種の革命家委員がゐた。アルベエル・リシアルは最初其委員の中にはいつてゐたが、直ぐ又其の名を削られて了つた。ガスパル・ブランは、五日にヌウシヤテルから歸つたので、委員の中にはゐなかつた。で、國際同盟からの委員は、ボオヴワル、シオル、パリクス、シヤルヴエ、ブラアセの五人に過ぎなかつたのだ。そして多くの公會は開かれたのだが、其の演壇を占めたのは、多くはジヤコビン黨の革命家か、或はバクウニンなどの云ふ新しい運動に就いては何んの理解もない年老つた哲學者か、昔流の社會主義者であつた。同盟の若い戰士は多くは戰場に出

てゐた。

それに、バクウニンが最も信用してゐた其の友人と云ふのも、實は覺束ない同志であつたのだ。

九月四日、ロトンド館に開かれた或る公會で、リシャルはパリの國際政府と民衆蜂起の協議をするために、リオン市の代表者を送る事を動議した。そしてリシアルはアンドリユやジヤクラルと共に其の派遣委員に選ばれた。九日、三人はパリへ行つた。アンドリユは翌日窃かに司法大臣クレミユに會つて、リオン檢事局檢事の任命を受けた。そして十一日、更に内務大臣ガンベタに會つて、他の二人の委員を紹介した。アンドリユは其の翌日リオンに歸つた。が、リシヤルは猶パリにとゞまつて、リオン公安委員會ガロオヌ州に組織しようとしてゐた義勇軍の司令官に賴まうと云つてゐた、クリユプレ將軍と會つた。そして彼れを連れて、十七日、リオンに歸つた。ジヤクラルはパリ第十八區の助役に任命されてそこにとゞまつて了つた。猶此のジヤクラルに據れば、リシヤルもやはり何にかの官職を向けられたのだが、それが氣にいらないでリオンに歸つたのだと云ふ。

かうした難局の中へバクウニンははいつて行つたのだ。そこには、肝心な國際勞働同盟の會員すら、まだ其のしなければならない事に就いてのはつきりした考へを持つてゐなかつた。ブルジユワ的急進派の首領共が跋扈して、民衆を裏切らうとする陰謀家共が立ち騷いでゐた。パリの國防政府は、リオン知事をして、『猛烈な共和主義者』シヤルメル・ラクウルを派遣した。九月十五日、公安委員會が解散されて、市會委員が選擧され、ブルジユワ共和主義者が其の大多數の椅子を占めた。そして、もと代議士の醫師エノンガリオン市長に任命された。バクウニンはそこに着くと直ぐに、もう絶望しなければならない筈だつたのだ。

が、彼れはやつて見た。

九月十七日、ロトンド館の或る公會で、『救佛中央委員會』の創立が決定され、翌日其の委員が選擧された。それはブラン、ボオヴワル、パリフス、リシャル、パラトン、シャルヴエ、プラアセ等の社會主義者ばかりだつた。バクウニンは、マルセイユから驅けつけたバステリカと一緒に、マダム街の其の委員會の會議に出席した。オルカル・ステユは其の當時の光景を次ぎのやうに描いてゐる。

『マダム街の妥協者共が集まつてゐる間に、一揆の案が裁縫師パリクスの家で熟して行つた。バクウニンはそこに住んでゐた。そしてそこで、ランキエヰチウブランやオズロフやパラトンが、毎日食事をとつてゐた。彼等は有らゆる活動家と結びはじめた。公會は頻繁に開かれて、未開の猛烈さを現はした。實に血なまぐさい動議が提出されて、それが熱心に採用された。（二十九字缺）

そして十九日に、バクウニンは次ぎのやうにオガレフに書いてゐる。

『老友よ。君の手紙を今受取つた。五日間も何んにも書き送らなかつた事を許してくれ。忙がしくて頭がひつくり返りさうなんだ。（以下二行缺）』

五

テステユの云つた『未開の猛烈』な公會は實際頻繁に開かれた。そして其のたびに民衆の要求が明かにされて行つた。九月二十四日のロトンド館の大公會は其の最も代表的なものであつた。血なまぐさいのではない、たゞ革命的だつたのだ。四畫工のウジエス、セエニユが司會した。彼れは元氣のいゝ雄辯な男で、リオン勞働者の間に非常な勢力を持つてゐた。其の大集合では、一切の官吏及び軍人を解職して、兵卒等の間に自由に選擧した大官を以て将軍に、仕へる事

を決議した。要塞を國防軍に引渡す事を決議した。又富者から强制租税を取立てる事を決議した。

翌二十五日の日曜日は、救佛中央委員會が民衆に提案する革命綱領を掲げた、大きな赤いビラの印刷に費された。此の綱領には救佛中央委員會の委員が皆な署名する事にきまつてゐた。バクウニンも、外國人ではあるが、其の友人等の名と一緒に自分の名を並べる事を其の義務だと信じた。或る市會委員等や士官等や警官等も、此の運動に贊成し、或は少くとも其の妨げをしない約束をした。其の二十五日に、バクウニンはオガレフに手紙を書いた。

『老友よ。直ぐ君に僕等の宣言を送る。それは（以下三十一字缺）ものだ。今晩僕等は主な敵共を捕縛する。明日は最後の戰鬪だ。そして、望むらくば、吾々の勝利だ。』

が、どうしたのか、其の晩の計畫は二十八日に延ばす事になつた。

二十六日、ロトンド館に大集會が催された。セエニュが司會した。ボオヴワルが宣言を讀んだ。群集は拍手喝采して滿場一致でそれを可決した。其のビラは全市の到る處の塀にはりつけられる事となつた。そしてセエニュは云つた。

『吾々は此のビラに署名して、若し成功しなかつたら吾々の此の首をなくしなければならない。しかし時は來たのだ。勝つか死ぬかだ。』

其の宣言の全文はかうだ。

フランス共和國

コムユン革命聯合

我が國は今悲しむべき狀態にある。官憲の無力と特權階級の無關心とはフランス國民を深い淵の岸まで打つて行つた。

…………………………………すべてがおしまひだ。此の危險の大きな事を感じ、そして民衆の絶望的活動が一刻も遲れてはならないと考へて、救佛聯合委員會の代議員等は其の中央委員會に集まつて、次ぎの如き決議を速かに採用せられん事を提議する。

第一條（以下二行缺）

第二條、一切の民事刑事の裁判は停止し、國民裁判がこれに代る。

第三條、（以下二行缺）

第四條…………もう負債の支拂に干渉する事は出來ない。

第五條、………………………………そしてそれが國民の直接監督の下に一切の權力を行使する。

第六條、各州首府の委員會は救佛革命議會をつくるために二名の代議員を送る。

第七條、此の議會は直ちにリオンの市會に召集される。リオンはフランスの第二の都會であり、極力國防に從ふ故も有力な都會である。此の議會が國民全體に支持されて、フランスを救ふであらう。

武器を取つて立て

セエニユ以下二十六名署名

これより先き、リオン市會は官立諸工場の勞働者の賃銀を三フランから二フラン五十に減らした。革命家等は此の事情を利用して、勞働者の示威運動を組織すると共に、同時に救佛中央委員會によつて準備された市議事堂の占領を行ふ事に決した。二十七日の夜、官立工場勞働者の大會が、ロトンド館に開かれた。そして翌二十八日、豫定の大運動がテ

ロオ廣場に行はれる事となつた。

其の前夜、救佛水夫委員會の會議が開かれた。ツル織職工で市委員のヴレエや、バクウニンや、其の他二三のものは、其の示威運動の武裝を欲した。が、多數は武器を持たない平和な示威運動を主張した。

正午には、數千の人々がテロオ廣場に集つた。國立諸工場の十六名の代表者は、賃銀三フランの復舊を市委員に要求すべく、市議事堂にはいつて行つた。が、其の日は市議會が開かれなかつた。すると、ふいに、群集の中から、セエニユを先頭にした百人ばかりの勞働者が現はれて、議事堂の中に闖入した。バクニンやパラトンやバステリカなどの救佛中央委員も、それと一緒にそこへはいつて行つた。セエニユはバルコニイの上から、市會をして二十六日の赤色ビラの綱領を採用されるか或は解散させるかだと叫んだ。そしてクリユズレを革命軍の大將に任命する事を提議した。クリユズレは、群集の破れるやうな喝采裡にバルコニイに現はれて、其の任命を謝して、今から直ぐ勞働者町のクロワ・ルウスへ行くと云つた。

が、此の裏切り者のクリユズレ將軍は、そこの國防軍に武器を取るように命じに行つたのではなく、たゞそこの勞働者に武器を持たずに大勢で出て來るようにと云つたゞけだつた。其の間に富裕な國民兵が走つて來て、議事堂の中へはいつて行つた。クリユズレはクロワ・ルウスから歸つて來て此の國民兵に捕つて了つた。民衆は、最初は、議事堂の中で何が起つてゐるのか知らなかつた。が、やがてセイニユの助けを呼ぶ聲によつてそれを知つて、これが又議事堂の中へ闖入しだした。ブルジユワ國民兵の一部分は武器を持たない群集によつて其の武裝を解かれて了つた。そして其の殘りのものも手出しをしなくなつた。

救佛委員會は市會の會議室を占領して、そこからいろ〳〵な布告を出しはじめた。二三時間がさうして過ぎた。バクウニンや其他二三のものは、『早く活動を始じめなければいけない、其のうちにブルジュワの國民兵が來る、…………………………』と切りに說いた。しかしそれは容れられなかつた。

それでも危急の警報が勞働者街に傳へられた。そして數ケ大隊の兵隊がギヨティエルやクロワ・ルウスから來た。しかし官憲の方は、依然として自由に行動が出來るので、其の黨與の國民兵を召集してこれを議事堂の前に送つた。武器のない群衆は其の場合を讓つて了つた。バクウニンは救佛委員會の委員等に極大決心を勸めた。『勞働者の國民兵に此の運動を支持するようにさせて、…………………………………………』が、

リシヤルは責任を恐れて、そして其の說が勝を占めた。

革命委員會は、市委員會と協議の上、議事堂から撤退した。そして其のあとで次ぎのやうな議事錄を書いて滿足してゐた。『民衆の代表者等は暴力によつて市委員會に迫らなければならないとは信じなかつた。で、市委員會が會議を始めた時に、事態を判斷する事は民衆に任して、引きさがつた。』

其の間にバクウニンの姿が見えなくなつた。混雜にまぎれて誰れも最初はそれに氣がつかなかつた。彼れはブルジュワ國民兵の護衞の下に議事堂にはいつて來たエノン市長と出遭つて、其の國民兵等のために地下室に押しこめられてゐたのだつた。オズロフはそれを聞いて、直ぐさま一隊の義勇兵を求めて、それと一緒に議事堂にはいつて行つてバクウニンを救ひ出した。

が、其時にはもう救國委員會は引き退いて市委員會がそれに代つてゐた。バクウニンは一人きりになつて、やはり引き退くほかに仕方はなかつた。

六

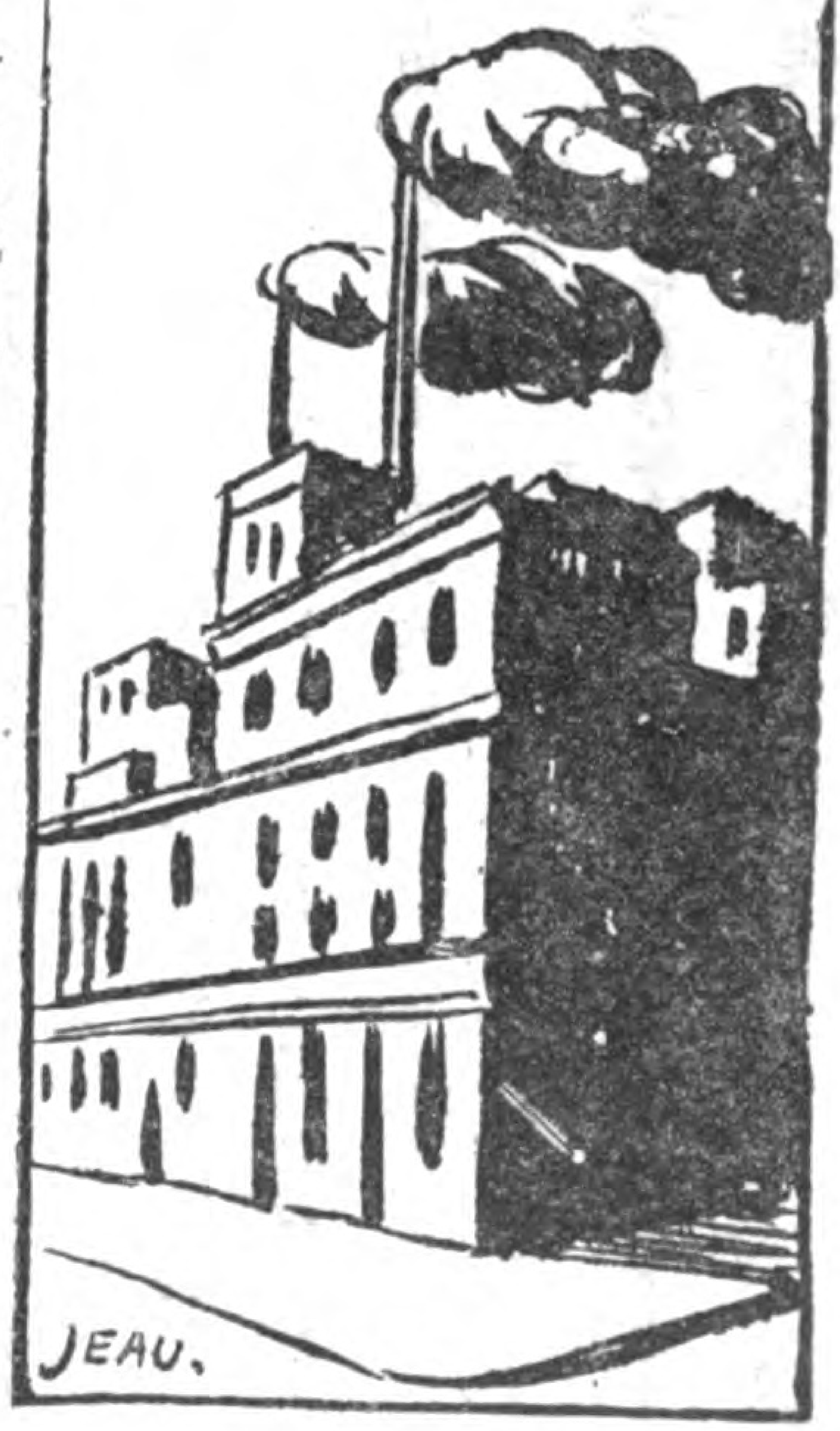
彼れは其の晩を一友人のもとに過ごした。そして其の翌晩、彼れに對する逮捕命令が出た事を聞いて、次ぎのやうな手紙をバリクスに殘してマルセイユへ出發した。

『親しき友よ。僕は君に別れを告げないでリオンを去りたくはない。が、用心は君と最後の握手をしに行く事を許さない。僕はもうこゝには何んにもする事がない。僕は諸君と一緒に鬪ふか或は死ぬためにリオンに來たのだ。フランスのためが今は崇高な人類のためになつてゐることを深く信じてやつて來たのだ。僕はきのふの運動にも加はつた。救佛委員會の決議にも僕の名を署名した。何故なら、…………………………………………僕には明々白々であつたから。……きのふの運動が若し勝ちを續けられたら、しかもそれはクリュズレ將軍が國民を裏切らなかつたらさうなつたのだ、（以下二行缺）……………………僕はリオンを去る、親しき友よ、悲しみと暗い豫感とに心を滿して。僕はもうフランスはおしまひだと考へるやうになつた。……フランスはドイツの屬國になるだらう。其の生きた本當の社會主義の代りに、吾々はドイツ人の理論的社會主義を持つだらう。そしてそれはプロシアの銃劍が彼に云ふのを許すだけの事しか云はないだらう。プロシアの官僚的軍閥的知慧がセントペテルスブルグのツアルの笞と結びついて、それが少くとも五十年間ヨオロツパ全大陸の平穩と秩序とを保證するだらう。……………………………………………………………………………『若しフランスの民衆が、それを欲したならば、それらのものは皆なそこから出て來る筈であつたのだ。』

バクウニンはランキエヰチを伴つてマルセイユへ行つた。そこで再び事を擧げようと思つた。そしてまだ新しい運動の可能をリオンに期して。』

レニンの國家理論（其二）

福田德三



（八）

『共產宣言』は、史的發展の進むに從ひ強制秩序が其用を見ざるに至ることを主張するものである。曰く、『發展の進行に從ひ、階級の差別が消滅し、生產は凡て聯結したる個人の手に集中するに至れば、…………………………………………………………。プロレタリアがブルヂオアジーに對する鬪爭に於て、必然的に自ら一階級に結合し、…………………………………………、支配階級として古き生產狀態を實力的に廢止するときは、其れと同時に、階級對抗の存在條件、階級其もの、而し

て其れと共に階級としての自己の支配をも廢止するものである』と。即ち此一句に於ては、國家及政治的權力は共に、階級支配と同一視せられて居るのである。然るに、此の階級支配なるものは、經濟的絞り取りなくして、否な却つて反對に經濟的絞り取りを取除く可き任務を有するものとして可能なりとせられて居るのである。乍去、經濟的絞り取りを取除く可き任務を有する階級支配とは實際如何なるものであるか、如何にして其れが可能であるかは、一向示されてないのである。『共產宣言』の敎ゆる所では、ブルジオアジーが、打勝ちたるプロレタリアによりて支配せられ又は壓迫せらると云ふのは、決してブルヂオアジーが從來プロレタリアを支配し又は壓迫して居たのとは同一の意味に於てゞはないのである。プロレタリアは、出來る丈け、――決して徹底的にではない――自己が支配せられ、壓迫せられることを防ぐと云ふに過ぎないのである。而して玆に支配と云ひ、壓迫と云ふのは、唯物史觀の見解に從へば、疑ひもなく、經濟的絞り取りの事を指したものである可きである。所謂プロレタリアの半國家、プロレタリアの階級國家に於ては、ブルヂオアジーの殘骸は、プロレタリアに屬するものと、共支配せらるゝことに於て違ひがある譯はない。强制の向ふ所は、凡ての者に對して同樣である可き筈である。從つて特に或る特定團某を壓迫すると云ふ事は考へ得られないことであつて、就中、階級としては漸次に消滅し行く所のブルヂオアジーに對する壓迫と云ふことはあり得ないことである。何となれば、全く消滅し去らず殘骸としてでも存在する限り、ブルヂオアジーは、從前通り經濟的に絞り取りを繼續するものであつて、然る限りは被壓迫者ではなく却つて壓迫者であると云ふ外はない。從つて『共產宣言』が、プロレタリア革命成功後の時期を、『プロレタリア』の階級支配時代と倣すのは不當である。何となれば經濟的絞り取りを作はさる階級支配とは無意味な事である。階級が階級として一方（政治的に）支配し乍ら、他方（經濟的に）支配せられると云ふのは、矛盾の甚しいものである。經濟的に支配せられるのでなければ、最早階級なるものは存せないのである。階級

とは 挿文『階級闘爭當事者としての雇傭所得と資本所得』に於て説明した通り 本來純經濟的概念である、所得の種類を異にすると云ふこと、而して其所得の種類が互に對抗する利害關係を持て居ること――而して事實としては、其利害の對抗は必ず一方が他方を支配することとしてのみ存し得ること――是れが階級の本質である。然るにマルクス及エンゲルスは、屢々それに政治的色彩を加味して、階級とは、被壓迫者又は壓迫者の綜合體を意味するものとした。ブルヂオア國家に續いて來る國家に於て、政治的支配が、一小部分の經濟的優先權を取除き又は制限する丈けに止まり、國民の何れの部分をも、經濟上にも政治上にもより惡く取扱はないものとすれば、舊社會の殘物としての階級支配なるものは、假令僅乍らも其跡を止むるであらうけれども、階級支配の全廢を當面の任務とし――從つて政治上ブルヂオアジーをより惡ふ取扱ひ――其目的を以て强制秩序を立つるときは、是れを目して、階級支配とす可きではない、其れは自家撞着の極である。其所謂階級をマルクス、エンゲルスの着色した形即ち政治的支配者と云ふ意味に解釋しても、此の自家撞着の存在は之を否定することは出來ない。況んや『共産宣言』の主張する如く、此狀態に於ける國家の形態は庶民平等の『デモクラシー』たるに於てをや。『プロレタリアを引揭げて支配階級とする』とか『デモクラシーの爲めに戰ふ』とか云ふことは、彼等が勞働者革命の目的として標榜する所である。コレハ、『共産宣言』の――從つて之れに立脚する凡ての社會主義者の――前提としてプロレタリアは數の上に於て大々多數を含むものであるとする事の當然の論結であるのである。『共産宣言』に曰く『凡て從來の運動は、少數者自らの若くは少數者の利益の爲めにする運動であつた。プロレタリア運動は然らず、非常に多數なる者の利益の爲めにする非常に多數なる者の運動である』と。デモクラシーに於て、凡ての國民は直接に、若くは普通平等選擧權によつて間接に、政治的支配に參與し、勞働者も雇主も、プロレタリアも、ブルヂオアも、政治的には全く平等である限りは、一階級の專制と云ふことは少くとも政治上に於てはあり得ぬのは勿論である。從つて階級專制

なるものある可しとすれば、其れは經濟上に於てのみ可能である可きである。此の經濟上の階級專制は形式的政治上には平等であり乍ら、法律制度の內容が例へば議會多數黨に經濟的絞り取りを可能ならしめるか、若くは間接に多數黨と結託する特殊資本家、特殊會社、特殊組合、特殊聯合等をして事實上に經濟的絞り取りを爲すを可能ならしめるかの場合に起るの外はなかる可きである。

（九）

以上が先づ考へられ得る階級支配の場合であつて、此れすらも行はれないときは、決して階級支配行はると云ふことを得ないのである。然るに普通平等の選擧權に立脚するデモクラシーに於ては、支配者となり得る者は多數國民の支持する一政黨であるから、デモクラシーに於て政權を取るものはプロレタリアてふ階級ではなくプロレタリア政黨である。而してプロレタリアがデモクラシーに於て全員擧つて一政黨を作るものとすれば、デモクラシーとは僅かにプロレタリアに政權を握らせるものと云ひ得る。反之、プロレタリアが數政黨に分れるときは、此の保證は與へられないのである。此場合『デモクラシーを得る爲めの戰』は必ずしも『プロレタリアを支配階級の地位に引上げる』ことと全意義でなくなるのである。而してデモクラシーに於て、プロレタリア黨が多數黨としての支配權を完全に得て、全生產を國家の手に集中——此頃の獨逸に於て謂ふ完全社會化（フォル・ゾチアリジールング）——するによつて資本主義の殘骸を全廢し得るとしても、公權力は決して其政治的性質を失ふものではない。否『公權力の政治的性質』と『共產宣言』に云ふのは冗語である。何となれば公けの權力は一の强制秩序に立脚する限りは必ず政治的權力である。ダカラ、『共產宣言』が『公けの權力が其政治的性質を失ふ』と云ふのは『公けの權力が最早公けの權力でなくなる』との意でなければならぬ。然るに『共產宣言』は、政治的權力を階級支配の意のみに解釋して居る。ソコデ、其意味する所は、公けの權力が

消滅すると云ふ事ではなく、單に、公けの權力が階級支配たる性質を失ふと云ふ事になる外はない。所が眞正なるデモクラシーには階級支配は無いものとする以上は、階級支配たる性質を失ふなどと云ふことはあり得ないことである。無いものは失へようはないではないか。ソコデ、我々は更らに熟考して『共產宣言』の眞意を究めねばならないことになる。『共產宣言』の眞意は、決して、公けの權力が單に階級支配たる性質を失ふ丈けで公けの權力其ものとしては依然として存續すると云ふのではない。曰く『階級と階級對抗とから成る古きブルヂオア社會の代りに、各人の自由なる發展が凡ての者の自由なる發展の條件たる一聯合が起る』と。茲に用ゐた聯合（アッソチアチオン）なる語の意味は甚漠然たるものである。國家も一の聯合（アッソチアチオン）なりとも云へる、又た各人の自由なる發展が凡ての者の自由なる發展の條件であることは、如何なる政體の下にもあり得ることである。考へて見るに、右一句中に重きを置く所は『自由』の一事であつて、其れは強制の反對として力說せられて居るのである。即ち右云ふ『自由なる聯合』とは、強制の組織、權力の秩序としての國家に對して云ふものである。故に之を平易に約して云へば『階級と階級對抗とが無くなれば國家も亦なくなる』と云ふ意に解するの外はないのである。此解釋に有力に裏書する一事は、『共產宣言』は、經濟的絞り取りと階級對抗とが消滅すれば、其れと同時に此の絞り取りと階級對抗とを維持し若くは除去すると云ふ事と離れて、強制秩序、公けの權力、政治的支配を必要とする凡ての社會的現象が消滅すると云ふ事を立證する爲めに一言をも費やして居ない事是れである。『共產宣言』は、無勞所得を無くなす爲めに、凡ての者に對する平等なる勞働強制を主張して居る。其れは社會主義の第一階梯たるプロレタリア階級國家の時代に就て云ふものであるが、然し、經濟的絞り取りをなくなした爲め、人性が根本的に一變して――レニンは之を肯定する――、各人は統一的に立案せられた勞働計劃（勞働豫算）に從つて、而して其の個人的欲望に何の顧慮を須ゐることなき勞働を任意に喜んで遂行するようになるで

あらうか、否か、此れは大きな問題である。假りに一歩を讓つて、此事があり得るとしても、場合に依つては避く可からざる例外があること卽ち其割り當てられた勞働に任意に喜んで從事せざるものあることは考へて置かねばならぬ。然る場合には如何しても强制は必要とならなければならぬのである。ブルヂオア國家が强制權力であると云ふのも決して一切の場合に、其强制が發動するものではない、否大々多數の場合には、强制は唯だ最後の保障たるに過ぎないので、現實に强制が發動するのは、右プロレタリア國家に於けると同じ樣に、寧ろ例外の場合に就てである、拙著『社會政策序論』一參照を乞ふ。殊に美濃部博士說に對する卑見を考へ合せられたし。故に私は、ブルヂオア國家に就ても、一概に唯だ强制權力と云ふ方面から國家の概念を立てようとする理論は大なる缺陷を有するもので、其缺陷は屢々人を過たしめるものであると信ずるものである。プロレタリア國家は單なる一の經濟組織たるに止ること能はざるものである、其れが此くの如き例外的障礙に對して全く强制を設けないと云ふことが出來ようか。況んや經濟以外の動機より來る障礙は絕無と云へようか。其れが言ひ得るには、何等の經驗に立脚せざるユートピアに於てのみであつて、苟くも『科學的』を標榜するマルキシズムには許され得可き主張ではないのである。階級の對抗による絞り取りを絕滅する爲めに、政治的權力支配、强制支配が必要なりとするならば、一度之を絕滅した後に於て、再び其れが起ることを防止する爲めに、新らしい階級對抗の擡頭を妨げる爲めに、亦た何等かの强制權力、政治的支配が必要であるのではないか。一切の强制を全廢し得るとする所謂自由の狀態の下に於ても、人間に固有なる不平等は依然として存することは疑ない所である。不平等の存する限り單に經濟上のみならず一切の絞り取りは決して其跡を絕つものではない。拙文『價格鬪爭より厚生鬪爭へ』參考を乞ふ。否、社會主義が其死敵として戰ふ所の資本主義なるものが、其所謂絞り取りを最も無遠慮に最も大膽に行ひ得たのは、其れが國家の干渉から解放せられることが多ければ多いほど甚しかつたのは事實である。所謂民業の自由の主張、民業壓迫、民權蹂躙の排斥なる要求は、事實に於ては、資本主

義が其絞り取りを自由に行はんがための口實として用られたことが甚だ多かつたのではないか。最も非官僚的政府が、民衆に干渉することの最も少ないと言はれる所謂自由國たる英米こそ亦た資本主義が最も自由に其力を伸し得たる國ではないか。私は吉野博士及其同說者に對して屢々云つた。今日までの英米式の政治的自由主義とは、之れに正當なる名稱を與へんと欲せば、資本自由主義と呼ばねばならぬものであると(『黎明錄』并に『暗雲錄』隨所參考。)一方に社會生活の大部分を從來の無政府狀態――自由競爭に基く營利主義――から取り去りて之を平等てふ秩序の下に置かんとする社會主義が、他方に又無政府主義的自由の實現を主張するのは、如何にして兩立し得ることであらうか。秩序的、計劃的なる社會主義的經濟――此頃獨逸で流行する所謂『プラン・ヴヰルトシアフト』――が、其本質を充實するに及んで其實現のために一切の强制を要せずと云ふことは實際的に如何に立證せられ得るか。否、ブルヂオア國家からプロレタリア國家に推移するによつて其實力と其任務とが非常に充實する國家が、所謂『死滅』『自ら息を引取る』又は『眠りに落つ』と云ふやうに、忽如として消滅するとは、不思議も不思議、空想も空想と云はねばならぬではないか。

(十)

『共產宣言』に大綱を示した、ブルヂオア國家から共產無政府社會への發展の各階梯に就て、マルクスとエンゲルスとは、其後の種々なる著述に於て稍々詳しい補說を試みて居る。而してプロレタリアの政權獲得の行程に就ては、常に繰返し々々『革命』なる語を用ゐて居るが、此語の意味は、場合によつて種々異つて用ゐられて居るから、彼等の所謂『革命』なるものに一貫的定義を下すことは、殆んど不可能である。然し乍ら、プロレタリアが實力の行使によつて此の政權を獲得すると云ふことと、プロレタリアは國民の大多數を占めるものであるから、普通平等の選擧權さへ採用せらるれば、其行使によつて、平和的、合法的、方法に訴へて政權を獲得し得られると云ふことは、其間大なる差違の存する事で

あつて、此點に關しては、『共產宣言』に云ふ所と、マルクス及エンゲルスの後年の諸著作に顯はれた所との間に僅かに矛盾の存する事は疑を容れない所である。『共產宣言』は明かに、……………………………………………。然るにカウツキーは近頃レニンとの爭論文『プロレタリアの獨裁政治』第三版、一九一八年第七頁に於て、此れと矛盾するマルクスの發言を一八七二年『インテルナチョナール』海牙會議の際アムステルダムに於て爲した演説中から摘出した。曰く『…………、…………………………、彼は古への基督敎徒のように、此世の國を閑却し又た蔑視し、全く念を之れに絕つにあらざる限りは、……………………………………。乍去我々は、此目的を達する手段が、何れの處に於ても同一なりとは決して主張するものでない。我々は異つた地方の異つた制度や、風俗習慣やを考慮せねばならぬことを知る。而して我々は、例へば米國や英國の如く――而して予は諸君和蘭の施設をより善く知つて居たならば恐らく更らに附加へて――和蘭の如く、勞働者が平和的方法によつて、其目的を達し得る國あることを否定するものではない。然し其れは必ずしも凡ての國に就て言ひ得ることではない』と。又たマルクスは、『哲學の貧乏』第二版一八九二年一六三頁に於て、發展の進行に從ひ、ブルヂオア國家は階級なき聯合によつて代位せらる可しと云つて居る。然るに、エンゲルスは反對に前段に擧げた樣に其の『排デユーリング論』に於て…………………………………。而してレニンは此一句を拉へ來つて、カウツキー幷に獨逸社會民主黨の僞造曲解を痛く難詰して居るのである。左樣かと思ふと、其の同じエンゲルスは、マルクスのアムステルダム演説に於けると殆んど同樣に、プロレタリアが其目的を達するに、平和的手段を以てし得る可能を說いたこともあるのである。其れは他の所でもない、彼がエルフルト綱領を評した一節中にある。『ノイエ・ツアイト』第二十一年一卷、第十號カウツキーは其『デモクラシーか獨裁政治か』第二版第十一頁に此一節を引用して、自說を確めて居る、これは無論彼の爲すを怠る可からざる事である。曰く、『代議政治が一切の權力を其手に集中し、

國民大多數の支持さへあれば、憲法上何事をも爲し得る樣な國に於ては、古き社會は平和の間に新社會に推移し得ることは十分に考へ得る。即ち佛國や米國の如き民主的共和國又は英國の如き立憲君主國に於て然り。然れども獨逸の如き國にては然る能はず』と。カウツキーは、レニンに對して勝利の聲を擧げて云ふ、『マルクスとエンゲルスとは、其政治上の考察に於て、常に、民主的國家と民主的ならざる國家との間に、大なる差別を認めて居るものである』と。（同上書十一頁）然し、マルクスとエンゲルスの凡ての著述を通じて見るときは、カウツキーの此言は當つて居ない。兩者は其凡ての著作に於て民主國と非民主國とを嚴別することを常に認めて居るとは決して云へないのである。唯だ兩者を區別して居る場合には、其はカウツキーの云ふ樣に、主としてプロレタリアの政權掌握が平和的に行はるゝか、實力的に行はるゝかの別と重要な關係を有する事を認めて居ることは確實であるのである。

(十一)

マルクスとエンゲルスが、プロレタリアの政權獲得方法に關する態度は、『プロレタリアの獨裁政治』てふ命題の中に既に決せられて居るのである。而して此の獨裁政治とはデモクラシーと云ふ政體によるものなることは、彼等の明かに認めて居る所である。唯だ『共產宣言』は、此のデモクラシーは實力を以て鬪つて始めて獲得し得られるものと爲して居る。ブルヂオア國家が現にデモクラシーの形を採つて居る所に於ては、其デモクラシーを充實するによつて、此の獨裁政治に到達し得るや否やに就ては、『共產宣言』は言及して居らないのである。否、彼等は之を否定するものである。プロレタリアの獨裁政治の取る可き政體のデモクラシーなる可きことは、『共產宣言』以外の他の著作に於ても屢々明言せられて居る。例へば、エンゲルスは前揭のエルフルト綱領批評中に『若し確定した事ありとすれば、其れは次の一事である。我黨並に勞働階級が政權を獲得し得るは、唯だ民主的共和國の形態の下に於てのみである事是れである。此形態

は、佛蘭西大革命が明示した通り、プロレタリアの獨裁政治に對する唯一の特殊形態なりと云ふも差支ない』と。（前掲所十一頁）然るに、プルヂオア的デモクラシーから引續いて、プロレタリア的デモクラシーに推移し行き得る可能は、マルクスもエンゲルスも共に極力之を否定　るのである。即ち、一八七二年六月二十四日付『共産宣言』第一序文に於て、此宣言は或點に於ては既に時代後れとなりたりと告白し、其時代後れの一例として、巴里のコムミユーンは『勞働階級が、既成の國家機關を單に其儘に引受け之れを自己の目的に對して運轉し能はざる』證左を與へたりと云つて居るのである。其證左はマルクスの『佛國市民戰』（獨本第三版四十三頁）に載せてある。レニン乃ち此一條を引き來つて、自說を立證して居る。レニンの云ふ通り、マルクスは、『ブルメール第十八日』に於て既に一八四八年乃至一八五一年の革命に就てプロレタリアが政權を獲得する方法を說くことと『共産宣言』に於いて『デモクラシーを得る爲めの戰』を說くのと兩立しない言を爲して居る。即ち云ふ『……、……………………………………、……………………………………。、………………、……………………………………、…………………………………、………………………………………』と。レニンは此一句を證として、『マルクスは、一八四八―五一年の……………………………………、………………………、…………………………………………………………………………』と云つて居る。此の推論は決してマルクスを誣ふるものでもなく又た誤解したものでもない。其れと共にレニンが『破壞す可き國家機關の代りに何を置く可きかの問題は、マルクスは之を解答しなかつた』と云ふのも亦誤謬ではない。レニンの云ふ如く『マルクスは、嚴密精確に、史的經驗の事實のみに立脚して居るもので而して當時の經驗は此問題に解答を與ふ可き何等の根據を提示して居ないのである』。乍去、レニンは、マルクスが此れより以前既に『共産宣言』に於て、此問題に解答を與へて居るものなることを忘れたか又は全く閑却して居るのである。『國家機關の破壞』と『デモクラシーの爲めに

する戰ひ』との間には、可なり大なる相違があるから、右の事を茲で認めるのは、レニンに取つては都合が悪いのである。乍去、唯物史觀に立脚して、國家機關の破壞を終點とする政治的綱領を史的敍述の形に於て打立てる以上、其は無政府主義に歸着するものであることは否定し得ざることである。然るにレニンは無政府主義と云はれることを極力拒否するもので、從つて、國家機關の破壞を終點とすることを認めず、マルクスは更らに其先を考へて居ると解釋したものと思ふ。マルクスは一八七一年四月二十一日クーゲルマンに與へた手紙の中に云ふ『予は既に「ブルメールの第十八日」に於て、佛國革命の最も手近な試みとして云つて置いた、……………………………………、而して是……………………………………………………レニンは此一句を以て『……れか又た我が勇敢なる巴里に於ける黨友の試みた所であると』『ノイエ・ツアイト』二十卷一號第七〇七頁……………………………………問題に關するマルキシズムの主要理論である』と云つて居るのである。『國家と革命』三十四頁

少くとも、レニンの云ふ如く、マルクスの言中には、一の疑ひも容るゝ餘地なき程明瞭に、ブルヂオア的階級國家のみならず、一切の國家を以て、"Schmarotzerauswuchs" として社會と對抗せしめ其の權力を一切餘計なものとし、巴里コムミユーンは此の『シユマロツツアー』が全く廢止せられ其權力が無用に歸した社會なり』とし、同上書四十八頁、『コムミユーンの存在は自明の理として、地方的自治を伴ふには相違ないと共に其れは決して無用に歸した國家權力に對する對衡としてではない』と云つて居るのである。同上書四十八頁 併し此の『地方的自治なるものは、如何に其れが民主的であり、分權的であつたとて、矢張一の國家權力であることは、之を曖昧に附してあるのである。而してエンゲルスも亦た殆んど同樣な曖昧な事を言つて居る。即ち彼は『住居問題』に於て『公共の安寧が要求するときは、强制的徵收收用は、プロレタリアが政治的權力を掌握した後に於ても必要である』同書二十二頁と云つて、プロレタリア國家の强制性を明白に認めて居り

乍ら、此場合『國家』と云ふ語を強て避けて、『勞働する國民は、家屋、工場、勞働要具の總所有者となる』云々と云つて居る。レーニンはエンゲルスが此く漠然と云つた事を露骨に其れを『勞働者國家』又は『プロレタリア國家』と呼んで居るのである。（『國家と革命』五十九頁）

（十二）

斯くマルクスもエンゲルスも、ブルヂオア國家からプロレタリア國家に移るてふ自家の發展史的根本命題と矛盾する嫌を辭せずして、實証的研究から見れば甚漠然たる而も遠い將來に屬する所謂『完全なる共產主義の國家なき社會』――『共產宣言』中には僅づか三行で片付けられて居る所の――を屢々手近に引付けて國家否定の言辭を繰返して居るのは甚だ不思議の事と云ふべきである。此の不思議は、二樣の解釋を以て、之を解き得ると信ずる。第一は、マックス・アドラーが『マルクス研究』第四卷上册（一九一八年刊）に於て『解放の意義に關するマルクスの社會主義思想』と題する一文を公けにして竊かに論究した如くマルクス――及エンゲルス――の青年時代に於ける個人主義的無政府主義傾向が全くは其影を潜めなかつた事是れである。第二は、彼等は個人的にはバクーニン、プルドーン等の無政府主義者と激しく論爭して居つたが（拙文『マルキシズムとしてのボルシエヴキズム』參考を乞ふ。）主張の上に於ては、無政府主義との間隔を成る可く少くして置きたいと努めて居た事是れである。エンゲルスはベーベルに與へた書翰中に『庶民國家と云ふ事は厭きるほど屢々無政府主義者から我々は押付けられるがマルクスのプルドーン駁論に於ても…………………………、…………………………、…………………………』と、だから少くともマルクス及エンゲルスの唯物史觀と無政府主義との間に根本的差違が存するなどと云ふことは妄も亦甚しいことは言ふまでもない事である。此一事を立證する有力な文獻は、マクルスとエンゲルスとが千八百七十二年から三年に亘つてバクーニン及其派の無政府主義

に對して伊太利の『ラ・プレベ』新聞に寄せた二つの論文是れである。（ノイエ・ツアイト三十三年第一卷一九一三、四年刊第四十頁以下にリャサノフの筆に成る其獨逸譯が寄せてある。）此文に於て、マルクスは『ブルヂオアの獨裁政治——資本主義的デモクラシーを彼れは此く名けたのであることは注意を要する——の代りに來る可きプロレタリアの獨裁政治は、國家に一の革命的にして單に過渡的の形態を與ふるに過ぎないものである』と云ひ、エンゲルスは『權威なき組織を有つことは可能なりや』と云ふ問を設けて、之を否定し各個人が一般的秩序の下に其意思を置くのでなければ、經濟的技術的大經營は存續し得ないと斷言し、唯だ將來の組織は、此の權威を生産條件が不可避とする其極度に於てのみ許すと云つて居る。……………………、……………………………………、……………………………………。其意は、公けの機關が其の政治的性質を失ひ單に社會を監視する行政的任務を有することゝなると云ふのである。そこで、エンゲルスが『政治的國家』と云ふ重語を用ゐることの深き意味が諒解されるのである。彼謂らく、無政府主義は政治的國家を一擧にして廢せんとするものである、唯物史觀は之れに反して、……………………——……………………——……………………、……………………………。此れがレニンが拉へて其國家理論の二大箇條の一たるプロレタリア獨裁政治論を打建てた論據なのである。政治的性質なき社會制度であつて而して複雜な上下關係强制關係を認めるものに何とか名を附けなければならぬ、エンゲルスは其を『非政治的國家』と名けた、而して其れ丈けでブルヂオアの『政治的國家』と十分に區別し得るものとした。此の非政治的國家とは、國々ならざる國家の謂であつて、政治的には國家でなく經濟的には國家であるものとするのである。レニンは實に巧妙にも此急所を捕へた而して云つて曰く、『……………………………、……………………………………』と。（『國家と革命』五十七頁）其巧妙さ——其狡猾さと云ふ人もあらう——實に彼を一個の論客と見ても斷じて尋常一樣の學究ならざる

を示して餘あるのである。

（十三）

プロレタリアの政權獲得、政權獲得後のプロレタリアの階級國家の組織に就ては、マルクスとエンゲルスとは、共著作の所々に於て論及して居り又た千八百七十一年の巴里コムミューンの經驗が事實上に共如何なるものなるかを示したとせられて居る。之れに反し共產主義の到達す可き最終の階梯即ち國家なく平等の理想を十分に實現した階級なき社會に就ては僅かなる而して甚だ淡然たる說明が下されて居るのみである。而して此時期に就ては之を具體的に說示す可き何等の經驗材料も存して居らぬは言ふまでもない。我々はマルクス及エンゲルスの著作に就て斷片的發言を拾綴する外に方法を有せざるものである。即ち先づマルクスが千八百七十五年五月五日ブラッケに與へてゴタ綱領草案を批評した書簡（一八九一年ノイエ・ツアイト第九年度第一卷五百六十一頁以下に掲載、『社會主義研究』大正十年十月號に堺利彥氏は此書簡の全文を譯載して居られる。譯文は肝要ならざる點を除いては甚だ忠實で、全體を通じて明快に出來て居る、これが永く保存され得る形ちに於て重刊せられんことは切望に堪へないことである。何となれば、此文は社會民主々義の學說上甚だ重要な文獻であるから。）に據らなければならぬ。マルクスは草案中にある社會主義政黨は『凡ての合法的手段を以て自由國家と社會主義社會を實現することを努めねばならぬ』とある一節を駁擊して『共產主義社會に於ては國家は如何なる變化を被むる可きや』の問を揭げて此問題を論じて居るが、彼は此問に正面から答へないで共產社會に於ては、現在の國家任務に類似する如何なる社會的任務が殘るかを說明するに止めて居る。曰く、『共產社會に於いては、國家の本質は如何なる變化を被むる可きか、換言すれば、現今の國家任務に類似する如何なる社會的任務が、殘存す可きか、此の問題は科學的にのみ解答せらる可きであつて、『國民』てふ語を『國家』てふ語と何千遍結び合せて見た所で、蚤の一飛び程も解決に近づき得るものではない、資本制社會と共產社會との間には、前者から後者に移る革命的變化の時代がある、其れに相應して、亦た政治上の過渡時代がある、此時代の國家は即ちプロレタリアの革命的獨

設の外はないのである』同上書九七三頁、レニン『國家と革命』第七十一頁、堺氏邦譯一一六頁　マルクスは此條に於て二個の回避を爲してゐる。第一は共産社會に於ける國家の本質（ウエーゼン）の問題を單に國家の任務の問題に措換へて居る。第二に、國家任務に代るものは、或種の社會任務なりとして居る、其意は強制的性質を帶びない任務と云ふことでなければならない。然るにマルクスは國家任務に類似する（アナローグ）と云つて居る。類似するものとは果して何か。變ずるものは任務の內容又は目的なく、其形態でありとしたものと考へられる。卽ち現在の强制的形態、其特殊的政治的手段たる外形が失はれると云ふ意に解する外はない。內容又は目的の上から云へば、共産社會に於ては更らにより多くの新らしいものが加はることは免れないのである。然らば單に殘存丈けの問題ではない、其一切の社會的任務は何であるかを示めして異れなくてはならぬのである。然るにマルクスは此問題にも何等の回答を與へない、彼は唯だ科學的に解答す可しとのみ答へた。而して其の『科學的解答』なるものは、何れの處に於ても終に與へられてないのである。之れに反し、彼は其過渡時代に就ては可なり詳しく語つて居る。故にレニンは云ふ『斯くマルクスは庶民國家に關する冗辯を笑倒した後、此問題に對する自己の態度を示して、之を科學的に解答するに方つては唯だ確定せる科學的事實を以てのみ推論す可きを警告して居る。確定して居る第一の事は（中略）歴史的發展の中には疑ひもなく一の特殊なる時期換言すれば、資本主義より共産主義への過渡の楷段が存在すると云ふ一事是れである』と。國家と革命第七十一頁　マルクスの回避の第二は誠にレニンの指摘した通り、共産社會に於ける國家の任務をすらも說示することなく、唯其れに達する途中の過渡時代の解說を以て之れに代へたことに存するのである。仍て我々は少しく前に立戾つて、彼が『共産社會のより高き楷梯』に就て發言して居る數句を拉らへて見なければならぬのである。曰く『我々が今問題とするのは、自己本來の根柢から發達したとしての共産社會でなく、其反對に資本制社會から生れ來るものとしての共産社會是れである。卽ちあらゆる點に於て經濟的にも道德的にも、精神

的にも、其の胎内から生れ出て來た舊社會の母斑を背負つて居るのである』、――是れをマルクスは名けて共產社會の第一階梯又は最低階梯と云ふ――『共產社會のより高き階梯に於ては、個人が分業の下に奴隷的に束縛せられると、從つて亦た精神的勞働と肉體的勞働との對抗が消滅し去つた後、勞働が生活の爲めの一手段たるのみでなく、其れ自らに於て第一の生活欲望となるに至るの後、個人の一切の方面に於ける發達に伴つて生產力も亦增進し、而して團體的の富の一切の源泉がより十分に流れ出すようになつた後、此時になつて始めて狹隘なブルヂオア的法律水平が全く踰越せられ而して社會は其旗印に『各人は其の能性に從つて各人に其欲望に從つて』と書き得るのである』と。（同上書五六六―七頁、堺氏邦譯一〇七―八頁レニン『國家と革命』七七―八〇頁）

（十四）

レニンは右の一節を掲げた後云つて曰く、『此一句を得て、我々はエンゲルスが『自由』てふ語と『國家』てふ語とを結び付けることを嘲つたことの正當さを十分に評價し得るのである。……………………………………………、………………』と。（『國家と革命』第八十頁）レニンは僅かにマルクスの眞意を捉らへたものである。以上の漠然たるマルクスの說明は『共產主義のより高き階梯』と稱する社會に於ては全く國家の存在を否認するもので、此點に於て彼が史的發展の高度とする共產主義なるものは無政府共產主義を意味するに外ならないことは、些の疑を容るゝことは出來ないのである。其れと共に彼が共產主義と無政府主義とを結び付ける爲めに、其政治論と經濟論との間に大なる矛盾、大なる間隔を殘したものなることも亦之を否定することは出來ない。換言すれば、マルクスは其『リープリングス・イデー』たる無政府主義を主張する爲めに其經濟論を支離滅裂の狀に陷らしめたものである。而してそれが亦たレニンが巧妙に捉らへ來つてカウツキー以下を僞造者なり裏切者なりと攻擊する武器とした所であるのである。

經濟上から考察すれば、右のマルクスの發言に於ては、分業が廢止されゝば生産力が增進すると云ふ事も、勞働が苦痛から一變して生活欲望となると云ゝ事も共に少しも『科學的』に說明されても居らず證明されても居らず、唯主張されて居るに過ぎないのである。其は姑く措くとするも『各人が其能性に從つて、各人へ其欲望に從つて』勞働を按配することは、複雜な計劃を要することであるに相違ないが、其の複雜な計劃が何等の强制、何等の秩序制度なくして行はれると云ふことは到底考へ得られない事である。一步を讓つて人性が一變して其れが可能となるとしても――是れ實にレニンが拉へて其理論の基礎とした一點である其事は後に述べる――時ありてか起る障礙、時ありてか起る不平に對して、唯絕對自由の運用によつて其が解決し得られるとは如何して立證し得られるか。否ブルヂオア的法律水平の踰越は行はれるとして、次に此れに代る何かの法律水平が起らないと云ふことが如何して證明し得られるか。否、マルクスの心中は或種の秩序、制度は之を認めて居るのである。其れでなければ、彼は其極力非難するユートピア論者と少しも分つ所なきものとなる外はない。レニン曰く『ブルヂオアジーの立場からは此くの如き社會的設備を純なるユートピアなりと稱し之を嘲笑することは容易な事である』と。(前揭書八十一頁) 遮莫、マルクスは決してユートピアを描出したのではない、彼は經濟上に於てはより高き共産社會にも或種の秩序制度を十分に認めて居る。唯其の政治上の理論たる無政府主義と聯絡させるために、此秩序、制度を强制的なる秩序でないとする必要があるため、其點を漠然とボカシして置いたものである。レニンは之れから糸をたぐつて行つて眞正なるマルキシズムの恢復を企てたのである。

次にエンゲルスはより高き共産社會に就て何と云つて居るかを考察するに、彼はマルクスよりも餘程詳しい說明を下して居るのである。其れは他の所に引用した(拙文『マルキシズムとしてのボルシェヴキズム』)『家族、私有財產、國家起源論』の一節(一八二頁)『排デューリング論』の一節(三〇一―二頁)『佛國市民戰』の序文の一節、『社會主義のユートピアより科學への發展』の一節(第三版四

十八頁）『住居問題』の一節（六十八頁）等であつて、レニンは『國家と革命』の四十七頁から六十九頁に渉つて詳しく之を引用して論評して居る。今繁に渉るを恐れるから、其引用は一切之を省いて置くが、我々はエンゲルスのより詳しい説明によつて、マルキシズムの所謂より高き階梯の共産主義は無政府主義的のものであることを更により明瞭に窺ふことが出來るのである。而して又たマルクスに於けると仝様に、エルゲルスに於ても、此階梯に就ては、其政治論の爲めに其經濟論は著しく曖昧化せられて居ることを認めざるを得ざるものである。要するにマルキシズムが科學的に主張し得るとする社會の史的發展の歸趨は無政府的共産主義であつて、其の詳細を描出することは科學的言證の範圍外に渉るものとして試みられず、唯大體の輪廓を描いて示してあるに止ること、從つてマルクスとエンゲルスとが力を盡して說く所は、其れに至る過渡時代としての低度の共産主義——之れが即ち社會主義である——であつて、此狀態は可なり永く續くものと考へられ、此の永く續く時期に於ては非政治的國家としてのプロレタリア國家——之をプロレタリアの獨裁政治と名く——なるものが存すると云ふことは是れであつて、此點に關してレニンがマルキシズムの國家理論なりとして主張する所は、決してマルクス及エンゲルスの說を誤傳したものでもなければ曲解したものでもないのは之を認むる外はないのである。然るに此の國家に對する見解に就てカウツキー、ベーベル、ベルンシユタイン、プレハノフ、レナー、パネコーク其他の社會民主々義者は、マルキシズムを曲解し濫用したとレニンは責めて居るのである。果して然りや否や。

（十五）

レニンが、此問題を取扱つたのは『國家と革命』の第六章である。題して『御都合主義によるマルキシズムの平凡化』と云ふ。彼は云ふ『社會革命に對する國家の態度、國家に對する社會革命の態度の問題は、第二インテルナチヨナール（一八八九年から一九一四年に到る）の最も重なる理論家、文士を勞することは甚だ少かつたのは、革命の問題全體に於ける

に全じかつた。一九一四年に至つて第二インテルナチョナールの崩壊に導いた、御都合主義の絶へざる増長の道程に於て最も特色的な事は、此問題が目前に横つたときでさへ之を回避するか又は閑却して置くかすることに努めたと云ふ事是れである。大體に於て我々は次の如く云ひ得る。プロレタリア革命の國家に對する態度てふ問題を回避することは、御都合主義に取つて都合の善いことであり又た之を助長したもので、其結果、マルキシズムを脱線せしめ、之を全然平凡化するに至つたと。此の悲しむべき行程を簡單乍ら説示する爲めに、我々はマルキシズムの最聲望ある理論家たるプレハノフとカウツキーとに就て論じて見よう」と。（同書八六・七頁）今茲では冗長に渉るを防ぐ爲め、後年レニンと正面的に最も熱心に論爭した、カウツキー丈けを擧げて他は省くこととする。

ゴタ綱領が社會民主黨の目的とする所は『自由國家』にありとしたに對しマルクスとエンゲルスとが極力反對したことは前に云つた通であるが、其次のエルフルト綱領に於ては、『自由國家』なる文字は削り去られた。乍去此のエルフルト綱領の註釋書に於てカウツキーは『將來國家』なる一節を特に設けて論じて居る。カウツキーは生産要具に對する私有財産の代りに團體的財産を以てすることは、決して社會主義に特有な見解ではない、政府主義も同樣な見解を取るものであると云ひ、社會主義的生産方法の本質は『生産の與へられたる狀態に從つて社會の主要欲望の充足に必要な一切の經營を、唯だ一の大きな團體（組合）に集合することである』と云ひ、『今日存在する社會的組織の中、社會主義的團體を其中に發展せしめる爲めの範圍として利用し得るに必要なる丈けの範圍を有するものは唯一あるのみである。其れは即ち近世的國家である』と云つて居る。（以上カウツキー著『エルフルト綱領』一一二頁至一一九頁）否、カウツキーは、近世的國家を以て社會主義的團體の『唯一の自然的基礎』であると云ふ、但し近世國家が此任務を盡くし得るには、其の本質に於て多少變化することを要すると云ふ。（同上書一二九頁）……、……、……、……

……、…………………、…………………………… 此見解から社會民主黨が盡すべき任務が生ずる、即ち社會民主黨は勞働階級が政權を獲得し其の助けによつて國家を大體に於て全く自足的なる一の大なる經濟團體に變化することを欲する』と。（同上書一三〇頁）即ち彼は、單に國家が資本的企業たることが已むと云ふのみであつて決して、國家其物がなくなると云つて居るのではない。彼は國家が多少其本質を變化するとは云つて居るが其が死滅するとか眠に落つとか云ふことに就ては一言も發して居らぬのである。彼は『將來國家』の面目を委細に描き出すを拒む理由として云つて居る、『我々の欲する所は、國家が自足的なる經濟團體に變形することと是れである。此點に就ては、社會民主黨中一の異論もない。此の團體は如何に自ら發展するか、如何なる傾向を生ずるか、此事を考察するのは決して無用な事ではない。乍併其考察の結果として出て來るものは各人の一私事であつて我黨全體の事ではない、又た然るを要する事でもない。何となれば我黨の行動は直接之れによつて左右せらるゝことはないから』と。（同上書一四五頁）從つて社會主義的經濟團體を支持し、負擔する國家の傾向として、其强制要素の死滅、其政治的性質の消滅從つて國家の自己廢止と云ふことも、一私人の考察としては考へ得ることは勿論である。さり乍らカウツキー自らは、社會主義的生産は强制秩序の內に於けるのみ可能なることを主張するものなるは疑を容れざる所である。即ち彼は無政府主義を難ずる條下に云ふ『社會主義的生産は、勞働の完全なる自由即ち勞働者が其欲する時、處、方法で勞働する自由とは兩立し難しとの主張は正當である。然し勞働者の此くの如き自由は、資本主義に基かうが、團體的基礎に基かうが、凡て如何なる形であらうとも、多數者が計劃的に協働することとは到底兩立しないのである』と。（同上書一六七頁）これは前に揭げたマルクスやエンゲルスの說、就中『自由なる個人の自由なる聯合云々の主張』とは、全く異つた考へ方であり、又た…………………む云々のエンゲルスの言とは、甚しく逕庭のある主張であることは多言を要しないであらう。カウツキーは

自ら慰めて云ふ『年少労働者の此不自由は、社會主義的共同體に於ては、其の壓抑的性質を失ふは勿論のこと、此れあつてこそ人類間に今迄可能であつた限りの最高の自由を得る基礎が與へられるのである。其最高の自由とは、生活の自由、藝術、學問、最高享樂の自由是れである』と。（同上書一七五頁）　此れはマルクス及エンゲルスの無國家の主張、完全自由の實現とは、甚しく調子の異ることも亦言ふ迄もあるまい。彼は又た『社會革命の後の日』なる論文（『社會革命』第二版一九〇七年刊一〇九頁以下）に於て『……………………………、……………、……………………………………………………………。プロレタリア自らの願望や、見込や、理論はタトへ如何様であるとも』と最も鮮明に告白して居る。茲に至つて彼カウツキーのマルクス及エンゲルスの無政府主義と相距ることの甚だ遠いものなることは、一點の疑を殘さないこととなつた。

レニン即ち評して曰く『カウツキーはベルンシュタインを駁すると稱して實は其御都合主義の軍門に降を乞ふたものである（中略）我々はカウツキーの御都合主義駁撃の爲めに物した最も圓熟した著書を取つて見よう。其れは彼の社會革命に關する小冊子である。著者は此書に於て特にプロレタリア革命と其支配との問題を取扱つて居る。著者は甚だ多く貴きものを與へて居る、然るに獨り國家の問題に至りては之を回避して居る。同書を通じて國家權力の獲得のみを論じ其外何物をも論じて居ないけれども、言廻し方は御都合主義に迎合する樣に選んである。即ち國家權力の獲得が國家機關の破壞なしに可能なることを許與して居るのである。即ちマルクスが一八七二年に共産宣言中時代後れとなつたものと聲明した事が、一九〇二年になつてカウツキーによつて復活せられたのである。』云々。（『國家と革命』九十頁）　レニンは更に云ふ『次に我々はカウツキーが御都合主義を駁す可く著した最近の而して最善の著述に移らう。即ち彼の『權力への道』てふ冊子是れである。此書は餘程進歩したものである（中略）著書は、一般に階級對抗の激しくなつた事を確實に指摘し、此れ

に關して大關係ある帝國主義の事を論じて居る。然るに(中略)此書に於ても國家の問題に就ては、著者は全く回避して居るのである。此くも屢々問題を回避することの結果は、即ち不可避的に御都合主義に全然降參して仕舞ふことになつたのである。實に獨逸の社會民主黨は、カウツキーなる人を通して次の如く聲明したものと云ふべきである。…………(一八九九年)。……………………(一九〇九年)。乍併此れに對して、プロレタリア革命の國家に對する態度が問題となるときは、予は、マルクスが一八五二年に言明した所に立戻る(一九一二年)と。パネコークとカウツキーとの論爭に於て、問題は實に此樣に提出せられた』と。レニンは續て此論爭の事を稍々詳しく紹介し、而して、最後に云つて曰く、『我々は次の如く言ふ權利を有つ、第二インテルナチョナール公式代表者の大々多數者は、全然御都合主義に墮し了つたのである。巴里コムミューンの經驗は忘れられたのみならず却つて曲解せられて居る(中畧)。此くプロレタリア革命の國家に對する態度の問題を曲解し又は沈默に附することとは此等の國家が帝國主義的競爭の結果より强くなつた軍國的道具を以て軍國的巨物に變化し行き、單に英國又は獨逸此の金融資本又は彼の金融が、世界を支配すべきかを決する爲めに、數百萬の人間が生命を失ふ樣になると、甚だ重大な關係を有することとならざるを得ない』と。(同上書一〇一—二頁)レニンの豫言の當否は今論ずるまでもないが、彼れがカウツキーの國家理論を以て眞正なるマルキシズムの其れに非ずとする主張は、以上の叙述を以て殆んど遺憾なきまでに其妥當が立證し得られて居るのである。然らば即ち此の誤傳此の曲解から洗ひ淨められたりと稱するレニンの國家理論なるものは果して如何。以下其の考察を試みて、此論文を終ることとする。

(次號完結)

勞働價値說と平均利潤率の問題

(マルクスの價値學說に對する一批評)

小泉信三

(一)

姑らくトウガン・バラノウスキイに從へば、勞働價値說と稱すべきものには少くも三種あると謂ふ。その第一は經濟行爲上の倫理的規範として勞働價値を立て、財がその生産に要する勞働量に應じて相互交換せらるゝを以て、正義の要求に適へるものとなす「理想的勞働價値說」、第二は生産上に投下せらるゝ勞働量を以て、財の相互交換比率を決定する——決して唯一のにはあらざるも——最重要の要素となす「相對的勞働價値說」、而して第三は勞働を直ちに價値の絕對的實質と認むる「絕對的勞働價値說」が是である。第一の意味に於ける勞働價値說の主張者としては、遠くは中古の聖トーオマスを擧げることが出來る。基督教の經濟上の理想は「各人にその勞働に應じて」の一語に簡約される。而して中世の所謂「公正なる價格」justum pretium の說は、此理想と最密接なる關係に立つものであつた。併し此理想の奉ぜらるゝことは、必しも中世にのみ限られたのではない。生産物をしてその正當なる價格に於て賣買されしむることに依て、一人の他人の爲めに强搾せらるゝの狀態を廢止しようとする案は、幾多の社會主義者に依て屢々提議せられて來たものである。而して此場合の正當なる交換比率は、卽ち投下勞働量（必要勞働量）に比例する交換比率であつた。此種

の提案の最顯著なものは、恐らくプルドオンの說であらう。彼れは所謂「價値の制定」に依て、物々必ずその勞働費用に應じて相交換せらるゝの狀態を實現し、斯くして、各勞働者をして、その全勞働產物を收得せしめんことを企劃したのである。併し此、價値の制定は、彼れに取つて將來の理想たるに過ぎないもので、現在に於ては、財と財とが決して投下勞働量に應じては相交換せられて居ない事は、彼れの明かに認めて居るところであつた。故に彼れは右述の意味に於けるその勞働價値說を「革命的未來學說」と稱して居たのである。マルクスも亦、此意味に於ける勞働價値說を主張するものであるかの如く速了せられた事が、全くないではなからう。併しマルクス自身の所說を[illegible]在する迄もなく、「哲學の貧困」に對するエンゲルスの序文中の言明に依ても、此種の「經濟に對する道義の應用」がマルクシズムと相容れ難きものである事は、最早爭ふ餘地がない。而して此意味に於ける勞働價値說を除けば、他の二つは何れも如何なる交換比率が正義の要求に適ふかを示すものではなくて、現に事實上に於て、財と財とが一定の比率で交換せられて居るのは、果して如何なる原因に由るものなるかを說明しようとするものである。而してトウガンは、比較的最も重要なる原因としては財の生產に要する勞働量を、併し乍ら是と相併んで、同じく財の交換價値に影響を與へる別の一要素として、財が生產されてから販賣せらるゝ迄に經過する時間を擧げて居るリカルドオの說に對して、相對的勞働價値說の名稱を適用し、マルクス及びロオドベルトスの價値論を呼ぶに絕對的勞働價値說を以てして居るのである。但しロオドベルトスの價値學說に至つては、一貫を欠くの嫌があるもので、彼れが勞働貨幣の說を唱へ、勞働を以て價値の尺度たるに最も適するもの、勞働を價値の尺度とすることが最も正理に適へるものなる事を主張すると同時に、勞働が價値の尺度たる事は、既に實現せられた事實ではなくて、將來に實現せらるべき、努力の對象たる理想であるとの意味を反復高調して居る點に於ては、彼れは最もプルドオンに近い立場を占め、またその財の市價は必しも常にその勞働費用に一致する

ものではないけれども、交換の自由に放任せらるゝ場合には、結局是に歸着しようとするものだと謂ふ說は、市價と自然價格との關係に關するリカルドオの說と趣を同うして居るが、更に又分配理論に入つて、貸子の地代と利潤とへの分割を說明する場合のロオドベルトスは、價値が勞働量に由て決せらるとの命題を、既に證明せられたものとして其基礎にして居る。(拙著「經濟學說と社會思想」二一九頁以下參照)。故にトウガンも評して、ロオドベルトスは凡べて三種の勞働價値說を、同時に主張するの不徹底を犯して居ると謂ふのである。(Tugan-Baranowski, Marxismus S. 133-6)併し何れにしても、價値を勞働に由て說明しようとした近世の代表的な學說としては、マルクスの外には、リカルドオ、ロオドベルトスの學說を擧げなくてはならぬ。而してマルクスの體系に於ける價値と平均利潤率となる、前世紀末以來の舊論題を新たに再び取上げるに際して、リカルドオ及びロオドベルトスの學說を參酌して、一般的に勞働價値說なるものゝ理論的構造を吟味するのは、此宿題を解決する上に、愡かに貢獻するところがあるものと信ずる。

(二)

問題は斯うである。マルクスの資本論第一卷に說かれるやうに、(而してリカルドオが其價値論の章の前半に說き。ロオドベルトスがその分配理論に於て承認するやうに)、財の價値が、その生產に必要なる勞働量のみに由て決定せらる、ものならば、生產に投下せらるゝ資本は全額であつても、その資本が代表する(若しくは働かす)ところの勞働量が同一でない場合には、新たに產出せらるゝ收益は同一でなかるべき筈である。即ち同額の資本の擧げ得る利潤額、從て利潤率は、資本中の勞働雇傭用に充てらるゝ部分の大小に由て、一々異かつて來なければならぬ筈である。然るにマルクスは、一方に於てリカルド及びロオドベルトスと同じく、利潤率なるものが、實際上に於ては決して資本の組織如何(即ちその如何なる部分が勞働雇傭の爲めに投ぜられ、如何なる部分が其以外の用に充てらるゝか)に由て一々相違するもの

でなくて、利潤率は諸種の資本を通じて均一に歸するの事實（少くも傾向）を認めて居るのである。其處でマルクスは矛盾に陷つて居るものではないかと云ふ疑が起るのである。併しマルクス自らの謂ふところに從へば、此の「矛盾」は外觀上の事に過ぎないので、勞働價値說と平均利潤率とが眞相に於ては決して相衝突するものではない理由は、資本論の後の卷に於て說明されると云ふ事が約束せられた。一八八五年に公にされた資本論第二卷には、此問題の解決は與へられて居なかつたが、此書の序文に於てエンゲルスは、主としてロオドルベルトスを以てマルクスの秘密なる源泉にして、且つそのいより優れたる先驅者となす一派の論者に向つて「啻に價値法則に抵觸せざるのみならず、否な却て此法則を基礎にして、均一なる平均利潤率が成立し得、又成立せざるべからざる所以」を說明せよとの問題を提出したので、此時以來資本論第三卷の公にされた一八九四年に至る十年間に於て、平均利潤率の「謎」の解決は、幾多の社會主義者經濟學者の著書論文の題目となつた。併し出題者エンゲルスの記すところに依れば、（資本論第三卷序文）是等の著書論文の中に於て最も優秀なる理解力を示したものは、コンラド・シュミットの著「マルクスの價値法則に基づく平均利潤率」（一八八九年）であつたが、而かも之れとても、提出せられた謎を正解するものではなかつた。即ち此謎は、マルクス以外には何人の頭腦を以てしても解決することの出來ぬ、極端なる難問題だつたと云ふ事になる。然らばマルクス其人が與へた解答と云ふのは如何なるものであつたか。

マルクスは始めにA商品とB商品とが一定の比率、例へば X：Y で相互交換せられるのは、此の異なる二商品の間に、共通の或物が同一量丈け含まれて居るからだと云ふ考へから出發して、その共通の或物は勞働で、之れが即ち價値實質であるとの推究に進み、一商品の價値はそれを生產する爲め「社會的に必要なる勞働時間」に由て定められ、同じ社會的必要）勞働時間の生產物は相互に價値を等うし、「等價のものは等價のものと交換される」との結論に達したのであ

る。而して此理論を一商品たる勞働力に適用すれば、その餘剩價値論が立てられる。卽ち勞働力の價値は勞働者及び家族の生活維持に必要なる物品の價値に由て定まるのである。然るに勞働者が、その生活必需物の再生產に必要な程度以上の勞働に服すれば、茲に消費せられた衣食住用品及び消耗せられた生產用具の原價以上に、全く新なる價値が發生する。之が餘剩價値であつて、資本家の支出全資本に對する利潤となるものである。然るに此の新價値は一に活勞働のみから生ずるもので、既に生產用具に體現せられて居る死勞働は、たゞその生產上に消耗せられただけが、其儘生產物の價値に移されるに過ぎぬと云ふところから、マルクスは資本の、勞働力に變形せらるゝ(卽ち賃銀とし　勞働力購買の用に充てらるゝ)部分を可變資本部分と名づけて、自餘の不變資本部分と相對せしめて居る。而して新たに生じた餘剩價値額の、可變資本部分のみに對する比例が、彼れの所謂餘剩價値率、その資本全額に對する比例が利潤率である。然るにその全資本額中に於て、可變部分と不變部分との占める割合は、技術上の關係から一定量の勞働に對して建物機械道具原料を要する程度の一ならざる爲め、產業の種類に由て一々相違があるべき筈である。この技術上の理由に基づき決定せ　るゝ、資本の不變部分の價値と可變部分の價値との組合せを稱して、資本の有機的組織と謂ふ。そこで今凡ての產業を通じて、餘剩價値率が同一(例へば百分百)であるとすれば、產業の種類に由て、その資本の有機的組織を異にする結果、それに應じて各產業は、各々その特有の利潤率を有たなければならぬ筈である事は、左記の第一表示にさるゝ通りである。

費用價格	商品價値
70	90
80	111
91	131
55	70
15	20

卽ち表の如くⅠ乃至Ⅴの五個の資本があつて、其全額は各々百であるが、其中で不變資本(c)と可變資本(v)との占める割合は一々異なり、而して餘剩價値率は一樣に百分百であるとすれば、利潤率は第四項に示される如く、資本の有機的組織

第一表

資本	餘剩價値率	餘剩價値	利潤率	消耗不變資本
I 80c+20v	100%	20	20%	50
II 70c+30v	100%	30	30%	51
III 0c+40v	100%	40	40%	51
IV 85c+15v	100%	15	15%	40
V 95c+ 5v	100%	5	5%	10

第二表

資本	餘剩價値	消耗不變資本	商品價値	費用價格	商品價格	利潤率	價値ト價格トノ差
I 80c+20v	20	50	90	70	92	22%	+2
II 70c+30v	30	51	111	81	103	22%	−8
III 60c+40v	40	51	131	91	113	22%	−18
IV 85c+15v	15	40	70	55	77	22%	+7
V 95c+ 5v	5	10	20	15	37	22%	+17
390+110	110		422		422		0

に應じて一々異なり、而して生産せられた商品の價値（可變資本＋消耗不變資本＝費用價格。費用價格＋餘剩價値＝商品價値）は第六項の數字に示される通りであらう。而して資本論第三卷の此點に到る迄にマルクスが說くところは、大體に於て、その第一卷の讀者の當然豫期するところで、少しも了解に苦しむところはない。

然るに（マルクスに從へば）自由競爭は、斯の如く各商品がその價値で賣られて、各資本百に歸屬する利潤額に異同のあることを許さない。資本は利潤率の低い生産方面から引出されて、高い方面に移され、彼此の供給の減少及び增加に由て、平均が實現せられる迄、此の資本の移動出入は止まぬであらう。而して此平均が實現せられた場合には、凡て五種の産業に於て産出せられた餘剩價値總額が、五個の資本全額に對して、均等に配分されると謂ふ。さうすると前者は一一〇、後者は五〇〇であるから二二%なる平均利潤率が成立し、各資本が此平均率に應じた利潤を得んがためには、各商品はその價値で賣れずに、各々その費用價格に平均利潤二二を加算した「生産價格」を以て賣られなければならぬ。此の個々商品の生産價格は、必然一部はその價値以上に昇り、一部はその價値以下に下らなければならぬ事は、上記第二表の示す通りである。

即ち此場合商品は、2+7+17=26 丈け價値以上に賣れ、8+18=26 丈け價

値以下に賣れる。即ち「商品の一部が其價値以上で賣られると全じ割合で、他の部分は價値以下に賣られる。而して此の如き價格で賣る事に依てのみ、IよりVに至る資本が、其有機的組織を異にするにも拘らず、能く利潤率が自I至Vに取つて均等、即ち二二%なることを得るのである」(資本論三卷上一三五頁)。斯く商品が價値から離れた價格で賣られる事は、決して偶然的一時的の現象でなくて、資本の有機的組織に異同があるところで、利潤率平均の一事を認める以上は、必然的永續的に起らなければならぬ現象である。否な却て一商品の生產價格は、「例外的にのみ其價値と一致する」もので、最も發達せる工業上の生產(即ち不變部分が重きを占める資本を以てする生產)に於ては、價値は生產價格以下にあるのが通則であると謂ふ(下卷二九一、二九二頁)。

(三)

平均利潤率の成立は、上記の如くにして說明せられた。併し、此平均利潤率が成立した曉には、商品は最早其價値(即ち社會必要勞働時間)に從つては賣買されないで、必然的に其價値を或は超過し、或は之に及ばず、たゞ例外的にのみ之と一致する生產價格を以て賣られると云ふのである。吾々に取ての問題は、是れが「矛盾」、或は勞働價値說の拋棄を意味せぬであらうか否かの一事に歸る。先づ結論を云へば、私は、他の勞働價値論者の場合は姑らく措き、マルクスの場合に限り、その勞働價値說と生產價格の說とは斷じて相容れないものであると思ふ。マルクスの獨特の方法に依て立證せられた勞働價値は、決して其の必要勞働時間以外の比例に於て、相互に交換せらるゝ事を承認することを許さない。若し之を承認すれば、價値論の依て立つ基礎は崩壞せざるを得ないと思ふのである。商品の價値は、「その生產に必要なる勞働量に由て決せらる。」又は商品と商品とは、その生產に要する勞働量に應じた比率に於て相交換せらるとの說は、固より自明の公理ではなくて、證明を俟つて始めて承認し得べき命題である。マルクスは果して如何なる方法を以て是を

證明しようとしたか。併し今マルクスの論理を檢するより前に、リカルドオは果して如何なる方法に依て、其勞働價値說を證明したかを知る事が甚た參考になる。

甚だ奇とすべきは、リカルドオが、マルクスとは反對に、マルクスをして價値とは一致しない生產價格に到達せしめた、同じ利潤率平均の法則其者に依て、その勞働價値說を證明して居る事である。一般にリカルドオの體系中に於て、平均利潤率は甚だ重要の役目を演じて居るものであるが、彼れの勞働價値論にも、若し證明があると云ふことが出來れば、それは平均利潤率を基礎としての證明である。（リカルドオの經濟學體系中に於て、平均利潤率なるものが如何に重要の任務を帶びて居るかは、獨人 Goetz Briefs が Untersuchungen zur klassischen National-oekonomie 1915 の中で具さに論じて居るが、彼は私が茲に述べようとする、價値論の基礎としての平均利潤率に就ては、充分言ひ及んでない。又此說はアダムスミスがフイジオクラアトから繼承して、始めて英吉利經濟學に輸入したものであると云ふ彼の斷定は、稍々論證不充分の嫌があると思ふが、今直ちに反定を擧げることが出來ぬから、姑らくこれを承認する。）彼れが人力に依て任意に增加し得べく、又その生產上に自由競爭が行はれて居る貨物に就ては、「その交換價値、即ち一貨物の幾許量が他の貨物と交換せらるべきやを決定する規則は、全然（後に至り殆ど一にと改む）その各々に費やされたる勞働の比較量に由るものなり」と述べたのは、利潤率平均の作用を前提としての立言である。リカルドも亦、アダム・スミス及びスミス以前の經濟論者の多數のものと同じく、市場價格又は現實價格 (market or actual price) と、本來價格自然價格 (primary and natural price) とを區別した。彼に從へば、市場價格は市場に於ける時々の需要供給に由て變動するもので、一時的には自然價格の上下に離れ得るものであるが、絕えず自然價格に歸一しようとして居て、決して久しきに亘つては自然價格から離れる事は出來ぬ。而してリカルドオの交換價値と稱するものは、此の自然價格に外ならぬものである。然らば貨物の市場價格は、何故にその自然價格、即ち交換價値に歸着しようとするかと云へば、それは資本が、特に高率の利潤を生ずる生產業に集中し、或は特に利潤率の低い產業から引出されて、供給の增減に由て利潤率の平均が再び恢復せらるる迄、その流出入を止めぬからで

ある。即ち此作用に由て、一貨物の市場價格が自然價格以上に上れば、その供給が增加して之を下降せしめ、反對に市場價格が自然價格以下に降れば、供給の減退が、それを再び舊に復せしめなければ已まぬと云ふのである。即ち彼れに從へば、利潤率が平均を得た時は、貨物の市場價格と、自然價格即ち交換價値とが一致する時である。(マルクスの場合には、利潤率が均一に歸する時は、即ち商品の價値から離れた生産價格の成立する時である)。「されば、貨物の市場價格の、何時までも引續きその自然價格以上、若しくば以下に留まることを妨げるものは、凡ての資本家が懷ける、その基金(資本)を比較的不利なる用途から、有利なる用途に轉用せんとする欲求である。貨物の可變價値を調節して、その生産に必要なる賃銀、及び資本をその原始的狀態に復せしむる爲めに要する、他の一切の費用を支辨したる後、殘る價値若しくば利潤をして、各業に於て、投下せられた資本に比例するが如くならしむるものは此競爭である。」(「經濟學及び課税原理」第四章「自然價格及び市場價格に就て」)

此の價値と市場價格との關係に關するリカルドオの說は、同額の資本は同量の勞働を代表す(即ち同數の勞働者を雇傭す)との假定の下に於てならば、無論承認することが出來る。斯る假定の下に於ては、貨物の市場價格は假令一時その價値の上下に逸脫することがあつても、利潤率平均の作用に由て、必ず早晩之に歸着すべき約束を持つて居る。ロオドベルトスが、交換の自由に放任せられて居ることでは、若し市價が「自然的」交換價値(勞働費用に由て定まるところの)以上に在れば、均衡が恢復せられて、同量勞働の產物と產物とが交換せらるゝやうになる迄、競爭者が來り加はるであらうし、市價が「自然」價以下に降れば、その反對の事が行はれるから、市價は究竟「公正若しくば自然なる」交換價値、即ち勞働費用額に絕えず歸着しようとする傾を持つて居ると主張するのも、(前掲拙著二四二―三頁)同様に、同額の資本は必ず同量の勞働を動かすとの前提の下に於てならば、固より承認することが出來る。併し一度此前

提を除けば、事態は全く一變する。假に二人の同じく一萬磅の資本を投じて生産を行ふものがあつて、一方はその資本の大部分を機械に投じ、一方は大部分を賃銀として支出したとして、生産物が夫れ〴〵その投下勞働量に應じて賣れるものとすれば、同じ一萬磅の資本に對して、一方の受ける收益は甚だ小さく、他方の收益は之に比して甚だ大なるべき筈である。其處で資本が此不利の産業を去つて有利の産業に移り、供給の增減、從て一方の價格の騰貴、他方の價格の下落に依て、利潤率が平均を得るに至つて、始めて資本の流出入が止むものとすれば、その平均を得た場合の價格卽ち自然價格は、決して投下勞働量に比例したものではない。マルサス、トルレンス等が指摘して、リカルドオに批評を加へたのも亦此點であつた。勿論リカルドオも始めから此點に心着がなかつた譯ではないが、今是等の批評に接して、漸く深く此一面に注意を向けるに至つた。彼れの經濟原論が始めて出た時から、その第三版が公にされるまで（或は其以後に至るまで）に、彼の學說が閱した修正は、凡べて彼れが同額の資本は必しも同量の勞働を代表するものでないと云ふ一點に、漸く重きを措くに至つた結果であると云つて好い。換言すれば、リカルドオが同時代の人と共に、比較的輕視して居つた固定資本なるものに漸く重を措くに至つた結果である。經濟原論第三版に於てその價値論に加へられた修正、又新たに加へられた機械論の一章は、何れも是れに由て說明することの出來るものである。（拙稿「リカルドオの機械論」三田學會雜誌第十五卷第十二號）既に資本中に於て固定資本と流動資本との占める割合如何に由て、同額の資本は必しも同量の勞働を雇傭せずと云ふ一點に重きを措くに至れば、勞働價値說は當然修正されなければならぬ。乃ちリカルドオはマカロックに書を與へて、價値を左右する原因は一ツでなくて二ツである。卽ち其貨物を生産するに必要なる勞働の相對量及び造られた貨物が市場に賣出される迄に經過する時間が是であつて、而して固定資本に關する一切の問題は此の第二の規則の範圍内に落ちるものだと明言するに至つた所以である。（一八二〇年五月二日、六月十三日附書簡其他）

（四）

其處でマルクスに歸ると、彼れは固よりリカルドオと同じ方法で、勞働價値說を證明する譯には行かぬ。彼れは資本の有機的組織が、凡ての產業を通じて全一であると云ふが如き事は夢想もして居らぬ。又十八世紀末及び十九世紀初年の經濟學者に就てならば、姑らく斯る假定を寬假し得るとしても、機械の應用の既に充分盛に行はれて居たマルクスの時代に於て、斯る假定の上に理論を建設することは何人も思及ばぬところであらう。

マルクスは資本論第三卷で平均利潤率の成立、價値の生產價格化を說明した後、或一節で、「樣々の生產部面の商品が、其價値にて賣らるゝの假定は、云ふ迄もなく、價値は價格が其周圍を旋廻する引力中心點であつて、此點に於て價格の騰落が平均せらるゝ事を意味するに過ぎぬ」と記して居る。（上卷一五七頁、高畠氏譯第三卷第一冊三一一頁）此理は、リカルドオの價値と市場價格との關係に於ては、容易に承認し得ること前記の通りであるが、マルクスの場合には、その何故に然るかを了解することが出來ぬ。マルクスに於ける生產價格と價値との關係は、リカルドオに於ける市場價格と價値との關係ではない。マルクスに於ける商品の生產價格は、決して偶々其價値から離れて、絕えず之に歸着しようとする傾向を示して居るものではなくて、必然の理由があつて、價値の上下に離れたものである事は、既に前段の說明に出て認められて居ると思ふ。再び前記第二表に就て見れば、その第六項に示されて居る五種の商品個々の價格は、決して第四項に現はれて居る個々の價値に一致しようとして、其周圍に旋回して居るものではない。資本の有機的組織に異同のあるところで、利潤率が平均すれば、個々商品の價格は、必ず然らざるべからざる理由に由て、其價値から離反する。決して偶然一時的にさうなつて、絕えず其本源の狀態に復歸しようとして居るものではないのである。故にマルクスの場合には、リカルドオが謂ふのと同じ意味で、價値が價格を支配するとは云へないのである。マルクスの價値法則は、

決して價格動搖の時向中心として立てられたものではない。(近頃山川均氏に依て翻譯されたブヂンの「マルクス學說體系」には「價値は價格の測定せられる標準を立てるものであつて、價格は自然に此標準に一致する傾向を持つて居る。……市場の『値切りこぎり』の結果として生じる價格は、自づと其の標準價値の方向に來き着けられる」(九五頁)と記して居るのは誤解であらう。その事は同じ著者が二一〇頁前後に於て自認して居る。)假令究竟に於て價値に一致しようとする傾きを持つて居ても、現實に於て價値から離れた價格が成立して居る以上、マルクスの論理を以てしては、彼れの價値法則は立てられない。彼れの證明方法を以てすれば、個々商品の現實の交換が、一々價値に由て定められた比率に於て行はれなければ、價値法則は維持する事が出來ないのである。

抑もマルクスは一商品の或分量と別の商品の或分量とが、相互交換せられると云ふ現實の事實から出發し、推究して、等量の勞働の生產物は等量の勞働の生產物と相交換されるとの命題に到達するのである。資本論第一卷(第一篇第一章)に就て見るに、假に一クオタアの小麥と二ツエントネルの鐵とが相互交換される事實があるとすれば、彼れは此兩商品が、此割合で相交換されるは、此二者の間に同一量の勞働が含まれて居るからだと論結するのである。彼れは右の事實を

小麥１クオタア＝鐵２ツエントネル

なる方程式で現はし、さて此方程式は抑も何を意味するかとの問を設ける。而して自ら此問に答へて曰ふ、「それはこの一クオタアの小麥と、二ツエントネルの鐵と云ふ、二つの違つたものゝ中に、等量の共通なる或物が存在することを語る。即ち此二者は、二者の何れにもあらざる或る第三のものに等しい。二者の各々は、それが交換價値なる限り、この第三のものに約元されなくてはならぬ」と。然らばその共通の或ものは何かと云へば、マルクスはそれが商品の幾何

學的、物理學的、化學的又はその他の自然的性質ではあり得べき筈がないと云ふ。そこでそのあり得可からざる性質を抽象して仕舞ふと、此の思考上の蒸溜法の結果として、たゞ一つ兩者に共通な性質のみが殘る。それは二商品が共に勞働の生産物たるの一事である。即ち「是等のものは、今その生産に人間の勞働が費やされ、人間の勞働がそれに蓄積せられて居ると云ふ事のみを示して居る。而して此兩者に共通なる社會的實質の結晶として是等の物は價値―商品價値である。」然らば商品の價値は何に由て測定されるかと謂へば、それは商品中に含有せらるゝ價値形成物質、即ち勞働の分量に由て測られる。併し此場合の勞働量とは、個々の場合に生産上現實に費やされ勞働量ではなくて、一物の生産の爲め社會的に必要なる勞働量、委しく謂へば普通の生産條件の下で、その社會に普通の熟練の程度、及び普通の勞働强度を以てして、一物を生産するに要する勞働時間である。而して「等大の勞働量を含むところの、即ち同じ勞働時間に於て生産され得るところの諸商品は皆同じ價値を有し、一商品の價値の他の各商品の價値に對する關係は、その一商品の生産に必要なる勞働時間の他の商品の生産に必要なる勞働時間に等し」く、「商品は其價値に應じて交換せられ」又は「等價物は等價物と交換せらるゝ」のである。即ちマルクスに從へば、一般にX量の小麥とY量の鐵とが相交換せらるゝのは、此の兩者に同一の(社會的に必要なる)勞働量が含まれて居るからだと謂ふのである。

　此の論究法はマルクス獨特のものであつて、從來勞働價値論者と稱せられた何人の說明法とも全然趣を異にして居る。さて是に對しては如何なる批評が下さるゝかと謂ふに、最初に起る疑問は、相互に交換せらるゝ貨物間に「共通なる同量の或物」は果して勞働のみであるか、及び勞働の生産物ではなくて、而かも相交換せらるゝものゝ交換比率は何に由て說明すべきかと云ふ事である。共通なる或物として考へられ得べきものゝ一は利用である。マルクスは使用價値の抽象と云ふ事を頻りに力說して居るが、例へば食欲を滿たし、或は寒暑を防ぐと云ふ特定の用途は、一々の商品に

由て異なるものではあるが、マルクスが個々の商品を、建築勞働紡績勞働指物勞働等、個々特定の勞働の産物と見ずして、一般的抽象的人間勞働の産物と見るやうに、食欲を滿たすもの、又は衣欲を滿たすものとは考へずに、一般的に人間欲望を滿たす力を有するものと云ふ事に、相互の共通點を求めると云ふ事は、勞働を以て共通要素とするのと、同じ程度に於て許さるべき事ではなからうか。次に又賣買交換はせられても、勞働の生産物でないものに對してマルクスは何う云ふかと云ふに、彼れは此種の財を其價値法則から除外して居る。即ち例へば彼れは、土地には價格はあるが價値はない。何となれば之れは勞働の生産物でないから、と云ふのである。(第一卷平民版六三―四頁)。固より斯の如き特定の局限せられた意味に價値なる言葉を用ゐるのは、人の隨意であるが、先づ勞働生産物以外のものを除外して置いて、さて殘るところのもの、即ち商品に就て、是れに共通の特徴は何かと云ふ問を發し、それに對して、勞働生産物たるの一事がそれだと答へるのは、或る一特徴を有するもののみを集めて、さて是等のものに共通の特徴は何かと云ふ問を發し、件の一特徴が即ち是れだと答へる事に歸着しはせぬか。此種の論究に依つて、吾々の認識は少しも歩を進めることは出來ないのである。併し是等の疑ひは今姑らく不問に附する。私が最も重大視するのは、上述の如き論理的過程に依つて證明せられた價値法則は、必ず現實の商品交換比率を支配して、商品は必ずその價値で賣買されなければならぬものだと云ふ一點である。上記マルクスの價値法則證明法が正しいものならば、それは生産價格に於ける商品の現實交換比率にも適用されなければならぬ。而して生産價格が價値から離れて居れば、當初の價値法則その者は破壞される事になるのである。(マルクスは現實の市場價格が、啻に價値のみならず、生産價格からさへも離れる事のあり得べきを認めて居るが。(三卷上二七九頁)、論を簡單にする爲め、姑らく商品は實際にその生産價格で賣買されるものと假定する。)

今假にクオタアの小麥とyツエントネルの鐵とな仝量の勞働に依て生産せられたものとする。然るにマルクスの生産

價々の說に從へば、例外の場合を除くの外、現實の商品交換比率は、その含有勞働量とは一致しないで、或はそれ以上にあつて、x 量の小麥は y 量の鐵とは交換されないで、或はそれ以下にあると云ふ。姑らく鐵の生產價格は其價値以上にあつて、$y-y'$ 量の鐵と交換されるものとすると、是をマルクスに倣つて方程式に現はせば

x 小麥 $= y-y'$ 鐵(若しくば x 小麥 $=$ A 瓩 $= y-y'$ 鐵)

となる。今此現實の交換比率に對して、前に述べたマルクスの蒸溜的推究法を適用すれば何うなるか。私はマルクスに倣つて疑問を提起する。「この方程式は抑も何を意味するか。」マルクスに從へば、吾々は之に對して「それはこの x 量の小麥と $y-y'$ 量の鐵と云ふ二つの異がつたものゝ中に、等量の共通なる或物が存在することを語る。卽ちこの二者は二者の何れにもあらざる或る第三のものに等しい。二者の各々はそれが交換價値なる限り、この第三のものに約元されなくてはならぬ」と答へなければならないのである。然らばその共通の或るものは何か。同じくマルクスの推究を繰返して行けば、吾々はこの x 量の小麥と $y-y'$ 量の鐵とが交換されるのは、此兩者に同量の社會的必要勞働量が含まれて居るからだと云ふ結論に到達せざるを得ないのである。吾々は x 量の小麥と y 量の鐵とが等價値であるとの前提から出發して、x 量の小麥は $y-y'$ 量の鐵と同價値だと云ふ結論に到達した。x 量の小麥に含まれて居る勞働量は、y 量の鐵に含まれて居る勞働量とも等しく、それより小なる $y-y'$ 量の鐵に含まれて居る勞働量とも等しいと謂ふのである。これは明かに非論理である。

マルクスは此批評を避ける事は出來ぬ。彼れが始めに

1クオタア小麥=2ツエントネル鐵

なる方程式を立て、此方程式は抑も何を意味するかとの問を發した際には、彼れは未だ其價値法則を持つて居らぬ。

彼れはたゞ目前に與へられた現實の交換比率を取て、それを推究の出發點としたのである。彼れは鐵と小麥とが價値法則に從つて相交換されて居るか、或は生產價格の法則に從つて交換されて居るかを全く知らない。從つて彼れの推究法にして許さるべくんば、それは現實に行はるゝ交換比率の、如何なるものに對しても適用されなければならぬ。而してそれを價値と離れた生產價格に適用するの結果は、價値法則其者を自滅せしめるのである。彼れの價値法則は、相交換さるゝ二商品には、共通の或物が同量丈け含まれて居るとの斷定から出發するもので、決して上記一クオタアの小麥と二ツエントネルの鐵の個々に就て、その生產に要する勞働量を調査し、その結果として歸納的に、此二者が相交換されるのは互に勞働費用を等しくするからであると論結したのではない。若し相交換さるゝ二商品の個々に就て、その勞働費用を調査したならば、マルクスは決してその同一ならざる事を發見したであらう。それは資本第三卷上第十章の後半、市場價格と市場價値とを論ずる條下に於て、マルクス自身の明かに認めて居るところである。

以上がマルクスに對する私の批評の主要點である。而して右の理由に基づいて、彼れの價値法則は平均利潤率と兩立し難きものであると斷定する。ブチンは前掲の書の「マルクス價値學說の大矛盾」なる一章の中に此問題を捉へて、マルクスの決して矛盾なく誤謬なきことを反覆辯明して居るが、その能辯にも拘らず、議論は薄弱である。商品の現實の價格が、必しも價値と一致せぬものならば、相交換せらるゝ商品間に共通の等量物としてのみ考へられた價値の法則は、抑も何うして立てられるか。此問に對する答へは與へられて居ないのである。

(五)

右述の如く、生產價格は最初に立てられた價値法則（殊にその論證方法）とは兩立し難きものであるが、猶ほ價値法則は、生產價格とは一致せぬ迄も、之を支配すると云ふ意味に於て正しいと主張する議論が立てられ得る。その一つ

は、成程個々の商品は、或は其價値以上、或はその價値以下に賣れるけれども、或商品が價値以上に賣れる丈け、他の商品は其價値以下に賣れるのであるから、（前掲第二表參看）一切の產業全體を總括すれば、生產價格の總額は價値總額に一致する。此意味に於て價値法則は効力を失はぬとの說である。（資本論三卷上一二八、一四〇頁）これと稍々似た說はロオドベルトスにも見出される。彼れは前述の如く、勞働價値說に基づいて分配理論を立てたのであるが、併し又同時に、其分配理論の中で甚だ重要の役目を演ずるものは、普通利潤（üblicher Gewinn）又は均等利潤（gleichmässige Gewinne）であつた。併し固より此兩者は兩立する事が出來ないので、彼れはその勞働價値說の方に制限を加へて、個々の生產物は必しもその勞働費用額に應じて交換せらるゝものではないが、全體に於て im allgemeinen 勞働價値說は眞理だと云はうとしたのである。（Zur Erkenntnis unsrer staatswirtschaftlichen Zustände, S.130–Das kapital S. 11–12）

併し、此の勞働費用は全體に於て交換を支配する、或は價値總額は價格總額に一致するとの說は、抑も何を意味するか。元來吾々が價値法則に求めて居るのは、個々商品の交換比率の說明であつて、マルクス自身も亦、一定の比率に於て交換せらるゝ二商品の間に、共通物を求めるところから出發して居るのであるから、價格の合計總額が、價値の合計總額に一致すると云ふ答へは、最初の問に外づれて居るのである。一クオタアの小麥が何故二ツエントネルの鐵と交換されるかと云ふのが問題であつて、此の二つの物の價値及び價格の合計が一致するか又はせぬかと云ふ事を求める爲めにならば、彼の方程式を立てる必要がないのである。既にボエム・バエルクの指摘して居る通り、貨幣の仲介を除いて考へれば、結局貨物が貨物と交換されるのであるから、一の貨物は、貨物たると同時に、交換の相手たる貨物の價格である。從て貨物全體の合計は、それに支拂はれる價格の合計と當然同一物である。即ち一社會の生產物全體の價格は、生產物全體その者だと云ふ事に歸着する。Aなる貨物とBなる貨物とが一對三の割合で交換されるとすれば、一Aは三

Bの價格、三Bは一Aの價格である。從て 3B+1A なる合計に對する價格は、また 3B+1A に外ならぬ。さうして見ると、商品全體の價格は商品全體の價値に一致すると云ふ事は、如何にもその通りには違ひないけれども、それは畢竟同じ物は同じ物だと云ふ tautology に歸着するので、何等の答へにもなるものではない。同じ論法を以てすれば、商品總額の重量は、商品總額の重量と一致するから、商品の交換比率はその重量に由て決せらると云ふ法則も立てられる筈だと、ボエムは酷評して居る。(Böhm-Bawerk K. M. and Close of His System pp. 74-5)

價値は依然として生產價格を支配すると云ふ說の、更に別の一と見るべきものは、商品全體の價値總額は、價値法則に由て定められ、此の價値總額が餘剩價値總額を決定し、餘剩價値總額が資本總額に割當てられて平均利潤率が成立し、平均利潤率が、特定產業の資本に適用せられて利潤率が定まり、利潤額が一要素となつて生產價格を決定する。即ち價値は究局生產價格を決定すると云ふ說である。(三卷上、一五九頁)

今順次此說の當否を撿して見ると、先づ一商品の生產價格は何を以て成るかと云ふに、既述の如く、それは費用價格と投下資本に對する平均利潤との合計である。然らばその費用價格はと云ふに、之れは支出せられた賃銀額と、生產用具消耗高との合算から成立つものである。然るに生產物がその價値で賣買されずして、生產價格で賣買されるのに、生產用具のみ獨り依然として價値通りに賣買されると云ふ事は考へられぬ。此場合にはマルクスも認めて居る通り、(三卷上、一三八以下、一四四、一八六頁)生產用具も亦其生產價格を以て賣買されるのが當然である。然らば此の生產用具の生產價格は何を以て成るかと云ふに、これも亦費用價格、即ち賃銀と消耗生產用具の價格とに、支出資本に對する平均利潤を加算したものに外ならぬ。然らば更に此の消耗生產用具の價格はと云へば、これ亦賃銀と消耗生產用具及び利潤を以て構成されるのである。今 p 以て利潤、k を以て費用價格、l を以て賃銀額、k' を以て生產用具の費用價格を示せば、先づ商品の生產價格は、$k+p$ である。而して此の k' は、更に $l'+(k''+p')$ に分解せられ、更に k'' は $l''+(k'''+p'')$ となる。斯くして生產用の價格を分解し分解して、最後迄(即ち人間が無價の自

然に（直接當面する迄）遡ると、商品の生産價格なるものは、畢竟生産各段階に於ける賃銀の合計（一＋二＋三……）と、同じく各段階に於ける利潤（一＋二＋三……）との和に外ならぬと云ふ事になる。然らば此賃銀額は何に由て定まるかと云ふと、各段階に於ける投下勞働量と賃銀率とに由て定まるが、商品の價値は勞働量のみに由て定まるものであつて、賃銀率の高低は決して價値を左右するものでないと云ふのは、マルクスの主張するところであるから、（「如何なる事情の下に於ても、賃銀の騰落は決して商品の價値を……動かす事能はず」）以上の分解の結果として、茲にマルクスの價値論と相容れない一要素が、生産價格の決定に參加して居ると云ふ事になるのである。そこで轉じて利潤の方を見ると、商品の價値總額が餘剩價値總額を決定すると云ふが、餘剩價値總額は、單獨に價値總額のみで決定せられるものではなくて、價値總額から、支拂はれた賃銀總額を控除した殘額を以て成るのである。そこで又賃銀總額は何に由て定まるかと云ふと、之を定めるものは、勞働量と賃銀率とである。然らば賃銀率は何に由て定まるか。それは價値法則に從ふものではないだらうか。マルクスは始めには、勞働力の價値は勞働者生活必需品の價値に由て定まると說明したが、商品價値が變じて生産價格となる曉きに於ては、勞働力の價値も亦生活必需品の價値から離れて、その生産價格に從ふのは當然であつて、マルクスも此事を承認して居る。（「……賃銀の消費に、生活價格をその價値と異にする商品が入る場合には、20v（可變資本、即ち支拂はるゝ賃銀）は價値から離れ得るであらう。」三卷上、一八六頁）さうすると餘剩價値總額を決定する要素の中の、少くも一ツは、價値法則の支配を受けぬ異分子であると云はねばなるまい。それではその可變資本の生産價格は何で極まるかと云ふ問が起り得るが、これは前述の理に由て、費用價格の分解又分解に由て、結局利潤と賃銀額との和に外ならぬと云ふに歸着するのである。更に次の段に進むと、假に餘剩價値額が決定せられたとしても、平均利潤率は一個の比率であるから、それは餘剩價値總額のみに由て定まるものではなくて、餘剩價値總額と總資本額との比で定まる。其處で總資本額と云ふ一要素が考慮に入て來る。次に個々商品の價格中に入る利潤額は何で定まるかと云ふと、特定産業に於ける投下資本額に、平均利潤率を乘じた結果として定まるのであるが、その投下資

本額は雇傭勞働量と賃銀率とに由て動かされる。其處で又再び賃銀率なるものが現はれて來る。これは利潤額が定まる迄の手續であるが、始めに述べた通り、商品價格は利潤額のみに由て定まるのではなくて、平均利潤と支出賃銀總額とに由て定まるのであるから、利潤も亦價格決定の一要因に過ぎぬと云ふことになる。(此一節ボエムに據る)

甚だ煩雜な說明になつたが、要するに生產價格なるものを分解して行けば、結局利潤と賃銀とに約元せられ、その賃銀の生產價格を更に分解すれば、全じく利潤と賃銀とに約元せられ、利潤の方を取て、其決定要因を分解すれば、矢張り全じく賃銀率なるものが其中に現はれて來るのである。價値は何で決まるか。生產費で決まる。生產費は何で決まるか。生產費の生產費で極まる、と云ふのでは、大地はアトラスに依て擔ひ支へられて居ると云ふ說明と全じ論法に歸着しはせぬか。大地はアトラスに依て支へられて居るものならば、之を擔ふアトラスは何の上に立つて居るか。更にアトラスが立つ第二の土地は何に依て支へられて居るか、第二のアトラスは更に又何の上に立つか。嘗てボイゼルは斯う云つて生產費說を評したが、(「自然價値論」)今右に述べたところに由ると、マルクスの生產價格の說も亦同じ批評を避けることが出來ないやうに思はれる。

而かもこれは凡べて前に述べた、商品の現實の價格が、それに含まるゝ社會的必要勞働量と一致せぬものならば、相交換せらるゝ商品間に共通の等量物として考へられた價値の法則は、如何にして立てられるかと云ふ、最も根本的な疑問を姑らく措いて其上での議論である。

附記、時間の都合上本文の後半は省略し過ぎた。これより少許り詳しい事は、慶應義塾經濟學部同人の編む「經濟思潮講演集」(岩波書店近刊)の拙文中に載せられる筈である。

態々指摘する程の事ではないかも知れぬが、マルクスが平均利潤なるものを、或は投下資本全額に平均利潤率を乘じた積として、或は費用價格に平均利潤率を乘じたものとして說いて居るのは(三卷上、一三二、一四四頁其他)讀者を迷はせる。その何れか一方に決定することに由て、說明用の數字又は符號は多少の訂正を要するであらう。

自由に關する一考察

高田保馬

一

自由が歴史の進行の裡に漸次實現せられる、又は社會の歴史は自由の展開の歴史であるとは屢說かれたる見解である。然れども、かゝる主張は極めて雜多なる內容を有し得る。蓋し自由と云ふ言葉が種々なる意義を有するによる。

自由と云ふ言葉は本來自己自らが其活動の原因にして自己以外のものにそれの原因を有せざる事、從ひて他より又は外部より束縛せられざる事を意味する。然れども此自己と云ひ他又は外部と云ふものを如何に見るかに從ひて其意義は樣々に相分れる。此等の意義は大別して二種となす事が出來よう。一は玆に其伸張の過程を跡づけむとする社會的自由にして、他は道德的或は哲學的自由である。自由概念の中心要素を形成する自他は社會的自由に就いて見る時、云はゞ經驗的なる自己と他人とである。特定の個人が其活動に於て他人に拘束せられず 自己自身の意思に從ふ時に其人は自由なりと云ふ。而して私共は社會生活に於ける此自己が他人によりて束縛せられ、又は然らずしてこれよりは獨立に自己の活動を自己の意志によりて營み得ると同樣なる姿を個人自身の內部に認める事が出來る。卽ち、個人の內部にありて個人の本質とも見るべき理性が動もすればこれに對立して束縛を加へむとする感性的自我の要求を斥けて其活動を營み、又はこれが壓迫に支配せられる。此關係の類似よりして自由の概念を社會の範圍から比喩的に自我の內部に移し、而して個人の一切の活動が理性によりて支配せらるゝ事を自由と云ひ、これに反して感性の要求が理性を束縛する事を

不自由と云ふ。理性に從ふ事を何故に社會生活に於ける個人が自己に從ふ事と同視するかと云ふに、理性こそは自我の本質、感性的自我又は雜多の欲求はたゞ一時的部分的の自我たるに過ぎず動もすればその活動を妨ぐるものとして、此本質に對立するものと信ぜられるからである。かくて道德的に云へば其良心の命に從ひて法を踰えざる生活學問的に見れば一切の理知的究理的活動が眞理の規範そのまゝに行はるゝ生活がこれ自由なる生活である。然れども、此比喩的又は派生的なる意義に於ける自由は社會的自由と直接に交渉する所無く、云はゞ互に獨立なる概念であるが故に、姑く私共の考察の範圍より之を取除いても差支なしと思ふ。

社會的自由は數多の方面より見て種々に區別し得られる。先づこれと社會との關係よりして二分する事が出來る。一は社會前の自由又は自然的自由にして、二は社會後の自由又は狹義に於ける社會的自由である。前者は云はゞ純論理的構想的のもの、即ち想定せられたる自然狀態に於ける自由にして、それは結社の存在せざる事より來る他人の壓迫束縛の缺乏に外ならぬ。勿論これは歷史の事實として存在したりしものとは考へられぬ。後者は結社の間に存立するもの云はゞ社會よりして成員に與へられたる自由である。社會によりて承認せられたる自由なるが故に、其侵害、毀損はやがてまた社會によりて報いられる、從ひて此種の自由は社會の保障する所の自由なりと認むる事が出來よう構想的なる社會前の自由は結社その事によりて減損する、此減損は社會存立の必要上已むを得ざる事である。然れども或限度以上の減損によりて其殘餘の部分は社會によりて保障せられ、社會的自由の內容をなす、社會的自由がかゝる內容即ち自然的自由の殘餘の社會的のものに化せられたるものよりも、なほ以外のものを含むことは云ふまでもない。

狹義の社會的自由はまた二に分ち得る。本來自由と云ふ事が消極的積極的の兩方面を有す、一は他人の束縛を受けざる事にして、他は自己の一切活動を自己の意志によりて決定する事これである。此兩方面に應じて二種の社會的自由が

考へられる。一は其消極的方面とも見るべきもの、云はば個人的又は民事的自由 (individual or civil liberty) である、他は其積極的方面とも見るべきもの、云はゞ政治的自由 (political liberty) である、然れどもこの種の自由は最も政治生活に著しく現はるゝとは云ふものゝ、これに限れる事に非ず、寧ろ統制的自由と稱するを當れりとすべきか。勿論嚴密に見れば、個人的自由とても單に消極的のものでは無く、自己が他の束縛を蒙らざる事は同時に自己の活動を其限度に於て自己の意志により營むと云ふ積極的方面を意味する。而して、所謂政治的自由に比して消極的方面が重きをなすと云ふ丈の事に止まらう。此個人的自由は他の意味からして、それに積極的消極的の方面を分ちて考ふる事が出來る。一は消極的即ち防衛的自由にして自己が他人の束縛より免れ居る姿である、二は積極的即ち利用的自由にして、他人を支配し利用する自由の姿である。自己の活動を自己の意志によりて營むと云ふ自由の概念は當然此利用的方面を含むが、これは自由の中に含まるゝ自己破壞的要素である。又政治的自由が自由と考へられ得るは、自己の活動を自己の意志によりて決定するが故である。例へば代議政治にありては、自己を支配する意志は他人の意志に非ずして自己其決定に參與したる意志である、進みて人民全體より見れば人民其者の意志が人民自身を支配する。此意味に於てそれは自治なるが故に自由である。此種の自由は政治の方面にのみ存せず、今日の所謂産業的自治又は産業的民主制の如き其顯著なる一例である、たゞ統制が自己其決定に參與したる意志によりて行はると云ふだけの事なるが故に、統制的自由とも云ふべきは前述の如し。然れどもこの種の自由が果して嚴密なる意義に於て自由と稱せられ得るやは問題である。自己其決定に參與したる意志は自己の意志に非ず、其内容が自己の意志の内容と相異なる可能は君主又は主人の意志に關する時と選ぶ事は無い。たゞ社會の同質的なる時にのみ二者は相一致し得る。結局はこれ他我による自我の統制であらう
たゞ特殊の自我が大なる社會的自我の一部分をなすと いふ形而上學的想定の下に於てのみ眞の自治として固有の意義

に於ける自由として解釋し得られる。然れども、かゝる形而上學想定の是非は今論じ得る限りでは無い。此の如く論じ來れば嚴密に自由と稱せられ得るものはたゞ個人的自由のみ、本章の所論また之を中心として考察せむと思ふ。

二

自由の增進が如何なる原因により如何なる過程を通して行はれしかを考ふるに先ち、これと階級制度との關係を明確にする必要を感ずる。蓋しこれ當面の問題に對する豫備的考察の性質を有するのである。

前に述べたるが如く私共の考察の重心は個人的自由にある。而も其意義をなほ一歩精確ならしめよう。茲に云ふ個人的自由は個人の意志が現實に他の意志によつて束縛せられずと云ふ事では無い、制度の上に於て個人の意志に束縛を受けざる活動の餘地の與へられてある事である。從ひて個人の意志が社會の意志と全然相一致し從つて二者の間に完全なる一致ありとしても、制度の上に於てかゝる餘地無くば何等の自由なしと考へる。現實の個人意識に自由の感情、拘束せられずとの觀念の有無は問題とする所では無い。從ひて問題とする所の自由は制度としての自由或は客觀的自由とも云ふべきであらう。さて此の如き自由は社會の階級制度と如何なる關係に立つか。

階級制度が其勢力を失ひ階級的區別が其峻嚴さを失ふ時には常に成員の個人的自由を伸展せしめる樣に思はれる。此點からして、自由の程度は階級制度の函數なるかに考へられ、一に其形態如何によりて決定せらるゝかに信ぜられる。私を以て見れば、自由が階級制度の函數なりと云ふ事は一部分に於てのみ眞理である。然らば二者の關係の眞相如何私は謂ふに自由の束縛は二の異なれる根原を有つ。其一は云はば社會の存續發展の爲の必要に應ずるものにして、其二は階級的支配の必要に應ずるもの、即ち一部分の階級が他の部分の階級を支配して、從を得むが爲にこれを強制する必要上彼等に加へらるゝものである。此二者を分つべき標準は前者が社會の一成員を通じ殆ど一樣に行はるゝに對し、云は

ゞ平等的強制なるに對し、後者が社會の一部分にのみ加へられる點に存する。實に階級的支配の必要に應ずる自由の束縛は社會の上級者に免除せられ、最下層のものには課せらるゝ事最も強く、其他階級的地位に應じて之を蒙る程度に差等がある。云はゞ成員の上に不等に賦課せられる。

過去の歴史を通觀するに、階級的區劃が其の峻嚴さを失ひ漸次開放的性質を加ふるにつれて自由の伸展を見たるは爭ふべからざる事實である。而して假に階級制度の存在せざる、社會を將來に實現せらるゝものとして構想するに、かゝる社會にありては今日よりも成員の自由の增進すべき事明瞭である。少くも社會の多數を占むる下層の階級に對する束縛は著しく緩和せられる。然れどもこの際減殺するものはかの階級的必要に應ずる束縛に限る。社會存續の必要に應ずる所の束縛に至りては決して階級的支配の撤去と共に消失するとは考へられぬ。構想せられたる無階級の社會に於てもそれは依然として存續するのみならず、今日の露西亞の實例より推せば却りてその增加すべしと云ふ推斷も全く根據なき事に非ず。低級の蕃民の社會に就いて見るに階級制度の僅に萠芽の姿になる場合に於てすら成員の上に加はる自由の束縛は著しき程度に達してゐる。從ひて此種の束縛は決して階級制度と共に起伏するものに非ず、其結果、自由が階級制度の函數なりと云ふ命題はたゞ自由の一部分に就いてのみ是認せられる。勿論自由を以て單に個人的自由の意義に解せず政治的又は統制的自由をも含ましむる時は結論自ら相異なる。若し此二種の自由を一括して考ふるとすれば、階級制度が其勢力を失ふにつれて、成員の上に加はる社會存續の爲の束縛も常に大體上政治的自由に裏づけられる事となる、換言すれば、自己の上に加はる統制が少くも形式上自己の政治的自由を意味する事となる。他の方面より之を表現すれば此二種の自由を一括して見る時、階級制度の減襲又は撤廢は自由を極量に達せしめる、勿論この事は必ずしも個人的自由の大なる事を意味せず。本外他の事情にして一樣ならば、政治的自由の加はるほど個人的自由はこれが爲に局限せら

れ、二者は云はゞ反比例の關係に立つもの、而して階級的束縛の減少したればとて政治的自由が減少すると限らず、却つて増加するのを常とするからである。

此際なほ附言を要すべき事項二點を認める。先づ、玆に所謂社會の必要に應ずる束縛は階級的懸隔の事情を外にして成立したる社會的束縛と同意義のものである。從ひてそれは客觀的なる考察者の眼に於て、社會の存續發展上これだけの束縛を是非必要とすると云ふ意味では無い、理知の眼を以て見れば社會の統一の爲に却つて有害なるものもあるべく、又は社會の爲に何等意義なきものもあらう。たゞこの種の束縛即ち階級的支配の爲にするに非ざる束縛は大體上から見て社會全體の爲にする意義を有するが故にかゝる總括的名稱を與へたるに過ぎぬ。此種の束縛の範圍は社會の事情を同一なりとするもなほ種々に變化し得る。或は生活の些末の點に亘りてまで之を規定する事もあり得べく、或は社會の團結の保持に對して必要なる最小限度の束縛を加へて止む事もあり得る。次に考ふべき事は成員の自由に對する束縛は社會の必要に應ずるものと階級的必要に應ずるものとを問はず、一方に於ては社會意識の拘束により他方に於ては社會組織の統制によりて行はれる。此事を考ふる時は個人的自由と政治的自由とが或一面に於て反比例する性質を有しながら、必ずしも然らざる所以を理解する事が出來る。階級的事情にして一樣ならば政治的自由の増加はそれが社會組織の統制を意味するが故にその限度に於て個人的自由の束縛を伴ひ得る。然れども個人的自由の束縛はこの外になほ社會意識によりて行はれ、從ひて後者の及ぼすべき生活方面の範圍の増減、拘束力の强度の變化によりて著しく變動するが故に個人的自由は政治的自由と函數的關係に立つものと見難い。

三

個人的自由が如何なる原因により、又如何なる過程を辿りて増進し來るかは次に考察すべき問題である。前に述べた

るが如く、個人的自由に對する束縛は一方に於て社會意識の拘束として加へられ、他方に於て社會組織による統制として加へらる。社會の必要に應ずる束縛も、又は階級的束縛も共に此何れの形に於ても加へらるゝが、大體から云へば、階級的束縛は社會組織による事多く、社會の必要による束縛は社會意識の內容の中心を形成する。何れにせよ、此二種の束縛の方法は密接に相關聯すれども、其減衰の原因、道行に於ては幾分か相異たれるものがある。

社會意識の拘束の減衰しゆく事柄が自由の增進過程の中心をなす樣に思はれる。而して、別の機會に於て略說したるが如く、此減衰の根本原因は人口の增加に認むべきであらう。社會人口の增加はそれが自然增加に負ふと、又は移住、融合に負ふとに論無く、社會の廓大を意味する。而も此社會の廓大に伴ひて社會と個人との距離は益々加はる、個人は益々加はりゆく社會の偉大なる威力に對して、云はゞ永久依存の關係に立つ一つの塵埃の如き觀を呈する。從ひて人口の增加に伴ひ特定の個人の活動が社會の團結存續に對して有する意義は益々減じ、云はゞ社會の個人に對する依存の程度は減ずる、個人の活動の如何によりて社會が脅威危險を蒙る事は極度に小となる。又社會の威力加はるにつれて假にかゝる脅威を加ふるものありとしても之を壓迫する事は極めて容易となる。此關係の認識は無意識の裡に作用して、小なる社會にありては社會が成員の活動に對して細心なる干涉を加ふる事となり、大なる社會にありては社會の成員に對する態度が自ら寬容的となる。大小社會が此存續の必要上に感ずる要求は自ら成員相互に對する要求となり自ら社會意識の內容上に差異を生ずる。其結果人口增加するにつれて、他の事情にして一樣なりとするも、社會意識の成員に加はる拘束は寬容的となり、此末に亙らず、又強度を減ずるの傾向が認められる。この事柄と共に、人口の增加に伴ふ人口の動的密度即ち社會的密度の增加が特に注目に値する。社會的密度の增加するに伴ひ、別けても都市生活にありては、互に多數の人人と接觸する結果、此接觸する相手の頻繁なる交代、變轉がある。此事からして一方には人人の間の直接なる結合、即ち對

人的結合が益々薄くなる、云はゞ生活の一方面を以て薄く交はるに過ぎない傾となる。他方に於ては、相互に他人の行動に對する監視の力を失ふ、蓋し今日接する所は明日接する人に非ずと云ふ樣の事情が益々加はりゆくからである。結合の程度薄くなる事は其人に對する依存の關係乏しきを意味し、依存の度弱ければこれによりて拘束せらるゝ所弱きを免れない。又、社會意識の拘束を有するのは成員相互の監視の行はるゝ事を條件とする、その程度が周圍の人人に於ける反動を生じ來るからである。然るに社會的密度の增加と共に人人互に行旅の客の如くに相對するに及べば、相互の依存減じ相互の監視また衰ふる。社會意識が其强きを失ひ、延いては其多くの內容が拘束力を失ひて社會意識の範圍內から斥けらるゝ事自然の勢であらう。

また人口の增加が文化の發達を促し、延ひては部分社會の交叉、即ち社會的錯綜を來す事は別の機會に於て屢々說明したる所である。而して此社會的錯綜の事實が成員自由の伸展の上に輕からざる意義を有する第一社會意識の拘束力は常に此社會意識を支持する社會に對して個人の有する依存の程度により決定せらる。然るに此依存には個人が社會によりて受くる利益及び個人が社會が個人に加へうべくして差控へ居る損害と云ふ積極消極の二方面がある。部分社會の分化進むに連れて此二種の依存關係共に減衰する。即ち、社會の分化するに伴ひ、各社會は人格の益々狹き方面の結合として存立し、其機能の範圍が漸次に小分せられる、其結果として一々の社會が個人に與へ得る利益は漸次減少すと見なければならぬ。また、社會が個人に與へる損害の限度は一般に結合の强度に比例する、然るに社會的錯綜の進み狹小なる生活方面に關して各社會の存立するに及べば、結合の强度また從ひて減じ、所謂個人の社會に存立する消極的依存の程度も衰ふる事となる。第二、社會の分化は一々の社會に存する個人の依存の程度を弱むる以上に、なほ他の注目すべき作用を有する。一方に於て種々ある社會は夫れぞれ其存續又は發展の必要を異にする以上、自然社會意識の內容を異に

する事當然であるが、進みてはその間に衝突、乖離の事實をすら屢〻生ずる。此事は各社會の社會意識をして威力を失はしめ、それが極めて相對的なる意識を有するに過ぎざる事を覺らしめる。他方に於ては、數多の社會の對主は個人に對する各社會の威壓の力を減ぜしめる、それは個人の社會に對する依存程度の減衰を云ふのでは無い。甲の社會の威壓に對する時個人はその同時に屬する乙の社會の力を借る事を得べく、乙の社會の威壓に對する時彼はまた甲の社會の力を借る事を得べく、其結果として個人は二社會の中間にありて双方の壓迫の力を相殺せしむるが如き作用により、其束縛を緩和せしむる事が出來る。此二の事情はかゝる部分社會の社會意識をして其拘束力を漸次に減衰せしむるに至る。

社會組織による統制の點より見ても個人の自由は漸次に增加し來るものであるが、此道行は必ずしも社會意識の減衰過程と同樣の事情に負ふものでは無い。これに關して最も注目すべきは異社會の混和である。異社會の接觸頻繁にして其間に融合移住の反覆的に行はるゝ時は必然に社會の連續的異質を生ずる。勿論此連續的異質は異社會の混和の結果としてのみ生ぜず、其一義的函數とは見難しと雖も、後者によりて成立する時連續の程度範圍を極めて大ならしめ得る。さて此連續的異質を缺ぐ時社會の組織は常に强制の原理の上に立ち自ら成員の自由を束縛する事とならなければならぬ。異質が連續的となるほど、成員間の同質性に基づく自然的融和の傾向あり、强制を必要ならしめず、異質の間に服從、自身の固質的關係を作らずして其間の統一が確保せられる。また異社會の混和の反覆的に行はるゝ場合には社會相互の接觸及び類似によりて其間の關係が漸次に爭鬪的分子を失ひ著しく緩和せられる。其結果內部の力を極度までに組織する必要を減じ、此點よりしても社會の統一が强制の上に立たず、個人の自由なる活動の上に立つ事多きに至る。更にまた、異社會の混和たえず行はるれば一方に於て外部の社會との關係よりして種々なる刺激を與へられ、內部の統制的組織を變改する必要が感ぜられ、他方に於ては文化の交叉を促す事により從來の組織を神聖視したる傳說の權威を失は

しめる。かゝる事情によりて、一たび成立したる組織が固定して人人の地位が身分により定まり、自ら強制的分子を含むに至る事が妨げられる。此事は外部の社會との接觸の乏しきほど、社會內部の組織が身分、及び強制關係の上に立ち、これに反してその頻繁なるほど、組織が固定的性質を失ふ事實によりて知られるであらう。

此等社會の混和を外にしてもなほ、社會組織による統制をして弱まらしむべき二三の事情を擧ぐる事が出來るが、これらは皆人々の增加に關聯したるものである。先づ、人々の增加が社會と個人との力の懸隔を大にせしむることによりて社會の個人に對する要求を緩和し之を減殺せしむる點は既に述べたるが如くなるが、これは一方に於て社會意識の拘束を弱むると共に、他方に於てまた社會組織の統制を弱からしむる傾向を有する。更に注目すべきは此人口の增加の結果とも見るべく文化の發達と部分社會の錯綜とが及ぼし來る影響がある。文化の發達に伴ひて云はゞ力の無意識的分配が增加する。社會組織が固定的性質を帶び身分及び強制の上に立つほど、力の意識的分配が行はれ、此固定的なる一切の體統關係に應じて力が歸屬する。從ひて力の分配狀態は體統關係と相並行して其間に不一致が存在しない。然るに文化の發達は著しく文化內容を增加せしめる。此增加に伴ひて力の意識的分配の外にその無意識的分配が必然的に行はれる。即ち、一方に於ては或は意識的分配を十分に行ふ能はざる文化內容の種類を失し、或は意識的分配を行ひ得ざるほどの餘りに多くの文化內容が成立する。他方に於ては文化內容の分享に與る人人の數を多からしめる。(一)權力と土地とは容易に意識的分配を行ふ事が出來るが、文化の發達に伴ひて生ずる種々なる動産に至りては社會組織によりてこれを一定の地位に結び付ける譯にゆかず、其分配は云はば賣買競爭の結果として無意識的に行はれる。又文化內容の一體に乏しき時代にありては、これを家傳とし又は教育慣習の上に階級的束縛を加へて、其分享を一定の範圍に制限する事により其意識的分配を行ひ得べしと雖も、その增加蓄積著しきに及べばかゝる分配を行ふ事が不可能となる。一定

の文化内容の享受には特殊の材能を要する事多く、又文化の發達するに伴ひ其増加しゆく客觀的表現は自然に流布する勢を有するからである。(二)文化の分享の容易になると云ふは、文化の發達に伴ひて、自ら生産力の増加を來し、一般成員を漸次に生産的勞働より解放する、此傾向が進むほど彼等をして種々なる文化内容と親ましむる譯となる。古代奴隷の生活と今日文明國の勞働者との生活を比較するに此點に於て著しく差異を有する。少くも閑散の生活が文化と共に漸次上流の地位までに分配せられ來る事は爭ひ難き事實である。文化内容の分享も亦一種の力として見る時以上述べたるが如き表裏の事情よりして力の無意識的分配が行はれる。而もこの分配の方向はその意識的分配從ひて社會組織に於ける體統の關係と一致せず、その結果として組織による統制に對して新なる抵抗、障碍を生ずる。この事は自らかゝる統制をして其勢力を減殺せしむるに至る。

部分社會の分化、錯綜もまた同樣なる傾向を伴ふ。他の事情にして一樣ならば社會組織による統制はたゞ單一なる社會のみ存在する時に最も強く行はれ得る。若し數多の社會の相ならび存在し個人は同時に其何れにも分屬すると云ふ事となれば、其何れの社會に於ける體統的組織も獨裁的地位を有し得ない、換言すれば、各社會それぞれに成員の上に威力を有する事は、一の社會例へば國家の威力を弱からしめその組織による統制をして絕對的ならざらしめる。ことに各種の社會に於ける人人の體統的地位が相平行せず、例へば國家組織に於て有力なる地位を占むる人が他の社會に於て極めて力弱き地位を有するに過ぎざるが如き事實の存在は、自ら國家の組織による統制に對し盲目的服從の傾向を破壞せしめる、其結果としてかゝる統制の強さを弱からしむる勢をなすに至らう。社會的錯綜の發達は社會一般の平等化、從ひて社會組織による統制の減殺に對して看過すべからざる一因子を形成する。

此等の諸事情よりして、社會意識の拘束も、社會組織による統制も共に減殺する、從ひて成員の上に加はる束縛は何

れの方面より見るも減衰し其個人的自由は伸展すべきである。而して、社會的束縛に社會の必要に應ずる束縛と階級束縛との二種を分ちたるが、その何れのがかゝる束縛の減衰と特に密接の關係あるか換言すればその何れかが文化の發達に伴ひて減衰しゆくか。

社會意識による拘束は一般的に見る時、社會の必要に應ずる束縛と特に密接なる關係を有する。その諸形態たる習慣、道德、法律、宗教等が常に神の意志、正義、社會的自我、實在意志等と同一視せらるゝのはかゝる一面を表示するものである。若し、社會組織による統制にして全然成立する事無しと想定し、而して社會意識のみが社會的束縛の道具なりしとすれば階級的束縛も成立する餘地なしと認められる。然れども現實に於ける社會意識の拘束は決して社會の必要に應ずるに止まらず、常にこの必要を反映すると同時に階級的束縛を意味する。社會意識の内容が階級的關係の變化に伴ひて變轉する一面ある事は爭ひ難き事實である。形成せられたる社會組織は社會意識の中に入り込みて其内容の一部分をなす。此社會意識の拘束力と云ふ支持ある事によりて社會組織が其固定性を得來る。社會意識に比すれば社會組織は階級的束縛と親密なる關係を有する。一方に於て社會組織は階級的束縛を主なる目的として形成せらるゝ事を得、また然らずして、社會的必要に應ずる束縛の爲に形成せられたる場合にありても、漸次階級的束縛の分子を加へこれが手段と化し去る事を一般の原則とする。かゝる點よりして社會意識に於て重きを占むるものは常に社會の必要に應ずる束縛にあり、社會組織にありては動もすれば階級的束縛が重きをなすと云ひ得られる。

先づ社會意識の減衰に就いて考へる。社會意識の束縛は前述の如く其内容より見れば、社會の必要に應ずる束縛と階級的束縛との二に分れる、而も更に立入りて考ふれば、階級的束縛以外のものを社會の必要に應ずる束縛として一括したるはたゞ便宜的のこと、これが二分して考へ得られる。それは嚴密なる意義に於て、社會の存續の爲に缺ぐべからず、

之を缺いては社會の生命が失はるる種のもの、倫理的極少（ethidch s Minimum）と云ふ言葉にて表はすべきであるが、これがやゝ異なれる意味に用ひらるゝが故に、假に極少規範と云ふ。此極少規範の範圍は社會の事情に應じて多少變動し得べきものと考へられるが、一括して社會の必要に應ずる束縛と名づけたるものは常に此範圍を超える。例へば今日の風俗慣習の中には理知の眼もて批判する時、社會の統一發展と直接何等の交渉無きものが存在して、而も吾人これに背く事を許されない。低級なる社會に於ては社會意識の拘束が生活の極めて些末なる方面に及ぶ、當時の事情よりしては極少規範の範圍、今日より更に大なるべしとしても、前者が後者を超ゆる事著しかりしは推斷に難からさる所である。所謂社會の必要に應ずる束縛のうち、此極少規範の範圍を超えたるものを假に名けて便宜的束縛と云ふ。かくする時は、社會意識の拘束が三種の束縛を意味する。一は極少規範の束縛、二は便宜的束縛、三は階級的束縛である。このうち、階級的束縛はかの社會組織に於ける階級的束縛の反映に外ならず、後者が減衰するに連れて漸次に其跡を社會意識の範圍より絶つべき運命を有する、また、社會の同質性の失はるゝに連れて、社會意識の便宜的束縛も減衰しゆく。蓋し、これは大抵、生活の些末たる方面に亘りてまで類似の存在し得たることに其成立の根據の一部を有したるが故である。而して理知の發達即ち社會生活の合理化と個人的競爭の加はりゆく事は自ら此種の束縛の弛緩を助長すと思はれるからである。極少規範のみは社會の事情によりて其範圍、拘束の強度に伸縮はあれ、減衰の道程を辿り難く、少くも他の二種の束縛とは自ら性質を異にする。

社會組織による統制に就いてもまた同様なる考察を加へ得ると思ふ。國家の統制に關しては階級的支配と單純な管理又は單純なる行政（une simple administration）とが屢區別せられる。後者は社會の存續、即ち其統一と其協働とを確保せむが爲に、一切の階級的關係を離れてもなほ行ふ所の統制の意味に解すべきである。これが社會意識の場合に述

べたる極少規範の束縛に當るものと便宜的束縛に當るものとを含むと考へ得る。一を極少管理と云はゞ他を便宜的管理と稱すべきである。たゞ、管理又は統制その事が勞費を要する煩雜の事項なるが故に、それは眞の必要を超えて行はるゝ事少く、此便宜的管理の束縛はかの社會意識による便宜的束縛に比して其意氣極めて少い。而して國家以外の社會組織に就いても亦同樣に見うべきが故に、すべて社會組織の統制は階級的支配と便宜的管理と極少管理との三者に分れる。前述の如く社會組織による統制の減衰は重に強制的要素の減衰である。此點より見れば、減衰しゆくものは階級的支配に伴ふ束縛にして少くも極少管理に伴ふ束縛では無い。便宜的管理に伴ふ束縛もそれが他人に束縛を及ぼす事その事の追求から行はれ得る點を考ふれば、階級的支配の減衰と共に其範圍を狹め行くと思はれる。

個人的自由が如何に伸展するにせよ、社會意識に於ける極少規範の束縛、社會組織に於ける極少管理の束縛、この二は人類が完全なる道德的自由の域に達せざる限り、永久に滅せざるものであらう。然れども此二者とても決して變化せざる大さのもの、云はゞ固定的のものでは無い。夫れ夫れ切り離して考察するも、また二者の相互關係に於て考察するも、其變化の必然性を信じうる。謂ふに、社會的密度の增加、文化の發達に伴ひて、人人相互の關係は多方面に亘り複雜を極める、從ひて此間の秩序調和を保たむが爲には社會組織の網が雜多の方面に擴げられなければならぬ。勿論社會組織に伴ふ強制の分子は消滅し行き、その束縛の強度は減衰するにしても、それは益廣き方面に亘る事となる。云は社會組織による極少管理は其範圍を擴大せしむる傾向を有す。社會意識の極少規範に就いて見るに、其束縛の強度の減衰は疑を容れざる事實であらう。たゞ其存立する範圍を考ふるに、社會的關係の多方面となり又複雜となるに連れて、自ら分化し從ひて擴大し行く必要あるものと見るべきであらう。然れども、此極少規範と極少管理との間には代替的反比例的關係が或點まで存在する。詳言すれば、極少規範にして收縮すれば極少管理がこれに代りて成員の上に必要なる

束縛を加へ得る。而して、社會意識內容は大體から見て生成するものにして作爲せらるゝものに非ず、從ひて社會の異質化と共に其強度を減じ、また極少規範が必要の範圍以內に收縮する時、社會組織の極少管理は之に取代る。

社會組織による統制が階級的束縛の性質を失ひてたゞ社會存續の必要に應ずるものに止まる時、それは必ずしも政治的自由を意味するものでは無い。換言すれば、かゝる內容の統制は例へば專制政治によりても行はれ得る。然れども、個人的自由の勢を加へ來れる近代にありては大體から見て民主的組織によりて行はれ、從ひてそれは自治又は政治的自由と相表裏するを常とする。此意味に於て社會意識の規範に對し社會組織の統制が代替的蠶食を試みる事は政治的自由の增加として考へられ得る。而も個人はこれが爲に其從來享受せる個人的自由を失ふに非ず、たゞ社會意識の束縛が政治的自由を伴ふ組織の束縛に變化したるまでである。然れども、此政治的自由と個人的自由との關係はこれに盡くるものに非ず、其一般關係を明にせむが爲には自由と平等との關係を考察すべき必要を認む。

四

私はこれまで屢自由と平等との相容れず、其一方は他方を害ふ事によりて成立する事を說いた。然れども二者の眞の關係は此の如く單純に說き去る事を許さず、其間或種の聯絡が可能にして、社會の變轉の大勢は此可能を實現せしめつゝある如くに思はれる。

試みに、與へられたる自然の外に何物をも有せざる遠祖の一集團を想定せよ。彼等が結社的關係に立つ限り互に相爭鬪する事無く、相互の同情と外部に對する一致とが其間に支配する。彼等は自由なれどもこれによりて平等は損はれず。何となれば、此自由を利用して他人より取去るべき何物も、如何なる文化も存在せざるが故である。力の慾望又は優勝の要求が既に認めらるゝとしても、利益を伴はざる優越は強く彼等を動かすに足るまい。かくて文化なしとすれば自由

は即ち平等を意味する。此二者の年齡は文化を有するに及びて始まり、其間の關係は文化の發達に伴ひて複雜を極む。

更に進みて、豐富なる文化を有すれども階級的懸隔なき社會を想定せよ、換言すれば、前述の原始的なる社會の中に文化を加へて之を飽和せしめよ。此の如き狀態にありては、成員に十分の自由を許す事はやがて相互の平等を損ふ事である。成員は其外部より受くる束縛の薄弱を以て滿足せず、此自由を利用せんと力める、存在する文化が此利用の動機となる。支配は此利用の形式にして絞取と獨占とは其內容である、他人の意志を壓迫して、一方其生產物を絞取し、他方精神的文化內容を或程度まで獨占して自他の懸隔を明確ならしめる、而も此利用にして實現せらるゝ時階級は成立する、此實現を阻止せむが爲には成員の束縛を必要とする。此束縛は過去の歷史によりて見るに、一方社會意識によりて行はれ、他方社會組織によりて行はれる。玆に自由と平等との背反が認められなければならぬ。文化の存する所、自由は平等を損ひ、平等を救はむが爲には自由を犧牲にする事を要する。而も此自由に對する束縛が社會意識と社會組織との二者によりて行はるる事は注目に値する。前述の如く、社會組織は一般に政治的自由即ち統制的自由を伴ひ得べきが、階級なき場合には、社會組織は常に自治的組織として政治的自由と相表裏する。社會意識による束縛はかゝる政治的自由を意味せず、何となれば其內容は自己以外のものゝ意志に俟たずとは云へ、成員の相互作用の間より云はゞ自然に生成し來れるもの、其內容の決定に對して自己の意志が參加したりと云ひ難きが故である、社會意識の重なる部分を占むる傳說慣習の如きに關しては特に然り。成員の自由に對する束縛は社會意識によりて行はれ得べく、又社會組織によりて行はれる事も出來る、從ひて他の事情にして一樣なりとすれば、此間に代替性があり、反比例的關係がある。それは二者の一部分たる極少規範と極少管理との間に存するのみでは無い。かくて個人的自由は社會的束縛と相反比例するが如く、社會的束縛內部にありても、政治的自由の程度は社會意識の効力と相反比例する。而して、他の事情ことに社會

意識の狀態にして一樣なりとすれば、個人的自由は政治的自由と相反比例すと考へられる。若し此二者の性質の差異にも拘はらず、等しく自由として認むる事を許さるゝならば、自由の總量が一定して、而して其中の一部分が個人的自由となれば、他の部分が政治的自由として與へられる。此二部分への配分は成員に如何なる程度の束縛を加ふるを要するか、從ひて成員の異質性文化の發達程度等によりて定まるであらう。然れども今、社會意識の事情にして一樣ならばと云ふ前提を撤去して現實の社會になほ一歩だけ近づける。前に說明を加へたるが如き理由によりて社會意識の束縛は文化の發達と共に減少する、特に成員の分化が益々著しきを加ふるに連れてその束縛は强度に於て減少し其範圍に於ても少くも社會的關係の複雜なるに對比して相對的に收縮する。この束縛の減衰によりて殘されたる範圍は個人的自由と政治的自由とに與へられ其間に分配せらるゝ譯である、從ひて、階級の關係を離れて考ふるもなほ、文化の發達と共に自由の伸展が行はれるものと認められる。社會の合理化其極度に對して社會意識の內容が極少規範に止まる時、自由は其極大量に達する。かくて此廣義に於ける、即ち包括的なる自由はかくて平等を損はずして伸展し得る。此包括的なる自由の中に個人的自由は如何なる部分を占め得るや。一方に於て、社會生活の合理化と共に社會組織による統制が極小管理までに收縮し、他方に於て部分社會の分化により其間の均衡が生じ個人が此均衡の間に介在する。かゝる事情からして個人的自由の範圍は政治的自由の範圍に比して、少くも相對的に大なる伸展の傾向を有するものと認められよう。かくて、社會意識の減衰は廣義に於ける自由の伸展を生ずるのみならず、個人的自由の增進を意味する。

最後に文化を有すると共に階級制度を有する事現在の如き社會を考へる。文化そのものゝ存在及び發達が自由と平等との聯絡の上に如何なる意義を有するかは既に說明したるが故に姑く之を離れて考へる。階級制度は一方に於て成員の地位に於ける平等を損ふと共に、他方に於ては成員多數のものの個人的自由を奪ふ。此際自由と平等とは相平行せる、

云はゞ連帶的なる被壓迫者である。從ひて、階級制度が弛緩して其嚴密さを失ふ事に成員の失はれたる個人的自由を恢復すると共に、其間に新なる平等の關係を確立する。更に政治的自由にも着眼して見る。階級的束縛は 述の如く社會意識の拘束によりても亦行はるゝが、社會組織の統制による事を少しとする。然るに、此社會組織の統制は階級制度の存在する限り、而して其嚴密なるほど、政治的自由を伴はず、これと表裏の關係に立つ事が無い。階級の影薄らぐに連れて云はば階級的束縛の分子を失ふにつれて、社會組織の統制全體が政治的自由の色彩を帶ぶる。かくて、階級制度の減衰によりて一方個人的自由の高まる時には同時に政治的自由もまた伸張を見つゝある。云はゞ他の方面に於ては反比例の關係に立つ所の自由と平等、個人的自由と政治的自由の二對が此方面から見れば聯絡を保ちつゝ相平行して伸張の道を進む。

概觀し來るに、人類が何等の文化を作らず、失ふべき何物をも有せざる時にのみ自由と平等とは相一致し得る。文化を一たび有するに至れば、極度の自由と極度の平等とは相背反し相矛盾する。たゞ制限せられたる自由と制限せられたる平等とが相調和し一致する。而も此自由と平等との調和的極量は恐らく無窮の未來に於てのみ實現の可能を有しよう。過去の文化の發達はたゞこの極量への接近方向を示したに過ぎぬ。かゝる極量を實現せしめざるもの、一方にありては社會意識の極少規範を超えたる束縛にして、他方にありては階級制度である。文化の間斷なき發達は社會意識を減衰せしめ階級制度の影を薄からしめる。此歩一歩は一方に於て自由の伸展であり、同時に他方に於ては平等の發達である、此意味に於て自由と平等とは手を携へつゝ進む。（一九二一、一二、九朝）

カントとアインシュタイン

―世界觀の一致―

竹内時男

近代哲學の朝宗する處はカントである。叡智なる彼の批判はもろ〳〵の思索に深刻なる色彩を投じた。實にありとしある知識に彼の生命は高く波打つて居るのである。

かけても思はんや、五千年の夢を包んだ古典的物理學が今日しも悲しき爆裂に遭逢せんとは。而して物理學の破綻は之と連鎖の狀態に在る認識論にも龜裂を惹起せんとして居る。凡ゆる知識界の穩謐は破られた、獨斷と權威とより人智を解放せよとの叫に。カントすら今や全然とは信ずるを得ざるに到つた。

若き思想の革命家アインシュタインは實に現在の哲學に滿足せぬ。大イマヌエルにも最終の價値を與へぬ。況んや、ロックやヒュームに於てをや。カントが不朽の著『Prolegomena』にすら尚未來ありとして居る。夫丈彼の構想には遠大なるものがあり、彼の理論には振天の慨がある。

カントは或意味に於てニウトンに源を汲んだ。然も遂に彼を抽んでた。而して今日の新興物理學より觀れば彼の價値は大いに減ぜられたかのやうであるが、尚且アインシュタイン論に極めて通きものがある事を忘れてはならぬ。カントの哲學的洞察が奇しくも今やアインシュタインの思惟と類似して來たのである。本稿は這般の消息を傳へ度い爲に物したのである。カッシラーやシュナイデルの著書に負ふ處が多い。

アリストテレスは其の著『物理學』に於て始めて運動の定義を下した。彼は位置とは物體を包圍し接觸する物體の境界なりとし、運動は位置の變化なりとした。アリストテレス以來時間、空間及び運動の概念は漸次變化進展して來た。スコラ學派より

コペルニクス、コペルニクスよりガリレイ、ガリレイよりニウトンへと幾度か此等の觀念に變遷した。ニウトンに到つては絶對の空間更に絶對の時間をも陽に假定するやうに成つた。

彼は絶對の空間は外的對象と無關係に常に一樣不動なりとし、絶對の時間は外的對象と交渉する事無く恒久に一樣に流れ去るものとした。彼の絶對の空間絶對の運動は、物理學的に實證し得られる實在的のものであつた。ニウトンの思想に影響せしものはガリレイの慣性則とヘンリー・モレスの空間論とである。否寧ろ神學である。ニウトンは廻轉運動に依つて絶對空間に於る絶對運動の存在を證明し得たりと考へた。然し彼と同時代のライプニッツは之に反抗して廻轉運動に優先無く、凡ゆる法則の等價なる可きを直觀して居た。

カントが時空問題に關與した最初の著作は一七五八年に發表せられた。此處に於て彼は運動と靜止との新しき教義を延て而して共に結果する處をも明かにした。彼は運動や靜止の判斷は他の對象に關係して始めて與へられるもので、決して不變のものでない事を喝破した。彼の相對論者的態度は此處に決まらねばならぬ。其より十年後の論文は絶對の空間は外的感覺の對象たり得ざる事を示して居る。彼の晩年の諸論への趨向は茲に見得られる。一七七〇年には空間と同じく時間もエムピリッシェスの何者でも無い事を唱へた。一七八六年の『自然科學の形而上學的原理』は『純粹理性批判』と相俟つてカントの時空及び運動の問題に對する位置を愈々鮮明にするものである。

彼は絶對純粹の空間は經驗の對象ならざる事を飽く迄も高唱して居る。謂ふ如く彼が絶對空間に對する態度は決して二義的でない。輓近に到つてポアンカレーの主義にも吾人はカントの思想の再現を認め得るのである。

カントの認識は斯く觀來ればアインシュタインの時空觀と少しも矛盾する處が無いと謂はねばならぬ。カントに對しては時間と空間とは吾人の直觀の純粹形式である。事象を排列して、之に客觀的意味を與へ、且客觀的經驗事實の可能性に對する條件を與へる法式である。

カントの物理學的見解には更に偉大なるものがある。

彼がリーマン以前百年にして三元以上の幾何學の可能性に注

目した事は驚く可き事である。一七四七年ライプニッツ論を反駁したる書中に於て、空間の三元性の根據に對する彼自身の觀想を表明した。一部科學的、一部形而上學的なる初期の彼の論文に空間の三元性が物質の物理學的性質に關聯せる事を叙べられたのである。

彼は曰く、空間の三元性は物質の力が相互に如何に働くかを定むる法則に依る事は確らしい。即ち擴延の元は物質が其の本質的力に依りて集合せんとする法則に基くと。彼は疑も無くニウトンの重力を考へて居た。距離の自乘に逆比例して作用の强さを減ずるやう現世界の物質が相互に働く爲に三元性が生ぜらしいと考へた。神が他の法則、例へば逆三乘の法則を以て之に換ふるならば、他の性質他の元の擴延が現れる譯である。

カントは實に幾何學と重力との連關を提示した最初の人である。最近に到つてアインシュタインはテンソール解析に依つて空間の計量と重力場との關係を定めたが、カントが豫想した處を科學的に意味附けたものと謂つて宜しい。

彼は吾人が三元以上の空間を假定する事の困難なるはニウトンの法則に依屬するからであるとして居る。又物質が如何なる力をも現さなければ如何なる空間も如何なる擴延も無からう。如何となれば力無くば集合無く、秩序無く、遂に世界無かる可しと唱へて居る。是アインシュタインが物質無くば宇宙無しと結論したのに一致する。彼は斯くてライプニッツが空間の三元性を一點に引ける垂線の三個なる事より說明したのを循環論なりとした。

彼は實に一旦別個なる二分野の內的連關に深い省察を置いたのである。

カントは三元ユークリッド幾何學はニウトン重力法則の妥當たる空間と相當せりと主張した。而して互に性質の函數的關係ある事を示した。

アインシュタインの特殊相對律は一定重力場に就きて議論するが、ユークリッド計量の空間を用ひて居る。一般相對性理論は變化する重力場を取り扱ひ、歪める非ユークリッド計量の四元空間を採擇して居る。實にカントの豫示と矛盾する事が無い。アインシュタインは歴史的發展に於て全然獨立せる二個の認識領域を合併せしめ、カント以來何者も手を下さなかつた功業を成就したのである。敬虔なる若き人の瞑想こそ眞に太陽をも射抜く强さを持つ。私はカントとアインシュタインとの思索の脈絡相通ずる事に於て悠々と斯く論ずるのである。(十一・一・一)

社會學的進化論としての社會主義

──社會主義の論爭に關する紹介──



エヅアルト・ベルンシュタイン

社會主義とは何ぞやの語は極めて多種多樣に解せられてゐるのである。即ち或る者は此語を以つて或所有及び經濟組織を基礎とせると同時に理想的國家に於て具體化せらる可く寫像された狀態の表現となし、又或者は斯くの如き經濟組織を現實化する手段として齎らさるゝ社會的階級の運動或は鬪爭と同一視し、更に或者は或法律的思想及び倫理的概念を基礎とせる要求或は制度の集合概念と見做して居るのである。總て以上の解釋は或形式の社會主義に關するか或は社會主義的運動の或方面を知らしむる限りに於ては何れも正當なるものであるが、併し我等の解決せんとする問題は是等の解釋の何れもによつて未だ盡されて居ないのである。

又社會學者によつて著された社會問題に關する教科書或は提要(コムペンヂエン)に於ても吾人は此概念に就いて甚しく異つた定義に遭遇するのである。歷史に溯らずして最近の獨逸人に就いて見るもシュモラーの解釋はロツシエルのそれと異り、ゾムバルトはシュモラーとオツペンハイマーはゾムバルトと何れも異つた解釋を下して居るのである。斯くの如きは單に以上の數氏に止まらずして他にも多くを見出すのである。是等の定義を相互に比較し其間に存する共通點を確定し、且つ總括する事が不可能であるかを觀察することは勿論興味のない事ではないが、併し論者には他の方法が有効に見えるのである。即ち此問題の歷史的現象形態を觀察する事である。論者の信ずる處によれば此方法に依つて我等は今日社會主義なる名稱の下に理解せらるべき事を最も明かに知り能ふのである。

社會主義の概念に關して最も一般的な且つ最も淺薄なものは此の概念を以つて全然貧富の別を有しない總てが多くを共同的にし且つ熱烈な同胞主義に支配せらるゝ社會的狀態の寫像となす事である。是等の特徵が存しない處即ち物的共有や倫理的共同性及び財産的差別の撤廢が缺如せる方面に於ては社會主義の本質的屬性は存しないのである。斯く解せらるゝに於ては社會主義なるものは其名稱よりも主義其者の起源は更に古き歷史を有するものである。即ち同主義の名稱が十九世紀に於て始めて出現せしに對し思想として或は運動としての社會主義なるものは我等が古代と稱する時代に於て既に之れを見出すのである。普ねく吾人々類は其居所を極めて簡單に變更する氏族的團體の生活を脫して寧ろ一定の場所に居住し國家的即ち領土的に組織せられた團體生活を營む處に於ては自から財産の異同、權利の不平等を齎らす事となり、其結果は遲かれ早かれ各個人又は階級の間に於て此不平等を排除せんとする欲求が生ずると共に、よりよき社會的狀態を想像する中に彼等の思想上に於ける沈澱的凝固性を見出し、よりよき社會狀態を實現する闘爭の中に彼等の政治上に於ける凝固性を見出すのである。亞細亞文明の歷史希臘及び羅馬の歷史の我等に與ふる史的材料は極めて

少きも、然かも尙斯くの如き運動の存せし事を示して居るのである。之れが憑據として吾人はロベルト・ペールマーンの古代の共産主義及び社會主義の歷史を指摘する事が出來るのである。此著書の批判に對しては論者は種々激烈な抗議を提出し得るのであるが、それにも不拘吾人は此著に依つて次の事を認め能ふのである。古代の歷史が物語る社會的鬪爭のみならず、又屢々スケッチ的に傳へられた憾はあるが所謂理想的國家の多少空想的な解釋や描寫が歷史學上價値を有し且斯くなすことが必要とせられて居ることである。羅馬に於て獨特な發達を遂げた羅馬主義(ノイアクリスチンツーム)が一個の社會主義的運動として解釋せらる可きやに就いては深く論ぜずとするも、以上の特徵が屢々問題となると共に世人は確かに之れを以て一個の倫理的運動として解釋せらるゝことを求めて居ることは世の熟知する處である。然し全現象としては社會主義なる名稱に當らずとするも、尙ほ幾多の社會主義理論及び運動を發生せしめた起源としては爭ふ可からざるものである。即ち之れに對する證左としては敎父及びスコラ哲學の文獻中に散見する。又之れが例證としては古代に於ける幾多の共産主義的及び半ば共産主義的なる基督敎の宗派に見るを得可く之れに次ぐものは文藝復興期及び宗敎改革時代の同主義である。又、最後の時期即ち宗敎改革の時代は次に擧ぐる著書の完成した時である。而して此著書の表題(チーテル)は思索的に構成せられた團體或は理想的國家を敘述せる總ての著書に對する綜合的概念となつたのである。即ちトーマス・モーアのユートピアがそれである。吾人が英王ヘンリー八世の特徵ある宰相の此著書に就いていひ得ることは、それが一般の文學に新生命を與へしことである。何となれば此著書は當時非常な人氣を博して諸國の言語に翻譯せられたからである。十六十七十八の三世紀は想像的な理想的團體の記述、それは記述の形式上より國家小說と名けらるゝものに充ち滿ちた時代である。勿論、是等の總べては社會主義的なる名稱に相應しからざるものであるが、然も徹頭徹尾吾人が今日適用する概念に於て實際的の性質を有するユートピアに缺如せるものでない、之に相當するものとしては例者、未完成のユートピ

アであつた新アトランチスの如きがそれである。此著はトーマス・モーアの官職上の後繼者の一人であり經驗的方法に就きての有名な哲學者であるフランシス・ベーコン其人によつてものせられたのである。

宗教改革時代に於ける社會主義的ユートピアは二つの方面に向つて漸進的な發達が遂げられたのである。即ち第一の方面は專ら力を想像的な摸寫に盡さんとせし傾向で。第二の方面は思案上最大の合理主義に赴かんとせし傾向である。我等の觀察上に最も重要な傾向は後者である。何となれば此傾向は社會的認識の要求に對する動力たりしと共に漸次社會主義的努力の科學的研究に其步を進むるに至つたのである。社會主義の合理的なユートピアの著者は彼に先きんぜし者の說きし處を訂正したのである。而して長き時期を通じて公然の批評でなくて、各種の著述家が暗々裡に之れを攻擊せしことが確定せられたのである。其處には啻に嚴肅な論爭が齎らされたのであるが、學說上の後繼者は公然其人の名を擧げずして之れに反抗したのである。

併しユートピアに就いて共通であつた處のもの換言すればユートピアの眞の特徵と稱す可きものはユートピア其者に於て偶然及偶然其者に從屬する意志が演ずる重要な職掌である。長き時期に亘つて吾等の記述の中に描寫せられた理想的狀態は不世出の人格者例者、立法者或は王侯の保護干涉に依つて齎らされるものである。かるが故に斯くの如き王侯或は立法者が偶然に世に現はれざるか、或は啻に此世を去りし場合に於ては其國民或は其國土は理想の狀態を味はふ事が出來ないのである。降つて佛蘭西革命の時代に於てユートピアの構成上、之が創造力として個人的意志或は慈善行爲者の創造的衝動に代つたものは或理想を信奉せし人々の集合的意志である。併し此集合的意志は意志其者が全國民の意志として考へられる場合に於ても常に尙ほ偶然的なものである。或團體或は國民が斯くの如き理想に向つて戰ふのは確かに如何に遙かに如何に强く其思想の宣傳を體得せるかに依るのであるが併し思想其者の發達に尙ほ本質的には偶然性に從

屬せるものである。

十九世紀に轉化すると共に之れが初期に於て其處には著しき進歩が齎らさるゝに至つたのである。此時期は社會主義の歷史に於て批判的な大ユートピスト即ちロバート・オーエン・シャール・フーリエ。アンリ・サンシモン及其學派の出現せし時代である。而して彼等が十八世紀のユートピストから區別せられる特徵は進化的思想が活躍せる事と所與に結合せんとする努力換言すれば彼等が彼等自身の前に存せし世界をよりよくせんとする事である。ロバート・オーエンは彼の社會主義的論文に於て英國に發達した資本主義的工場と共工場が齎らした狀態を明かにすると共に之を以て彼自からの社會主義的革新政策の出發點としたのである。シャール・フーリエは尙著しく中產階級的な佛蘭西に於て理想としての社會主義を心理學的に基礎付けると共に實際的には組合運動の方法に依つて之れを實現せんことを試みたのである。此場合に於て彼の自治政策上の計畫は我等にとりて特殊の興味を與ふるものである。サンシモンは世人が彼を目して尙ほ一個のユートピストと見做し能ふかは疑問とせられる程・熱心な進化論者であつて、同時に彼は吾人が社會主義の歷史に彼を加ふる事の穩當ならざる事が認められる如く余りに現實に觸される人であつたのである。フーリエは一個のユートピアである。バジリアードの著者で豐富な思想の所有者であるモレリーの感化を被むる事多きが如くサンシモンはエンチクロペデイストで同時に人類の精神の進歩及び人類の完成的能力に關した科學的論文の著者であるコンドルセーの影響を受けて居るのである。サンシモン一派の場合に於ては就中、吾人は既に進歩せる國民の歷史を有機的及び批判的時期詳言すれば比較的平和な發展的時期と革命的改造の時期とに區別せるを見出すのである。

併し總べて以上の三者、即ちオーエン・フーリエ・サンシモン及び其學派の場合に於て彼等の科學的たらんとする努力及び現實に定著せんとするにも不拘、彼等にとつての最も重大な職責は社會主義實現の手段を發明する事である。彼等

が實際的に行動せんと欲せし處に於て彼等の努力せし事は共製法を完成せんとせし點である。然かも常に彼等はユートピアに立歸らんとする危險に存したのである。而して目的のユートピズムスの代りに手段のユートピズムスが齎らされたのである。十九世紀の後期に於ける社會主義に關した文獻は十中の八九共手段に於てユートピア的である、著書を以て充たされたのである。此場合に於て吾人は更に是等の著書をユートピア的な改革主義とユートピア的な革命主義とに區別し能ふのである。即ち前者は彼等の不充分な條件の爲に必ず失敗せざるを得ざる經濟的實驗に没頭し後者は革命力の創造的萬能に驚嘆の目を見張つたのである。此場合に於て今日科學的社會主義の創造者として普ねく認められて居る二個の偉人が以上の思想に根本的な變化を與ふるに至つたのである。即ち此二偉人はカールマルクスとフリードリツヒエンゲルスとである。

何故に彼等の學說は斯くの如き名稱を負ふに至りしか何故に彼等は特に科學的方面に共要求を要するに至りしか。何んとなれば彼等は總べて彼等の以前に齎らされた社會主義的理論よりも社會的進步の力及び進化的法則の本質に於て、より深くより系統的に詮索せし結果よりして社會主義的鬪爭を一個の完成せる進化論によつて支持せしめたのである。共進化論に於ては社會的進化の有機的性質に關する思想がより多く機械的或は化學的に規定せらるゝ事件としての是等の進化に對する解釋よりも正當視せられたのである。

種々なる場合にユートピストに依つて過重視せられた意志及び思想はマルクス・エンゲルスの學說に於ては屢々世人が考へたようには社會的進化の動力として輕視せられず或は全く無視せられなかつたのである—理想なき處に何等の意志なく、意志なき處には何等の行動なし—併し以上の二つのものは社會的に制約せられたるものとして二人は現はして居るのである。此場合に於て現はされる處は如何に此二つのものが吾人々類の社會生活上の物的條件又は形態に從屬

るかを示すことである。此物的條件又は形態に於て重要な要素となるものは人類に必要な生活財の生産の方法である。何んとなれば此生産は人類が取扱ふ道具に依つて最も多く決定せられるものである。併し勞働の方法を規定する道具によつて人類が自然的方則中に沒入すると共に最後に又た吾人の世界的認識の度合も之れに從屬するのである。社會的に觀察すれば道具其者に依つて個人主義的生産たるか集産主義的生産たるかゞ規定せらるゝのである。

古代及び尙ほ中世の終末に至る迄生産は殊に個人主義的であつたのである。然るに大發見時代に於ける世界的交通、世界的商業の膨脹發達は始めて生産上に集産的勞働を齎らすに至つたのである。其處には製造所の名稱を有する經濟的形態が普及するに至り生産は大商人の指導の下に營まれ、勞働は手工業者に委せられたのである。次で勞働者は工場と稱せられる大規模の仕事場に於て各種の勞働に從事するに至つたのである。斯くして商人は一個の工場主となり工場に於ては完全な道具が利用せられ其道具に對しては技術上の動力として自然力が應用せられたのである。斯くて道具は機械となり手工業者は工場勞働者と化するに至つたのである。工場に於ける生産は加速度的に集産的勞働となり工場の設立及び維持が資本に依る結果、資本は著しく生産を支配するに至つたのである。

資本主義的生産の發達と資本家相互の競爭との場合に於て客觀的な衝動として餘剩勞働に對する鬪爭なるものを生ずるに至つた。而して此餘剩勞働なるものは資本、原料、補助、材料、及び道具殊に機械の費用を辨じて尙ほ餘りある生産の純收入と稱するもので、此純益は賃金として勞働者に支拂はれざるものである。マルクスが斯くの如き場合に適用せし名稱である餘剩價値に對する鬪爭は長き時期を經過する中には工場の著しき膨脹を齎らす事となる。何となれば斯くの如き膨脹は生産力の大なる經濟を可能ならしめ、それに依つて自己に對抗する競爭者を打破し販路の増加を齎らす事になる。而して斯くの如き膨脹の社會的結果、例者企業の集中は都市及び地方に於ける人口の稠密的狀態をきたす。工業

的中心又は都市が膨脹發達するにつれて漸次吾人が地方の都會化と稱し能ふものが出現するに至る。過去の何れの時代よりも多く都市的文化なるものが地方人を倣し全社會が都市的印刻を押されるに至るのである。

總べて以上の者は新しき社會組織に對する物的根本條件をなすものである。何んとなればそれが社會的階級の新組織と結合せるからである。而して之れが重大な要素と稱す可きものは一定不變の賃銀勞働者階級即ち工業的無産者階級の現出及び增加である。經濟的の改造が新しき法律制度と新しき社會的設備及び法則を必要とする場合に於て社會的改革家の取扱ふ處は理想的社會の發明や之れが救濟的方法の議案でなくて寧ろ社會的必須性の發見である。併し此必須性を現實化する場合に於て最も強大な主觀的な動力となるものは勞働者階級即ち無産者階級である。彼等の物質的、精神的欲望は益々增加し彼等の法律上の解釋は輿論を維持する事になる。精緻な社會的觀察によれば我々の時代に於ける勞働者階級の要求を集めたものは前時代に於ける社會主義的思想の合理的内容の總括として表現せらるゝものである。

斯くして吾人はマルクス・エンゲルスの理論によつて新たなる社會主義の定義に到達したのである。而して其定義は次の如く構成され能ふのである。

近世の社會主義は階級的地位の認識に到達した勞働者の政治的、經濟的及び一般の文化的努力の精神的内容と並びに各國に於ける資本主義の發展に於て彼等に對立せる社會的階級と及び是等の努力を現實化する鬪爭の總括せられしものである。

社會主義的世界に於て此の理論を完成し個々の場合に於て之れを解釋し、之れを實際に適用する點に於て過去及び現在に於ける社會主義の最も注意に價する論爭が存するのである。

日本の勞働者に對する威嚇

＝ゴムパースと友愛會＝

ウヰリアム・ヘイウッド

閑かな春の日に近づいてゐる。間もなく美しい日本島は、彼女の最も派出やかな裝ひを凝らすだらう。そして雪を頂いた峯の麓から、太洋と内海の岸に至るまで、香ぐはしい櫻の花のピンクと白とを織り交ぜた、絲を以て點綴されるであらう。

この希望の時――すべての自然の胎内には、豐かな收穫となる可き果實を孕んでゐる時――この時日本人の心には戰慄が潜み込んでゐる。彼等はこの美しい約束の季節を前に見た。そして灼熱の夏の近づくにつれて、疫病と傳染病とが西方から來たのを見た。一葉の海水を渡つて先づ第一に長崎を侵し、そこから苦惱と死との脅威が擴ろがつてゆく。人間を亡ぼすペストとコレラ。收穫と成長するものとを荒廢する害虫。

私は日本に生れた者ではない。けれども日本の勞働者に心からの興味を抱いてゐる私には、日本の同僚たる勞働者諸君に向つて、今ま東方から來りつゝある疫病に對して一言の警告を呈することを禁じ得ぬのである。諸君の勞働團體たる友愛會は、今私の云つて居る疫病を、自分等の上に請待した。この疫病は、何でも五月の頃に諸君の國に着く筈である。この疫病の到着が、事によると、萬國勞働祭の當日たる五月一日にあるといふことは、何たる皮肉であらう。

この疫病は到着しても、生命をも收穫をも亡ぼさぬ。しかし私の恐れることは、××××××××××××××××××××、××××××××××。××××××××××××。そして友愛會が若し自己の眞意義を理解したならば、米國の搾取階級の傀儡に過ぎな

いサムエル・ゴムパースを迎へないで、却つて東方に向つて、勞働階級を導く眞精神を求めたであらう。

この俗悪な忘恩者――私は曾て「蝦蟇のサム公」と呼んだ――は友愛會の請待に應じた。そして東洋人が自分を訪づれる友人に與へる惜みなき歡待に、有頂天となるだらう。しかしゴムパースは諸君の友人であらうか。一九二一年の六月に、コロゴムラードのデンヴアー市に開かれた大會を司會したのは彼れではなかつたか。彼は總ての亞細亞人を合衆國から排斥する法律の制定を合衆國政府に要求する、此大會の決議に加はつた一人ではなかつたか。ゴムパース氏は、彼れが諸君から期待し、そして正しく諸君が彼れに與へようとする歡迎を、友愛會の會員にまでも撰ろげることを敢てするだらうか。

此人物が諸君に演説する時には、諸君を馬鹿にして話をする。彼は眞實を語る勇氣はない、四十年間彼れを會長とする團體の、然る可き眞實を語る勇氣はない。彼は日本人が、A・F・L（米國勞働聯合會）の如何なる組合にも加入させられぬといふことは、諸君に語らぬであらう。之れに反して彼は諸君に、諸君自身の國を打建てることの利益を、綺麗な文句で語るだらう。その僻彼れは、日本の勞働者たる諸君は、他の總ての國の勞働者と同じように、資本家階級に對する鬪爭の困難に當面することを、充分に心得て居る。

またゴムパース氏は、×××××××××××××××××、諸君に眞實を語らぬであらう。此國の勞働階級は資本家乃至は搾取主たる主人から絶對に自由であるといふことも、帝國主義的政府の支配は最早や存せぬといふことをも、彼は諸君に語らぬであらう。それかと云つてゴムパース氏は、彼れの故國の勞働階級についても、諸君に眞實を語らぬであら。米國に於ける幾百萬の男女勞働者は、土地にも生産機械にも接近する機會を奪はれて居るといふことをも、彼は諸君に語らぬであらう。彼れは諸君に、米國の資本家は、日本の資本家と地主と同じように、製造所をも工場をも、人民が其の上に棲息する土地すらも所有して居ることを語らぬであらう。そして彼は諸君に向つて、A・F・Lの功勞で出來た何等かの法律の事を話すかも知らぬ。けれども私は、是等の法律は其の背後に勞

働者の團結力があつて、之を實行せしめない限りは、何等の効果もないものだと云ふことを、彼が諸君に話すかどうかを疑ふものである。

豫め戒められておくことは、やがて豫め用意をしておくことになる。これが私が日本の勞働者諸君に呈する此一小論文の目的である。友愛會の會員諸君と、日本の組合組織のない勞働者諸君とが、若しゴムパース氏の話を聽かれるなら、彼は共產主義者は愚か、善良な組合員ですらもなく、產業的組合主義者でも革命的の人物でもないと云ふことを心得た上で聽かれたい。ゴムパースは政治屋であり、妥協屋である。

然しながら若し私が、ゴムパースの代りに、諸君の求めてゐる光明を增すやうな思想を諸君に提供しないなら、以上の如く批評もすべて無益である。

同僚諸君、私は勞働運動に、永いそして苦しい經驗をした。

（以下二百四十字缺）

This man, when he addresses you, will speak with his tongue in his cheek. He dare not tell you the truth, the awful truth of the organization of which, he for forty years has been the President. He will not tell you that the Japanese can find no place in the unions of the American Federation of Labor. He may, however, in well-mouthed phrazes tell you of the advantages to be gained in building up your own country, though he understands perfectly well that you, the working class of Japan, have the same difficuities to contend with against the capitalist class as do the workers of any other nation.

Mr. Gompers will not tell you the truth .. ..

....

He will not tell you that the Working Class of this country are absolutely free from capitalist or land lord exploiters, that the domination of imperial government has ceased to exist. Nor will Mr. Gompers tell you the truth in regard to the working class of the country from which he comes. He will not explain to you that millions of workingmen and women in the United States are deprived of access to the land and to the machinery of production. He will not tell you that the capitalists of America own the mines, mills and factories and the very land upon which the people must live, even as do the capitalists and the Landlords of Japan. He may tell you of some law for which the American Federation of Labor claim credit, but I doubt that he will admit that these laws are ineffective without the organized power of the workers behind them to see that they are enforced.

To be forewarned, is to be forearmed, and this is the purpose of this brief article which I address to the Japanese workers. If the members of the Yu-Ai-Kai and the unorganized workers of Japan listen to Mr. Gompers, let it be with the knowledge that he is not even a good union man, much, less a Communist, an Industrialist or even a personage of revolutionary type. Gompers is a political fixer, a union compromiser.

But all of this criticism would be of little avail, if I had not some thoughts to offer you that would add to the light for which you seek.

Comrades, my experience in the labor movement has been long and bitter.

(omitted 17 lines)

A Menace to Japan.

By W. D. Haywood

The gentle spring time is approaching. Very soon the beautiful island of Japan will put on her most gorgeous raiment, from the base of her snowcapped peaks to the shores of ocean and sea, will be dotted with green, interlaced with the pink and white of sweet-smelling cherry-blossoms.

In this season of promise, when all nature is pregnant with the fruits of what may prove to be a bountiful harvest, trepidation now creeps into the hearts of the Nipponese. They have seen these beautiful seasons of promise before, and with the glowing summer has come plague and pestilence from the West, across the narrow sea, first invading Nagasaki, spreading its menace from there—inflicting suffering and death. Bubonic plague and cholera destroying human beings, locusts and worms devastating crops and growing things.

I, though not a native of Japan, but having a deep heart-felt interest in the working people of that country, feel impelled to utter a warning to my Japanese Fellow Workers of a pestilence that is coming from the East. Your labor organization, the Yu-Ai-Kai, have invited the plague of which I speak, upon themselves. It is to arrive in your country some time in the month of May. It would be ironical to suggest that perhaps it will be the First of May, International Labor Day.

When this pestilence arrives, it will not destroy life or crops, but the fear that I entertain is, ...
....
....
....
.... and, if the Yu-Ai-Kai understood its real significance, it would rather have turned to the East for a guiding spirit, than to have invited Samuel Gompers, who is little else than a vicious, pliant tool of the exploiting class of America.

This vile ingrate, whom I have, on occasion designated as Sammy the Toad, has accepted the invitation of the Yu-Ai-Kai and will revel in the luxurious hospitality which the Oriental so well understand how to extend to visiting friends. But is Gompers your friend? Was it not he who presided over the convention held in June, 1921, in Denver, Colorado? Was he not a party to the resolution which was passed in that convention demanding of the United States government that a law be passed excluding all Asiatics from the United States? Would Mr. Gompers dare to extend to the members of the Yu-Ai-Kai the welcome that he will expect and that you undoubtedly will give to him?

Ausklügelung von Rezepten, sondern um die *Entdeckung* von sozialen *Notwendigkeiten*. Die stärkste subjektive Triebkraft bei der Verwirklichung dieser aber ist die Arbeiterklasse, das Proletariat. Seine materiellen und geistigen Bedürfnisse treten immer mehr in den Vordergrund, seine Rechtsauffassungen erobern die öffentliche Meinung. *Und die Summe der Forderungen der Arbeiterklasse unseres Zeitalters* stellt sich der genaueren soziologischen Betrachtung der als die *Zusammenfassung des rationellen Inhalts der sozialistischen Ideologie früherer Epochen.*

Und so gelangen wir an der Hand der Marx-Engelsschen Theorie zu einer neuen Definition des Sozialismus, die etwa so formulirt werden kann:

Der moderne Sozialismus ist

"die Zusammenfassung des geistigen Inhalts der politischen, wirtschaftlichen und allgemein kulturellen Bestrebungen der zur Erkentniss ihrer Klassenlage gelangten Arbeiter, sowie der ihnen gleichgestellten Gesellschaftsschichten in den Ländern kapitalistischer Entwicklung, und der Kampf zur Verwirklichung dieser Bestrebungen."

An die Herausarbeitung dieser Theorie in der sozialistischen Welt und an ihre Ausdeutung und praktische Anwendung im Einzelnen knüpfen sich die bemerkenswertesten Streitfragen des Sozialismus in Vergangenheit und Gegenwart.

des gesellschaftlichen Daseins der Menschen, für die der massgebende Faktor ist die Art und Weise der Produktion der Lebensgüter der Menschen.

Denn diese Produktion wird entscheidend bestimmt vom *Werkzeug*, über das der Mensch verfügt, vom Werkzeug aber, das die Arbeitweise vorschreibt, hängt zugleich ab das Eindringen des Menschen in die Gesetze der Natur und damit zuletzt auch der Höhegrad seiner Welterkenntniss.

Sozial betrachtet ist es das Werkzeug, das bestimmt, ob individualistisch oder kollektivistisch produzirt wird.

Im Altertum und auch noch bis zum Ausgang des Mittelalters ist die Produktion überwiegend individualistisch, erst die Steigerung des Weltverkehrs und des Welthandels in der Periode der grossen Entdeckungen führt zu kollektivistischer Arbeit in der Produktion. Es breitet sich die Wirtschaftsform aus, die den Namen Manufaktur erhält, Produktion unter Leitung vom Grosskapitalisten, welche Arbeit an Handwerker *ausgeben*, dann aber Arbeiter in grossen Werkstätten, Fabriken genannt, beschäftigen. Aus den Kaufmann wird so ein Fabrikant und in der Fabrik werden vervollkommnete Werkzeuge verwendet, für die als technischer Antrieb die Naturkraft verwendet wird. Das Werkzeug wird zur Machine und aus dem Handwerker ein Fabrikarbeiter. Die Produktion in der Fabrik wird in steigenden Grade Kollektivarbeit, und da zur Einrichtung und zum Unterhalt der Fabrik Kapital gehört, beherrscht zunehmend das Kapital die Produktion.

Beim Aufkommen der kapitalistischen Produktion und im Wettbewerb der Kapitalisten untereinander wirkt als *objektive* Triebkraft der *Kampf um die Mehrarbeit*, *das* heisst um den Teil des Bruttowerts der Produktion über die Kosten von Anlage, Rohstoff, Hilfsstoffe und Werkzeuge, bezw. Maschinen hinaus, der nicht den Arbeitern als Lohn gezahlt werden muss. Dieser Kampf um den Mehrwert, wie Marx ihn nennt, hat im weiteren Verlauf zur Folge eine steigende Vergrösserung der Fabriken, weil diese eine grössere Oekonomie der Kräfte erlaubt, damit die Unterbietung der Konkurrenz ermöglicht und zur Steigerung des Absatzes führt. Die weitere soziale Folge der Vergrösserung, bezw. Konzentration der Unternehmungen ist die Verdichtung der Bevölkerung in Städten und Ländern. Die Industriezentren, die Städte wachsen, es tritt allmählich das ein, was man die *Verstadtlichung* des Landes nennen kann, mehr als in irgend einem früheren Zeitalter ergreift die städtische Kultur auch die Bevölkerung des platten Landes und drückt der ganzen Gesellschaft ihren Stempel auf.

Alles das schafft die materiellen Vorbedingungen für eine neue Gesellschaftsordnung, denn es ist verbunden mit einer neuen Gliederung der Gesellschaftsklassen, als deren wichtigstes Moment zu nennen ist das Aufkommen und Wachstum der Klasse ständiger Lohnarbeiter, des industriellen Proletariats. Die ökonomische Umwälzung macht eine neue *Rechtsordnung, neue soziale Einrichtungen* und Gesetze notwendig. Es handelt sich nun für den sozialen Reformer nicht mehr um die Erfindung von Idealgesellschaften und die

wobei sein Plan kommunaler Genossenschaftpolitik auf besonderes Interesse Anspruch hat. Saintsimon ist so sehr Entwicklungstheoretiker, dass es fraglich wird, ob man ihn überhaupt noch einen Utopisten nennen kann, wie er zugleich so sehr Wirklichkeitsmensch ist, dass man befugt ist, seinen Anspruch auf Einreihung in die Geschichte des Sozialismus zu bestreiten. Wenn Fourier stark von Morelly dem geistreichen Verfasser der Utopie "die Basiliade" beeinflusst ist, so Saintsimon von Condorcet, dem Enzyklopädisten und Verfasser der wissenschaftlichen Abhandlung über den Fortschritt des menschlichen Geistes und die Vervollkommungsfähigkeit der Menschheit. Bei den Saintsimonisten finden wir unter anderen schon die Einteilung der Geschichte der sich fortschrittlich entwickelnden Nationen in organische und kritische Periode, d. h. Perioden relativruhiger Entwicklung und Perioden revolutionärer Umwälzungen.

Aber bei allen dreien, bei Owen, bei Fourier und bei Saintsimon und ihren Schülern spielt trotz ihres Strebens nach Wissenschaftlichkeit und Anknüpfung an das Gegebene die *Erfindung* der Mittel zur Verwirklichung des Sozialismus die entscheidende Rolle; wo sie praktisch sein wollen, arbeiten sie *Rezepte* aus, und immer wieder sind sie in Gefahr, auf die Utopie zurückzugreifen. An die Stelle des Utopismus des Ziels tritt ein *Utopismus des Mittels*. Die Literatur des Sozialismus im zweiten Drittel des 19 Jahrhunderts ist voller Schriften, die utopistisch im Mittel sind, wobei man wieder einen utopistischen Reformismus und einen utopistischen Revolutionarismus unterscheiden kann. Der eine versteift sich auf ökonomische Experimente, die wegen ihrer unzulänglichen Voraussetzungen notwendig fehlschlagen müssen, der andere huldigt einen Wunderglauben an die schöpferische Allmacht der Revolutionsgewalt.

Hier nun bewirken einen grundlegenden Wandel in den Anschauungen die beiden grossen Männer die heute als Begründer des wissenschaftlichen Sozialismus weithin anerkannt sind: Karl Marx und Friedrich Engels.

Warum trägt ihre Lehre diesen Namen, hat sie den besonderen Anspruch auf Wissenschaftlichkeit? Weil sie tiefer und systematische als alle vor ihr aufgestellten sozialistischen Theorien eindringt, in das Wesen der Kräfte und Entwicklungsgesetze des gesellschaftlichen Fortschritts, den Kampf für den Sozialismus auf eine durchgearbeitete Entwicklungstheorie stützt, in der der Gedanke von der organischen Natur der sozialen Entwicklung zum Unterschied von der Auffassung dieser Entwicklung als eines mehr mechanischen oder chemisch bestimmten Vorgangs zu seinem Rechte kommt.

Wille und Idee, die von den Utopisten in der einen oder anderen Weise überschätzt werden, werden in der Marx-Engelschen Lehre zwar nicht, wie vielfach angenommen worden ist, als Triebkräfte der sozialen Entwicklung geringeingeschätzt oder gar ignorirt-ohne Idee kein Wille und ohne Wille keine Aktion-aber sie werden in ihrer *sozialen Bedingtheit* gekennzeichnet. Es wird gezeigt, wie abhängig sind von den materiellen Bedingungen und Formen

Philosophen der empirischen Method, Francis Bacon zum Verfasser hat.

Nach zwei Seiten hin lässt sich in den sozialistischen Utopien des mit der Reformation einsetzenden Zeitalters eine abgestufte Entwcklung feststellen: erstens eine Tendenz der Ueberbietung in phantastischen Ausmalereien, und zweitens eine Tendenz zum grösstmöglichen Rationalismus in der Spekulation. Diese letzter Tendenz ist für unsere Betrachtung die wichtigere, denn sie war ein Hebel zur Förderung der sozialen Erkenntniss und führte schrittweise zur wissenschaftlichen Behandlung der sozialistischen Bestrebungen. Die Verfasser rationalistischer Utopien des Sozialismus suchen ihre Vorgänger zu korrigieren, und wenn das langer Zeit ohne die Form der Polemik vor sich geht, so lässt sich doch bei verschiedenen Autoren eine unausgesprochene Bekämpfung von Ideen des oder der Vorgänger feststellen.

Es handelt sich schon um ernst aufgeleste Streitfragen, der Nachfolger widerlegt den Vorgänger ohne ihn zu nennen.

Was aber den Utopien gemeinsam war, was das eigentliche Merkmal der Utopie ist, ist die entscheidende Rolle, die bei ihnen der *Zufall* und der noch *vom Zufall abhängige Wille* spielen. Lange Zeit ist in diesen Beschreibung der geschilderte Idealzustand hergestellt worden durch das Eingreifen *einer* ungewöhnlich weisen Persönlichkeit, eines Gesetzgebers oder anordnenden Fürsten, so dass wenn dieser Fürst oder Gesetzgeber zufällig nicht geboren oder vor der Zeit gestorben wären, das betreffende Volk oder Land den Idealzustand nicht zu kosten bekommen hätten. Später, im Zeitalter der französischen Revolution tritt an die Stelle des individuellen Willens oder Schaffensdranges von Wohltätern in der Konstruktion der Utope als schöferische Kraft der *Kollektivwille* von Anhängern einer bestimmten Idee. Dieser Kollektivwille ist aber, selbst wo er als der Will eines ganzen Volkes gedacht wird, immer noch Zufallssache. Ob die Gruppe oder die Volksmasse für die Idee kämpfen, hängt lediglich davon ab, wie weit und wie stark sie von der Propagirung dieser Idee erfasst sind, das Aufkommen der Idee aber selbst ist noch wesentlich vom Zufall abhängig.

An der Wende zum 19 Jahrhundert und in dessen ersten Drittel tritt hier ein wesentlicher Fortschritt ein. Es ist in der Geschichts des Sozialismus die Epoche der grossen, kritisch gerichteten Utopisten, der Robert Owen, Charles Fourier und Henri Saintsimon und ihrer Schulen. Das Merkmal dieser Sozialisten, das sie von den Utopisten des 18 Jahrhundert unterscheidet, ist die Rolle, die bei ihnen der Entwicklungsgedanke spielt und das Bestreben, an das gegebene anzu-knüpfen, die Welt, die sie vor sich haben, weiterzubilden. Robert Owen verweist in seinen sozialistischen Abhandlungen auf die in England aufgekommene kapitalistische Fabrik und die Zustände, die sie geschaffen hat, und nimmt sie zum Ausganspunkt sozialistischer Reformpolitik. Charles Fourier im noch stark kleinbürgerlichen Frankreich sucht den Sozialismus als Ideal psychologisch zu fundieren, in der Praxis auf dem Wege de Genossenschaften zu verwirklichen,

wo die Menschen nicht mehr in einfachen, ihren Wohnsitz wechselnden Stammesverbänden leben, sondern sich sesshaft gemacht haben und staatliche, beziehungsweise territorial gegliederte Gemeinwesen geschaffen haben, die der Bildung grosser Vermögensunterschiede und Rechtsungleichheiten Vorschub leisten, stellt sich früher oder später bei Individuen oder Schichten der Wunsch nach Beseitigung dieser Ungleichheiten ein und findet in der Ausmalung von *besseren* Gesellschaftszuständen seinen ideologischen, in Kämpfen für *solche* seinen politischen Niederschlag. Die Geschichte der asiatischen und vorderasiatischen Kulturvölker, die Geschichte der Griechen und Römer giebt uns zwar nur lückenhaft, aber doch unmissverständlich Kunde von solchen Bewegungen. Als Quelle dafür sei auf Robert Pöhlmanns Geschichte des antiken Kommunismus und Sozialismus verwiesen ein Werk, gegen dessen kritische Aufstellungen ich mancherlei starke Einwände zu erheben habe, aus dem man aber ersehen kann, wie sehr nicht nur die sozialen Kämpfe, von denen uns die Geschichte der Alten erzählt, sondern auch die mehr oder weniger phantastischen Konstruktionen oder Ausmalungen von Idealstaaten, die uns leider oft nur sehr skizzenhaft überliefert sind, einer geschichtswissenschaftlichen Würdigung fähig sind und eine solche daher auch bedürfen. Ob man das Vorchristentum, das in Rom seine eigentliche Ausbildung erfahren hat, als eine sozialistische Bewegung auffassen darf, mag dahingestellt bleiben. Bekannt ist, dass ihm diese Eigenschaft vielfach bestritten wird und man es lediglich als eine ethische Bewegung aufgefasst wissen will Aber wenn es als Gesammterscheinung nicht auf die Bezeichnung sozialistisch Anspruch haben soll, so ist es doch unbestreitbar die Nährquelle vieler sozialistischer Theorien und Bewegungen gewesen. Zeugniss legen ab allerhand Kapitel aus der grossen Literatur der Kirchenväter und der Scholastik und Beispiele sind eine Reihe noch dem Altertum angehöriger kommunister und halbkommunistischen christlichen Sekten, denen solche des Zeitalters der Renaissance und der Reformation gefolgt sind.

Dem letzten Zeitalter gehört auch die Entstehung des Buches an, dessen Titel zum Sammelbegriff für die ganze Gruppe der Beschreibungen spekulativ konstruirter Gemeinwesen oder Idealstaaten wird, nämlich die Abhandlung *Utopia* des Thomas More. Man kann von dieser Schrift des charaktervollen Staatskanzlers Heinrich VIII von England sagen, dass sie einer ganzen Literatur Leben gegeben hat. Denn sie machte für ihre Zeit Sensation und wurde in die verschiedensten Sprachen übersetzt. Das 16, 17 und 18 Jahrhundert sind voll von Beschreibungen vorgestellter Idealgemeinwesen, von Staatsromanen, wie man sie auch im Hinblick auf die Form der Beschreibung nennt. Nicht alle davon haben auf die Bezeichnung als sozialistisch Anspruch, es fehlt durchaus nicht an Utopien, die nach unseren heutigen Begriffen bürgerlicher Natur sind. Das gilt Z. B. von der unvollendeten Utopie "Die neue Atlantis," die einen der Amtsnachfolger des Thomas More, den berühmten

Der Sozialismus als soziologische Entwicklungslehre.

Eine Einführung in die Streitfragen des Sozialismus

von **Eduard Bernstein.**

Was versteht man unter Sozialismus? Das Wort ist sehr verschiedenartig gedeutet worden. Vielfach wird es als der Ausdruck für einen vorgestellten Zustand gebraucht, dem eine bestimmte Eigentums-und Wirtschaftsordnung zugrunde liegt, und der sich in einem ganzen Idealstaat verkörpern soll. Andre setzen es als gleichbedeutend mit einer Bewegung oder einem Kampf von Gesellschaftsklassen zur Verwicklichung solcher Wirtschaftsordnung, und wieder anderen ist es der Sammelbegriff für eine Summe von Forderungen oder Einrichtungen, denen bestimmte Rechtsgedanken und ethische Begriffe zugrunde liegen. Alle diese Deutungen haben insofern ihre Berechtigung, als sie auf bestimmte Formen des Sozialismus sich beziehen oder bestimmte Seiten der sozialistischen Bewegung kennzeichnen. Aber keine davon erschöpft den Gegentand.

Auch in den Lehrbüchern oder Kompendien der Sozialwissenschaften stossen wir auf sehr unterschiedliche Definitionen des Begriffs. Um nicht weiter in der Geschichte zurückzugehen, und uns auf Deutsche zu beschränken, so finden wir bei Schmoller eine andre Deutung als bei Roscher, bei Sombart eine andere als bei Schmoller, bei Oppenheimer eine andere als bei Sombart, und so noch weiter. Es wäre nicht uninteressant, sie vergleichend gegeneinander zu halten und festzustellen, was ihnen gemeinsam ist und zu sehen, ob sie sich nicht sozusagen auf einen Generalnenner bringen lassen. Mir scheint jedoch ein anderer Weg ratsamer, nämlich der Weg der Bettrachtung der geschichtlichen Erscheinungsformen des Gegenstandes. Vermöge ihrer werden wir uns, glaube ich, am besten darüber unterrichten können, was wir heute unter Sozialismus zu verstehen haben.

Der allgemeinste und darum allerdings auch der oberflächlichste Begriff vom Sozialismus ist die Vorstellung von einem Gesellschaftzustand, wo es weder Reiche noch Arme giebt, wo vieles allen gemeinsam ist und eine starke Brüderlichkeit herrscht. Wo diese Merkmale fehlen, wo weitgehende sachliche Gemeinsamkeit, weitgehende ethische Gemeinschaftlichkeit und Abwesenheit grosser Vermögensunterschiede fehlen, fehlen die wesentlichen Attribute des Sozialismus. So begriffen nun ist er sehr viel älter als sein Name. Während dieser erst im 19 Jahrhundert aufkommt, findet man die Sache als Idee oder Bewegung schon in dem Zeitalter, das wir Altertum nennen. Ueberall dort,

ont résolu héroiquement et par un sacrifice sublime de tous leurs intérêts pour renouveler les destinées du Japon, de rompre avec ses traditions les plus antiques, qu'il me parait à propos de terminer ce discours. Il y a parfois dans l'histoire des nations des moments où pour rester fidèle à l'esprit et à la vocation de la race, il faut savoir briser courageusement des formes qui ont eu leur valeur et leur utilité mais qui ne s'accordent plus avec ce besoin de tout être vivant le plus sacré qui est de continuer à vivre. Ce moment est venu pour la France en 1789, il est venu pour le Japon en 1868. Eh bien, je crois que dans l'histoire d'une littérature, il y a des moments de ce genre. Le meilleur moyen de rendre hommage à nos ancêtres et de rester fidèle à l'exemple qu'ils nous ont donné, c'est de montrer que nous leur sommes égaux par le courage, par la grandeur et par la fermeté de nos desseins. Nous valons autant qu'eux, ce qu'ils ont pu faire, nous pouvons le faire aussi, et pourquoi pas davantage? Certes les leçons qu'ils nous ont données ne sont pas perdues, mais nous ne serions pas les fils de tels pères, si dédaigneux de vivre en parasites impuissants de leur héritage, nous négligions de ces leçons la plus importance: l'audace.

historiens et romanciers jusqu'aux médaillons minutieux de nos fabricants de sonnets, peu à peu les galeries de notre imagination se sont trouvées meublées. Tous les spectacles ont été décrits, classés, adaptés aux exigences de notre mémoire. La langue française par les mêmes qualités que j'indiquais tout à l'heure s'est trouvée après quelques essais incertains, grâce au relief et l'énergie de ses vocables comme à la souplesse de sa syntaxe, aussi propre à l'évocation des images qu'elle l'était à l'exposition des sentiments et de idées.

Je n'ai pas la prétention d'avoir pu au cours de ces quelques minutes vous tracer un tableau complet de notre littérature, j'ai voulu simplement vous rendre sensible l'esprit commun qui à travers toutes les variétés d'époques et d'écoles n'a cessé d'animer ce vaste corps; c'est un esprit d'investigation, d'activité et si je peux dire d'autorité, le besoin de dominer le sujet, de le comprendre et de le faire comprendre, de soumettre toutes choses à l'esprit. Certains lecteurs timides rapportent de leurs excursions plus ou moins limitées au travers de nos livres une impression de scepticisme et de découragement. Il ne saurait y en avoir de plus injuste. Certes l'écrivain français n'a pas de ménagements avec la vérité ; il considère comme un devoir professionnel d'aller jusqu'au bout du dessin qu'il établit ou de la thèse qu'il soutient. Mais la littérature française n'existerait pas si elle n'était basée sur ce principe que l'esprit humain a autorité sur la matière et que cette terre est appropriée non seulement à l'exercice de notre sensibilité animale mais à l'ordre que notre intelligence a pour mission de retrouver. L'esprit qui se dégage de notre littérature est un esprit de joie et cette joie est la plus haute qu'un coeur humain puisse contenir, celle de l'homme qui s'aperçoit que le monde lui appartient parce que le monde a un sens.

Un esprit de joie et aussi un esprit de confiance, et c'est par cette leçon de confiance, m'adressant aux descendants de ces hommes qui,

impropre et mal préparée, que le son ne gêne pas le sens, que l'idée ne contrarie pas la vie en embarrassant l'oreille ou la respiration du lecteur.

Au commencement du XIXe siècle, notre littérature subit une révolution. La langue, qui, je le répète, pour répondre aux nécessités non pas d'un groupe d'écrivains mais d'un peuple tout entier qui au cours de plusieurs générations a délibéré la plume à la main, était parvenu à un très haut degré d'élaboration et qui commençait à donner avec certains écrivains de la fin du 18e siècle des signes de dégradation, dut s'accommoder à de tout autres emplois. Certes, l'ancienne vertu de notre littérature, celle que j'appelais tout à l'heure, explicative,—théorique et psychologique,—n'a pas cessé d'exister et de produire des oeuvres et des chefs-d'oeuvres. Il me suffit d'attester "Adolphe," "Dominique," les noms de Tocqueville et de Taine, les romans de M. Paul Bourget, toute une moitié de l'oeuvre si intéressante d'un écrivain contemporain qui, sans doute, vous est connu, M. Marcel Proust. Mais d'autres besoins s'étaient fait jour. Le XIXe siècle a été par excellence le siècle de la découverte, et ce qu'il a découvert, au delà des courtes frontières d'autrefois, c'est le monde, et même plusieurs mondes, celui de la géographie, celui de la science, celui d'histoire. C'est dans cette masse de faits, d'images et de documents nouveaux que l'esprit littéraire avait à se retrouver. Le poète ou le romancier n'avait pas comme le savant à chercher à établir un enchainement de causes et de conséquences, mais à substituer fictivement à une masse informe un tableau cohérent limité par un cadre précis et réduit à des traits essentiels dont l'ensemble forme une composition. C'est ce vaste travail d'inventaire de la réalité et de l'histoire, grâce au prélèvement d'échantillons caractéristiques, qui fut jusqu'à une date récente par les soins de nos romantiques, de nos parnassiens et de nos réalistes, la tâche principale du siècle qui vient de s'écouler. Depuis les fresques un peu bâclées de nos premiers

de Montesquieu, de Voltaire et de Jean Jacques Rousseau, ont jugé l'homme et la société par le dehors : c'est quelqu'un qui parle devant un auditoire invisible et qui expose ses idées par ordre démonstratif en les soutenant d'exemples et d'appels à notre attention et à notre assentiment. Les seconds ont procédé, si je peux dire, par voie de paraboles, ils ont représenté le conflit de nos idées et de nos sentiments par le moyen de personnages engagés devant nos yeux dans une action fictive. Tel notre poète La Fontaine, tels nos premiers romanciers et nos dramaturges classiques dont je n'ai pas besoin de vous rappeler les noms. Enfin une troisième catégorie d'écrivains, apparentée à nos vieux fabricants de dictons et de maximes, a employé les sources de la versification pour faire chatoyer certaines idées, certains sentiments sous tous leurs aspects, sur leurs toutes facettes, pour leur donner une forme piquante, vive, contrastée, de nature à les graver profondément dans l'esprit. C'était là le domaine propre de ce que nos aïeux nommaient bonnement la poésie.

C'est pendant cette période que, sous l'effort des générations qui l'ont fait servir à l'expansion des idées et des sentiments les plus complexes et les plus délicats, la langue française a acquis les qualités qui la recommandent aujourd'hui pour un emploi universel, et singulièrement la clarté. Il faut tout d'abord pour qu'un idiome soit clair que les matériaux qu'il emploie, c'est-à-dire les mots, aient un sens précis et pour ainsi dire officiellement et légalement défini. Il faut en second lieu que la phrase soit construite de manière à respecter l'ordre et la hiérarchie des idées, de sorte que la proposition principale ne soit pas étouffée par les incidentes, et que d'autre part les articulations du langage soient assez fines et assez souples, que la gamme des temps soit assez riche, pour répondre à l'extrême variété des rapports par où se relient à l'idée mère les idées subordonnées qui lui donnent son plein épanouissement. Enfin il faut que dans la phrase l'élément intelligent et spirituel ne rencontre pas un obstacle dans une matière

pas été un mouvement démocratique, elle a été l'accession légale de tout un peuple aux privilèges de l'aristocratie. Chaque Français, héritier de races nombreuses et disparates qui se sont résorbées dans notre unité nationale, a toujours constitué à lui seul une petite souveraineté en voie de tractation continuelle diplomatique et juridique avec les souverainetés voisines sous l'autorité d'une espèce de tribunal épars mais tout puissant qu'on appelle *l'Opinion* et dont on peut constater l'existence dès les temps des Premiers Capétiens et de le Guerre de Cent Ans. Il n'est pas étonnant que cette double situation de la France et du citoyen français ait influé sur notre littérature, qu'elle ait obligé chaque esprit à s'occuper de théorie, à dégager des principes assez généraux pour fournir solution à des problèmes extrêmement compliqués. La littérature chez nous n'a pas été l'amusement d'une élite, elle a été la nécessité de tout un peuple, un débat continuellement ouvert devant tous et contre tous pareil à celui qui se poursuit entre les différentes facultés de l'intelligence.

Ces considérations font comprendre le caractère presque uniquement moral et intellectuel qu'ont eu nos ouvrages de pensée dans la première période de leur développement depuis la fin du XVIe siècle jusqu'au commencement du XIXe. Pour l'écrivain français il s'est toujours agi beaucoup moins de peindre que d'expliquer, et la première nécessité pour le Français tombé au milieu d'une société complexe et engagé par les circonstances dans des séries d'actions extraordinairement riches et délicates, c'était de voir clair en lui-même. Cette étude a toujours eu un but pratique et l'on pourrait dire que pendant deux siècles toute notre littérature n'a existé que pour établir une vaste théorie de l'action. Les écrivains pendant cette période se sont divisés en trois classes. Les uns, de Montaigne à Joubert et à Maine de Biran, de Bourdaloue à Joseph de Maistre, en passant par La Bruyère et par Vauvenargues dans cette suite où brillent les noms à divers titres éclatants de Pascal,

nous apprenons à lire. Et si les livres français ont rencontré chez tous les peuples du monde une faveur égale, si de préférence à ceux écrits dans d'autres idiomes, ils ont été recherchés par les hommes de tous les âges, de toutes les classes et de tous les temps, il est à supposer qu'ils le doivent non pas seulement au talent de leurs auteurs, au charme, à la variété, à l'intérêt des thèses qu'ils débattent et des tableaux qu'ils proposent, mais à une qualité générale, et cette qualité c'est que, plus que d'autres, ils sont nutritifs de l'esprit c'est qu'ils fournissent à leurs lecteurs non pas seulement un spectacle, mais une méthode, c'est qu'ils leur apprennent à faire de l'ordre en s'incorporant à celui que l'auteur a pour un moment réalisé.

Cette propension de l'esprit français à concevoir en tout le général, à remonter à une cause ou principe par rapport à quoi tous les effets (dans les deux sens des mots) viennent s'ordonner, il est probable que nous la devons non pas tellement à notre formation classique, d'après les modèles de la Grèce et de Rome qu'à notre situation géographique et ethnographique. La France réunit sur son territoire des échantillons de tous les climats, et son histoire, au milieu des peuples si divers qui l'entourent et des tendances contrariées qui s'exercent sur elle, lui a fourni le moyen, lui a imposé la nécessité, d'étudier et d'imaginer, ce qu'un auteur dramatique appellerait toutes les situations, toutes les combinaisons politiques, doctrinales ou militaires qui étaient de nature à défendre et agrandir son patrimoine. La France n'était pas l'instrument et l'esclave d'une situation donnée, d'une destinée tracée d'avance, elle avait à s'arranger continuellement avec toutes les modifications d'une civilisation en travail à laquelle son rôle a toujours été d'apporter l'harmonie et l'équilibre. D'autre part il est parfaitement vrai de remarquer que le Français est profondément individualiste et impatient de toute autorité avec laquelle il n'a pas conclu une espèce de petit traité, explicite ou tacite, mais toujours révisable. La Révolution française n'a

finalement le capital disparate de son expérience personnelle. Le premier objet de le littérature est tout d'abord de fixer ce monde à l'état de fuite perpétuelle, de substituer à ce milieu fluide qui échappe à notre prise un tableau permanent que l'esprit peut étudier à loisir. Et sa seconde démarche est de limiter ce tableau, de séparer un certain nombre de faits qui nous paraissent présenter entre eux un lien secret de parenté, qui composent entre eux ce que j'appelle une figure, de ce qui les entoure, de ce qui les précède et de ce qui les suit, de manière à faire de leur multiplicité cette unité que l'esprit saisit d'un seul regard. Et enfin à l'intérieur de ce tableau l'art de l'écrivain, ou de celui que nous appellerons plus justement suivant l'étymologie grecque, le poète, le créateur, est de mettre en évidence l'essentiel et tout autour de ce point lumineux de repartir savamment toute la gamme des nuances et des ombres mutuellement subordonnées, de manière à constituer un sens, de substituer enfin à la touche rudimentaire et brutale de la réalité l'expression plénière d'une vérité organisatrice, Du spectacle attesté par les sens s'est dégagé un sens assimilable par l'esprit, le monde est devenu lisible.

Messieurs, cet adjectif que je viens d'employer résume l'objet de toutes les littératures. L'objet de la littérature est de nous apprendre à lire. Depuis le travail de l'écolier qui réunit péniblement pour en faire une phrase le sujet, le verbe et le complément, jusqu'à celui du grand poète qui va chercher aux quatre coins de l'univers des images et des figures pour en composer un prodigieux concert, le but de l'écrivain est le même, c'est de constituer un ordre, c'est de substituer à la sensation animale, un regard ordonnateur, dominateur, créateur, c'est de nous permettre de détacher de chaque chose sa signification, son image désormais soustraite à l'altération le mot qui en donne le sens, et d'expérimenter l'effet de cette image portative et suscitatrice sur chacun des autres mots qui constituent notre immense vocabulaire. C'est dans les livres que

Discours sur la Littérature Française

Paul Claudel.

Messieurs.

A l'imposante manifestation que la jeunesse cultivée de Tokyo, représentée par des délégations de toutes ses écoles, de toutes ses Universités a bien voulu faire aujourd'hui autour de moi, je ne répondrai pas par les protestations conventionnelles d'une modestie oiseuse, mais par l'expression d'une gratitude profondément ressentie et d'une joie dont vous permettrez à l'écrivain Paul Claudel de faire part à l'ambassadeur de la France. Jeunes gens, votre présence en rangs serrés à cette fête dont vous seuls avez pris l'initiative généreuse est une preuve que pour vous les lettres françaises ne sont pas seulement la dépouille d'esprits défunts, le document de destinées désormais accomplies qu'on interroge curieusement dans le silence des bibliothèques, mais que la France a encore un message à vous adresser, d'un esprit vivant à d'autres esprits vivants, et que ce message au delà de la mer et de toutes les barrières interposées a trouvé ici, dans ce Japon où la civilisation de l'Orient a donné sa fleur suprême, des oreilles qui lui étaient préparées.

Vous le savez, Messieurs, la littérature n'est pas seulement un amusement d'oisifs, une évaporation de notre rêverie, une jonglerie de syllabes, elle répond comme la science à un besoin essentiel de notre esprit, qui est de mettre un certain ordre dans le spectacle des choses, présentes et passées, qui nous entourent. Dans cette vie quotidienne qui est la nôtre, nous ne voyons pas les causes, mais les effets. Nous sommes emportés par un torrent ininterrompu de menus faits, de sensations fugitives dont chacun s'arrange comme il peut pour constituer

第四インタナショナル解剖

第四インタナショナルに就て

室伏高信

一

こゝに第四インタナショナルといふのは第四共産インタナチョナーレ(Die 4. Kommunistische Inter nationale)のことである。ヴキーン・インタナショナルのことを、それが第三インタナショナルよりも後から生れ出たといふ理由で第四インタナショナルといつた場合もあるようであるが、それは今日ではそれのモスコウ製の名前としての第二・五インタナチョナーレ(Die 2½-Internationale)として知られるようになつてゐる。

この二つのインタナショナルはまだ生れ出たばかり、生れ出たといふよりは生れだそうとしてゐるばかりであるし、そのうちヴキーン・インタナショナルの方は、分裂した第二と第三の二つのインタナショナルをも包含して世界の全社會主義運動の唯一つなる國際統一團體となることを目的とするものであるが、それだけにその望みは殆んど絶無であつて、それの失敗に終ることは、少くとも昨年秋英國勞働黨の拒絶によつて、餘りに明瞭になつたようだから、今後存在してゆくにしても、どういふ方針どういふ形でその存在を續けてゆくかは、今後の問題であらう或はそれも、その本來の包括的な目的から離れて、第二、及び第三インタナショナルを分離したインタナショナルとして存續するのほかはないであらう。第四インタナショナルの方は最初から、分離した、何れの從前のものとも獨立した、それ自身の原理の上に、新らしいインタナショナルを組織しやうとする運動であつて、昨年秋伯林で創立の聲を揚げたものである。その中心勢力をなしてゐるもの、そして同時に創立の創始者となつ

てゐるのは獨逸の共産勞働黨(Die kommunistische Arbeiter Partei Deutschland)と、それと姉妹關係にある、これまた獨逸の革命的勞働組合としての總勞働組合(Allgemeine Arbeiter Union)の一派がそれである。獨逸以外でそれに參加し、または參加しようとしてゐるのは、英國ではシルビア・パンカーストの一派、並にこれと行動をともにする『社會主義』または『スパア』の一派などであり、和蘭の共産勞働黨もそれに加はるべき地位にあるし、ブルガリアのプログノフ一派または瑞典の一派もこれであり、またロシア自身にも同樣の同志があるやうに思はれる。ブキヤーリン及びコロンタイなぞがその一派と目されてゐるものであり、またレーニン自身の記るしてゐるところによればラデツクさへこの傾向に立つてゐるものである。(N. Lenin, Left Wing Communism, p. 12) これ等のブキヤリンやコロンタイが第四インタナショナルに對してどういふ態度をとるかはまだ分らないし、またラデツクはレーニン折紙付きの左翼派であるにしても、いろ／＼の關係から見て第三インタナショナルを離れるやうなことはあるまい。が共産黨内における所謂『勞働者反對黨』が正統派または幹部派或は中央派共産黨の諸君を離隔しつゝあることは疑のない事實であるし、また第四インタナショナルが伯林で創立の聲を揚げた當時でさへ既に南部スラヴ共産黨は明らかにその成立を祝福してゐるのである。

二

今日國際社會主義團(インタナショナル)として知られてゐるものは四つの種類を擧げることができる。第二、第三、第二・五、及び第四インタナショナルがこれであつて、大體においていふと、第二インタナショナルは右翼派社會主義を代表するものであり、これに對する抗議として生れた第三インタナショナルは共産黨として知られてゐるが、今日では寧ろ共産主義中央派といつた方が適當であらう。第二・五インタナショナルはマルクス主義中央派を代表し、そしてこゝに述べようとする第四インタナショナルは共産主義左翼を代表してゐる一團の國際社會主義の原理及び運動をいふのである。即ちレーニン一派の共産主義の妥協性に對する抗議として生れたものであつて今日の國際社會主義の最左翼に立つものであるとともに、また共産主義(ボルシエヴヰズム)の左翼を代表するものであるが、この『共産主義の左翼』は、ボルシヴヰズムがロシアに生れてから間もなく生れてきたものであつて、レーニン自身の認めてゐるところによれば、この左翼派はボルシエヴヰキの初期の歴史のうちに存在し、既に一九〇七年から八年へかけては、この左翼派はレーニンなぞのボルシヴヰキ中央派よりも却つて民衆宣傳上に有利な地歩を占めてゐたものである。

(Lenin, ibid., p. 85) この一派は、一九〇八にレーニン一派の中央派と意見を同じくすることができなかつたためにレーニン一派から除名されてゐるのであるが、今日尚ほこの一派がロシア共産黨のうちに存在してゐるとは前に述べたとほりである。英國では一九二〇年に英國共産黨(C. P. G. B.)が幾つかの共産黨(B. S P. S. L. P., W. S. F., S. W. S. S.)から成立し、そして昨年また獨立勞働黨の左翼が分裂してこれに參加したのであるが、これ等の諸團體は議會政策に對しても、勞働組合(または産業組合)についても、可成り隔つた意見の持主としてそれまで對峙してきたものであつて、第三インタナショナルの要求のために合同をなしたもの、若しくは合同を餘儀なくされたものであつたから、その合同の最初から他日の分裂の因由が固有されてゐたといふことができよう。爾來この共産黨内の數派の諸君は、名義上英國共産黨の名のもとに統一はされたものの各々別々の機關紙をもつて、各々別々の立場を宣明しつゝ第三インタナショナルの有名な『訓練(ディシプリン)』のもとに拘束されてこなかつた。その間の暗鬪として續くこと一年ばかり、昨年の夏になつて、暗鬪は世間の表面に暴露される迄に窮局に押しつめられて、とう〳〵『スパア』と、『ソーシヤリスト』と、『ウワーカース・ドレッドノート』とが共産黨の本部、即ち英國共産主義の中央派からボイコットされるようになり、その問題が動機になつて、シルビア・パンカースト孃が英國共産黨から除名されることとなつた。それとほゞ時を同じくして、獨逸の共産勞働黨(カー・アー・ペー・デー)と第三インタナショナルとの關係も斷絶することとなつた。元來このカー・アー・ペー・デーの成立したのは一九二〇年の四月であるが、これより先きこの一團はスパルタクス同盟(Spartakusbund)の左翼として、カール・リープクネヒトなぞの中央派と抗爭して、やがてそれから分裂してゐたものであるから、そしてスパルタクス同盟が一九一八年に共産黨(カー・ペー・デー)となつた時にもこれに加はらないし又一九二〇年十一月、今日の合同共産黨(フアウ・カー・ペー・デー)となつた時にもこれに加はつてはゐないし、また第三インタナショナルに對しては一九二〇年十二月に『同情黨』として參加したが第三インタナショナルの一分子としてそれに參加するには至らなかつた。そしてその當時、第三インタナショナルの『同情黨』として關係を承認された時にも、彼れの政策が第三インタナショナルのそれとは趣きの違つてゐるものであることを宣言したほどであつた。こういふわけで第三インタナショナルといつても、その中心をなしてゐるレーニン、トロツキー、ヂノヴヰエフの一派と意見を異にしてゐるもの、それより[illegible]もつ

と極端まで行かなくては承知のできない一團が包まれてゐたのである。レーニンは英國の共産黨の合同をすゝめた時に、パンカーストなどの一派の左翼派の諸君に向つて、あなた方は共産黨の中で左翼のブロックを造れ、そしてその中にあつて、あなた方の信んずる政策のために働け、といふ意味のことをいつたそうである。事實上この一團は第三インタナショナルに加入し亦はそれの『同情黨』としての關係をつゞけてゐる間でも、常にその内部における異分子として働きもし、異分子としての待遇をもうけてきたのである。このことは一昨年來ロシア共産黨の中で、勞働組合の問題について漸く明らかになつてきたし、ブキーリンがレーニンから、お前はサンヂカリストだ、といはれたのもこの傾向の發展上における一挿話であつたのである。一昨年の四月レーニンが『左翼派共産主義』の一書を書いた時にはレーニンは既にこの左翼派共産主義運動の重要問題であることを承認して次のようなことをいつてゐる。勞働者階級運動の歴史は、凡ての國において、それが××××××の方へ成長し且つ强められる前に、一つの爭鬪を經驗せねばならぬことを示してゐる。その爭鬪は、第一に、各國におけるメンシエヴヰキ要素の日和見主義及社會的××狂と鬪ふことであり、第二に、その爭鬪は、ある種類において、左翼派共産主義と鬪ふことである。この爭鬪の第一の舞臺は、殆んど一つの例外もないように、第二(それは今日では事實上殺された)と第三インタナショナルとの間における爭鬪として發展した。この爭鬪の第二の舞臺は獨逸、英國、伊太利、アメリカにおいて見ることができるそはフランス……においても見ることができる。この類似性は左翼派共産主義に對する爭鬪をしてたゞに國際的ならしめるばかりでなく、その範域において全世界的のものとならしめると(Lenin, ibid, pp. 70-1) チノヴヰエフもまた昨年の第三インタナショナルの總會における彼れの報告のうちで、カー・アー・ペー・デーの『問題が國際的意義』をもつてゐたことを述べてゐる(一九二一年六月廿五日)そして昨年の第三インタナショナルの總會(第三回總會)では、チノヴヰエフ報告どほり、このカー・アー・ペー・デーに對して、第三インタナショナルに參加するか(同情黨としてゞなく、第三インタナショナルの綱領をうけ入れて)それでなければ第三インタナショルから除外さるべきものであることを決議してゐるのである。(執行委員會の報告に對する決議第三項)これに對しカー・アー・ペー・デーの方は、最初から彼れ自身の綱領が『犯しがたき』(ウンフエルレツフリツヒ)のものであることを主張してきたばかりでなしに、またその一九二〇年十二月の宣言において第三インタナショナルと彼れとの立場の相違を鮮明にし

てゐるばかりではなしに、『レヴヰーの道とカー・アー・ペー・デーの道』や、それから『レーニンへの公開狀』なぞを出版して第三インタナショナルに對する挑戰的の態度を明白にするようになつた。そこへ昨年九月第三インタナショナルから除外されるとともに、こゝに第四インタナショナルの計畫を進めることとなつたのである。

三

第四インタナショナルは第三インタナショナルと同じく共產主義——ボルシエヴヰズムとして共產主義を奉ずる。この點では第三インタナショナルと同一の立場をとつてゐる。從つてボルシエヴヰズムの基礎的特質としての無產者階級の獨裁政治の原理を奉ずるものである。その點において、それは第三インタナショナルの規範に據してゐるのであつて、また從つて第二及び第二・五インタナショナルとその立場を異にしてゐるものであるが、この無產者階級の獨裁政治をどうして實現してゆくかの方法、即ちタクチークの問題になると、殆んど根本的にその立場を異にしてゐるといふことができよう。農民に對する態度、指導者問題、議會主義及び勞働組合に對する態度の四つが大體においてこの二つの共產主義を分裂に導く四大要素——タクチークのうへにおける——であるといふことができる。この點は一九二〇年十一月第三インタナショナルの執行委員會におけるゴルテルとトロツキーとの討論と、レーニンの左翼派共產主義非難論 (Lenin Der Radikalismus ein: Kinderkrankheit des kommunismus,1920) 及びそれに對する論駁としてのゴルテルのレーニンへの公開狀』(Herman Gorter, Offener Brief an den Genossen Lenin. Berlin, 1920) によつて明らかである。

四

農民問題が社會革命運動にとつて非常に重要な、そして或る場合には殆んどそれに致命的ででもあるかのように思はれる重要な關係をもつてゐるものであることは、社會革命が今日まで痛切に經驗したところだといふことができよう。ロシア革命もまたこれによつて其の最も激しい試練をうけてきたこと、または現にうけつゝあることを、世界の社會革命の前に、證明し、暴露し、或は訴へつゝある。最初にボルシエヴヰキの諸君に、即時平和、勞兵會獨裁、及び農民への土地の分配の三大政策を標榜して立つたのであつて、この三大政策が、時と處とをえて、ボルシエヴヰキの成功を導ひたのであるが、その中、ロシアのような農民が人口の多數を占めてゐるところでは、農民に對する政策は特に重要だといふことができよう。何故なら、ロシアのような農業國で、農民の協同、または同情なくして革命の行

はれるといふことは考へ及ばないところであるからである。ところでロシアでは、この人口の大多數を占めてきた農民の間に革命的精神が廣く久しく行はれてきたのであつて、社會革命黨がこの國に發達してゐたのもこの間の消息を示してゐるものである。革命が始まるとともにこの農民の間に分配されてきた革命的精神は、この國の農民をして、産業勞働者と等しく、革命の二大要素の地位へともちきたしたのである。そこで勞農ロシアにとつては、農民の大多數としての無産農民は無産勞働者とともに、革命の要素となることができたのであつて、少くとも革命の最初までは、農民問題はロシア革命では他國の社會革命家が××するほどの簡單さで解決されたのである。しかしこのロシアの工場勞働者對農民の關係はその他の諸國でもこれを望むことができるであらうか。即ちこれ等の諸國でもロシアにおいてと同じように農民の大多數と無産勞働者とが社會革命の先陣として協同することができるであらうか。第四インタナショナルの理論的指導者としてのヘルマン・ゴルテルは、先づこの點から第三インタナショナルのタクチークに對する彼れの抗議を始めてゐるのである。

彼に從へば、この點で西歐諸國の事情はロシアとは全く同日の談ではない、ロシアでは約七、八百萬の工場勞働者に對して約二千五百萬の無産農民(アルメン・バウエルン)がある。また支那や印度のような亞細亞の諸國では、人口の八割は小農民であるが、この關係は『東から西へ』行くに從つて變化してくる。そして西歐の諸國では例へば英國は農民は人口の一小部分であるし、その他の諸國も多くはロシアのような大地主制のもとに立つてゐないで、貧困農民といつてもロシアのやうに貧困でもないし、また多くは『一片の土地』を所有してゐるから、農民は革命運動の要素として考へることはできない。またいよ〳〵革命が始まつても、『農民に土地を』(Der Boden den Bauern) の政策はロシアのように農民を感激せしめる力をもたない。そこで西歐諸國のプロレタリアートは、ゴルテルの解釋に從ふと、孤立である。彼れは資本主義を向ふへ廻して戰はねばならないのに、農民は資本主義の味方であるからである。この經濟的事情の相違は、またゴルテルに從ふと、西歐諸國の共産主義が、ロシアのそれよりも、全然違つたタクチークを必要とすることの結論に到着せしめる (Gorter, Offener Brief an den Genossen Lenin, s. 7-11) そしてこの點が、ゴルテルに從ふと、彼れとレニンとの、出發點の相違——根本的の相違を導くのである。(ebenda, s. 4) だからゴルテルに從ふと、西歐諸國では、××××何よりも第一に民衆の開拓と組織とに全力を注ぐ必要がある。それは少數の指

導者の嚴格な專横獨斷な指導のもとに、少數のプロレタリアート軍によつて××をもたらし、または××を支持することができるものではなくして、民衆それ自身の自覺と組織との力に待たなくてはならないこととなる。即ち階級或は群衆の問題が重要であつて指導者は重要でなくなつてくる。(ebenda, s. 14) ゴルテルの言葉でいふと、大指導者をうることが肝要でなくてまた獨逸にはこうした大指導者はなくて、各々のプロレタリアートがそれぞれ『英雄』となることが必要となつてくる。こういふわけで獨逸のカー・アー・ペー・デーの間で問題になつた、或は第三インタナシナルと第四インタナショナルの間で問題になつた『上からか下からか?(オーベン、オーダー、ウンテン)』或は『指導者の獨裁か群衆のそれか?(ディクタトウル、デア、ヒューラア、オーダー、デアマッセン)』の問題は、嚴格な訓練のもとに立つプロレタリアートの精鋭としての共産黨によつて革命を指導しようとするモスコウのタクチークに對する左翼派共産主義の根本的の抗議として存在してきたのである。

五

議會主義に對する非難は、ボルシエヴヰキによつて始められたのではないし、またソヴヰエット制度もボルシエヴヰキによつて始められたといふわけでもないが、ボルシエヴヰズムはソヴヰエット制度、そして非議會主義をもつて、彼れ自身の重要な内容の一つとしてきた。否なそれをもつてマルクス主義の要素の一つとまで主張した。此點はレーニンの『國家と革命』によつて明瞭である。(Lenin, Staat und Revolution, s. 36-42) しかし『議會主義・破壊』を要求するレーニンは議會政治へのボイコットを必要とするものではない。この點は既に一九〇六年七年及び八年の三回に亘つてボルシエヴヰキが議會をボイコットしたことに關して明瞭である。レーニンはこのボイコットをもつてボルシエヴヰキの失策であると考へてきたのである。(Lenin, Left Wing Communism, p. 21) そして左翼派ボルシエヴヰキは、この『反動的な議會に參加することの必要を理解することのできない』ものであるといふ理由でボルシエヴヰキ黨から除名されたことさへあるのである。第三インタナショナルの第二回會議では、彼れが非議會主義を主張しながらも、尙ほプロパガンダのために、議會を利用することの必要を決議してゐる。(Leisatze und Statuten der Komm nistischen Internationale, s. 40-49) 即ち第三インタナショナルは議會主義または議會制度には反對するが現存する議會をプロパガンダ用として利用するといふ政策、或はレーニンによれば、『議會が無用のものであること』を勞働階級に知らしめるために、議會をボイコットすることに反對し、そして共産黨が選擧場裡に立つこ

となすゝめてきたのである。しかしゴルテルに從へば、彼れは決してサンヂカリズムのように政治的行動を否認するものではないが、議會をもつてプルゲルによつての、プルゲルのための機關であるとするとともに、(Gorter, Offener Brief, s. 33)プロパガンダ用としても、それはたゞプルゲルのためのプロパガンダ用に役だつに過ぎないとなすのである。何とすれば有産階級の諸新聞は議會の事をたゞ彼等の階級にだけ都合よく報道するものであることを知つてゐるからである。(Clenda, s. 42)パンカースト嬢もこれとほゞ同一のことを述べてゐる。(Workers' Dreadnought, Sept. 24, 1921)

勞働組合に關しても、第四インタナショナルの戰術は第三インタナショナルのそれとは全然相容れることのできぬものの一つである。第三インタナショナル……に從へば、勞働組合に對する共産黨の態度は、在來の反動的な勞働組合を破壊して、新らしく革命的勞働組合を組織することではなくして、この古るき組合の間にあつて、その古るき指導者を共産黨員に置きかへ、または内部における宣傳その他の方法によつて、この古るき組合を内部×××することである。從つてそれはこの點についてのI・W・Wの政策に反對するし、また獨逸のアー・アー・ウーのような革命的組合の組織にも同意しないのである。

(Leitsätze und Statuten der Kommunistischen Internationale, 1920, s. 49-57)これに對しカー・アー・ペー・デーの態度を見るに、それは一九二〇年十二月の宣言で彼れが第三インタナショナルの勞働組合に對する政策に反對すること、そして彼れが勞働組合(ゲベルクスシャフト)を破壊することの必要を宣言してゐるし、アー・アー・ウーもまたその宣言のうちで、赤色勞働組合インタナショナルの方針に反對して、勞働組合の破壊が歴史的必然であること、そしてこれに代へる工場組織をもつてすべきであることを宣明してゐるのである。

以上のようなわけで第四インタナショナルは、××××、がたゞロシアのそれに追從しないで、西歐の諸國はそれとロシアとの經濟的事情の相違してゐる實質に基いて、これに適應する新らしい戰術を決定すべきであること、議會と勞働組合を、××の機關として絶對にこれを排斥すること、こういふ主要な點において、第三インタナショナルに對する彼れの特色をもつてきたのであるが、しかし第四インタナショナルと第三インタナショナルとの區別が單なる戰術にだけの區別だと見ることができようか。私はこゝには第三インタナショナルの批評にも、また第四インタナショナルの批評にも入ることを差控えるつも

りであるから、たゞこの第三インタナショナル及び第四インタナショナルそれ自身をして語らしめるに止めたいと思ふ。

ソヴヰエット・ロシアが、その農民政策においても、また外交政策においても、ブルヂョア化したことの事實は何人も之を疑ひはしないであらう。レーニン自身は、昨年のロシア共産黨の大會においても、また昨年の第三インタナショナルの大會の席上においても、彼れの有名な演説のうちで、農民政策を「急激に變更」することの必要を説いてゐるばかりではなしに、この「急激なる變更」が「資本主義への後退」を意味してゐることゝを大膽に率直に述べてゐるのである。無論彼れはその同じ演説のうちで、彼れの國家資本主義が、卽ち無産階級の國家における國家資本主義が、資本國家における國家資本主義と異ることやまた農民との協同の必要なことなぞを力説してはゐるのであるが、しかし如何なる理論とまたは「必要」とにもかゝわらず、勞農ロシアで「資本主義への後退」の存在してゐることはこれを拒むことはできないのである。それに對して左翼派共産主義または第四インタナショナルは如何なる態度をとつてゐるかといふのに、××、勞農ロシアにおける、勞農政府によつての、この資本主義の施用は、……この處分の自由、商業の自由は、資本主義的奴隷制度の施用である。農民の要求を承認してこの自由生産と自由交易とをもたらして、且つ外國への讓歩をしたとともに、勞農政府は、勞農政府卽ち無産者階級の國家としては存在を失つたのである。……ロシアの無産者階級はかくして既に國家の統制者ではなくなつた。勞農政府はその自身の政策への犠牲として倒壊した。……勞農政府は無産者階級に對して敵意的態度をとるのほかなきに至つた。……ロシアの共産黨は勞働者階級の敵對者となつた。何となれば、それは勞農政府をして無産階級の犠牲において、有産階級の利益のための援手となつてゐるからである。：第三インタナショナルはその第三回の會議で彼れ自身を現在の勞農ロシアの政府、卽ち有産階級の國家に、その運命を結びつけた。……從つて第三インタナショナルはその獨立性を失つた。そして彼れは『ロシアの國民のインタナショナル』となるに至つた。ゴルテルに從へば、社會民主黨または第二インタナショナルを「日和見主義」として嘲罵してきた第三インタナショナルも、今やその社會民主主義と何の擇むところもなくなつてしまつたと。(Workers, Dreadnought, Oct. 22. 1921)また曰く、レーニンの小冊子(Der Radikalismus)が共産的革命主義の書物であるといふことは、ベルンシタインの書物が革命のための

書物であると同様であるに過ぎないと。(Offener Brief, s. 67)

七

第四インタナショナルについて批評することは、また第三インタナショナルについて批評することであるから、私は今度生れ出た第四インタナショナルについての批評の一切を避けるが、第三インタナショナルがレーニンの謂ふところの『必要』の前に妥協政策にと入つてゐる時に、第四インタナショナルの成立をもつて單に『小兒病』(Kinderkrankheit)として一笑し去ることができるであらうか。またそれが今日數において少數だといふ理由だけで一笑に附し去ることができるであらうか。この世界大戰中に、ボルシエヴヰキの勢力が殆んど消え去つたもののようであつたのが、一朝にしてあれだけの大事業をなしたとすれば、今日の少數は必ずしも冷笑の理由とはならない。特に第四インタナショナルが成立したことが、第四インタナショナルそのものとして發達するにせよ、またはせないにせよ、それが第三インタナショナルにとつて、理論的にも實際上にも、大なる損害となることはないであらうか。私はたゞこういふ點を一、二指摘するだけに止めて、これの批評は私の『共産主義批評』のうちに包括せしめたいと思ふ。

(註) 第四インタナショナルに對するモスコウの態度はトロツキーが曾つて第三インタナショナルの執行委員會でカーアー・ペー・デーの態度について述べたものによつて知ることができる。(Kommunistische Internationale, No. 17.)

(大正十年一月十三日)

第四インタナショナル

山川均

一

一八六四年にマルクス等の影響の下に起つた萬國勞働者同盟は、普通に第一インタナショナルと呼ばれて居るが、この傳統を繼いで一八八九年以來續いてゐる萬國社會黨大會は、第二インタナショナルとして知られてゐる。然るに一九一四年の世界大戰と共に國際生産階級運動の形勢は急轉し、一九一七年に最

初の無産階級國家が露西亞に實現され、各國社會黨の左翼は第三インタナショナルを組織し、第二インタナショナルは社會主義運動中の改良主義、階級協調主義、愛國主義の右翼を代表するに過ぎないものとなつた。然るに佛蘭西社會黨のロンゲー、獨逸の獨立社會黨、墺のフリッツ、アドラー、英國の獨立社會黨などで代表せられてゐる中央派は、第二インタナショナルから脫退すると同時に、第三インタナショナルにも加盟せず、更に此兩勢力を包容した新しいインタナショナルの組織を主張し、昨年ウインナで最初の國際會議を開催した。第三インタナショナル側では之を『二個半インタナショナル』と呼んで嘲笑を浴びせて居た。

ところが最近に至つて、伯林に『第四インタナショナル』が生れた。

二

獨逸共産主義者の極左派は、一昨年の四月に共産黨を分離して獨逸共産勞働黨を組織した。獨逸共産勞働黨は最初から第三インタナショナルに加盟してゐなかつたが、第三インタナショナル執行委員會へは、單に討議に加はる資格で代表者を送つてゐた。

第三インタナショナルでは、…………………………………………………………………………米國でも舊社會黨から初て共産黨が分離した當時から、共産黨と共産勞働黨の二派に分れて對立して居つたが、×××に基づいて、昨年初めて兩派の合同によつて一國一黨主義を實現した。

ここで第三インタナショナル執行委員會では、獨逸の兩共産黨の合同に色々手を盡した末、昨年の第三回大會の決議により、獨逸共産勞働黨に對して最後の通告を發したのである。此通告は獨逸共産勞働黨は第三インタナショナルの大會の定めた政策に從つて獨逸共産黨と合同するか、さもなくば斷然、第三インタナショナルとの關係を斷つことを求めたものであつた。

此通告を受けた獨逸共産勞働黨では、昨年九月十一日に大會を開いて此問題を討議したが、大會は第三インタナショナルとの關係を斷つことに決して次の如く宣言を發表した。

『本大會は宣言する。露西亞ソヴイエツト政府に對する吾々の態度は、ソヴイエツト政府の現在の政策によつて餘儀なくされたものである。ソヴイエツト政府が…………………も任務を盡してゐる以上は、獨逸共産勞働黨の如き有力な支持を受く可き筈である。けれどもソヴイエツト政府が此任務

に背く、××××××の管理人たる行動を取るに至つた場合には、獨逸共產勞働黨は之に反對すべき義務がある。獨逸共產勞働黨が斯くの如き方針によつて行動することは、同時に露國××××××爲に行動して居る所以であつて、それは露國革命の大××××××め、之によつて得られた經驗の光に照らして×××××はんとするのである。」

大會は左翼共產主義を基礎として新しいインタナショナル、即ち第四インタナショナル創立の必要を主張し、和蘭、ブルガリア、ユーゴスラヴ、及び英國等の類似の團體を糾合する見込みのあることを述べてゐる。此大會の決議に基づいて、昨年十月に伯林に召集せられたのが即ち第四インタナショナルである。

三

第四インタナショナルは直ちに長文の宣言書を發表したが、其主張の第一點は、露西亞ソヴイエット政府は國內の農民に對する讓歩の結果として、×××××××の政府ではなくなつた、そして外國との通商の開始と、外國資本に對する經濟上の利權と讓與によつて、却つて國際資本主義の×××引延ばすものとなつた、然るに第三インタナショナルはソヴイエット政府の政策を支持するものであるから、最早や萬國無產階級×××××××××となることは出來ぬといふことである。また第三インタナショナルは、共產黨と勞働組合との關係については、各國の共產黨は特に共產主義の勞働組合と云つたようなものを組織しないで、出來得る限り既成の組合運動の××××××××××××運動の方針とする。之は共產黨の運動が、勞働者の大衆と離れた小數者の徒黨的運動となることを防ぎ、常に大衆の運動たる性質を失はぬ爲である。現に獨逸では、共產主義の勞働者は、社會民主主義の勞働組合から脫退して別の組合を組織した。獨逸の勞働組合運動は今や八百萬の組合員を擁して居るが、右の政策の結果として、純粹に共產主義を奉ずる小數の革命的勞働組合が出來たことは出來たが、組合運動の大部隊は、其伍列の間から革命分子が取去られたので一層保守的になつて來た。そして今まで組合運動の內部にあつて、其生命となつてゐた共產主義者は、最早や組合運動の大部隊を感化し指導することが出來なくなつた。そこで獨逸の政策は一般に失敗と見做されて居り、第三インタナショナルでは第一回の大會以來、常に組合を×××××するの戰術を取つて居る。そして運動方法の方面では、第四インタナショナルは先づ此方針に反對する。また第三インタナショナルは議會運動を以て共產主義××××××に用ひることを認めるが、第四インタナショナル

は絶對…………………

前述の如く第四インタナショナルは、主として獨逸の共産勞働黨を中心とする運動であるが、同黨は目下三萬六千人の黨員を存して居る。英國では旣に共産黨と別れ、『ウオカース・ドレツドノート』を機關紙として盛んに左翼共産主義を主張して居るパンカースト夫人の一派が之に加盟し、近く英國でも共産黨に對抗して、共産勞働黨を組織するといふことである。

第四インタナショナルは從來の共産黨に對立して共産勞働黨といふ標語を用ひて居つたが、現在のところでは、此運動が實際どれだけの勞働者を代表して居るかは明かでない。理論上の方面では、和蘭の共産主義者ヘルマン・ゴルテン・アレトン・パンネコツク等が代表的の學者である。

四

之に對して各國の共産黨では、どんな態度を取つて居るかといふと、極めて冷靜に傍觀して居るらしい。英國共産黨の機關紙は、『ドレツドノート』の挑戰を輕く受流して斯く云つて居る。

『吾々は第四インタナショナルの計畫に對して意見を求められたが、之が爲に時間と紙面を潰しても何にもならぬから、計畫者自身の說明に委しておきたいと思ふ。一體これは獨逸に於ける『小兒病的左翼』の小黨派なる共産勞働黨の計畫に出でたものであるが、此一派は今日まで常に……の經歷をもち、初めにはラフエンブルグ一派の「國家的ボリセヰズム」乃至は愛國的ボリセヰズムと一體になつてゐたものである。最近第三インタナショナルとの意見の衝突は、議會運動を宣傳に用ひること、既成組合の內部から働らく方針に關するものである……。』

『議會運動その他の如き特定の問題に關したインタナショナルの規定に、悉く一致せぬ場合のあることは勿論である。……然し小問題に一致せぬといふので直ぐ分裂して仕舞へば、インタナショナルはそれきりである。勞働組合問題や議會利用の問題は、其時の形勢如何によつて定まる小問題であつて、其決定は變更することが出來る。……けれども眞の問題はインタナショナルの問題である。吾々は從來のインタナショナルの覆轍を踏んではならぬ。インタナショナルの規律の嚴守は、勝利に欠く可らざるものである。必ず勞働者は善く此必要を知り、インタナショナルの規律を弛廢せしめぬであらう共産勞働黨は第三インタナショナルを攻擊する爲に、反革命側に與みして居る。之は決して彼等の本意とするところではないが、事實はさうなつて居る。そして旣に彼等の機關紙には、『フライハイト』や『ポピュレイル』の如き右翼社

會黨の夫に見るようなソヴイエツト露西亞に對する攻撃や惡口が見え出して居るのである。此徴候だけでも、第四インタナシヨナルの眞性質を勞働階級に知らしめるに充分である。』

『ドレツドノート』などの紙上には、近來盛んに露西亞にケチをつけた記事の現はれて居ることは事實である。殊に露國が資本主義國と通商を開始したことは、露國革命が經濟上の戰線に於いて資本主義に敗北したものである、世界的革命運動に裏切つたものであるとして盛んに非難が浴びせてある。第四インタナシヨナルの運動が將來どう發展して行くか、それは今後の生產階級運動の上に、どれだけの意義を有するものであるかは、まだ充分に斷定するだけの事實が分つて居らぬ。從つて茲には、敢て之を重要視しないと共に、敢て之を輕視することもせぬ。けれども少くとも露國の經濟政策の變更に關した範圍では、之れだけのことを云つても間違ひはない。若しパンカーストの英國の三角同盟がもつと確つかりして居つたなら、若しパンカーストの英國に、露西亞の勞働者だけの事でも出來て居つたなら、ソヴイエツト露西亞は齒ぎしりしながらも資本主義の英國と通商しなければならぬ必要もなかつたらう。そしてパンカースト夫人から革命の精神を敎へて貰ふような皮肉も起らなかつたであらう。

五

そこで第三インタナシヨナル對第四インタナシヨナルの分岐點は、對組合政策や議會運動利用の可否といふ事柄にあるようであるが、實は其根底には、もつと根本的な問題があるのである。即ち世界革命の理論の相異といふことである。そしてこの理論の相異の結果として、現在の國際資本主義の形勢をどう解釋するかゞ違つて來る。第三インタナシヨナルは、一九一八――一九年には、世界の資本主義は一度び危機に臨んでゐた、資本主義が露西亞以外の國々では此難關を切拔けたのは、無產階級の攻勢が足りなかつた×である、然るに一九一九年からは、國際資本主義は一時的に恢復しかけて來た、そして此恢復の結果は、近き將來に、再び前よりも大きな第二の危機に到着する。若し各國の無產階級に充分な行動力さへあれば、國際資本主義は今度の危機を切拔けることは出來ぬと主張する。之に反して第四インタナシヨナルの指導者は、資本主義の一時的の復興を認めない。從つて『…………………』といふことが、共產黨の政策でなければならぬと云ふことになる。

此問題は少くとも獨逸の共產黨の間には、必ずしも今日起つた問題ではない。昨年三月の一揆の問題、更に遡つては共產黨の前身たるスパルタカス團の性質、最初の共產黨の傘下に集まつた諸勢力の性質と其消長とを明らかにしなければ、第三インタナシヨナルに對立して起つた第四インタナシヨナルの性質と、其間の曲折を明かにすることが出來ぬ。

衣裳の進化とその心理

The first purpose of Clothes was not warmth or decency but ornament—Sartor Resartus.

賀川豐彦

表徵としての衣裳

カーライルは、衣裳を人類の裝飾的本能から出たものとして居る。裸體の時から、衣裳の時代に移るまでに、人類は寒温の爲めに、衣裳を纏ふたのでは無くして、藝術の爲めに衣裳を纏ふたのだと彼は考へるのである。羞恥の感念が、第一のアダムに起つて來た時に、人類は衣裳を以つて蔽ふことを覺えたのである。それは寒温の爲めに衣服を着る前に起つた一つの表象であるとカーライルは考へるのである。

生理的にのみ、衣裳の進化を研究せんとするものは、カーライルの意味がわからないであらう。然し、衣裳が何故刻々に進化せねばならぬものであるかを、よく知るものは、カーライルの云ふ意味がよくわかるのである。

たゞ寒温だけの爲めならば、衣裳には別に流行も意匠もいらない筈である。然し衣裳はたゞ寒温以上に――寒温を寧ろ善いことにして、人間の心的態度を表現する一つの工夫として使用せられるのである。

つまり衣裳は一つの言葉として、社會心理に或一つの意味を持つことになるのである。

衣裳と改造

凡てを唯物的に見んとする人々は、衣服が何の爲めに着られて居るかわから無い。紡績會社の存在、絹糸會社の存在はたゞ、唯物的活動して居るやうにしか見え無い。然し社會風習と

云ふやうな、稍く無意識的に活動して居るものでも、その、本質に於ては、全く人類の本能の中に動く、或衝動に導かれて動いて居るものであつて、たゞ物理化學的にのみ動いてゐるものではないのである。

それで、改造運動に於ても、意識的の改造は誠に容易であるけれども、無意識的か、又は半意識的に働いてゐる本能的人間風習を改造することは實に困難である。たとへば產業革命を唱道するものでも、衣服の點に於ては、別に裸體的で、衛生、わけにも行くまいし矢張り在來の如く無意識的風習の中に袴とか羽織とかを着て居らねばならないのである。

そうして、たとひ、裸體で歩くことが出來たとしても、それは少しも衣裳が全々不用になつたと云ふことを意味するのでは無くして、裸體そのものが完全な衣裳として見られる時代が來たと云ふより外無いのであつて、裸體美に就て自覺してくるやうになると、世界も全く變るが、兎に角、世界は今の處そう社會風習の改造まで企て得そうも考へられない。

裸體美の進化と時代

凡ての人間の裸體が美しいものでは無い、或例の人間の平衡（バランス）の取れない肉體はあまり美しいものでは無かつたらう、老人の肉體も美しくは無い。裸體にして美しいのは青年とか處女の肉體に限る。

而も、之を美しく見るまでには、心的準備が要る。

原人は皮膚それ自らが美しいと思へ無かつたから、皮膚の上に色々な刺青をして居る。皮膚それ自身が美しく保たれ、大理石の如くに艶々しく觀賞せられたのは、ギリシャが初めてである。體育の重ぜられ、規則な肉體の使用を禁ずる國土で無ければ肉體は決して美しくは見えない。肉體が美しく見える時代はそれ自身最も進んだ時代である。

今日の日本でも、もしも、裸體美を說くものがありとすれば、それは恐ろしい非美術的な人間である。日本の處女の中でも、バランスのよく取れた美しい皮膚を持つ女は極く僅かしか居ら無い。それは女湯にゆけばよくわかることである。あの醜い世界に毎日置かれてはとても一日として滿足することは出來ない。日本の女は胴が曲がり、肢が短かく、或乙女の或時代を除いては美の對象とはなり得ない。古代希臘に於て、裸體が美であり得たのは優秀なる人種の優秀なる文化があつたからで、今日のギリシャ人に同樣のことを求め得らるゝかと云ふに決してそうでは無い。今日のギリシャ人は、醜惡な人體の持主であつて、決して昔のやうな肉體を持つて居るものは無い。今日裸體にし

て美しいのは和蘭人とか、ノールウェー人とか、英人、米人の如き特種なものであらう。英人でも下層階級のものは駄目である。米人などでも生存競爭の猛烈な地方では、人體が退化してゐる。

力士の肉體などは、動いて居る時には、或曲線を持つて美しいが、固定させると美しくなくなる。それは、重心を下に置いて倒れる憂が無いやうな身體を撰ぶし、その方面に發達せしめるから、固定的に見れば、どうしても、平衡（バランス）が取れて居ら無い。だから、力士を固定的に美しく見える爲めにはそれを補ふ爲めに舊幕時代からの「締」をその儘殘してゐる。

力士の締は營業的に殘つて居るのも一つの理由であらうが、その根本の理由はバランスから美に作用せられた本能的審美作用から來てゐるのである。

肉體美から云へば、ローマ時代の力士（グラディエトア）の方が遙かに肉體美を持つてゐた。それで今日でも力士（グラディエトア）の裸體美を傳へた彫刻が多く殘つて居る。

そんな理由で男子でも、女子でも裸體が美であり、眞であり、美である時代は、一地方の一時代に限られて居るものであつて、裸體の曲線がその作業と一致し、美しく見える時にのみ限られて居る。

今日でも水泳する場合とか、運動する場合とかは、多くの男も女も、みな裸體か、裸體に近い形を取る。即ちその時にのみは裸體で無ければ都合が悪いのみならず、そんな時――即ち運動してゐる時には、人體は美しく見えるものである。古代ギリシヤでも、裸體は多く運動してゐる形であつて、いつでも裸體で居るわけでは無い。プルタークが書いて居るやうに、古代ギリシヤの女性が裸體に近い衣裳をして、群衆の中に立ち現れたのは、それが、運動してゐる時に限られたものである。ユリピデスの劇曲などにでも、その記述がある。運動してゐる裸體に近い女性の肉體は美しいものである。そしてバランスの取れた運動によつて鍛はれた處女の肉體も美しい。それ等が古代ギリシヤのみに於て裸體美が彫刻になつた理由である。即ちいつの時代の如何なる女の肉體でも美を保ち得るわけでは無い。

裸體美觀賞の進化

見る方からみても、裸體美の觀賞に進化がある。たゞ色慾から裸體を美と見るならば、まだ美の眞髓には達しては居ら無い。日本の春畫の如きは裸體を對象として居ら無い。色情藝術から云ふても、裸體は全部的に色情の對象とはならない。喇嘛教の觀喜佛などでも同樣で裸體と色慾とは遊離したものであ

る。肉體は色慾を反つて害することがある。それで色慾の爲めに、衣裳の必要とせられることが多いのである。殊に日本の女の如き場合に於ては、處女時代の或一定時期の外は美は段々減退して行くから、裸體としては決して美の對象とならないことは先にも述べた通りである。色慾から見た肉體は一つの誇張を持つて居る。その誇張なくしては、色慾藝術はあり得ない。それは、日本の浮世繪式の春畫に於て最もその特徴が現れてゐる。それは全く主觀藝術であつて、印象派的に出來て居る。それで多分色情藝術としては世界で最も美しいまた完全に發達したものであらう、然し、之は先にも述べた通りに一種の主觀的色情藝術としてであつて、肉體美全體としてでは無い。日本の中産階級の女の發達しない、四肢の如きはどんなに見ても、美の對象とはならない。眞正の裸體畫と云ふものは如何なる場合に於ても春畫ではない。それは美の根本から違つて居るのである

眞正の裸體畫は、肉體全體の平衡と曲線美の綜合にある。色慾は或種の裸體美を要求するにしても、眞正の裸體美がその對象となり得ないものである。つまり色慾藝術としての裸體畫と、眞正の文化價値のある裸體美と云ふものには、眼のつけどころが違ふのであるから、その誇張せられて居る點も違ふし美として取扱はれて居る點が違ふ。即ちギリシヤの裸體美術などは四肢や胴體や頸だけでそれで充分美になり得てゐるので、日本の女の四肢や胴體を離して見る時に、それが決して美の對象となり得るものではないのである。

即ち羞恥とその感覺が、最初起るのは、この審美的關係から起るのであつて、美を護りたいと云ふ觀念が無ければ羞恥の感覺は起らないのである。それで色情關係ほど、羞恥の感覺は鋭くなつて居るのであつて、文明人に於ては夫婦間ですら羞恥の感覺が極端にまで發達して居る。それは美しくある爲めに、醜い部分を蔽はんとするからである。即ち此點が、色情藝術と眞正の裸體美が分離する點であつて、眞正の裸體美術家は必ず省略によるか、意匠によつて、性慾と關係の無い裸體を表現せしむるものである。古代ギリシヤの或種の裸體畫などでは省略して無い變りにポヂションを變則な形で保たせて居る。つまり眞正の美と云ふものは或種の目的にあるのでは無くして美そのものにあるのだからして、特殊な形に肉體を置く場合には決して肉體美は出てくるものでは無い。それでギリシヤの如く肉體が美の對象となり得るものだと發見してくれたのは、人類文化の上から見て、一大發見であつて、希臘を除く外の今日までの凡ての藝術は肉體を虐待して居るのである。そして最初のアダムも、裸體に美を發見することは出來なかつたらう。それで無花

果の曲線美を借りる必要があつたらうと思はれる。

そしてまた餘程文化の發達した國民で無ければ、肉體の曲線美を好愛することは出來ないのである。肉體の曲線に美があることを發見するのは、特殊な境遇にあるもののみが發見するのであつて、踊るとか、舞ふとかすると之が出てくる。たゞ靜的に之を見るとそれは多くの場合色情藝術に墮落する傾向がある。

元來人體は運動の爲めに出來て居るのであつて、その筋肉は動かす時に美を出すものである。それが靜的に美と見える場合は特殊な場合に限られて居る。それでレツシングの八釜敷云ふたラオコーンの美などでも運動型を取つて居るのである。ギリシヤの美の多くはそれである。ところが女性が自由に裸體に近い身體で運動をし得た時代と云ふのは極く惠まれた時代の外は無いから、この種類の美が觀賞せられる時代は今日まで、ギリシヤの或時代——それも一二世紀の極く短い時代——の外は無かつたのである。今日の裸體彫刻がギリシヤのそれに劣るのは運動型を捕へ無いからである。そしてロダンの裸體彫刻の美しいのは或る動きがあるからである。或る動きの無い場合に人體は美としては拙いものである。それで衣裳を離れて肉體だけを捨てゝ置く事は美の世界においては實に冒險である。

それで下手な人の彫刻した美人像などは、見て居て氣の毒なものが多くある。つまり人體の筋肉が凡て生きて來た時に、美しさがあるので、それを全部生かすことを忘れた美人の裸體像などは、衣服を着せてやつた方がどれだけ美しいか知れない。私は折々展覽會などを廻はつて、これには着物を着せてやりたいと思つたことが度々あつた。ロダンの彫刻でも、私はニユーヨーク博物館のロダン部に有つた「犧牲」と云ふのであつたが、裸體美人が倒れて居るのが有つたが、あれには衣服が要ると思つた。

つまり、裸體美が、完全なる美として表現せられるのは、裸體それ自身が完全なる衣裳としての表現を取り得る時に限るので、その他の場合は、裸體は美としては遠慮した方が善いのである。

ところが、裸體の美を發見し得るものは人間の中でも、極く少數の彫刻家または畫家に限つて居るので、藝術家のみは、裸體美を表現する資格はあつても、他のものはそれを表現することが出來ない。それで美術館の裸體像が、美しいからと云ふて、凡ての人が裸體で街を歩くことは出來ない。凡ての人が裸體で歩き得るやうになるには、最も完全なる體育と、美に對する觀賞を教育せねばならぬ。この困難と危險性を防ぐ爲めに或

程度の衣裳はどうしても必要となる。それが最初は褌の形で來るか、腰卷の形で來るか、人體の中の美に對して障害となり亦危險な部分を省略する爲めに、衣裳はどうしても必要になるのである。

裸體美から遠ざかる衣裳の形式

裸體が美しいものであるに、なぜ衣裳が必要になるかと云ふことに就て、私は述べた。即ちどんな場合でも運動して居るものなら人體は美の要素を充分に具備し得るもので、然らずして、個定的に之をみる時に人間の身體は或特殊な時代と人種を除いては裸體美を發見することが出來ないのである。それで女性などでも運動から遠ざかると共に、肉體を全部隱さ無ければならないやうになるのである。殊に中世紀に於ては、肉體を罪惡視し、顏面をさへ包むやうになつて了つたから、其の美は全く見ることは出來なくなつたのである。そして近世紀になつて、凡ての人々が再び活動を初めたので、また肉體を露出することが許されるやうになり、舞踊に際してなどは出來るだけ裸體に近い方が美しいものであるとして觀賞されるやうになつたのである。凡ての運動が罪惡視せられ、靜的に、靜的に考へ込んだ、中世思想には人間の身體が美しい衣裳であるなどと云ふ考へは勿論思ひ浮ぶことさへ出來なかつたのである。今日の文明人にでも、まだこのことがわから無いで居るものが多い。つまり人體が休止的になると共に裸體美から遠ざるもので、動態に移ると共に出來るだけ肉體に近い服裝がよく人間にうつるし、また、美しく見えるのである。そしてその最も美しいものはやはり裸體それ自身であるのだ。

然し、先にも云ふた通り人間はいつでも動いて居るので無いから、そして人間の身體ほど、境遇と遺傳によつて變質するものは無いから、動的美——即ち筋肉美の體現されたものとして、いつも裸體で居るわけには行か無い。それで衣裳が色々な形で進化して行くのである。

古代希臘などでは、今日我國の偶像などに傳はつて居るやうに、襞の對比と曲線美によつて運動の曲線と相一致せしめ、美しく見せやうとしたものである。

實際、山岳の美などの美いのも全くこの襞の關係によるのであつて、襞の無い世界は悲しい世界である。而も、古代ギリシヤの襞は、實に美しいものであつて、今日の我等が到底想像もつか無い美を體現させたものである。それは多く、鎖の垂れた時に現れる曲線を利用したり、また簡單な對比率を用ゐて居る。之が人體の運動する度毎に美しい曲線を畫くので、人體に

取つては、最も豊かな感じを與へるものである。

襞を利用し無い時には縞とか模様とかが利用せられるのであるが、日本の友染模様などは靜的に見れば、美しいものであるが、あの模樣を着て舞つても少しも、美しくない。その理由は、友染模様と云ふものが靜的に完成した一つの畫であつて、座つた舞妓の衣裳としては、美しいが主體的の舞踊に際してはその儘で踊ると、色と色が混色してわけのわからぬものとなる。踊る時には寧ろ襞つきのものが遙かに美しいのである。それで運動の激しい女學生の袴にしても、西洋人の女洋服にしても必ず襞が利用せられて居る。山脈の襞の外に地殻を飾る方法が無い如く、運動型の美を體現するに、衣の襞の外に美しいものは無いのである。

襞から離れて模樣となると、運動型は、固定型に移つた證據である。然しれは襞の美を說く前に衣服全體としての形を論ずる必要がある。


古代ローマのトガ

衣服の型の二様式

衣服の全體の型は大別して二つに分類することが出來る。即ち、分解的衣服と、綜合的衣服である。分解的なものは運動型であつて、綜合的のものは靜止型である。分解的であるものは、四肢に合はす爲めに、自ら分解的に着用せねばならないから、そうなつて居るので、綜合性のものは、少しはゆとりが有つても靜止して居る場合に邪魔にならぬのと、また靜止して居る場合に、威力と美とを見せる爲めに綜合的であり、幅廣くみせるやうに出來て居るのである。印度及古代ギリシヤ、古代羅馬の袈裟

(Toga,peplum) の如きが全くそれである。

運動型の分解的なものが固定的になつたもの――たとへば日本の直衣の如きでも同じ方向に近づくものである。即ち出來るだけ幅を廣くとり、襞を利用して美しく調和させるやうにして、威力と美とを調和させるやうにして居る。

日本の「キモノ」は一般的に云へば綜合的であるが、之は昔からそうであるのでは無くして徳川時代の靜的時代にかうなつたのである。運動の激しかつた奈良朝前後は勿論のこと、藤原時代ですら分解的運動型のものが固定的に直されたものを用ゐて居たのである。それが、文化が固定的になると共に綜合的のものが用ゐられるやうになつた。今日でも勞働者はまだ分解的であるそして日本獨特のキモノが出來上つたのである。

「キモノ」の成立する心理

今日「キモノ」を用ゐて居るのは蒙古人種の間に多い。然し日本の婦人が着て居るやうな「キモノ」は徳川文化が無ければ發達しなかつたであらうと思はれる。それは形の上に於て劃一的なものであつて、全く原始的なものである。勿論、それは關西と關東とによつて、多少形の上に異つた點もあり、時代によつて、多少變形した處もある。然し大體に於て運動をしない時代の感化を受けて、袖と裾に於て四肢を全く縛つて了つて居る。而もそれが、運動することによつて美を發揮しない四角な曲線で包まれて居る。之などは徳川時代の筋肉抑止時代の露骨な表示であつて、靜座せしめた時代の遺物である。女は藤原時代から既に長い袖の「キモノ」を着るやうになつて居たが徳川時代のやうに、全く運動を休止せしめるやうな太鼓帶で、女を縛ることはしなかつた。長い袖は運動をしなくて居れると云ふ表象であると共に、大きた帶と對比せしめる爲めにはなくてならぬものであるのだ。殊に日本の「キモノ」は襞の無い、綜合的のものであるから、袖に於てでも或種の自然的襞でも出現せしめなければ美しさは出て來ないのである。それで振袖式のものを造つて、對比的のものにしたのである。西洋でも、「ガウン」のやうた綜合的のものでは袖が馬鹿に大きいものである。つまり中世紀から出て來た靜止的のものであるから袖が大きく長くても善いわけであるのだ。

日本に於ける帶の發達も全く同一原理から出て來て居るのであつて、動的に見るときに帶ほど馬鹿な衣裳は無い。然し靜的に見れば帶は身體の中央であつて、視線の眞中になるから模樣入りの美しいものが必要とな　てくるのである。

それで、座らせてみると洋服を着た花嫁と和裝をした花嫁と

どちらが美しいかと云へば、和裝の方が遙かに美しいことがある。然し動かす段になると、和裝はとても駄目である。第一踊りにさへ適し無い。日本式の舞踊學校では、みな前垂を用ゐて居るが、前垂でも無ければ、日本の着物をきて踊ることは實に醜(みにく)しいことである。

日本の「キモノ」を考へる時に、日本の結髮史を同時に考へることを忘れてはならない。日本の結髮は「キモノ」に順應して進化して來たものである。髮の幅の廣くなつたのは袖と對比せしめんが爲めである。支那人は上衣と髮との間に頸だけが、あまりに長く出て恰好が惡いから耳輪で之を補ふて居る。西洋の婦人が矢張り同じことをして居る。ハイカラ髷を結ふなどは、日本婦人も先には耳輪を用ゆるやうになるかも知れぬ。然し振袖に耳輪はうつら無い。二つともブラ／＼して居るからである。日本に耳輪の發達しなかつたのは全くこの爲めである。その變り日本婦人は「ボンネット」を戴く變りに生髮(なまがみ)製のボンネットを戴くやうになつたのである。それで振袖をきる時にはどうしても島田でなければ似合は無い。

勿論最近になつて、振袖とハイカラ髷とがよく調和するやうになつて來たが、それには別に原因がある。

「キモノ」筋肉美の關係

キモノを着て居るものは走つてはならない。走る爲めに着物は出來て居らない。キモノを着て體操してはならない。キモノは體操の爲めには出來て居らない。キモノは靜止美の爲めに出來て居るのである。それでキモノを着て居る時には髷い恰好ミでも結えねばならない筈であるのだ。その爲めに男子でさえ、徳川時代には髷を結ふて衣服との對比を保たせたものである。それが、近頃では帽子で對比を取つて居るが、女子はハイカラ髷が、袴の流行と共に對比的に移入せられた爲めに、髷が複雜になつて來た。袴には島田はどうしてもうつらない。袴を穿くとハイカラの方が美く見える。それは袴が比較的運動型に近いからである。

ところが女學生でも最初は髷と袴の間に調和を發見することが困難であつたのだ。それが近頃のやうに運動が盛んになると共に、女子の筋肉の運動が一種の美しさを加へて來て、西洋から輸入して來た運動型のハイカラ髷と完全に調和するやうになつて來たのである。そして、今迄はキモノを着て居ても、キモノの方に引かれて居たものが、筋肉の動かしかたが西洋的になつて來た爲めに、輸入した髷と、キモノで或る程度まで調和し

得るやうになつたのである。

日本のキモノには着て居る時の一定の筋の動かしかたの有つたものが、——たとへば內足にあるけとか（裾がはぐれ無い爲めに）手を前に合せて膝の上に置けとか（腕が露出しない爲め）あぐらをかいてはならぬとか——一々面倒なポヂションが、キモノの美を發揮する爲めに要求せられたものが、今日では、女子が筋肉の活動美で、キモノを或程度まで自ら生かす工夫を覺えたのである。

然し之は室內に於てであつて、室外に出ると矢張りキモノは活動の爲めに出來たものでは無いことがよく證明される。私は上海に行つて、日本婦人が振袖を着て自動車に乘る處を見て氣の毒に思ふた。日本婦人とは一緒に公園の散步は勿論のこと、山登り、野遊びはとても出來ない。それはそのキモノが運動型に出來て居らないからである。然し運動をよして室內に歸ると、日本のキモノは豐かで心持ちが善い。この點がキモノを西洋人が寢卷に使用する理由である。寢卷としては日本の、キモノ程美しいものは無い。一日忙しく屋外に勞働する人々が、洋服を脫ぎ捨てゝ日本のキモノを着ると畔つた心持ちになるのも全くこのあたりの審美的直覺から來るのである。それで我等は、キモノの進化を研究すると共にその時代の運動の形式を度外視することは出來ない。たとへば元祿のキモノは袖に於て輕快であり美しい曲線を持つて居るが、あれはたしかに、女が多少なりとも動いて居たしるしであつて、そう取るより外に見方は無い。

天平時代のキモノは分解的であつて、日本婦人が嘗て着たものの中では最も運動的なそして優美なものである。それは天平時代の婦人が佛敎傳來前後に男子と同樣に動いてゐた證據である。

つまりキモノを研究する時に、たゞキモノそのものを研究しても文化的價値は無いので、その時代の女性なり男性なりの、筋の動かしやうを充分頭に入れて考へなければ微細な點に於て觀賞する場合誤謬に陷るのである。

之は洋服を着た日本人が、筋肉を充分曲線的に動かさ無い爲めに、淋しく貧弱に見えるのも相對照してみるとよくわかる。つまり、筋肉の動かし樣を度外視しては、どんなキモノも考へることは出來ないのである。

洋服と筋肉美の關係

洋服は元來が運動的に出來た分解的のものである。西洋でも凡てが運動型のものばかりでは無いが、十六世紀頃からは著し

運動型のものが發達して、今日のやうなものとなつた。洋服は四肢の運動を度外視して考へる時に如何にも不細工なものであつて、美しいものであると考へることは出來ない。十六世紀頃に流行し出した、ホーズ Hose は今日のものに比較して更に美しいものである。フキリップ二世からナポレオン時代まで、着て居た、ホーズ式の洋服は日本にも多少感化を與へて戰國時代の服裝に顯れて居る。

然し今日の洋服は全く裝飾と云ふよりか、實用向きだと云ふところにその價値があるのである。機械文明の今日にはこの圓筒形の洋服が反つて輪廓から云ふて合つて居るのかも知れ無い。何しろ、今日我等の着て居る洋服は世界的の性質を以つて居て、全世界の各種民族が、之を採用して居るのである、

數年前米國人の或人々は希臘に於てだけでも、古代のギリシャのペプラム式 Peplum 袈裟を回復したいと思つて、それを着てアゼンスの街を歩いたが誰れもその眞似をしなかつたと云ふ

之は何處にその原因があるかと云ふに、全く筋肉活動の關係によるのである。今日は昔のやうな閑な時代と違ふから一丈八尺もあるやうな大幅の袈裟を着て歩くことの出來ない時代である。電車にも乘らねばならぬ、飛行機にも乘らねばならぬ、その爲めにどうしても圓筒形ではあるけれども洋服を便利とするのである。そして洋服でも活動して居るときには相當に美しさを持つて居るのである。

然し活動式の洋服だけでは變も無ければ靜止的美も出き無いので、靜的美の要求せられた時には幅のある「ガウン」をその上につけたり、中世紀式マントルをつけてみたり、ホーズをつけたりするのである。

以上私は極く簡單に靜止型の衣裳と運動型の衣裳の形の變化を考へたが、凡ての衣裳の進化を支配する心理的法則は、以上私が述べたことから判斷が出來るのである。

即ち筋肉美が尊まれ、運動の盛んな時には運動型の洋服が採用せられ、固定的、形式美の重ぜられる時には筋肉と全く關係の無い衣裳が重ぜられるのである。その最も極端な一例が、クリノライン Crinoline の消長である。

「クリノライン」の消長と固定美

クリノラインは、極端に裾をふくらませた女の衣服の型であつて、なんでも、西班牙の王女の不具を隱さんが爲めに考へたものが流行し出したのだと云ふが、必しもそれだけの理由で流行したものではない。クリノラインは單調を破りローマンチックな感じを人に與へ而も植物性の優美を與へるもので又孔雀の

尾を思ひ出さしめるのである。それは華やかな花のやうな感じを與へるものである英國ではエリサベス女王の時に流行して、チャールス一世の時に衰へ女王アンの時に再び流行しジョーヂ一世及ジョーヂ二世の時には極端に流行しジョーヂ三世の時また衰へ一七四〇年—一七四五年頃また盛んになり數十年その流行がつゞき後また衰へ、一八五〇年代米國の奴隷解放時代にまた流行して居たが、その後衰へて再び歸つて來ない。

この様な形式的な衣裳が何故流行したかと云ふに、それは靜止的であつたからである之は德川時代の長袴と同一であつて、形式的には一種の美しさを持つて居る爲めに極端なる變則的進化を遂げたのである。之を今日戰爭前に流行した、極端にまで袴の裾を踏めて、紐育の如きその爲めに電車の昇降段を別に一つ數を増加する必要があつたと云ふの



クリノラインを着たるゼームス王妃アンとホーズ袴をつけたるゼームス王

と比較して、大きな差であるが、之を見ても靜止型の衣裳がどんな形を取るものであるかゞほゞ想像がつくと思ふのである。

衣裳の進化と思想の推移

衣裳は完全に藝術である。それは人間の活動を度外視して考へることの出來ない表現藝術である。それで古典的の時代には古典的の服裝が用ゐられ、ローマンチックの時代にはローマンチックの服裝が着用せられ、自然主義的の時代には、自然主義的な服裝が用ゐられる。

然らば古典時代にはどんな服裝が着用せらるかと云へば、形から云へば運動型を離れた襞の多い幅のひろいもの、その曲線は多く無限曲線の性質を帶びたもので、いつみても善いものが用ゐられるのであつて、何かの儀式にはよくこの形が歸つてくる。

ローマンチックの時代には、鈍角、鋭角楕圓形、特別に奇異なファンタジチックな形式が尊ばれ、古典的の襞や幅よりか、輪廓の著しく特徴のあるものが愛せられるのである。青年時代には多くこの種類の服裝がしたいものである。

自然主義時代の服裝は直線や直角や、圓筒形や、屈線で徴はれて居るもので、今日の洋服がそのモデルである。今日の洋服は襟のところはM形の屈線で現はされ、手も足も圓筒形である。そこには、古典的の襞も無ければ、ローマンチックな鋭角も發見出來ない。

之等の衣裳の輪廓は建築と非常な關係がある。直衣を着て石造の事務室に這入つても似合はぬ如く、ゴシックの教會堂には今日の洋服は誠に不似合である。それで英國々教會や、ギリシア正教會や、ローマ教會では建築――ローマンチックな建築と調和を取る爲めに或種類の角と曲線を持つ法衣を着て居る。之は已むを得ないことである。この法衣をせめるプロテスタントがあるならば、それは寧ろ彼が不明なのだ。

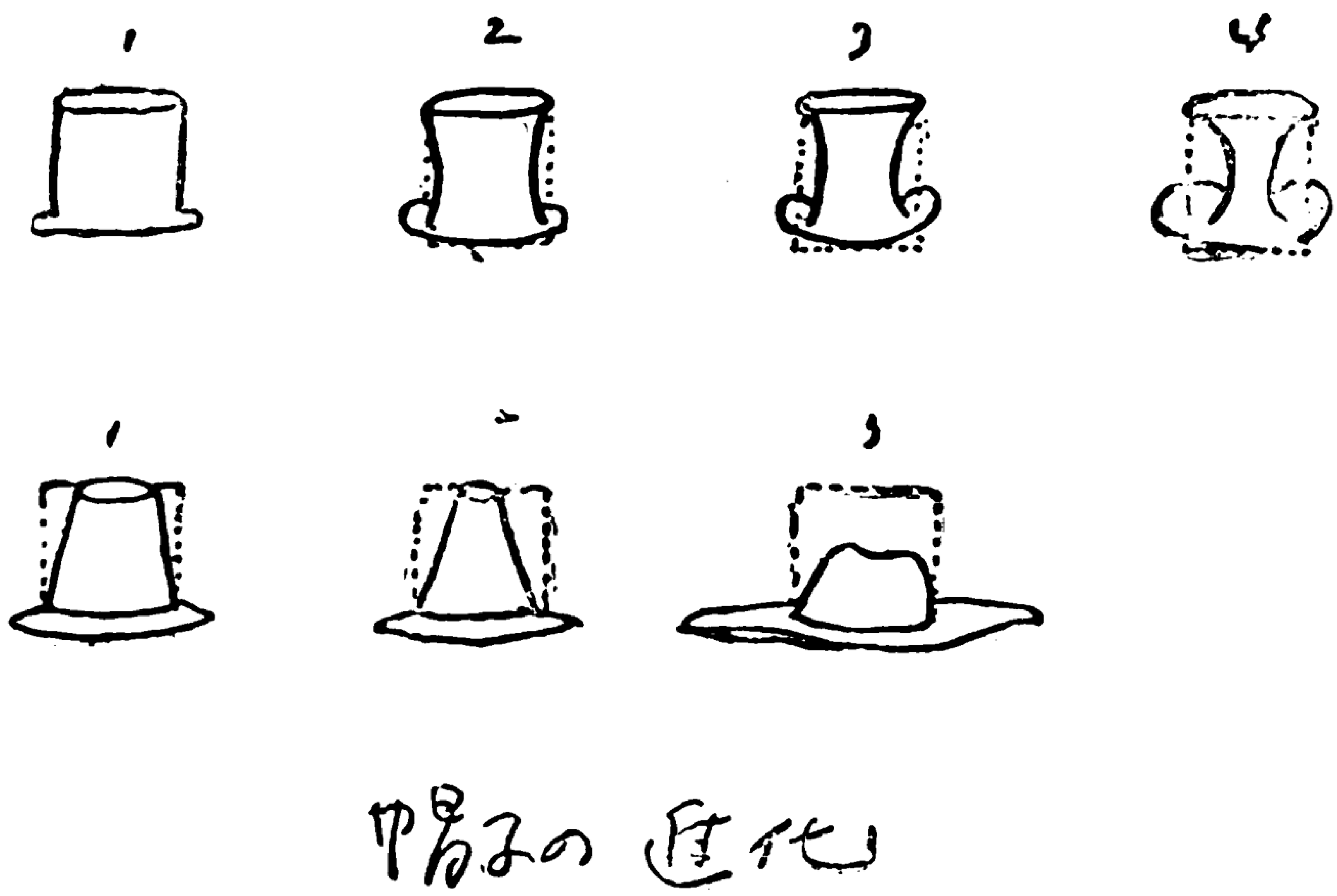
そこで、かう云ふことが云へる、思想の推移に從ひ、衣裳は永遠に或表徴を取つて變つてゆくものであると、之は模様に就ても同様のことが云へる。

この邊の消息は帽子の進化をみても善く理解することが出來る。今日のシルク・ハットは、フランシス・ベーコンなどが挿圖の甲(1)のやうなものを蒙つて居たのである。それがローマンチックな時代では色々な形に變化させられ、極端なものは甲(4)にまで變化させて居る。乙の(2)はジョン・バンヤンなどが蒙つた帽子で矢張り一種のローマンチシズムの時代に蒙つたものである。今日では平常はこんな帽子を蒙らなくてもローマンチック

な儀式になると之が復歸してくるのである。つまり形式により表徴が或種の思想を傳へる爲めに歸つてくるのである。

衣服の模樣と文化思想の關係

古典的な模樣は、その時代の、活動と相一致する無限曲線を多く利用したもので、動く時にも美が猶殘つて居る。それがローマンチツクになると、勝手な模樣が現れると共に、非常に矛盾した模樣—即ちその衣服の活動の方向や關係を全く無限して居るものがついて居る。自然主義の時代にはその模樣は現實的となり無限曲線が少なく、それ自身が一個の完全した畫のやうな傾きがある。それで自然主義のものは畫としては働かなくても、或活動に移るとそれはいやなものになる。之は龍村氏などが研究して居られる、織寶會の綾や錦の模樣を一瞥して私の感じたことである。模樣の曲線を見れば、大抵その織物が何時代に出來たかがわかるのである。運動的の時代であれば、運動性の曲線美を有つた模樣が多くついて居り　固定的の時代には畫として定つたもの模樣がついて居る。



衣裳と流行及個性の心理

衣裳は凡てこんな關係で出來上つて居るものであるから、この心理をよく理解するものは來る可き時代の流行をそひあてることが出來る。即ち、古典趣味が流行すると思へば古典の型を拾つて行けば善いので、ローマンチシズムが流行すると思へば、ローマンチツクな型を拾へば善いのである。

之は一つの個性を見る場合に於ても、衣裳によつて多少人を知ることが出來る。衣裳はその人の心地をよく表徴して居るものであつて、ローマンチツクな人は特異な服裝をし、古典的な人は古典的な服裝をして居ることは誰れでも知つて居ることである。

藝術より見たる禮儀と衣裳の關係

そこで、禮儀と衣裳の關係が起る。禮儀と云ふものは、道徳の審美的方面である。羞耻の感覺が美から出てくることを私は先に述べたが、「耻かしくもない」と云ふのは美に關する道徳から出てくるのである。

「之を出品すると耻かしい」とか、「大勢の前に出ると耻かしい」とか云ふ心理は意志が美的に働かねばならぬことを豫想して居るからである。禮儀とはつまり、大勢の眼の前に出ても耻しくない藝術的行動を云ふので、その爲めにはお茶や、舞や作法を習得して、美的行動が人の前に出來るやうにするのである。近代世活には凡ての平面的の美を破壞して了つたから、禮儀も全部破壞されたが、文明が少し落ち付いてくると、また美的行動が道徳の一部に加へられ、必ずやまた禮儀が八釜敷云はれる時代が來るであらう。その禮儀の八釜敷云はれる時代に感情、思想の行動を表徴する衣服のことはまた八釜敷云はれるのである。

今日でも結婚とか、葬式とか云へばいつも儀式が八釜敷云はれ、衣裳の問題になるのは、結婚の場合には雌雄淘汰の關係もあるが、思想の行動としての表徴が大に加はつて居る。

そこで禮式に用ゐられる服裝はどんなものが用ゐられるかといふに、禮式の服裝を支配するに三つの大きな社會心理的法則がある。

一、表徴としての衣裳の意匠
二、權力者階級の模倣
三、最高文化の追從

表徴としての衣裳の意匠は、喪に際しては沈んだ表情を取り、結婚に際しては明るい目出度い表徴をとると云ふことである。之は色彩に於ても輪廓に於ても同樣である。

權力階級の模倣と云ふのは、衣裳に限らず、凡ての儀式は王者の眞似をするものであつて、葬式の如きは今日輿と稱するものは昔王者が乘つて居たものである。それが靈魂を送る時には、王者の輿を紙で模倣して、野邊送りに使用するのである。今日支那で結婚の時に使用する輿も其の王者の輿の型である。そしてお葬式の時の行列は大名行列を眞似たり、同樣の行列の眞似をするのである。之は如何なる時代を通じても同一の現象を發見するのであつて、王者が審美的の型を作る爲めに、民衆がそれを模倣するのでもあるが、民衆は何時の間にやら王者の眞似を死ぬ時とか、結婚する時とかにするのである。

更に王者の眞似をしても、文明の低い時の眞似をしなくて、文明の高い方の眞似をするのである。卽ち支那では禮典には漢や宋の行列が復活してくるのである。そして僧侶は文化の最高時代の服裝を永遠に保存するものである。それで禮式事がある

と何時でも、過去にあつた最高文化の時代の形式が現れてくる。御大典には過去の最高文化時代の禮典がそのまゝに復活した。これは今日のやうな自然主義的な衣裳では御大典氣分にならないからである。そこで王朝時代の戴冠式が有職故實によつてその儘復活せられるのである。

それで衣裳の改造を唱道するものは此邊の消息を知らなければ決して成功するものではない。

社會思想の變革と衣裳の急激なる進化

衣裳が社會生活と社會思想の變化によつて、推移するものであることは以上の記述によつて略推定が附いたと思ふが、從つて社會思潮の急激なる變化は、衣裳の上にも激變を齎らすことをいつも知らねばならぬ。太古に日本人が簡單なチユニツク樣のものを着て居たものが、佛教の傳來と共に袈裟を用ゐ、唐の文化の渡來と共に唐式の服裝を模倣し、豐臣時代にキリスタン文化の渡來と共に、歐洲文化の影響を受け、明治になつては、洋服を着出したことは實に著しき事實である。

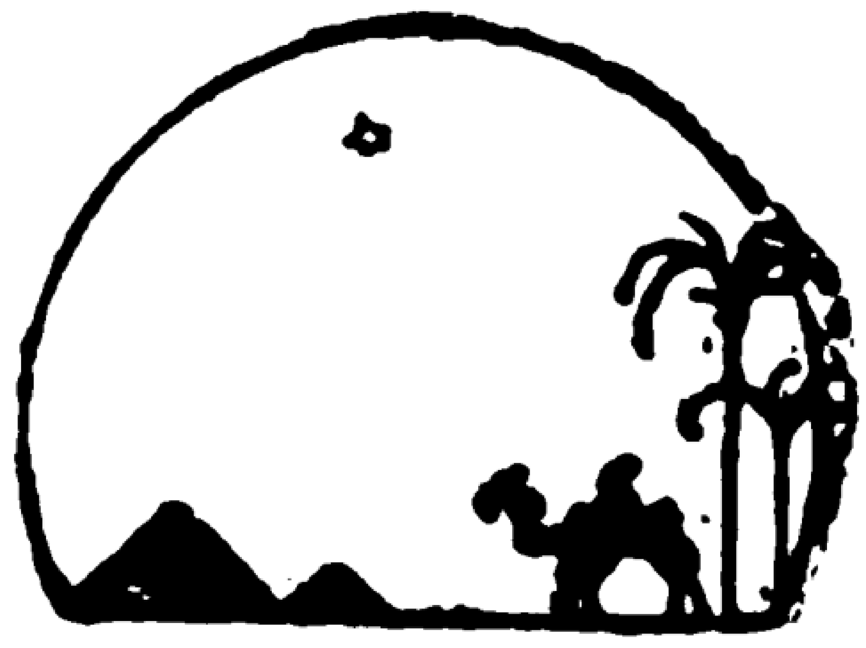
西洋でも同樣であつて、古代ローマの時代には、トガ Toga とチユニツク Tunic はゴール地方でもゴス、ヴスゴス、ヴンダル、みな一樣に採用してゐた、それがシヤレマンの後には激變し、英國などでは、ウイリアム製服工が這入つてから、大變化を受け、チヤルス二世頃にまた大變化があつたのである。產業革命と共に洋服が出現して今日に到つて居るが、社會生活と社會思想の變革がその儘影響して居るのである。

革命と共に服裝は急變する。支那の婦人は革命と共に男子のやうな服裝をするやうになつた。今日のロシヤや獨逸では服裝の上に一大革命を持ち來らすであらうと私は思ふて居る。

日本に於ても最近著しく女子の間に洋服を着るものが增加して來たが、之は日本人の生活及思想が、著しく變化して來た證據であつて、日本は之から急激に服裝上の革命を見るであらうと思ふ。

服裝の革命は不自然な宣傳ではどうすることも出來ない。それは生活內容に伴はれて審美的內容が筋肉活動の形式的變化と共に來るのであつて、無暗に歐化を唱道しても、それはなにもならぬ。それかと云ふて、日本趣味をのみ鼓吹しても役に立たぬ。その時代の生活樣式が歐化するならば、洋服は遂に日本服を征服するであらう。然し日本婦人がどれだけ洋服を消化し得るかゞ疑問である。歐洲に於ても國民性に從つて女子の服裝などは少しづゝ國民性を代表する程度に於て線と輪廓を異にして居る。我國特有な線と輪廓が、歐洲文化と合體して、どんな風に變つて行くか、それは文明批評家の知りたいところである。

之を要するに、衣裳は、人間の生活意志の表現であると斷定することは、その根本に於て間違つた考へでは無い。 ——完



雜記（三）

エッキス

エミール・ブートルーの偶然の哲學。
フランスの大學とアメリカの學者。
フランスの理學。

エミール・ブートルーの偶然の哲學

去十一月フランスの哲學者エミール、ブートルーが七十六歳を以て逝いたといふことである。氏は一八七四年に「自然法の偶然性に就て」といふドクトル論文をソルボンヌに提出し、其論文の效果に依つて、爾來「偶然性の哲學」Philosophie de la contingence なるものが彼れの名に結びつき哲學に於ける一の勢力となつたのである。偶然性といふは必然性といふことの反語である。自然法は必然な第一原理でなく、寧ろ他のレアリテの結果である、人の活らきや自由がレアリテであるといふ。そこで彼はプラグマテイストの中に數へられてゐる。アリストテレスは、經驗は相對的である、經驗的法則には除外例を免かれない、普遍的で絕對的なものは唯だ思考に依てのみ得られると云つた。デカルトは、經驗が數學的に表現せられることを認め、數學の必然性に依り經驗の必然性を誘ひ、近代のデターミニズムを導いた。この決定論が、デカルトに於ては、より多く思考に傾いて導かれたのが、實驗的研究法に同樣の位置を與へるのが、自然科學に於けるニユートンの哲學である。ブートルーに從へば(H. S. P. P. 253)、カントは、このニユートンの

哲學が自然のアプリオリの知識の實驗的證明に在るのを、その可能性を説明しやうとしたのであり、或意味に於て、カントの目的は形而上學のニユートンとなるに在つたと云へるといふ。そして、人の知るやうに、カントは經驗のアプリオリの要素を摘出して之を成就したと云はれるのである。又其の基礎には、數學がアプリオリの綜合判斷であるといふことが含まれてゐた。ブートルーが自然法を偶然であるとするのは、先づ數學がアプリオリで必然であるか、自然法がいかに數學的に殘りなく表はされるかの考究に基いてゐた。數學が純粹に論理のみに依つて組立て得られるかと云ふに、數學的演繹の出發の始となる、公理とか公準とか定義とかいふものに隨意性があり偶然性があり、其爲めに論理の必然性のみを以て全般の必然性を成立たせ得ない。力學に物理學に生物學に、具體的な科學に於て、より多く數學的なものと然らざるものとがあるが、何れも本來必然的でない數學を以てゞも、なほ僅に à peu près に表はし得るに過ぎないことを知る。夫れで、自然法は、吾人が事物を理解しやうとし assimiler les choses à notre intelligence 又意志でそれを理づけやうとするとき用ひる方法の總和であると云得るのみである。即ちそこに必然がなく、偶然があり自由があるといふ。科學は建設せず單に方法であるとし、知識が實在を模するとするに反するのである。意志や活らきや感情に實在を求めるのである。

「偶然」と云ふことは又「連續」に反して偶發的な變化をも豫想する。そして實在たるライフが、デスティニィの桎梏の下に死滅せず、生動し向上することを云ふのである。かういふブートルーの「偶然性の哲學」はポアンカレーが數學や自然法を convention とすると同じ途を行くものである。マツハもジエームスもデユーエムもルロアも同樣に、アンテイ、インテレクチユアルとして、プラグマテイツクとして數へられるは、是等の自然法の見方に於ける一致に於てゞある。

「偶然」と云ひ「偶發的變化」と云ふ所から、科學の革命などいふ今日の一流行語も容易に受入れられる。「科學の破産」などいふ言葉もブートルーの「宗教と科學」の中にもある。然し「偶然」といふことはプロバリテの問題であるから、革命や破産

の公算が全有の一と皆無の零との間に在り得ると云ふことを示しただけである。同時に一と零との間に大なる逕庭のあることを辨別しなければならないのである。問題は眞理の絶對性に置換へるに相對性を以つてしたと云ふことに在る。哲學史的にブートルーの「偶然性」を考究するには少くもカントの批評主義をフランスへ導いた Ren uvier ブートルーの師であつた Lachelier のことなどを記さなければならないであらう。然しそれらはこゝに記すには余りデヽイルである。

フランスの大學とアメリカの學者

エミール・ブートルーの子で、アンリ・ポアンカレーの甥に當る、ピエール・ブートルーは有名な數學者である。曾て米國プリンストンの教授であつたが、今は巴里コレヂ・ド・フランスの一般科學史の教授である。この十一月のアメリカの Scientific Monthly に、氏の「フランスの理學」と云ふ一文があつた(雜誌の表紙には其筆者をエミール……としてあつたが)。フランスの學風の特色を述べたもので、多くの感動を與へ得るものと思はれた。其の終りに、茲にはフランス學風の長所短所を特に色彩を強く表はしたのであるが、夫は米佛の間に教授の交換や學生の遊學が多く語られる爲である。若しこゝに記したやうな型の學術が嗜好に適するならば、フランスへ行け、若し然らざれば、本國に留まるに若くはないと結んである。是等の文字によりても知られるが、この頃アメリカがフランスの學風を輸入しようとしてゐる有様が著るしく目につく。

Science and Learning in France といふ美しい書物が、フランスの大學に入學するアメリカの學生の案内として The Society (for american fellowships) in French Universitiesから一九一七年に出版された。多數の知名の米國の學者の筆になつたもので、種々の專門科學に關し、佛國各大學の特長を記し、有名な教授の肖像など添へてある。アメリカの大學は最初に範をイギリスに取つた。次にジョンス・ホプキンスのできた頃から獨逸の學風が導き入れられた、學生は自己の研究により何等か學界に貢獻せねばならぬことを覺らしめられ、アメリカの學術

は大に進歩した。然し一國の學風にのみ泥むのも弊の生ずる所以であり、傳統あるフランスの學風の長所を學ばうとする時が來た。昔、フンボルトが巴里を憧憬して、伯林を「知あつて文のない沙漠」と貶すみ、ゲーテが、獨逸には學者が各地に散在して個人的交際もなく viva voce の思想の交換もなきに、佛國に於ては、學者が巴里の一市に集り、日夕相共に語り、問題を相助けて料理してゐる狀態のあることを羨んでゐたことなどを擧げ、アメリカがフランスのカルチュアーに就て、フランスの思想の明快と精細フランスの生活のチャームなどフランス文化の特有性を取入れなければならないことを說いてゐる。

是等の意味で近年アメリカから多くの學者が佛國の大學教育を視察に行つたやうである。去年頃のScientific Monthlyに米國クラーク大學の物理學の教授ウエブスター氏のさういふ視察記を讀んだことを記憶する。其中には巴里のエコール・ポリテクニクを激賞して、米國の大學を大にけなしてあつた。クラーク大學などは先づ弊の少ない方であると斷つてあつたが、近傍の大きい米國の大學で（ハーヴードの事らしい。）教授會はベースボールのテイームに補助金をどうするかを評議するので半日潰してゐると嘲けり、ベースボールの外に學生一般が興味を集めない樣な大學は閉ぢても惜しくないと云ひ、エコール・ポリテクニクの入學の困難の事から、佛人がそこの學生たることを誇としてゐると語り、アメリカの何處に、單にそこの學生たるを以て誇とし得る樣な學校があるかと憤つてゐた。又近來、形式的陶冶論の不人望、能力のトランスファーの否定といふ教育心理學者の主張のために、アメリカの初等、中等の教育に於て、從來、推理の能力を錬ると稱した數學教育を輕んずるに至つた風のあるのを、フランスの强制的數學教育の效果に比して危ぶんだりしてゐた。

フランスの文化を高調した多くのパンフレットが戰爭の間に佛國から出版されたものも少くなかつた。フランス學術の綜覽としては、桑港博覽會に出品として編纂された La Science française 1915 なる二冊の書物も便宜である。哲學の部をベルグソンが書き、數學はアツペル、總序をルシヤン、ポアンカレが書きなどしてゐる。夫等を交へながら前記のピエール・ブート

ルーの記事を基としてフランスの理學に就て次に記さう。

フランスの理學

エミール・ブートルーが自然科學の組織を Contingent とし人爲に依るとするに從へば、さういふ組織や方法に、ナショナルな又は個人的な色彩を帶びることがある理由も容易に了解せられるであらう。ピエール・ブートルーはさういふ意味で、フランスで培かはれた理學に、フランス人の導いた理學に特殊の味はひのあることを示してゐる。

フランスの理學の傳統は十七世紀の初半期に起つてゐる。パリの大學にはもつと古い歷史があり、それは實に西歐の最初の大學であつた。ギリシャの學術がアラビヤ譯を通して歐洲に傳はつたとき、却て伊太利よりも早くトレミーのアルマジエストなども、パリでは學ばれてゐたことなどもあつた。ギリシャの學藝がアラビヤ譯に依らずギリシャのオリジナルに就て學ぶに及んで更に進步したが、やがてギリシャの模倣にのみ依つてゐたことの反動が生じ、新しい道が試みられなければならないことが明かになつた時が來た。そのとき、ナショナルな理想が現はれて來たといふ。それまで中世の理學は却て大にインターナショナルなものであつたと、ピエールは記してゐる。アラビヤ又はギリシャ中心の模倣といふことに於て均齊であつたといふ意味であらう。フランスでかやうな自覺的なナショナルの氣分の湧いた時は、フランスの文學、藝術、一般のカルチユアーが最高點に達した時であり、コルネイユ、モリエルの時で、又デカルト、フエルマーの時であり、パスカルが物理學者として數學者として、同時に思想家として著作者として有名であつたのも其時であつた。中でもデカルトが時代の先頭に立つてゐたのは、其影響が廣かつたばかりでなく、彼れが將來の思想をラヂカルに變へしめた、新しい型の理學の最も明かな、最も預言的なヴイジョンを持つてゐた人であつたからである。

デカルトを詳しく說くことがフランスの理學の特長を最も多く示すことになるやうである。項を改めて次回に夫を記さう。

文藝管見（一）

里見弴

第一章　自分自身の紹介

小序

まづ第一には、自分自身を紹介してかゝらうと思ふ。——宗教に就いて、地球に就いて、人間に就いてどんな考へでゐる男であるか、それから述べたいのだ。これは決して、自分の考へが進んでゐるとか、深いとか、正しいとか、そんな自信があつてするのではない。それどころか、始終、至らないことを嘆き、もどかしく思つてゐる。この言葉には、少しも修辭的謙遜などは含まれてゐない。或は云ふだらう、人として少しの自信もない言が、人の前で云へるわけはない、と。それは本當だ。そして、私の場合では、その自信は、然しかう云ふところにあるのだ。私の考は進んでもゐず、淺墓でもあり、また正しいかどうかも解らない。——その點では、前にも云ふ通り全く自信はない。が、たゞ、それらの怪しげな考へには、私として、寸分の嘘もないと云ふ自信はあるのだ。それは、私にとつて、「考へ」ではなく「生活」だ、と云ひ切つていゝ。更に「現在の私自身の相」だと云つてもいゝ。今、私は弱い、愚だ、——要するにひどく駄目だ。私はたゞ、その駄目な自分の相を述べよう。これが、自分自身を紹介する所以だ。

天

既成の宗教に就いて、恥しながら、私は殆ど知るところがない。祖母と母との感化で、幼時には、南無阿彌陀佛さへ唱へれば、極樂往生が出來ると云ふ信仰をもつてゐた。今でも、自分に親しい、既に亡つた人たちが、どこか清々しい世界にゐて、全く時代と云ふものから超越した眼で、私たちの一擧一動（勿論心のなかのそれをも含む）見おろしてゐる、と云ふ、空想――よりはもう少し實感に近いものをもつてゐる、どうかすると私は、その清々しい世界にゐる祖母などに話しかけるやうに、肚のなかで呟くことがある。また、その人たちに對して面伏に感じることがある。けれども、それほどのことでは、もう今の私には信仰と呼んでいゝほどの力にはならない。第一私は、死後よりも現在を思ふことが切だ。例へば、私がこの世で立派な生涯を送るためならば、死後なんぞはどんな目にあはされてもいゝ、と云ふ位の氣持だ。（云ふまでもなく、必ずやさう云ふ矛盾が避られない、と思ふ意味では決してない。）けれどもまた、存外私は、不慮の出來ごとかなんかで死にかゝつた時に、南無阿彌陀佛を唱へることとすら忘れて、安心しきつて往けるほど、幼時に得た既成宗教の信仰を、底深く保つてゐはしまいか、と思はれる節もないではないが、兎に角、そんな、その場へ行つてみなければ分らないやうな話はよそう。

で、私には、既成宗教に依るところの信仰はないのだ。

けれども私には、どうしても惡いことをしていゝ、とは思へない。何を以て善となし、何を指して惡と呼ぶか、と云ふやうな論は姑く措いて、簡單に、「心苦しい」と云ふ氣持を詐るわけにはいかないと云ふのだ。この「心苦しい」にもいろ／＼あらう。師の教に反いたから、とか、浮世の義理を欠いたから、とか、法律に觸れたから、とか、それはいろ

〵あらうが、私の云ふのは、たゞ自分だけの氣持へ來るやつだ。例へば、師もなく、義理も法律もない、絕海の孤島で、お斷話にでもあるやうに、狼かなにかに育てられた少年の胸へも來るやつだ。道學者が呼んで、良心とか、道義心とか云ふものも、本來それでなければならない筈だが、その生れたまゝの心へ觸れて、可厭な感じを起すやうなことはしたくないと云ふのが、謂はゞ今の私の宗教だ。

　この、生れたまゝの心、と云ふのが、取りも直さず「まごゝろ」だ。まごゝろは、云ふまでもなく眞の心で、嘘ではいけない、——それだけのことだ。既成の宗教や道德に腐れのはいり易い所以は、その祖述者の心があまり高く、深く、賢いので、中々凡夫の身で一から十まで同感し得られるわけはないのに、やさしく、嚙んでくゝめるやうに云つてあるのに吊られて、すつかり吞み込んだやうな氣持になる、と、その氣持と、祖述者のまごゝろとの間には、隙が出來る。その隙に對して無神經であるか、さもなければ、氣がつきながら知らない振りで許す。かようにして、お弟子の心には嘘が忍び込み易いのだ。「無神經」と云ふ用語に對して、或は云ふだらう、それはその人の鈍根で致し方もないことだが、それでもまごゝろに變りはあるまい、と。私に云はせれば、そのまごゝろは曇つてゐる。何故に曇るか、嘘の息が度々かゝつたからで決してそれを、生れたまゝとは云へないのだ。それから、一番まごゝろを曇らせ易い嘘は、人に對してつくそれではなくして、自分に向つてつくそれだ。例へば、眞實心苦しく思つてゐるのに、なアにこれしきのことに、とくだらなく强がつてみたりする嘘が、度重なると、その同じことでは、もう心苦しく感じなくなつて來る、——まごゝろが見事に曇つて了つて、それでは「そらごゝろ」だ。

　兎も角私は、自分のなかにまごゝろを觀る。そして、一擧一動（云ふまでもなく心のうちのそれを含む。）そこから發し、動くやうになりたい、と希つてゐるところが實際は、立派だと思つてもそれほどでないやうな[illegible]をしたり、僻いや

つに過つても笑つて挨拶したり、さう云ふ嘘は、日に何十遍となくつく。この位な嘘なら、まごゝろだつて承知してゐるからいゝ、詞はゞそんな氣持の安心をもつて、ドン／＼やつてゐる。まごゝろそれ自身を騙してかゝらうとする嘘に比べれば、數段ましだとは云ふ定、決していゝことではないと思つてゐる。と云ふのは、ひとに對してではない、自分の身の爲め、――つまりはまごゝろの光りのために罪だからだ。

そこで、已にまごゝろを觀る心は、天に理法を描かずにはゐられない心だ。あれでもよからう、これでもよかろうで、安閑と世上を見渡してはゐられないのだ。

釋迦の生涯に就いては、一代記と云つた風に通俗なものすら私は讀んでゐない。が、道に、老者、病者、死者を見て、これアうか／＼宮城なんぞに落ちついてはゐられないぞ、と緊めて志を立てたやうに聞いてゐる。恐らく釋迦は、まごゝろ籠めて不老不死の泉だか藥だかを探ね廻つたに違ひない。またその當然の醫術（それが科學的だらうと禁厭風のものだらうと）の蘊奥を研めたに違ひない。要するに初は、皇統の繼承者として、所謂善政を敷くばかりでは滿足できないで、見て心を痛ましめるやうなものを、治下の民の間から、一切とり除かうと希つたことだらう。けれども、その後何千年か經た文明開化の今日でも、そのうちの一つだつて成し遂げられてはゐない。一旦失望落膽して釋迦は、それまで外に求めてゐたものを、内に探さうと思ひ直して、卽ち心の平和はどうして得られるか、と云ふ點に思ひを潜め深い思索にはひつた、――こんな順序ではあるまいか。出鱈目だから、歴史には逸れてゐるかも知れないが、私は私の安ッぽさで考へて置くより仕方がない。

釋迦は、生れから云つても、あゝでもよし、かうでもよからうで、安閑と世上を見渡してはゐられない位置だつたとは云へ、その同じ位置にゐても、そんな態度をとつた人はいくらもあることだし、よし釋迦が一平民に生れたとしたとこ

ろで、順序は違ふまでも、きつと救民濟世の志を立てたに違ひない。あの國の第四階級と云ふものは、日本の勞働者どころか、穢多よりもまだひどい取扱をうけてゐたと云ふから、或は社會主義的出發點に立つたかも知れない。然し一生ビラ撒きの親分くらゐで濟ます筈はないから、ぬけ出て行つた最後は、矢つ張り生と死との問題だつたろう、さうして、……涅槃と云ふ解決がどう云ふものか、私には分らない。

今の私などに有難く思はれるのは、澤山の、どうにもかうにも手のつけやうがないやうな難問題にぶつかりながら、え丶面倒くせえ、俺さへ幸福ならそれでいゝんだ、と云つた氣持を出さずに、最後まで、まごゝろをもつて眞理の扉を叩き續けてゐたことだ。さうだ、そんな、根氣と云ふくらゐの、つまらないことからでも、人の延び縮みは別れる…。

いろ／＼ごたついて來たが、私は今、まごゝろと云ふものよりほかに、宗教的な力を裡に感じることは出來ないのだ。言葉を換へれば、私の小本願は、人々が正直になりさへすれば、社會問題もくそもない、自然と世の中がよくなる、と云ふにある。それも、（幾度も同じことを繰返すやうだが）ひとに對する正直よりも、自分自身の、生れたまゝの心に忠實であり、それのみによつて磨かれるまごゝろの光りで、あまねく世を明るくしたい、と願ふのだ。そして、若しもさうなつた曉には、求めずして天の理法が地に敷かれ、今の世には得難い平和幸福も、永く人々の心を去りはしまいと信じる。

以上述べたところによると、或はかう云はれるだらう、それはお前の云ふ通り一々尤もだが、いかにも消極的ではないか、嘘を云はない、それだけの精進なら、謂はゞ足踏をしてゐるやうなものだ、この忙しい世の中では、もつと急進的な教がほしいぢやないか、と。だから私は、小序にも云つた通り、何も立派な考へなど述べる氣ではないのだ。私自身ちつとも前へ出ないで困つてゐる最中だ。けれども、若しさう云ふ横槍が出たとしたら、私もかう答へる丈けの見當はつ

いてゐる。まごゝろから出るものは、小さく、或は弱々しく、或は淺薄にみえても、鋭い。それには、必ず一念と云ふものが伴ふ。飛んで行つた、あゝ堅い、なんだ岩だ、ぢアよさう、と云ふ矢なら、必ずやまごゝろから射られたものではない、まごゝろから放たれた矢なら、きつと念力が籠つてゐる。この力は馬鹿には出來ないものだ。どことかの桑とやらを、手を觸れずに、海のなかへ持つて行つたのもこの力だ。忙しければ忙しいやうに、怠らずまごゝろを磨きさへすれば、念力の能率もグン〳〵のぼつて行くだらう。——から返事をしよう。

誰でも間違つてるとは云へさうもない、つまり解りきつたことを長々と書いたが、この、解りきつたことを、恥しがらずに平氣で書けるやうになつたのは、私にとつては、どれほど尊く、有難いことか知れない

本號で「自分自身の紹介」を終り、來月號から本文にはいる豫定の所、數月來あたまの具合惡く、不滿足のうちにやつとこれだけを書いた。來月號には「地」と「人」とを書いて、この第一章を終る豫定である。

詩七篇

野口米次郎

狂想

麥稈一束、土塊（つちくれ）と女の髮で、
そうです、僕の家は造られませう。
ああ、世界を失つて歌一つ得たい！
雲は左の窓から飛びこみ、
形の無い苦痛と誇りの舞踊者が
潮のやうに右から踊りこむ。
僕はこれ異教徒、喜びのうちに病み、
舞踊者の足拍子に立ち上つて、
海水を變じて山巖たらしめる歌をうたひませう。
（恐れる所は、僕の歌の止む所に道徳が初まることだ。）
身を捲く襤褸一着、夢の斷片、
僕の心に夜陰の恐怖！
僕は追憶と藝術で眞赤な大空がほしい、
星を薔薇の花園に降らしたい。
さまざまな假裝した木の葉と僕の靈が、ああ御覧じろ、
墓所を掘るため大地へと急ぐ！

奇異な斷片

おほ！ なんたる奇異な斷片、
ははは、面白く踊る！
ご覧、可愛い足をあんなに上げて！
死は甘い、それは確だ、

笑ひながら死に行く、
なんたる香しい歯を見せて、ははは！
古い愛戀の消えゆく音樂のなかに
死ぬこと位奇異な最後はない！
ご覧、雪と音樂は消えゆく！
臆病者だね、ははは！
怖くて死ねない？
小さい移り氣が戀しくて、ははは！
悲みを殘さずに死んで仕舞ふ、ははは
なんたる奇異な雪片よ！
私の愛人、お前は臆病者だね！

平和

夜の無終のだるい旋轉！　影のやうな平和が世界を包む、愛戀
と夢が無限のうちに眠る。
豐かな狂想の新らしく生れた世界！　陸と海と月と人間がその
胸に朦朧を卷く。
ああ、世界は母なる孤獨と休憩する、その羽翼のしたで星と自
分は沈默の說教を聞いて居る。

ロバート・ブラウニンクに與へる

あなたは人生のパゼントを官能で見る喫煙室の物語師、
あなたの爽快な辯舌はあなたの藝術を朦朧化させ、
また朦朧を變じて告別の辭（バレヂクトリー）たらしめる、
あなたは奇矯な誇りで裝飾された田舍氣質です。
あなたは時には虛無主義からただ離れるため群衆的であり、
あなたの大きな表現の渦（かロロ）はあなたを異大な傳奇作者と作り、
殘忍に見えるため、あなたはしばしば神秘啓示を遊戲します。
あなたは色强い冒險の大食家です。
あなたは天國と人生との間をセレネードするトロバドーアで
す、

六紋琴(キター)にあはせるあなたの愛歌は私共に肉體的苦痛さへ感ぜし
　めます。
あなたは現實家だが、不思議に眼を樂天主義に向けて居ます。
あなたは人情の火の上で氣儘に踊る鷲頭獅身(グリフォン)の怪獸です。

友人スタダードに與へる

懐しい老チヤーレーよ、僕は君といろいろなことを語りたい―
明白に始も終もないことや、
所聽になつたり呪言(スウエア)になつたりするやうな痛快なことを。
僕は君があらゆる點で僕に同意して、
遂には感激のあまり小さい千の內證事さへ洩すに至ることを知
　つて居る。
『小さい內證事は嬉しいね―』と君は疲れた眉毛をつり上げて
　いふであらう。
僕は君に揶揄つてみると想像する、君は『だつて神樣がこんな
　に作つて仕舞つた!』と叫ぶに相違ない。
懐しいチヤーレーよ、華盛頓で千八百九十九年の昔のやうに、
　もう一度僕は
君と同臆臺で燃える聖火(フォント)の下で眠りたい。
黄金色な聖火の焰は君の頬の無邪氣な歌につれて立ち上つた。
僕の異教心は君が首に懸けたスキヤピユラーや胸に入墨した十
　字架を見て
何んなに慄いたかを今でも忘れることが出來ない。
我我は牧神(フォーン)の一對で、睡眠から目覺めた時いかにも牧神らしく、
生命と沈默の古い道へ我我の口笛を響かせた。
懐しい老チヤーレーよ、君は世界を嫌ふ人、有らゆる形式に於
　ける慣習の逆人、
常春藤(アイビー)の陰から呪言(スウエア)する鸚鵡一羽を君に與へて、
神聖な幽居(テブスキュリチー)の一隅に君を祭りこめたいと僕は願つた。

僕は日本から歸つて再び君を見る時、
君を全き野蠻人とする力のある魅符(チャーム)を持つて來ると君に約束し
たではなかつたか。
ああ、君は今悲しい死んだ石の一塊だ、
恐らく君がいつも恐れた『筆後れ』を感ぜずに眠つて居るであ
らう。

附言、チャールス・ワールエン・スタダードは僕の親愛なる友人の一人で、英のスチーブンソンや米の詩人ミラーの親友であつた。散文や詩の著書十數卷ある外、生前は華盛頓加特力大學の英文教授であつた。十數年前死んで、その骨は加利保留仁亞のモンタレーの加特力敎徒の墓地に横たはつて居る。僕一昨年渡米の節、親しくその墓地に花輪一箇を捧げた。その日は春も日毀めかけては居たが、灰色の風が強かつた。

二十年後ウオキン・ミラーの山莊を見舞つて

ここは以前は彼の生きた呼吸で清められて居ました、
今ここは彼の死で一層に神聖化して居ます。
私が彼と一所にここで住んだ時以來もう二十年になります——
私は低く頭をこの二十年間の思考に垂れて、
獨り小路(こみち)を歩いて居ます……
この小路で彼の影は薔薇の花瓣の上に碑銘(エピタフ)を書いて居ます。
（神の園丁なるウオキンよ、神はあなたを祝福します！）
『お前の書齋は昔のやうにお前の歸つて來るのを待つて居る、』
——
この言葉は彼が私に送つた最後の手紙の最後の文字でありまし
た。
今私はここへ歸つて來ました、……ああ、二十年の長日月が已に
過ぎて居る！
彼が『僕の悴(マイソン)』と呼んだ青年の私は今は澤山の髮の毛を頭から
失つて居ります、
また悲哀を喜んで語らうとして居ります。

私は夜あなたと共に空中にも地上にも
沙のやうに散らばつた星の間に眠ることを何んなに喜んだでせ
う、
（だれが空の星と村の燈火とを區別することが出來たでせう）。
私はそれらの光が『そこに[illegible]らしめよ』といふあなたの命令で
顯はれたとさへ思ひました。
あなたは肩に熊の皮を掛け、長靴をはいた豫言者でした。
私は朝あなたと共に山に裂かれた霧の畔を登つて、
言葉を埋め、神の沈默を掘りました。
何んたる壯大な沈默が銀色した金門灣から流れこんだでせう、
帝王のやうな太陽がその灣を沈んでいつた時、何んたる沈默が
あつたでせう！
ウオキンよ、かかる瞬間に我我の耳は夕暮の蟋蟀（クリケツト）に對して開か
れ、
言葉無く我我は徘徊して、空中に懸つた大きな提燈を見て微笑

ウオキンよ、私はあなたがあなたの愛する高丘（ハイト）で眠つて居られ
ることを喜びます。
春になると、紫色の空氣の中から毛莨（バタカツプ）や罌粟（ポピー）が笑の歌を振りこ
ぼし、
冬になると、幽靈の軍隊のやうに霧がこの山を占領して仕舞ふ
——
この時あなたは墓場から歸き出して霧に乘りまたがり、
あなたの詩『コロンブス』の言葉、『帆走れよ、帆走れよ』を呼
ばれるでせう。
あなたは生命の日に於てのやうに、死の世界でも生と歌の偉人
でありませう。
ウオキンよ、私は空虛な涙の歌をうたはんが爲めここへ來たの
ではありません、

私は人生の戰鬪から戰鬪へ移る間の一休憩を得るために來ました
私はあなたが幾年も幾年も死んでゐられるとは考へられません。
私はたれかの聲を聞くやうに感じます、『ウオキンは酒一壺と羊肉一塊買ひに町へ出掛けた。待つて居給へ、ぢきに歸つて來るだらうから……』
よろしい！ それでは香ばしい夕景の空氣に頭と足とを横たへて、
私は彼の歸るのを待ちませう、『おおヨネよ、二十年たつて……』
と呼びながら輝く彼の顏を待ちませう。

(千九百十八年十一月)

某哲人に與へる

鳥と花が歌ひのこしたものを
あなたはとつて以て自分の歌とするでせう、——
あなたの諧音は生れたもの、作られたものでない。
藝術の叛逆を見ずに歌を持つといふことは尊い、
人生をして單純な力を得せしめるといふことは尊い、
(そのこと自身が尊い創造です、)
理智の壓制から忘れられるといふことは尊い。
あなたはミニユエトやシヤンソンや空想に止れと命ずる、
酒宴や假裝に閉ぢよと命ずる
あなたは高い座席から下りて、
粗末な着物と言葉の庶民のなかに坐る。
單純のなかにあなたは自分の解放を求める。
眞實なる自己を確にするといふことは尊い。
現實のないところに眞實の想像がある理由がない、——
人生を平易に見るといふことが
發見であり感動である。

私はあなたのなかに人生と世界の問題を讀みます、
涙と喜びの撚り合せを、
空間の深さ、時間の廣濶を、
完全な宇宙の廻轉を。
私はあなたのなかに偶然に對する人間の避くべからざる服從を
　讀みます、
急迫の場合を變じて歌とする眞實なる智識を讀みます。
音律の變化はただ急迫そのものから得られる、
眞實なる感情と均齊が
法則の嚴守を我我に迫る。
あなたの歌に時と場所の上に浮き出る、
不滅とか時好とかに煩はされない生命の心理狀態——
眞實なる觸感——
驚異——
あなたの歌はあなた自身である以外に何物でもない。

私は忙はしい風の足が
人情と法則を暗示しながら過ぎるのを見ます、
風は熱情が横はつて居る陰影へと急ぐのです。
おお風よ、私はお前と共により良い生命と歌を築くであらうか。
あなたは夢と希望から生れた一光明、
生の戰慄を歌ふ人、
あなたの瞑想の魔法、
あなたの歌の妖術をして、
沈默の渺漠の上に遊戯させてください。

女人國遊記

生方敏郎



○世の中の女が、男で苦勞するごとく、男は常に女の爲めに苦勞してゐる。

○吳王が西施に苦勞したと同樣に、橋の下の乞食は女乞食の爲めに苦勞してゐる。

○血に燃える靑年が女の幻影に苦しめられる樣に、骨の枯れた老人は女の古疵に惱まされてゐる。

○女が生れ落ちるとから、男に附きまつはられる樣に、男も生れ落ちるとから、女と離されることがない。

○根本的に違ふ男といふものと、女といふものとが、一つ世界に住まねばならぬといふのは、何といふ因果な、そして同時に何といふ幸福な宿命であらう。

○神が人を造つた、と說く人々がある。人が却つて神を造つた、と說く人々がある。女が男を産んだのか？男が女を産んだのか？

○神が人を造つた、と說く方の說に、神は最初男を作り、後からその肋骨の一枚を拔き取つて、それを以て更に女を作つた、といふのがある。

○右の結論として、男はあばら骨が一枚足りない、といふことに成る。勿論之は解剖學的にではなく、比喩としてだ。

○又結論として、男は先に造られ、從つて不出來であつたが、

女は後から造られ、從つて上出來であつた、とも言ひ得る。

○

又結論として、曲りくねつた肋骨から作られた女の根性は、矢張曲りくねつてゐる。若し之を少しでも眞直に撓めやうとすれば、すぐポキリと折れてしまう。といふ說も有る。女に多くの經驗を持つ詩人ゲーテは此說の支持者だ。

○

昔から、女性に關する男性の意見は、二派に分れた。女の尻押をする一派と、女の惡口を云ふ一派と。

○

昔から外面如菩薩、內心如夜叉といふ言葉がある。しかし、今の世には、內心ばかりでなく外面も共に、夜叉のやうな女が多い。

○

ストリンドベルグは、自分は女は嫌ひだ、而かも女を愛する、と云つた。

○

オスカア・ワイルドは、善女は人を苦しませる、そして惡女は人を惱ませる、と云つた。

○

さうかと思ふと、又ワイルドは、女は理解さる可きものとして造られず、愛せらる可きものとして造られた。とも云つてゐる。まづ前のストリンドベルグと似たり寄つたりの考へであつたらしい。

○

イプセンは眼覺めたる女としてノラさんを舞台の上に描出し、大に世間を騷がせた。多くの男はこの爲めにイプセンの敵に成り、多くの女はイプセンの味方となつた。そして、遂にイプセンは勝利を得た。

○

シエークスピーアも常に女の味方であつた。彼の書いた悲劇の種子は常に男の過失か短見淺慮か邪まな心か野心かに依つて播かれる。女は賢いか、貞淑か、機智があるか、熱情があるかだ。そしてシエークスピーアも勝利を得た。

○

昔から、女と貧乏人ほど煽動に乘り易いものはない。彼等は共に踏み付けられてゐる時、哀憐の情を催させるほど從順だが、勢を得た時の彼等は宛で狂犬だ。

○

女は決して弱者ではない。貧乏人も決して弱者ではない。否

共に弱者なのである。たゞ彼等は弱めらる可き不利な地に久しく置かれたといふだけだ。殊にその理性的でなく感情的であるといふ點に於いて、女と貧乏人とは、よく似てゐる。

○

賑かな街を、女を連れて散歩なぞしてゐる男を見るのは、羨ましいものだ。併し、それは傍から見た時の幸福にすぎない。自分で女を連れて歩いて見ると、それは案外、見かけ倒しの幸福であることに氣付くであらう。

○

足弱を連れて旅をするな、落人義經に辨慶が諫めて、靜御前と別れさせる。足弱で、携帶品が澤山で、氣が變り易くつて、見栄坊である女といふものを、一緒に連れて旅するほど心元ないものはない。籠で歩いた昔も汽車で行く今も、そんな事に變りはない。

○

旅に出て手足まとひである女は、家に居ては極めて重寶な人間である。如何に物臭な女でも、女は自分の身の廻りの世話を他人にはさせない。却つて他人の世話までもする。主人の世話、父の世話、子供の世話。

○

男が間に合ふか、女が間に合ふかは、彼等の各を居候に置いてみれば分る。そして男の居候が間に合ふのは、障子の切貼くらゐにすぎない。

○

女は、昔から今に至るまで、財産として扱はれてゐる。その或者は金剛石の如くに、その或者は牛馬の如くに、價値を認められ、値ぶみされてゐる。それ故、女はいつでも自分を養ふ者を失はないといふ幸福を持つ代りに、又常に他人に養はれる運命にあるといふ不幸をも持つ。

○

親が男の兒を教育をする時、草花を培ふ心である。良い果實を結ばせやうとするのだ。親が女の兒を美しく裝ふ時、品物の風袋を化粧するつもりである。そして價高く賣らうとするのだ。

○

男は常に多くの好い持物を持たねばならぬ。財産——學問——地位——藝能——門閥——等だ。女は全く無一物でもいゝ。財産無くして富豪の夫人とも成り、學問無くして博士夫人ともなり、氏無くして大臣や貴族の夫人とも成る。女は常に他に持たれるのだ。

○ 戀は、男に金の必要を烈しく迫る。そして金を得ることを妨げる。

○ 今の學校教育は、オールド、ミスを作る以外に、果して何を造り出したであらう。

○ ツルゲネーフの小説の中に、村の中で、たゞ銀時計を持つ、といふだけのことに惚れて、結婚した女があると書いてある。

○ 何處の國にも、女神といふものがある。これは果して婦人を崇敬するところから拵へ出したものであらうか？、むしろ男神に配する必要から女神を作つたものらしく思はれる。お造酒を供へるのと同じ意味に於いて。

○ 白粉を塗りこくれば、大抵の女が男の眼には美人に見える。男は女の美に對する批評家ではなくして、玩賞家であるからだ。酒を飲むで、良い酒か惡い酒かを判斷する者よりは、酒を飲むで直ちに醉ふのが[illegible]好者である。

○ 男がコケテイシュな女に、何處までも引きづられて行くのは、女の[illegible]に「不確實」といふ誘惑があるからだ。それは確實ほど好いものはない。けれども、それでは安心してしまひ、男は直に怠け者に成る。コケツトの持つ不確實は、冒險好みな男を誘惑するのに、何よりもいゝ餌だ。そして戀に怠ける男を鼓舞するのに尤も好い拍車だ。男はその「不確實」にチヤームされてそれ外には餘り取り柄の無い女を、女神のやうに敬慕して追ひ廻すのだ。

○ 赤裸々は青年の美德である。猫を被ることは少女の藝術である。

○ 何の關係も無い女が、嫁に行くのを見てすら、男は其日いちんち位は塞いで暮す。それほど、男は浮氣つぽい。

○ 電車の中の乘合の客に顏を時々見られてさへ、女はひそかに悦んでゐる。これほど、女は己惚れが强い。

○ 男に負けまい、とする女。女子の爲めに權威を要求する女、女子をして公正な取扱を受けしめやうと努力する女。然ういふ

婦人達は、いつも男にしいたげられ、横暴な蹂躙され、極めて不公正な待遇を受ける。

○

男の持物になつて平氣でゐるやうな女は、帽子の樣に男の頭の上に載せられ、男に盲從する如くに見える女は、却つて男の鼻梁の上に架る眼鏡と成り、男に踏み付けられてゐるかの如き女は、實に重い靴のやうに男の步行を牽制する。

○

男は、永久に女に對つて友人たらんことを希望する。けれども女は、男を主人にするか、然うでなければ奴隷にする。

○

女の腕まくりは怖るゝに足りないが、女の涙は男を取りひしぐ。

○

女の涙は男を取りひしぐ。併し女の笑くぼは男を解放し活氣づけて、最後に彼女の最も忠實な僕にする。

○

女は、本當の事を話すのに、それが恰も確實性無きものであるかの樣に不安な心持で話し、嘘僞を語るのに極めて強い確信を以てする。

○

女の語る嘘言には、本當以上の本當の事がある。

○

泣く女は強く、嘘を云ふ女は正直な女だ。

○

女は度胸が据つてゐる。女は他に向つて——少くとも女房は自分の亭主に向つては——さあ殺してしまひなさい、などと迫る。しかし、それは到底對手が自分を殺しつこないと見て取つた時の話である。女の度胸がよいと云つても、たゞ此程度の度胸である。

○

後家さんに向つては、奥さんのやうに話し、奥さんに向つてはお孃さんのやうに話すことを忘れるな。これが近代婦人に對する社交術である。

○

美人は美人を友とし、醜婦は醜婦を友とする。恰度、賢人が賢人を友とし、愚人が愚人を友とする樣に、恰度鮎は鮎同士で群を成し、お玉じやくしはお玉じやくし同士で群を成す樣に。

○

馬鹿な男に喰ひはぐり者がないやうに、やくさな女に殘り者

はない。

○

美しい妹を持つ兄は、その妹が嫁に行く迄、友人の間に評判がいゝ。

○

女を人前で讚美するフエミニストを警戒しろ。彼は、女の弱點を最もよく知つてゐる男であるから。

○

金持の父と愚な母とは、子供の寶だ。賢い妻と美しい娘とは、父の寶だ。

○

男に錢あれかし、女に魅力あれかし。

○

女は、生涯男を理解するものではない。女は男を誤解するのだ。それ故、女は戀する時、常に秀才な男を戀せずして、秀才らしい男を戀し、深切な男の愛を承け容れずして、深切相な男の愛を承け容れる。

○

女の芳い香は、男を引き付ける。そして女の惡臭は、又更に強く男子の嗅覺に抑へる。

人生で初めて逢つた異性には、大抵の場合、戀に似た心が芽ぐまれる。

○

異性同士、近く永くゐると、その美點がそんなによく見えなくなる代りに、その缺點がだんだんそんなに氣にならなくなる。それ故、戀に成り相な間柄が、案外何事もない平凡な交際としてつゞき、兎ても見込みのなかつた人達の間に却つて戀愛の果實を結んで知己朋友を驚かす。

○

戀愛は、人間の行ふ奇蹟である。

○

戀が人の胸に這入つて來ると、その時まで住んでゐた總ての想ひを追ひ出し、一室に唯一人でゐる。戀はそれほどエゴイストである。

○

戀するやうに成ると、情人の親戚朋友が敵のやうに見えて來る。自分に敵意を持つて迫るかの如く怖ろしく成る。戀愛が侵略である實證だ。

○

○ 戀する者に成ると、自分の兄弟や親友が、不思議にも自分を離れたかのやうに覺える。戀愛が反逆である證據だ。

○ 男は戀する時、たゞその心を告白しやうとあせつて、何事も爲し得ない。女は戀する時、それを口に言ふまいとして、何事でもする。

○ 男は、何んな場合にも戀をする。女は、しかし彼女が貧乏の苦痛を知つてゐたなら、貧しい男に向つて戀することは、決してない。

○ 大眞閣詩の序に曰く、「一西子不レ及二十無鹽一」。と。西子は西施なり、越王勾踐より吳王夫差に贈れる傾國の美人。無鹽は名高き醜婦の名なり。肉の戀に、數つこなしを上乘とするの義ならんか。

○ 初戀は香高く色淡き花のやうなものである。失つた戀は、遠い空にはためく涼しい星のやうなものである。そして惑溺した戀は、熟した果物のやうに甘い。

○ 他人が讃美してくれたり、辯護してくれたりするやうな戀に決してロクな戀はない。戀は苦しい悲しい思ひの多かつた程が本當に甘い戀なのだ。

○ 對手が、飾り造作も無く、待つてました、と云はんばかりに成就した戀には、いつ迄も物足りないところがある。之でみても、苦勞は戀に尤も大切な要素であることが分る。

○ 道德よりも戀愛を尊重する人がある。戀愛よりも節操の方を尊重する人がある。

○ 此方らの戀する女から戀されないのは、悲しいことだ。しかし、此方らの何とも思はない女から何とか思はれるの不幸に較べれば、何でもないことだ。

○ 失戀も不幸であらう。けれども、それは結婚せねばならなく成つた戀愛ほどには不幸ではない。

○ 男にとつて、女は單にお茶受け代りの噂話としてでも、好い

ものだ。お役所に於いて、銀行に於いて、新聞社に於いて、默つてゐてもまづいし喋りすぎても宜くない時、お天氣模樣の話と女の話とは、尤も適當だ。多く喋つても憎まれず、默つて聽き手に成つても嫌がられない。

○

町内の美人の話さへも、お茶受け代りと成る世の中なればこそ、戀愛小說に市價を生じたわけである。

○

女は口で嘘を言ひ、手で眞實を語る。戀された場合、男に從ふか否かは、女の手から聞くのが、一番確かな答である。

○

いやな女と三日も一緒にゐれば、必ず家を逃げ出したく成るが、賴りある女と戀し合つてゐる間は、世界の外まで出かけたいやうな心持に成る。

○

急いて世間を狹くする。せかなきや先越（せんこ）す人がある。戀の手おくれは、病氣の捺治の手おくれ以上に救ひ難い。

○

熱誠をこめて戀する者は、おひたゞしく神經質に成る。遊戲半分に浮氣する者は、常に餘裕綽々としてゐる。熱誠ある戀が兎角破れ易く、面白半分の浮氣つぽい戀が、しば／＼成功するのは、その爲めだ。

○

女の戀は、繻袢の衿を買ふやうなものである。選り好みを止めれば、之を得るのに左迄骨は折れない。

○

獨身者の悲みは、淋しさにある。夫婦者の憂ひは煩はしいことにある。

○

獨身者は自分が獨占する異性を持たぬところに、不滿があり、夫婦者は自分を、獨占する異性の存在するところに悲みがある。

○

優しくすれば付け上る細君は、手荒くすれば氣ちがひになる女である。

○

妻は、良人の惡口を言ふ代りに、近所の惡口を言觸する。

○

男と女は、相互の誤解に依つて結婚し、相互の理解に依つて分れる。とオスカア・ワイルドは言つてゐる。だが、お互ひ

は、結婚その物を誤解することに依つても、結婚する。

○

結婚は戀愛の墳墓である。とはナポレオンの警句として人口に膾炙してゐる。その戀を葬るばかりでなく、後から芽ぐまうとする戀のひこばえ迄も枯すのは、結婚だ。

○

お妾のやうな奥さんがある。女中のやうな奥さんがある。看守人のやうな奥さんがある。長良川の鵜飼ひのやうに、主人の取つて來た物を皆な搾取する奥さんがある。

○

誰に見しよとて、紅かね付きよぞ、皆な主への心中だて。といふ唄がある。けれども、奥さんが外出する時おめかしをするのは、決して主人への心中だてではない。それは主人は留守居をしてゐることが何よりの證據である。

他所の多くの男に、美しく見られやうとする心持が外出せんとする奥さんをおめかしさせる。

○

山内一豐は妻の與へた金で馬を買ひ、遂に大名と成ることが出來たので、後世の史家、並びに道學先生は、その妻の内助の功を賞揚する。しかし、その爲めに一豐は妻のおかげで出世したことに成り、彼の豪さは割引される

○

働き者の奥さんを持つた亭主の災難は、自己の能力を割引されることだ。

○

美人を妻に持つ男は、盗人である。と或人は言つた。美しい女を私有物とするからだ。けれど私はそれに附け足して言はふ。美人を妻に持つ男は、周圍に來る男を皆盗人と思はなくてはならない。と。

○

金剛石で魚は釣れぬやうに、妻の貞操は平生良人の注意をすら惹かない。それだのに、一度妻の貞操に少しでも疑はしい雲がかゝれば、良人は血眼に成つて、金剛石を失つた以上に嘆き悲しむ。

○

ソクラテスの妻が尋常一樣の女でなかつたことは、皆さん御承知のことでありませう。東洋の哲人孔夫子は、その妻のことに關して何事をも語らない。そしてただ女子と小人養ひ難し。と嘆息した丈けだ。哲人は、何うしてこんなに女房運が惡かつたのであらう。

○

男は、いつも無勘定で女に對ふ。只結婚する時だけ、女に對して算盤を置いてゐる。

○

今の奥さんは、お妾さんのやうに生活しやうとし、今の娘は既婚者のやうに生活しやうとし、今の女中は令孃のやうに生活しやうとしてゐる。

○

どんな良妻を持つた幸福な男でも、別に最う一つそれと同じ幸福を殖はさうとする時は、その良妻から妨げられるだらう。そのやうに限られた幸福を持つことが、幸福な結婚をした者の不幸だ。

○

買ひ損なつた細君は、買ひ損なひの萬年筆の樣だ。後からは修繕も何も利かない。執拗くいぢくり廻せば破れてしまふ。だが、萬年筆は捨てることだけは許されてゐる。それだけまだ慰めがある。

○

戀愛は盲目である場合が多い。その盲目の目で見て配偶者を選定するものとすれば、世に戀愛結婚ほど危險なものはない。

○

だが戀愛結婚にも、幸福なのがあり、賣買結婚にも幸福なのがあり、政略結婚にも幸福なのがある。

○

嫉妬は愛情の産物ではない。所有慾の一種である。嫉妬やきの女が貞女であるとは、誰が保證出來やう。

○

駿馬痴漢を乘せて走り、好妻多くは醜夫に伴ふて眠る。誠に緣は異なもの、味なもの。とも云ふ。又曰く、似た者夫婦。と。

○

處女の貞操は、賣物に傷の付かない爲めである。妻の貞操は金剛石を盗まれない爲めである。寡婦の貞操は、亡夫の墓に供へる精神的香華である。貞操は、時と場合に依り、各その意味が違ふ。

○

男は前の妻を愛するが故に再婚し、女は前の良人を嫌つた爲めに再婚する。とワイルドが云つたのは、眞理だ。貞女が二夫に見えないのは、先夫を愛することが深いからだ。再婚するのは、その反對の場合にあるからだ。

○

女は他人に據らないでは、自ら生活を支へることが出來ない。

といふ事が、屢〻再婚の理由にされてゐる。この場合、貞操問題は生活問題の前に、讓歩したのである。

○

現代の處女は、既婚者の如くに振舞ひ、現代の奥さんは處女の如くに振つてゐる。

○

生別は死別よりは不幸である。けれども、生別は不幸な結婚生活程に絶望的ではない。生別は運命を賭ける。凶が出るかも知れぬ。併し、必ずしも凶が出るとは、限らない。

○

貧乏な既婚者は、子供の出來るのを怖れ、富裕な既婚者は、新らしい戀愛の出來ないのを悲しむ。

○

夫婦喧嘩の仲裁をすることと、資本家に社會奉仕を說法することとは、骨折り損の草臥儲けである。

○

死んだ良人の墓を見れば、その後家さんに後釜の男が出來たか、まだ出來ないかは、誰にも分る。

○

不經濟な細君を持つ良人、不貞な細君を持つ良人は、比較的外で道樂をしない。その窮乏と、その見張りの爲めに、外遊する餘裕が無いからだ。

○

唯一日見て一夜の妻とするものを、日本語に於て見立てと云ひ、唯一日見て永久の妻とするものを、同じ國の言葉で見合ひといふ。

○

婦人に選擧權の無いことを憂へなさるな。男子は婦人の嫌がる人間を、下男にすら雇ひはしない。況んや、區會議員をや。況んや市會議員をや。國會議員をや。

○

父は子供を自分の子供として、愛する。母は子供を自分自身として愛する。婦姑も子供に對しては慈母である場合が、少くない。

○

亭主の好きな赤烏帽子。といふ言がある。けれども細君は、自分の好きな物を以て、主人に好ませる位の魅力は持つてゐる。赤い手柄、大一番の髷型、流行のショール。何でもだ。

○

離婚は、女にとつては追放だ。けれども、男にとつては解放

だ。女は傷物となり、男は若返へる。

○

良人に情人の出來たことを、妻が知れば、妻の受ける損害はいよ〳〵大きく成る。妻に姦夫のあることを良人が知れば、それは恥の上塗りだ。

○

男は未練が強く、女は慾情が強い。

○

私の良人は愛情が有りませんでしたから。とに、別れた女の必ず云ふ極り文句である。愛情が無いから別れたのか、別れたから愛情が無いのか？

○

妻の目から見ると、良人は不經濟で同時に吝いところがあり、良人から見ると、大抵の妻が吝嗇な無駄使ひ屋さんに映じるのだ。

○

良人は美しい妻を他の男達に見せびらかさうとし、妻は良い良人であるなら、他の女から距てやうとして氣を揉む。

○

兎角浮世は色と酒 と昔の人は言つた。今の世は、兎角色と飯。である。今の人々が禁酒會に這入つたわけではない。今の時勢が人々から酒を取り上げてしまつて、飯のことを眞劍に考へさせる迄に、切迫してゐるのだ。

○

實際現代は、殊に最近では、飯と色、經濟問題と性の問題とに、人々の話頭が集中してゐる樣だ。食べることゝ子を産むこと、一つは自分の生命を支へ、一つは自分の生命を延長させることだ。

○

世の中のことは、食べることゝ子を産むことを基調として運ばれてゐる。食べることと産むこと、及び産むまでの手續きは、善いことでもなければ惡いことでもない。たゞ世のあらゆる善い事の住む宮殿と惡い事の藏される塔とが、この二つの物の上に建てられる。

○

男と女との間にあつた劃然たる境界線を取り除けたことが、ワイニンゲルの有名なる發見であつた。人はたゞ男らしい男と、女らしい女とのみを、男として又女として見てゐる。けれども、實際大多數の男女は、この中間に挾まる可きものだ。

ベルグソンの印象

室伏高信

私がベルグソンに會つたのは去年の晩秋、私が巴里に滯在してゐた時のことであつた。ベルグソンには、彼れが傑れた哲學者であるといふ理由だけでなくて、別に……………………、是非一度會はなければならないこととなつてゐた。で私はこの哲學者とは以前には何の知合ひでもなかつたし、また彼に面會する特別の便宜もなかつたので、私は伯林にゐる間に、バートランド・ラッセルに手紙を出して、私を彼に紹介してくれまいかといふことを頼むでみた。無論彼への紹介をラッセルに頼みこむことの賢明でないことを私も氣がつかないではなかつたが、丁度私はこの時ロマン・ロランへの紹介状をほしかつた時であつたから、その序でにといふ、ごく簡單な、無反省な態度で、ラッセルへ頼んでみたのであつた。しかしラッセルからの手紙が届いて見ると、その中にはたゞロマン・ロランへの紹介状が封入されてゐるばかりであつた。『私とベルグソンとは、哲學上にも、政治上にも、激しい立場の隔りがある。』こういふ理由で、ベルグソンへの紹介状を書くことの不可能な事情を知らせてきたのであつた。この手紙が私の手許に届いたのは、もう私が伯林の數ケ月の滯在から引揚げようとしてゐる間際のことであつたので、私はもうどうすることもできないで巴里へと向つた。そして巴里に、一人の知己をさへもつてゐない私は、日本からの多くの旅行者のするように、日本の大使館に頼みこむのほかはなかつた。私は石井大使を訪ふてこの話をした。戰爭中に、石井大使は、矢張り日本からの大使として華盛頓に滯在しておつた。その時ベルグソンは佛蘭西政府からの使命を帶びてアメリカに渡ることとなつた。彼はその前にもコロムビア大學から招かれて渡米したことがあつたが、英語國民の間に、信望の厚いベルグソンは、今度は佛蘭西の忠實な市民を代表して、彼の所謂『獨逸の機械的並に唯物的の勢力』との戰ひにおいて、『精神』と『自由』と『創造的進化』の擁護をアメリカ人民に訴へるために、ヴヰヴヰア

ニとともに再び大西洋を橫ぎつたのであつた。石井大使がベルグソンと會談することのできたのはこの時のことであつた。で早速石井大使に紹介の勞をとつてもらうことにした。

それから三日ばかりしてベルグソンからの長い手紙が届いた。そして十月三十一日午後二時半に來てくれといふと、その日に都合が惡るかつたら、私の方から別の時日を指定してくれといふことが書かれてゐた。私は十月一杯位ひで巴里を出掛けてヂュネーブの方へ旅行する豫定ではあつたが、まだ巴里へきてルーブルも見てゐない位ひであつたから幾らか巴里滯在を延ばしてもいゝと思つて、少し待ち遠ほしくはあつたが、ベルグソンの指定日まで待つことにした。

十月三十一日の午後、私はL'Evolutioncreatrice 一冊をかゝへたまゝリュー・キャムボンの旅館を出て、そこから手近にあるコンコルドの廣場をぬけてシャンゼリゼーの方へとタクシーを驅つた。兩側の並木には、もう巴里の秋は色ざめて見えてはゐるが、十月半ばの伯林の寒さを味はされてきた私にとつては、並木の間から射しこむでくる、まだ小春日の暖かさを殘してゐる太陽の光が旅人の寂しさを慰めてくれる慈愛の輝きのように思はれた。エトアールから左へと折れて、それから幾つかの小さい、そして紛らはしい通りやら橫丁やらを拔けて、ベルグソンの家の前にタクシーの停まつたのは、約束の時間からまだ十分ばかり前であつた。その通りは、エラン・ヴヰタールに泥ずんでか、リュー・ヴヰタールといふた。それはセーヌの岸からあまり遠くない、そして一寸小高い丘の上ではあつたが、またそれだけに凸凹な、寂れた、巴里にしては珍らしいほど手入れの足りない、長さは一丁位ひしかない小街であつた。ブリキの鑵なぞを並べてゐる一軒の金物屋の前に、灰色の塀で遮られてゐる一軒の二階家があつた。ベルを押すと二十ばかりの年格好の物優しい佛蘭西女が出てきて、私の顏を見ると、私がまだ何ともいはないうちに、ウヰーといひながら奥へ入つて行つた。そして再び顏を見せたと思ふと、私を玄關の左側の一室へと案内した。疊にすると十疊敷位ひと思はれるこの一室は、この家の應接間に使はれてゐるのであらう。二、三脚の事務椅子と、一脚の長椅子のほかに、壁に添ふて二つの書棚が並んでゐた。書物の多くは英語もので、そして生物學だとか、地理學だとかいふような種類のものが私の目についた。そのほかには何の裝飾もなかつたばかりでなしに、椅子も、書棚も、書棚の中の書物も、みなこの室を圍むでゐる周りの暗黒い壁の色に調和するほどに、古色が錆びついてゐて外からの光線さへ、この室へ何の新らし味をも齎らしてはこなかつた。私にはその瞬間に、こ

室の主人の風貌を想像して見たり、またこの室の主人が入つてきた時に、最初に何といつて話しかけようか、なぞと、それからそれへと連想をつゞけてゐた。私のイメーヂの中に映つてきたベルグソンは、痩せて、質素で年老いてはゐるが、しかしじつと考へこむだ、落付きのうちに威嚴を包むでゐる、靜的な老學者の姿であつた。しかしベルグソンが忽がしくこの室へ入つてきた瞬間に、私の想像の樓閣は一撃のもとに破壊されてしまつた。

ベルグソンは一八五九年十月巴里に生れたので、丁度六十二歳になつてゐた。彼の額はもう大部分禿げこむでゐたし、彼の着てゐたフロックは色も褪め、襟のところに幾つかの穴もあいてゐた。それに彼の首に結ばれたネクタイとカラとは、今では耶蘇教の牧師さんにでなくては見ることのできないような時代離れのした形のものであつたので、この室の主人として應はしいような點が見えてゐないことはなかつたのであるが、しかしこの古典的な服裝の老學者にドアを排して室に入つてきた時から、彼の服裝を掩護してゐると思はれるほどに、才氣の喚發する、せか〳〵しい態度の持主であつた。彼はこの淡闇い室の中を、師走の往來を行く商人のように歩るいた。何がそんなに忙がしいのかと問ふて見たいほどに足をちよこ〳〵と動かしながら、拱手の両手を少しの暇も休めないで、口早やに次から次へと喋つてゆくのであつた。

彼の父は猶太人であつた。彼の母には愛蘭人の血が交つてゐた。さう思つて彼の顔を覗きこむと、尖張り鼻のあたりに猶太人らしい臭ひが殘つてゐないこともないが、かうやつて話してゐると、彼の血液の八、九割はケルト種だといふ感じを抱かせずには置かない敏捷さが閃めいてゐた。そして私がわざ〳〵彼を訪ねたといふことを、心から感謝するといつて、それほど感謝してゐるとは思はれないほどに、早口に喋つた。

私は…………、私の托されてゐる用向きから私の話を始めた。ベルグソンはこれより先きスコットランドからも、瑞典からも招かれてゐるが、今は戰爭中に怠つた——怠つたと彼は自ら語つた——哲學の研究を續けなくてはならないし、それに今は倫理學についての著述に沒頭してゐるので、この一、二年はどこへも足を踏み出すことはできさうにもない。しかしベルグソンはその滯りがなくなつた時には、是非東洋の、風色に接したいといふてゐた。『私は日本については非常に驚異の眼をもつて見てゐるものである。その[illegible]

は、私たちが研究しないではゐられない不思議な出來事なのである。私は是非一度日本の土を踏むで見たい』とベルグソンはそれから『日本の友人』のことを話した。日本には澤山の友人がある日本に行つてそれ等の友人の諸君と哲學について議論を戰はせたいと。私は私の知つてゐる範圍で、ベルグソンの哲學が日本の哲學界にどういふ影響を與へたかを話して見た。が彼自身の方が、私よりもよく知つてるほどに、日本における彼の哲學の地位を知つてゐた。そして『創造的進化が日本で飜譯されたことに話が及ぶと、彼は『笑』も飜譯されたように思ふと附け加へた。

永久に、不斷に、創造して止まることがない、それが人生なのであるし、ベルグソンはこういつて彼の哲學を論じ始めた。『變動なのです。凡てが流動なのです。そして變動するといひ、流動するといふことは、決してたゞ言葉だけにいふべきことではなく、私たちがほんとうにそれを信じなくてはならないのです。私のよく引く例なのですが、私たちが夏の日光を浴びながら野外に立ちとまつて周圍を見渡したとします。邊りはたゞ沈默と休止とに見えるでしよう。しかしその沈默と休止とに見えてゐる夏の野には、草が生成しつゝあります。樹の葉が成長しつゝ或は枯れつゝあります。そこに佇んでゐる私たち自身も不斷に年とりつゝあります。だから私たちが事物の眞髓を捕えようとすれば、これも私のよくいふ譬喩なのですが、活動寫眞のするように、運動です、運動を映出するように運動そのものを捕へなくてはならないのです。人生は事物ぢやない。これは運動なのです。持續的な運動なのです。精神も完體ぢやなくて運動なのです。持續的な運動なのです。つまり變化なのです。』彼は矢繼早やにこういつて話をつゞけた。それは矢繼早やではあつたが話が進むに從つて、だん／＼と情熱が加はつてきた。灰色になつてはゐるが、太いその眉には、情熱の焔が燃え立つてゐるように見えてきた。彼れの奥まつてはゐるが、その兩眼が若者の眼のように希望に輝いて見えてきた。

ベルグソンが初めてジェームスを訪ねたのは、一九〇八年、倫敦においてゞあつた。ジェームスはその時の印象を彼のその時の講演のうちで述べてゐるが（それは後に『多言的宇宙』の名のもとに出版された）ジェームスの眼にはこの佛蘭西からの訪問者は、また比較的に－比較的にといふ言葉が使つてはあるが－『青年』であつた。この『青年』は『そんなに謙抑で質素な人ではあるが、しかしこうした智的天才なのだ！』ジェームはベルグソンについてこういふことを書いたことがあつた。そしてまた彼は、この『青年』の創造力を稱えて、『彼の創造性は私

を惑はす』とまでいふたことがあつた。ベルグソンがジエームスに會つてから十三年たつて、私は今この『青年』と相對してゐるのであつた。この『青年』は今は彼の額に老人の刻印を押されてはゐるが、矢張り十三年前にもこうであつたかと思はれるほどの輝いた眼に、若者の情熱を漲らして、質素で謙抑ではあるが、『智的天才』として、犯しがたい威嚴の力を示してきた。

彼は彼の哲學を自ら、『變動の哲學だ』といふた。彼の變動の哲學は、安定の形式のうちに自分自身を嵌めこもうとする智力を最後の價にまで引下げずには置かなかつた。『生命は流動である。それは靜的なものぢやない。だから智力は生命を理解することはできないのです。變動の意味を摑むためには、智力は全く無能なのです』と。彼は彼が十數年來繰返してきた彼の哲學を一とほり温習をした。直觀論が出る。創造的進化といふ言葉が繰返される。然り彼の述べてゐるとの凡てはそして彼の述べてゐる比喩の言葉そのものさへも、殆んど凡てが彼の著述のうちに書き古るしたことではあつたが、彼自身の口から、そして美しい言葉の裝ひのもとに、彼自身の唇から流れ出るのを聽いてゐると、凡てが新らしいものとして、凡てがこの藝術的哲學者の生命の迸りとして情熱に燃える。『知識の樹は生命の樹ではない』といふバイロンの言葉が私の眼の前にちらついてくる。嘗つて老哲學者ウヰリアム・ジエームスを『惑はした一彼は、今私の前に、それも矢張りジエームスのいつてゐるとほりマヂシアンのように立つてゐる。

ラッセルから私に宛てた手紙によつて、彼がベルグソンについてどういふ感じをもつてゐるかをよく知ることのできた私はベルグソンからも、その對岸の哲學者ラッセルのことを聽いて見たくてたまらなかつた。話が直觀と智力とのことに及んだ時にその機會がきたと私は思つた。で私はラッセルが日本へきたこと、そして私が嘗つてそのラッセルによつて書かれたベルグソン哲學の批評を讀んだことのあること、を話して見た。ラッセルの名を聽いた時に、今まで情熱に燃えてゐたベルグソンの顏には、私の氣のせいか、どこにか暗いところが見えて來た。そこでこの老哲學者は顏を少し背向けたまゝで、私の問に何とも答へないで、幾十秒かの沈默へと入つた。私はこの場合急ぐにこれも最近に東洋を訪問した哲學者としてチユウイーのことに話を移すとの、より少く不賢明であるとに氣がついた。でチユウイーも日本へ來たことを、話して再びベルグソンの方を見向いてみた。チユウイー！おゝ彼は優れた哲學者です！私からチユウイの名を聞いた瞬間にこの哲學者は直ぐとその短い

沈默を破つて例の早口で讃美の言葉をつゞけた。曾つてジエームスを稱へたことのあるベルグソンはまたそのジエームスの門下としてのチョンチユイーを讃美することを惜んではゐなかつた。無論その讃美は、自分の後輩に對する先人の讃美のそれのようではあつたが。

ベルグソンは今倫理道徳の方面に彼の研究を集中してゐると、彼自らがいふた。この方面に彼は從來まだ手をつけてゐないので、彼の新著が發表された時に、彼が再び世界の學界から新しい興味を以つて研究されるであらうことは想像にあまりあるところではあるが、しかし不斷の變、直觀、創造的進化、自由意思、といふように並べて見ただけでも、彼の來るべき道徳論なり、倫理學なり、政治論なりが、どういふ色彩を作つて出現するかといふことも、また想像にあまりあるようにも思はれる。彼れの哲學のやうに多量に、倫理的の感激に根ばえしてゐるものにとつては、哲學それ自身が道徳論そのもののようにも思はれる。ある哲學者が彼を批評したように、彼の哲學は、プラグマチズムと等しく、『形而上學的理論』でなくして、寧ろ人性に關する理論であり、若しくは『理論』でなくしく『實行』であるといふことも出來るかも知れない。

ベルグソンの直觀の哲學、變の哲學、生命の哲學、神秘主義の感激が、ソーレルによつてサンヂカリズムの理論に演繹されたことは人のよく知るところであるが、私はベルグソンの意思の自由の哲學、創造的活動の哲學、非機械的人生觀が、マルクスの唯物史觀について、どういふ關係にあるかを、ベルグソンその人の口から聽いて見たいと、丁度私たちの話が、自由の問題に入つた時に、私は思ひつかないではゐられなかつた。彼が果して私の希望どほり、この問題、こうした變愛氣の多い問題に就ての意見を述べるかどうかを、私は心のうちに危ぶんではゐたがしかし私はこの機會に唯物史觀のことを口にして見た。『それは大問題なのだ!』とこう投げるようにいつたベルグソンは、少しの間如何にも當惑したような落付きを見せてゐたが、それも短い瞬間だけで、またもとの早口の老哲學者へと歸つた。『唯物史觀!それは充分ではないのです。』と。彼は唯物史觀を眞向から否定したり、または受容れたりすることの代りに、それは充分ではないのですといふた。何故充分ではないのであらうか?ベルグソンは續いて述べる、經濟關係だけが人間の社會生活を支配するのぢやないのです。無論それも重要な要素でしよう。しかし私たちは理想の存在を考へなくちやならない

のです。理想が人間の生活に如何に重大な役目を演ずるもので あるかなと。私はこの際に次のような二、三言を挿んだ『そうです、如何にもそうなのです、しかしマルクスは理想なり、イデーなりを無視したといふわけではなくて、たゞそれが經濟的メキャニズムの上部構造だといつてゐるに過ぎないのだと思ひますが……』すると私の言葉の終るのが待ち遠しいといつた風に急はしく拍手をしてゐたベルグソンは、『いや、それも一面なのです。一面を見てゐるだけなのです、理想は決して經濟關係によつてだけ製造されるものではないのです、例へば佛蘭西革命、佛蘭西大革命（彼は特に「大革命」といひ足した）を御覽なさい。無論この佛蘭西大革命には貧困の分子もあつた。（彼はこの時偶に貧困といふ言葉を使つた、私には彼が如何にこの場合貧困の問題を佛蘭西革命と關連せしめたかゞ分らなかつた。もつと詳しくいふと、唯物史觀と佛蘭西大革命との關係を論ずるために、彼が何故に佛蘭西革命が『貧困』からきた革命でないといふことをいはうとしたかゞ私には分らなかつた）がそれは結局十八世紀の哲學、啓蒙哲學によつて指導されたのです。この哲學の先行がなくては佛蘭西大革命を想像することはできなかつた』と、論じた。『しかしその啓蒙哲學も、結局十八世紀の經濟的メキャニズムの上部構造ぢやあないでしょうか？』私は彼の言葉の途切れを待つて再びこう問ふて見た。いや、その哲學も、實は十七世紀に既に存在してゐたのです。だからそれが佛蘭西革命當時の經濟組織の産み出したものではありえないのです。ベルグソンは急がしげに、そして分りきつたことだといつた風に、私の言葉を遮つた。

啓蒙哲學は既に十七世紀に存在した。だから十八世紀の經濟組織よりは先行した存在だ！慥にそのとほりだ。十八世紀よりは十七世紀の方が先きなのだ。これほど分りきつたことはない筈であつたのだ。だがしかし、その『十八世紀の經濟組織』は、十八世紀になつて初めて生れたのか。無論ハーグレーブスや、アークライトや、カートライトや、諸々の機械の發明者は、ニュートンや、ベーコンや、デスカーテスや、諸々の科學者よりも後の時代に輩出したに相違ないし、ホッブスや、ロックなぞの自然主義的個人主義の生れ出たのも、十七世紀中であつたに相違ないのである。だがしかし商業的革命の來たのはそれよりももつと以前のことではなかつただらうか！十七世紀の初めに私たちは既にマーキャンチリズムの時代を經驗したではなかつたであらうか。私はこういふことを考へずにはゐられなかつたのである。しかし私はたゞ私の心中でそう考へゐただけに止めて、口に出しては何ともいはうとはしなかつた。そしてベル

グソンが次のように言葉を續けてゆくのを默して聽いてゐた。社會の經濟關係と人間の理想とはともに相互關係をもつのです。例へば……（私はこの哲學者の有名な例へばを聽いた刹那に、彼は『證明』の必要な時に『例證』をもつてそれに代えるのが常だ、と誰かのいつたベルグソン批評を思はずにはゐられなかつた）……それは肉體と精神との關係のようなものなのです。ともに存在して、そして一方だけでは存在の出來ないものなのですと。ベルグソンは更に言葉を續ける。『經濟組織の一面だけを見て、そして暴力によつて社會問題を解決しようとするのは大きな間違ひなのです。暴力は人生の奧深くに徹することはできないのです。それは人間の心を變へる力はないのです。またそして理想だけを說いても、幾ら說いて見ても、それはたゞ智識階級にだけは分るでしようが、國民の深さに徹することは不可能なのです』

私は唯物史觀の問題から社會主義といふ、もつと漠然とはしてゐるが、しかしもつとこの書齋の老哲學者から見て隔りの大きそうな問題へと話頭を移した。『社會主義？社會主義といつただけではあまり漠然としてゐます。……若し夫れが正義といふ言葉と同意義なら無論異存はないのですが――といつてゐるベルグソンの態度には、この問題から早く逃げたい逃げたいといふ樣子が見えてゐた。正義と同意義なら、ベルグソンでなくつたつて、誰れだつて異論のあらう筈がない。また異論があつたにしても、異論を唱へる筈がない。私の聞きたいのは、『社會主義が正義であつた場合』に、どうこうといふのではなく、社會主義が正義であるかないかの問題であつたのである。ベルグソンはこの問題に正面から答へることなどこまでも避けた。しかし彼は私の問の凡てから逃避しようとはしなかつた。そして明らかに社會主義の國際主義に反對を言明した。彼曰く、各國の問題は各國それ〴〵に決定さるべきものである。各國のそれ〴〵の特性に從つて決定すべきである。一般的原則を決めて、それで各國特種の問題を決定しようとするものは誤謬であると。彼また曰く、獨り社會主義についてだけではない、凡ての問題は一般に原則によつて決定することはできない。それはその問題自身において決定しなくてはならない。これが彼の哲學であると。更にまた曰く、社會主義の色々の流派についても、例へばソレルが私の哲學とサンヂカリズムとを結び付けてゐるが、これ等の諸々の流派の社會主義の問題も、それ〴〵六百頁位（特に六百頁と彼はいふた）の著述を必要とするものであつて、それはみなそれ〴〵それ自身において決定さ

るべきものである。これが四十年來彼の說いてきた主張であると。

彼が運動の哲學を說いた時よりも、また彼が唯物史觀を批評した時よりも、彼が今日の佛蘭西――『敵國』獨逸の前に、凡てのものを失ひ、また凡てのものを見出しつゝある今日の佛蘭西――について話した時に、私はこの老哲學者、アンリー・ベルグソンの眞面目を見たかのように思ふ。私は今日の佛蘭西、繰返していふが今日の、クレマンソオや、ポアンカレや、バレスなぞの佛蘭西が、あまりに反動的な佛蘭西でもあり、またあまりに憎しみにみちた佛蘭西でもあるといふ、私の感じをそのまゝに偽らずに彼に語つた。彼の態度は見るく\うちに變つて來た。そして突然に君は東部佛蘭西を見たかと問ふた。私は東部佛蘭西はたゞ獨逸からの汽車の窓に眺めたゞけだと話した。すると彼は舊戰線を見るがいゝ、東部佛蘭西を見るがいゝ、と、同一のことを二度叫びながら、私を如何にも佛蘭西への同情の缺けた外國人だと思つたように、東部戰線を見たものでなくちや現代佛蘭西人の心持ちが分るものぢやないと言ひ切つた。『佛蘭西は一九一四年に出來るだけ戰爭を避けようとしたぢやないか。君は他の佛蘭西人に會つたか？佛蘭西政府は決して反動的ぢやないのだ。佛蘭西人は寛大に過ぎるのだ。佛蘭西人はもつと〱獨逸を憎惡しなくちやならないのだ！』老哲學者の顏色はだん〱と朱色に變つて行つた。彼の眼光は益々輝きを加へて行つた。今の瞬間まで叡智の印のように見へてゐた彼の太い眉毛が、強い憎みの表徵として激しく動き始めた。その憎しみは、『敵國』獨逸を燒き盡さなくては止まないほどであつたばかりではなしに、『佛蘭西への同情の缺けてゐる』私をも、呪はずにはゐられないほど、強い、本能的な、そして盲目的な燃ゆる焔であつた。

彼は無論大哲學者であつた。彼は詩人的哲學者であつた。しかし彼はその哲學者であり、詩人である前に、佛蘭西人であつた。そして現代の佛蘭西人であつた。――私はこう思ひながらこの老佛蘭西人と堅い握手を交はして、灰色の二階家を辭して、再びエトアールの方へと足を運んだ。

自敍傳（四）

大杉榮

一

幼年學校は、東京に中央幼年學校といふのがあつて、そして當時の六個師團の各師團司令部所在地に地方幼年學校といふのがあつた。中央は本科で地方は豫科だ。或る師團、たとへば第一師團の管轄に本籍を持つてゐるものは、其の師團司令部所在地の、即ち東京の地方にはいつた。そしてそこで三年間訓はゆる軍人精神を吹つこまれて、各地方のものが皆んな東京の中央に集まるのだつた。

僕は僕の本籍地の名古屋の幼年學校にはいつた。

父は、後に僕が社會主義者になつたのを、僕のフランス語のせいにしてゐた。フランスは革命の國だと云ふ、ごくぼんやりした理由から。僕もそれは、もつと細かなそしてもつと込みいつた理由から、部分的に承認する。が、僕の其のフランス語と云ふのは、此の幼年學校で、しかも命令的にはじまつたのだつた。

東京の地方にはフランス語とドイツ語とロシア語とがあつた。が、其他の地方には、フランス語とドイツ語としかなかつた。そして入學志願者は、其の願書の中に、其の中のどれか一つを希望語學として書き入れて置くのだつた。

僕は、フランスはもう舊い、これからは何んでもドイツだと云

ふので、ドイツ語を選んだ。そして父を覺束ない先生にして、一ケ月ばかりかゝつて、たしかヘステルの第一讀本をあげてゐた。

名古屋へ行く途中、東京で、一二年前から上京してゐた大久保を訪ねた。彼れも去年は落第して今年は東京の地方に及第したのだつた。彼れもやはりドイツ語を希望してゐた。そこへ、熊本の地方の先輩である石川が、休暇で東京に遊びに來てゐて、一緒に落ち合つた。彼れはやはりドイツ語で、しかもそれが非常にお得意らしかつた。彼れはフランス語をさんざんにけなした。大久保と僕とは、何にか書いてあるんだかちつとも分らない蟹の子文字の彼れの本をいぢくり廻しながら、大いに彼れをうらやんだ。

が、學校にはいつた其の日の、第一番目の出來事は五十名の新入生が擊劍場でせいの順に並ばされた事で、そして其の次ぎがそれに續いて直ぐ皆んなの語學を決定された事であつた。希望者はフランス語よりもドイツ語の方が遙かに多かつた。そして學校の方針はそれを公平に二分する事であつた。即ち五十名の新入生を二十五名づゝそれぞれドイツ語とフランス語とに分ける事であつた。

『尤も、今までドイツ語をやつてゐたものは、希望通りドイツ語をやらせる。しかしそれは、單にアベチエを知つてゐるとか、エス・イスト何んとかを知つてゐるとか云ふんでは駄目だ。試驗をする。』

せいの高い、胸とか尻のうんと張り出た、ドイツ士官のやうな大尉が、左の手を其のお尻の上に乘せ、右の手でねぢ上つた髯を更にねぢ上げながら、其のエス・イスト何んとかと云ふのを非常に流暢にやつた。此のエス・イスト組は僕の外にも五六人あつたやうだつた。が、皆んな試驗をすると云ふのにおどかされて默つて了つた。そして其の大尉は、恐らくは氣まぐれに、直ぐ其場でドイツ語とフランス語の二組をつくつて了つた。

僕の名は其のフランス語の方にあつた。僕はがつかりした。しかし、命令でさうきめられて了つた以上は、もうどうともする事が出來なかつた。それに、元來語學の好きな僕はフランス語も直ぐに好きになつた。そして、其他の科目はすべて中學校でやつた事の復習のやうなものなので、僕は此のフランス語に

全力を注いだ。

本はアメリカで出來たフランチ・ブックとか云ふので英語でフウト・ノオトがついてゐた。僕はまだ碌に發音も出來ないうちから、其のノオトと大きな佛和辭書と首つ引きで、一人で進んで行つた。そして二學期か三學期かの始めに、原書の辭書を渡されてからは、先生の云ふ通りに分つても分らんでも其の原書の辭書ばかりを引いてゐた。先生は又、此の辭書と同時に、向うの子供雜誌の古いのを折々分けてくれた。『分つても分らんでもいゝ、とにかく讀んで行け』と云ふのが先生のモツトオだつた。僕は忠實に貰つた雜誌の始めから終りまでを讀み通した。ちつとも分らんのを二度も三度も讀み通した。そして、さうかうしてゐる間に、原書の辭書の方もいゝ加減分るやうになり、子供雜誌も當てずつぽうに判讀するやうになつた。

學校にはいつた幾日目かの最初の土曜日に、それまでいろんな世話をしてくれた三年の或る生徒から、あしたは『岡』の下宿に集まるやうにと云はれた。

元來僕には此の『岡』と云ふ感念が少しもなかつた。讃岐の丸龜に生れてそこを少しも知らず、尾張に本籍があつてそこも碌に知らず、そして『岡』と云ふやうな言葉も餘り聞いた事がなかつた。今までゐた新發田では、殆んど皆んなが新發田か或は其の附近の人であつた。僕はそれ等の人と一緒に自分を北越男子などと云つてゐた。しかし其の越後に對しても『岡』と云ふやうな感じはまるでなかつたのだ。

で、此の『岡』の下宿と云ふのも、よくは其の意味が分らなかつた。しかし、上官の云ふ事、古參生の云ふ事はよく聞かなければならないとは、何によりも先きに教へられた事であつた
そして此の古參生には、敬禮は勿論の事、ちよつと物云ふのでも不動の姿勢をとらなければならなかつたのだ。僕は氣をつけの姿勢の儘『ハア』と答へた。

『岡の殿樣がつくつてくれたんで、皆んなが日曜日にはそこへ行つて遊ぶんだ』

其の古參生は僕が堅くなつてゐるのを慰め顏に云つた。が、僕には又、此の『殿樣』と云ふのが妙に響いた。これも感情の

字引の中にはない言葉だつた。なるほど新發田には殿樣があつた。殿樣と云ふ言葉もよく聞いた。が、其の言葉の中に籠られてゐる感謝や崇拜の感じは、少しも僕に移つて來なかつた。そして二三年前に、何んとか三十年祭とか云ふんで、其の殿樣夫婦が東京からやつて來た時、僕は彼等の通つたあとの廊下か何にかの馬鹿に臭い香に鼻をつまんだ、其のいやな感じがあるだけだつた。しかし其の殿樣のお陰で、日曜日の遊び場があると云ふのは、うれしかつた。

其の下宿と云ふのは學校から近い或るお寺だつた。其の本堂の廣間に古參生と新入生と四五十名集まつた。

『僕等は先づ國の者同士の堅い團結を形づくらなければならない。そして其の團結の下に將校生徒としての本分を發揮して行かなければならない。斷じて他國のものゝ辱かしめを受けてはならない。』

山田と云ふ、小作りのしかし嚴丈なからだの、左肩を右肩よりも一尺も上にあげた男が『訓戒』し出した。僕はそれを聞きながら、新發田で僕が一番えらいと思つてゐた不良連の首領の、井上と云ふのを思ひ出した。そして『こゝにも仲間がゐるな』と僕は直ぐ感じた。

山田の『訓戒』も、これに續いたまだ四五人の『訓戒』も、要するに皆な此の『斷じて他國のものゝ辱かしめを受けてはならない』と云ふ事に歸着した。第一期生即ち當時の三年生は、愛知縣人と石川縣人とがいづれも十名ばかりづゝで互に覇を爭つて來た。第二期生では愛知縣人の方が少し數が殖えた。そして僕等の第三期生では、愛知縣人即ち國の者が二十六名と云ふ絶對多數を占めたのであつた。が、頭數が殖えたからと云つて、油斷は出來ない。又、こんなに多い頭數をかゝえてゐて、それで負けては猶更見つともない。そこで團結を堅くしなければならない、と云ふんだ。

僕は何んで石川縣人と愛知縣人とがさうして爭はなければならないのかは分らなかつた。しかし、誰れ一人知つてゐるものゝない中にはいつて、かうして『國の者』と云ふ特別な友人が直ぐ出來たのは、何によりもうれしかつた。そして此の友人等の敵になる石川縣人が譯もなく憎らしくなつた。

『調寺』が濟むと菓子が出た。菓子屋の箱に山のやうに盛つた餅菓子が出た。それを食つて了ふと、こんどはちよつとした肴に酒が出た。本當の牛飲馬食だ。もともと餘り酒は飲めない僕も、皆んなの勢ひに驅られて、多少の盃を重ねた。そして山田等の詩吟につれて、皆んなの騷ぎのうちに『宗次妙論偉成童』など、吟じ出した。それで僕はすつかり山田等の『仲間』になつて了つた。

二

第一期生には、最初の後輩である第二期生に對しては、隨分ひどく威張つた。又隨分ひどくいぢめた。が、第三期生の僕等に對しては、隨分あまくしてくれた。そして僕は、多分そんなのには僕一人だつたらうと思ふが、直ぐに此の先輩から『仲間』として可愛がられるやうになつた。

最古參生たる第一期生の『仲間』には、學校の中では、どんな惡い事でも無事にやれた。たとへば煙草は、若し見つかれば、營倉物だつた。しかしそれも、彼等だけには、安全な場所があつた。國の先輩は僕をそこへ連れて行く事は最初遠慮してゐた。が、他國の先輩、殊に東京から來た先輩が、直ぐに僕をそこへ連れて行つた。

又、これは見つかれば輕くて譴責、重くて退校の處分に遇ふのだが、夜皆んなが寢靜まつてから左翼の方の寢室へ遊びに行く事もやはり東京から來た先輩に敎はつた。『仲間』の仕事と云ふのは、これが一番重な事であつたのだ。

此の東京から來た先輩の中には、尤も『仲間』ではなかつたが乃木將軍の息子もゐた。からだは第一期生ぢうで一番大きかつたが、學科は一番出來なかつた。そしていつも大きな口をにやにやと微笑ましてゐた。

が、そんな『武士道の遂行』へばかりでなく、僕は又本當の武士道へもまじめに進んで行つた。

何とか云ふ文學士の敎頭が、倫理の時間に、武士道の話をした。それは、死處を選ぶと云ふ事が武士道の神髓だ、と云ふのだつた。

僕は其の話にすつかり感服した。そして僕の武士道を全うす

るためには、僕自身の死處を豫め選んで置かなければならないと決心した。それ以來僕は古來の武士の死にかたをいろ〳〵と研究し出した。何にかの本を讀んでは、これはと思ふ武士の死にざまを、原文のまゝ寫し取つた。そして其の寫しはたしかに一卷の書物位にはなつてゐた。

其のいろんな死にざまの中で、僕の心を一番動かしたのは、戰國時代の鳥井強右エ門のはりつけだつた。と云ふよりも寧ろ、其のはりつけの圖に題した、誰れだかの『慷慨赴死易、從容就死難』と云ふ文字だつた。

『よし、俺れも從容として死に就いて見せる。』

僕は腕を扼して自分で自分にさう誓つた。

やはり此の教頭の話で、もう一つ覺えてゐる事がある。それは、遼東半島還附の勅語の中の、『報復』と云ふ言葉の解釋に就いてゞあつた。其の言葉の前後は今は何んにも覺えてない。多分『臥薪嘗膽して報復を謀れ』と云ふやうな文句だつたらうと想像する。此の『報復』と云ふのは、表むきは何んとかの意味だが實は復讐の事だ、と云ふんだつた。そして僕は其の表てむきの意味が何んであつたかは今でも思ひ出す事が出來ない程、其の謂ゆる本當の意味を有りがたがつた。

何月か忘れたが、多分初夏の頃だつたらうと思ふ。平壤占領紀念日と云ふのがあつた。

僕は其日の朝飯に始めて栗飯と云ふものを食はされた。ちよつと甘い味がしてうまいと思つた。おかずは枝豆と鑵詰の牛肉が少々とだつた。名古屋の第三師團全部が、其の朝は此の御馳走だつた。

當直の、前にも云つた北川と云ふ大尉が、食堂で此の御馳走のいわれを話した。平壤を占領した晩だか朝だかの、これが突嗟の御祝ひの御馳走だつたのださうだ。

食事が濟むと皆んなは講堂に集つた。そこには、正面に大きなアジア地圖が掛かつてゐて、支那の遼東半島が日本と同じ赤い色で色どられてゐた。學校ぢうの武官と文官とが左右にならんだ。そこで今云つた教頭の『報復』の話が始まつたのだつた。

敎頭の講演が濟むと、こんどは名古屋の東の町はづれにある、陸軍墓地へ連れて行かれた。北川大尉を始め學校の他の士官等は、其の多くの戰友の墓をそれ／＼に持つてゐた。そして彼等は其の墓の一つ一つに就いて、其の當時の思出を話して聞かした。

『これ等の忠勇な軍人の靈魂を慰めるためにも、吾々は是非とも報復のいくさを起さなければならない。』

士官等の結論は皆な、謂はゆる三國干渉の張本であるロシアに對する、此の弔ひ合戰の要求であつた。僕等はたぎるやうに血を沸かした。

間もなく、僕は始めての暑中休暇で新發田へ歸つた。

或日ふと父の机のひき出しを開けて見たら、『××』と云ふ字の印を押した、状袋が出て來た。封が切つてあるので僕は直ぐ披いて見た。それは、當時の參謀本部の總長か次長かの何んとかの×××××ら各師團長及び各旅團長に宛てたもので、××××××××××××××××、其のつもりで將校や兵の教育をしろ、と云ふ命令風のものであつた。

僕は直ぐに指を折つて數へて見た。××××と云へば、僕がちようど少尉になつた頃の事だ。僕は躍りあがつて喜んだ。

父の机の上には、ロシア語の本だの、黑龍會の何んとか云ふ雜誌だのが幅をきかしてゐた。

（が、こゝまで書いて來て、此の記憶が或は幼年學校入學以前の事でなかつたかと云ふ疑ひが出て來た。それは、これが片田町の家の、父の室での出來事であつたやうに思はれるからである。其頃から父は旅團副官をやつてゐた。幼年學校にはいる其の年か前年かに、僕の家は尾上町に引越した。どうも此の尾上町での事ではなかつたやうだ。すると、ロシアに對する報復と云ふ事を敎へられた時にそれを思ひ出して、そして其の思出が却つて後の事實のやうに記憶されて來たのかも知れない。しかし、僕が其の××××を見て、少尉になつてからの事だと喜んだのは、確かに事實である。そして僕は、此の『××』と云ふ事に就いて既に何にか知つてゐたものと見えて、其の喜びを自分一人の胸の中にたゝみ込んで罪

つて誰れにも話した事がなかつた。）

三

十幾番かではいつた僕は、學年試驗の結果七、八番かに席順があがつた。

が、此の學科の上で席順を爭ふと云ふ事は、中學校以來僕にはまるでない事だつた。一番とか二番とか云ふ奴は、氣のきかない、糞勉強の、馬鹿だときめてゐた。『なあに、實力では遙かに俺の方が上だ』と窃かに威張つてゐた。そしてただいゝ加減上の方の席にゐる事で、十分滿足してゐた。で、學科は、前にも云つたやうに好きな語學に耽けるほかは、殊更に勉強する必要もなく又碌に勉強もしなかつた。

しかし腕力とか膂力とか、又はそれに基づく勢力とかの上では最初から決して人後に落ちなかつた。尤も單なる腕力では、せいの順で右翼から十四五人目の僕は、とても一番とは行かなかつたらう。が、暴力とか勢力とか云ふ事になれば、それには大ぶ趣きが違つて來る。それに僕には愛知縣と云ふ絶對多數の背景があつた。

古參生等の『仲間』にはいつた僕には、先づ同期生等の間で傍若無人の振舞をした。僕と同じ寢室のものや左翼の寢室のものは默つてゐた。が、中の寢室のものゝ中に、中村と云ふ男がゐた。東京のもので、口先きばかりでなく、眞から元氣のいゝ男だつた。そいつが、僕がそいつの隣りの何んとか云ふ男のところへ夜遊びに行くのを、愚圖々々云ひ出した。まだ外にも二三人それに同ずるものがあつたやうだつた。或晩僕は、何にかの事から其の中村を、そいつの寢室の皆んなの見てゐる前でなぐりつけた。奴は腕まくりしながら默つて、なぐられて笑つてゐた。それでそいつは友達になつて了つた。此の中村は其後胸を惡くして死んだ。そして其の弟の彝と云ふのが第五期にはいつて來た。西洋畫のあの中村彝君がそれだ。

又、同じ寢室で、僕よりも右翼に佐藤と云ふのと河野と云ふのとがゐた。どちらも、武揚學校と云ふ名古屋での陸軍豫備校から來たもので、其の友達が多かつた。因の名古屋のものは、大がい其の友達だつた。中にも、僕よりも右翼にゐた濱村と云

ふのと坂田と云ふのとが餘程親しかつた。其の佐藤と河野とがちよい〳〵僕に敵意を見せだした。そして濱村や坂田は、そんな時には、僕の敵だか味方だか分らん變な態度を取つた。其の中のどの一人でも僕には强敵なのに、かう大勢で組んで來られてはとても堪らなかつた。早速僕は濱村と坂田とを呼んで、『佐藤と河野との二人と決鬪するが、君等の態度をはつきりきめろ』と云つた。二人は中立を誓つた。で、僕は直ぐに、先づ大きな方の佐藤を呼び出した。同期生ちうで一番大きな男で、擊劍も一番うまかつた。器機體操場の金棒の下へ連れて行つて、そこでいきなり毆りつけた。げんこは眼にあたつた。彼はほろ〳〵涙を流して、默つて其の眼を押へてゐた。そこへ濱村と坂田とが心配して見に來た。そして二人の中へはいつた。河野は直ぐに好意を見せて來た。そして五人は、五人組をつくつて、何んでもの惡い事の協同者となつた。

四五年前に、ふと此の佐藤が訪れて來た。子供の時の友達だと云ふので、誰れかと思つて玄關へ出て見たら、昔しのまゝのせいの高い顔一ぱい濃い髯の彼れだつた。聯隊長とかと喧嘩して豫備になつたんださうだが、今になつて止される位なら、あの時分一緒に退校されるんだつたなあなどゝ、職業の世話を頼みながら今の僕をうらやんでゐた。其後南米行き移民の監督か何かに有りついたとか云つてゐたが、どうしたか。そしてついうつかりして、昔し僕が毆つた眼の中の赤い疵のあとが、まだ殘つてゐるかどうかも見落して了つた。

擊劍は佐藤の次ぎが僕だつた。器機體操は佐藤と河野と僕とが相伯仲してゐた。が、駈足は僕が一人圖拔けて早かつた。僕等の班長をしてゐた河合と云ふ曹長が、これも駈足をお得意としてゐたが、いつも口惜しがりながら僕のあとについて來た。

學科の濟んだあとで、毎日そんな遊戯をやらされてゐたが、其のほかによくフウトボオルや綱引をやつた。そして此の二つの遊びでは、班長が組を分けるのに困つて了つた。最初前列と後列とに分けた。すると幾度やつても僕のゐる前列が勝つた。で、こんどは、僕一人だけを後列の方の組に廻はして見た。後列が勝つた。フランス語の組とドイツ語の組とに分けても見

た。が、それでもやはり僕のゐるフランス語の方が勝つた。仕方なしに班長は『君はそばで見てゐろ』と云つて、僕を列の中から出して了つた事もあつた。

が、困つたのは游泳だつた。

最初の夏は、伊勢のからすと云ふ海岸へ游泳演習に行つた。先生は觀海流の何んとか云ふ有名なお爺さんで、若い時には伊勢から向う岸の尾張の知多半島まで、よく泳いでは味噌を買ひに行つたと云ふ話のある人だつた。學校には此の伊勢出身で、觀海流の三里や五里と云ふ遠泳に及第したものもゐた。殊に佐藤などは一番の名人だつた。其他にも、名古屋出身のものは大てい皆な此の觀海流を泳いだ。

子供の時からよく川遊びや海遊びはやつたが、ばちや〱騒ぎ廻るほかにまるで泳げなかつた僕は、實に閉口した。そして第一日目の試験に力一ぱいで漸く二、三間泳いで、一番下の丙組へ編入された。

古參生や同期生の助手連が、僕等の足頸を握つて、其の觀海流と云ふのを教へた。が、僕はそれを教へられるのが嫌なのと、足頸を握られるのがいやなのとで、いつも逃げ廻つては我流の犬泳で泳いでゐた。

それでも一週間目の第二回の試験には、僕は其の犬泳ぎで千米突泳いで、甲組にはいつた。そして二週間目の最後の試験には、やはり其の犬泳ぎで最大限の四千米突泳いで、來年は助手と云ふ事になつた。

其の來年には知多半島の大野へ行つた。僕は名は助手でも、觀海流も何にも教へる事は出來なかつた。そして自分の受持つた丙組の幾人かをただ勝手に遊ばして置いた。が、二週間目の最後の試験の時には、其の中から一人、やはり我流の犬泳ぎで四千米突泳ぎ通したのが出た。それは僕が可愛がつてゐた第四期生のまだほんの子供で、途中で泣きさうになるのを絶えずそばから激勵して、無理やりに引ぱつて行つたのだつた。そして其の子は、本當のゼロから出立してそこに到達した。其の年のたつた一人として好成績を謳はれた。

最近、汽車の中で此の男に會つたが、參謀肩章なぞをさげて

立派な士官になつてゐた。はじめ僕は直ぐ前にゐるのにそれと氣がつかなかつたが、向うで名刺を出して見せて、『御存じでせうな』と云はれたのでやつと分つた。やはり昔しのやうに、『ハア、ハア……何とかであります。』と上官に物云ふやうに話してゐた。其時にはまだ大尉だつたが、此頃ではもう少佐になつたらう。

四

僕の腕白は二年になつて益々ひどくなつたが、それと同時に又僕の頭を押へる奴が出て來た。それは、第一期生が出て行つたあとで始めて其の頭をあげた、第二期生だつた。

僕は第一期生の『仲間』と一緒に、外套を頭からかぶつて、第二期生の左翼の寢室を襲ふた事もあつた。又第二期生の『少年』をちよい／＼からかつた事もあつた。そんな事は古參生たる第二期生共には非常な憤慨であつたに違ひない。そして其の少年の一人のゐた石川縣人共が、先づ僕を目の仇にしだした。

彼等は僕の『生意氣』な事實をいろ／＼と擧げて、國の第二期生等に僕の處分を迫つた。國の第二期生には淺野といふ『仲間』の首領がゐた。が、彼れにもそれをどうともする事が出來なかつた。又、國の第二期生の中にも密かに僕を惜んでゐる奴等があつた。其の結果僕は屡々殴られた。大勢で取り圍んで、氣をつけの姿勢をとらして置いて、ぽか／＼殴るんだ。石川縣の奴等もよくかうして殴つた。

此の制裁には一切手を出す事が出來なかつた。古參生には反抗する事が出來ないのだ。僕はたゞ倒れないだけの用心をして默つて打たれてゐた。倒れると、蹴られる恐れがある。が、げんこで殴られるだけなら高が知れてゐる。そして僕は、出來るだけ落ちついて、其のげんこの飛んで來るたびに一つ二つと胸の中で勘定してゐた。

其の勘定の出來る間は、どんなにひどく打たれても我まんが出來た。が、どや／＼と大勢が一ぺんにのしかゝつて來て、どいつがどう殴るんだか分らなくなると、我まんが出來なくなつた。殊に、後ろや横から密つと蹴る奴があつたりすると、そしてこれは實によくあつたのだが、もうどうしても我まんが出來なかつた。が、氣をつけの姿勢のまゝ手出しをする事の出來な

い僕は、たゞ默つてそいつを睨みつける事のほかに仕方がなかつた。

前に班長と云ふ言葉を使つたが、これは下士官で、生徒監の士官を助けて、生徒の監督をしてゐた。それが一級に曹長一人と軍曹一人とゐた。

河合軍曹は僕を可愛がつて、大がいの事は大目に見てくれた。よくいろんな犯行を見つけたが、いつも大きな聲で怒鳴るだけで、めつたにそれを生徒監に報告する事はなかつた。

が、間もなく此の河合軍曹が轉任になつて、何んとか云ふばかに長つ細い軍曹が來た。此の軍曹はよく妙な手帳をひろげては、自習室を廻つて皆んなの顔とそれを見くらべてゐた。或時僕は窃つと其の手帳をのぞきこんで見た。そこには、勇敢とか粗暴とか寛仁とか卑劣とか云ふやうな性質上の言葉がならんでゐた。其の下に二三行づゝ其の説明らしい文句がついてゐた。曹長はきつと、此の手帳の中にある二字づゝのどれかの言葉によつて、皆んなの性格をきめてゐたのだ。

曹長は來ると直ぐ僕を變な目で見だした。又此の曹長が來ると同時に、それまで僕等が坊ちやん軍曹だとかガルソン軍曹だとかあだ名してゐた程おとなしかつた、もう一人の班長の何熊軍曹が、急に意地悪くなり出した。そして二人で僕のあとを嗅ぎ廻つては、何にやかと生徒監に報告した。

其の結果は殆んどのべつ幕なしの外出止めとなつた。一週間にたつた一日の日曜の外出を止められるんだ。それも、汚れた靴下を戸棚の奥に突つこんであつたとか。晝、寢臺に腰かけてゐたとか。其他、今ちよつと思ひ出せないやうな馬鹿々々しい事ばかりでだ。

二階の僕等の寢室の向ひに下士官等の室があつた。僕等はよくそこへ、煙草がなくなると、夜盗みに行つた。夜は週番の下士が一人其の下の室に寢てゐた。

或時また皆んなの煙草が切れて了つた。河野が一番に盗みに行つた。其の次に僕が行つた。が、僕は其の室へはいつて行つて

机の引き出しに手をかけた時、『コラ』と云つて捕まつて了つた。それは週番の稲熊軍曹だつた。

僕は當直の生徒監の室へ引つぱつて行かれた。

『實は數日前から、尤も其の以前にもちよい〳〵あつたのですが、下士室で皆んなの煙草がよくなくなりまして殊にきのふは私の金が少々なくなつたのです。で、けふは是非其の犯人を取りおさへようと待ち構へてゐましたが、果して此の大杉が室へ忍びこむのを見まして、今取りおさへて來ました。』

軍曹は勝ち誇つたやうにして吉川中尉に報告した。中尉は僕等第三期生の受持で、岡の出身で、そして僕を可愛がつてゐた唯一の士官だつた。中尉は青くなつた。そして軍曹には詳しい報告書を書いて來るやうにと云つて其の出て行つたあとで僕を訊問し出した。

『煙草なぞ盜つた事はありません。金も勿論の事です。けふはズボンのボタンが一つなくなつたので、今晩ぢうにつけて置かうと思つてそれを取りに行つたゝです。』

僕は飽くまで泥棒の事實は否認した。

『其のズボンと云ふのはどのズボンか』

『今はいてゐる此のズボンです。』

僕はさう云つて、軍曹に引つぱられて來る途中に擰め引きちぎつて置いた、ボタンのあとを見せた。

『うん〳〵』

中尉はかうなづいたまゝ暫く黙つて何か考へてゐた。金でも煙草でも、とにかく盜んだとあれば、勿論直ぐさま退校だ。又、單にボタンを取りにはいつたとしても、夜無斷ではいるべからざる室へはいつたのだから、重營倉は免れない。それに、たとへさうとして處分して置いても、下士からの報告の嫌疑は免れない。それでは日本人の將來にもかゝはる。又自分の責任にもなる。

中尉は軍曹を呼んだ。そして斯う云つた其の考へを、僕にも聞かせるやうにして話して、本人の將來のために其の報告書を破つてくれないかと頼むやうに云つた。

軍曹は不性々々に承知した。が、それ以來軍曹や曹長の目は益々僕の上に鋭くなつた。

五

第二期生の何とか云ふ中尉は、自分の受持でない僕に對しては、殆んど無關心だつた。が、第四期生付の北川大尉は、其のまだ第一期生付であつた頃から、妙に僕を憎みだした。

學校の前庭で彼に會ふ。僕は其頃の停止敬禮といふのをやる。一間ばかり前で止まつて、擧手の禮をするのだ。すると彼れはきまつて暫く僕を睨みつけて、帽子のひさしに當てた指先の位置がどうの、掌の向けかたがどうのと、何にかの小言を云つた。そしてうまく上衣かズボンのボタンでもはづれてゐるのを見つければ、直ぐ其の次の日曜日は外出止めと來た。又、めづらしく今日は外出が出來ると思つて喜んでゐると、銃器の檢査だとか清潔檢査だとか觸れて寢室にはいつて來て、銃の手入が足りないとか靴に埃りがかかつてゐるとか云つて、折角服まで着換へてゐるのを外出止めにした。

或日大尉は、夕飯の時に、けふの月は上弦か下弦かと云ふ質問を出した。

『大杉！』

僕は自分の名を呼ばれて立つた。それが下弦だと云ふ事は勿論僕は知つてゐた。けれども僕には、其のかと云ふ音が、どうしても出て來なかつた。吃りにはか行とた行、殊にか行が一番苦物なのだ。況んや、更に其の下にもう一つか行のげが續くのだ。

『上弦でありません。』

仕方なしに僕はさう答へた。

『それでは何だ？』

『上弦でありません。』

『だから何んだと云ふんだ？』

『上弦でありません。』

『だから何んだ？』

『上弦でありません。』

『何に？』

『上弦でありません』

問ひ返されゝば益々言葉の出て來ない僕は、軍人らしく即答

するためには、どうしてもさう答へるよりほかに仕方がなかつた。それを知つてゐる皆んなはくす〳〵笑つた。

『よろしい、あしたは外出止めだ。』

大尉はさう云ひ棄てゝ、『直れ！』の號令で皆んなが直立不動の姿勢をとつてゐる間を、さつさと出て行つて了つた。

吃りの事のついでに、僕の吃りをもう少しこゝに書いて見よう。

母はそれを少さい時にわづらつた氣管支のせいにしてゐた。が、父方の親戚に大勢吃りのある事は前にも云つた。生れつきの吃りであつたらしい。そして小學校の頃には半分啞のやうだつた事を記憶してゐる。其の吃るたんびに母に叱られて毆られた事もやはり前に云つた。

父はそれを非常に心配して、『吃音矯正』と云ふやうな藥を本の廣告で見ると、きつとそれを買つて僕にためして見た。が、いつも其の効は少しもなかつた。

かう云ふとよく人は笑ふが、僕には一種ごく内氣な恥かしやのところがある。ちよつとした事直ぐ顔を赤くする。人前でもじ〳〵する。これも生れつきではあらうと思ふが、吃りの影響も決して少なくはあるまい。又、云ひたい事がなか〳〵云へないので、ぢり〳〵する。いら立つ。氣も短かくなる。又、人が何か笑つてゐると、自分の吃るのを笑つてゐるのぢやあるまいかと、直ぐ氣を廻す。邪推深くなる。と云ふやうな精神上の影響が可なりあるやうに思ふ。

が、もう一度北川大尉の話にもどる。

或晩、學校の直ぐ裏の裁判所から火事が出た。僕等は不時呼集の訴へるやうな喇叭の聲で目がさめた。學校の教室と塀一つで隔てゝ隣り合つた登記所が燃えてゐた。

三年生は直ぐポンプを出して消防に當つた。

二年生はあちこちの警衛に當つた。

北川大尉は、それ〴〵の命令を終ると、『大杉！』と僕を呼んで、更に五六人組の他の四人とほかに一二名呼んで、直ぐ御眞影を前庭へ持ち出して、其の警護をするやうにと命じた。僕

等はそれを非常な光榮と心得て、喜んで飛んで行つた。

そこへ、暫くして不時呼集で驅けつけた何とか云ふ聯隊長が來て、僕等の立つてゐる植込のそばで小便をしやうとした。

『聯隊長殿、こゝに御眞影があります。』

僕は大きな聲で怒鳴りつけた。聯隊長は恐縮して、敬禮して、立ち去つた。僕等は非常に緊張した心持ちで、朝まで其の御眞影のそばに立ち盡した。そして僕は、其の間、北川大尉に對するふだんの反感をまるで忘れてゐた。

又、其後、と云つても僕が幼年學校を退校した後の事であるが、僕よりも一年上だつた田中と云ふ男が、喧嘩で中央幼年學校を退學させられて、僕の下宿にたよつて來た。田中は北川大尉と同國の伊勢であつた。で、田中のおやぢさんは心配して北川大尉を訪ねた。

『大杉と一緒にゐるんですか。それならちつとも心配は要りません。』

田中のおやぢさんは、それで安心して、息子のところへ學費を送つて來た。

僕は田中のおやぢいさんの此の手紙を見た時、どう云ふつもりなのか、北川大尉の氣持ちがちつとも分らなかつた。

下士共の僕に對する追窮は益々猛酷になつた。そして遂に、もう一度、あぶないところで退學されかゝつた。

四月の中ば頃に、全校の生徒が、修學旅行で大和巡りに出かけた。奈良から橿原神宮に詣でゝ、雨の中を吉野山に登つて、何んとか云ふお寺に泊つた。第一期生だけがほかの宿で、第四期生と僕等とが一緒だつた。

修學旅行や游泳演習の時には、それが殆んど毎晩の仕事であつたやうに、『仲間』のものは左賀や下級生の少年を襲ふた。其晩も僕は、坂田と一緒に、第四期生の寢所に押しかけた。

其の途で僕は、稻熊軍曹が其の室のふすまの隙間から、僕等を窺つてゐるやうなのを察した。が、さうした場合によくなるやうになれと云ふ氣になる僕は構はず目ざす方へ進んで行つた。

暫くすると、廣い室の向ふの障子が少し開いて、そこから軍曹らしい顏が見へた。僕は或る少年の×××××××××××

ゐたところだつた。軍曹の顔が引つこんだ。まだ其の邊をうろついてゐたらしい坂田は、急いで反對の方の側の障子から逃げた。僕は默つて軍曹の引つこんだあとを見てゐた。

軍曹は曹長を連れて來た。そしていきなり僕を引つぱつて行つた。

其晩はそれつきりで何んの事もなく過ぎた。翌日は多武峯を裏から登つて、向うの麓の櫻井に降りた。僕等は同期生の右翼だけでそこの小さな宿屋に泊つた。おはちを三度ばかり代へさせたりして大いに騷いだ。が、まだ何んの事もなかつた。僕等は處分なしかなとか、學校へ歸つてからだらうとか話してゐた。

其の翌日は長谷の觀音から三輪神社に出た。そして此の三輪神社の裏の森の中で、とうとう來なければならない事が來た。校長の山本少佐が、全生徒に半圓を畫かせて、嚴かに僕に對する懲罰の宣告を下した。罰は、重營倉十日のところ、特に禁足三十日に處すと云ふのだ。

六

僕は此の懲罰がどうしてあんなに僕を打撃したのかよく分らない。僕は生れて始めて、そして恐らくは絶後であらうと思ふが、本當に後悔した。三十日間の禁足を殆んど默想に暮らした。そして從來の生活を一變する事に決心した。

先づ煙草をよした。そして、今までは暴れ廻る事に費してゐた休憩時間を、多くは前庭の植物園に暮した。

學校の前庭は、半分が器械體操場で他の半分が立派な植物園だつた。溫室も大きいのが一つと小さいのが一つとあつた。そして其の間に、僕等が『天文臺』と呼んでゐたものが立つてゐた。實際そこには、氣溫、氣壓、風力、雨量などを計る可なり精巧な器械や、地震計などが備へつけられてあつた。

中學校の三四年程度までしかやらない初等學校で、こんな設備のあるのは、恐らくは今でも他にはあるまいと思ふ。だが、此の設備は、生徒のためではなくつて先生のためのものだつたやうだ。博物と理化の先生が校長とよく知つてゐて、最初學校を建築する時に、其の先生が設計したのだと云ふ話があつた。先生は一人の若い助手と一緒に、いつも、やはり此の學校

の分には過ぎた立派な設備の理化學實驗室や、此の天文臺や植物園で暮らしてゐた。が、生徒にそれを十分利用する事は少しも教へなかつた そして僕等が學校を出てから、どこから其の批難が起つて、此の天文臺は師範學校かどこかへ賣つて了つた。

僕は此の植物園の中を、小さな白い札のラテン語の學名や和名などを讀みながら、歩き暮らした。そして絶えず今までの生活を顧みながら考へてゐた。

此の反省は更に、僕を改心と云ふよりもほかの、他の方向へ導いて行つた。

それは僕が果して軍人生活に堪え得るかどうかと云ふ事であつた。吉野の事件では、將校會議で僕の退校處分を主張した士官もあつたさうだが、そして北川大尉の代りに來た國の津田大尉と受持の吉田中尉とのお陰で漸く助かつたのださうだが、實際僕は退校する方がいゝのぢやあるまいかと考へだした事だ。

下士共の僕に對する犬のやうな嗅ぎまはりは、僕の改心に何んの頓着もなく續いた。そして時々やはり、何にかの落度を見つけた。僕は先づ、果して此の下士共の下に辛抱が出來るかと思つた。彼等を上官として、其の下に服從して行く事が出來るかと思つた。尊敬も親愛も何んにも感じてゐない彼等に、其の命令に從ふのは、服從ではなくして盲從だと思つた。

そして此の盲從と云ふ事に氣がつくと、他の將校や古參に對する今までの不平不滿が續々と出て來た。

僕は始めて新發田の自由な空を思つた。まだほんの子供の時、學校の先生からも遁れ、母の目からも遁れて、終日練兵場で遊び暮らした事を思つた。

僕は自由を欲しだしたのだ。

かうした氣持は又讀書によつても餘程誘ひ出された事と思ふ。

學校では、學校で渡す教科書や參考書のほかは、一切讀書を嚴禁してあつた。しかしいろんな書物が竊かに持ちこまれた。

もう人の名も本の名もよくは覺えてゐないが、たとへば大町桂月とか鹽井雨江とか云ふやうな當時の國文科出身の新進文學

士や、久保天隨とか岡府犀東とか云ふ漢文科出身の新進文學士が、切りに古文もどきや漢文もどきの文章を發表した時代だ。僕はそんなものを切りに耽讀した。

僕が今こゝに櫻井鷗江と云ふ名を擧げたのは、其の人の何んかの文章の中に『人の花散る景色面白や』とあつたのが、當時の僕の讀んだもの丶中で覺えてゐるたつた一つの事だからである。誰れの何にが僕にどんな影響を與へたかは何んにも記憶しない。

しかし多分、それらの本の中には、恐らくは幼稚なしかし自由で奔放な、ロマンティズムが流れてゐたのではなかつたかと思ふ。

そんな讀書の影響であらうが、僕も其頃から擬古文めいたものを書いてゐた。これは三年になつてからの事であるが、離宮拜觀記と云ふものを書いて、四宮憲章と云ふ漢文の先生から、『才多からざるに非ず、文巧みならざるに非ず、只だ柔弱、以て軍人の文とす可らず』と云ふ批評を貰つた事を覺えてゐる。其の前半がきつと餘程のお得意で、そして後半が餘程の不平だつたのだらうと思ふ。

が、三年の時の何んとか云ふ國語の先生は、僕の此の『才』を大いに愛してくれた。そして或る雪の日の作文の時間に、こんな日の練兵は『豪快』でもあらうが、しかし又何んとかでもあらうと云つて、其の何んとかと云ふ熟字を教へてくれた。僕は早速僕の文章の中に其の熟字を使つた。

それから數日して、僕は生徒監に呼ばれて、本當にさう思つたのかと尋ねられて、よし本當でもそんな事は書くものでないと叱られた。あとで聞くと、先生もそんな字を教へるんぢやないと叱られたさうだ。

僕は先生の家へ一二度遊びに行つた。先生はさうした……………しさや、先生が判任官なので軍曹と共に一緒に仕事しなければならない事などを、切りにこぼして聞かした。

『君はいゝ時に出た。僕もとう／＼出されちやつたよ。何にか仕事はないかね。』

其の後五六年たつて、ふと道で先生と會つた時、先生はさびし

さうに笑ひながら云つてゐた。

其の夏僕は、訓育（實科）では未曾有の十九點何分（二十點滿點）で一番、學科では十八點何分で二番、操行ではこれ又未曾有の十四點何分で下から一番、平均して三十五番か六番かと云ふ成績表を持つて、今までの僕にはなかつた陰欝な少年となつて新發田へ歸つた。

七

僕を佐渡へ旅行にやつたりして私かに慰めてゐてくれたらしい父は、僕が又名古屋へ歸る前の晩に、始めて一晩ゆつくりと僕の將來を戒めた。母は何んにも云はずに、大きな目に涙を一ぱい浮べて、そばに聞いてゐた。僕はそれで多少氣をとり直して新發田を出た。

が、東京に着くとフランス語のある中學校の、學習院と曉星中學校と成城學校との規則書を貰ふ事は忘れなかつた。そして別に東京遊學案内と云ふ本をも貰つた。

幼年學校を退校する決心では素よりなかつた。もう自由を欲するなどゝ云ふはつきりした氣持ではなく、たゞ何んとなく幽鬱に襲はれて仕方がなかつたのだ。そしてぼんやりとそんなものを手に入れて、それを讀む事によつて輕い滿足を感じてゐたのだ。

學校に歸つてからも、暫く、そんな幽鬱な氣が續いた。そして一人で、夜前庭のベンチに腰をかけて、しく／＼泣いてゐるやうな事も屢々あつた。

が、直ぐにこんどは、亂暴な氣持が襲ふて來た。鞭のやうなものを持つては、第四期生や新入の第五期生をおどして歩いた。下士官共にも反抗しだした。士官にも敬禮しなくなつた。そして學科を休んでは、一日學校のあちこちをうろついてゐた。

軍醫は腦神經衰弱と診察した。そして二週間の休暇をくれた。

學校の門を出た僕は、以前の僕と變らない、たゞ少し何にか

物思ひのありさうな、快活な少年だつた。そして其の足で直ぐ大阪へ行つた。

大阪には山田の伯父が旅團長をしてゐた。僕は毎日、辨當と地圖とを持つて、攝津、河內、和泉と、所定めず步き廻つた。どうかすると、劍を拔いて道に立てゝ、其の倒れる方へ行つたりもした。

そして、すつかりいゝ氣持になつて學校へ歸つた。

が、歸ると又、直ぐ病氣が出た。喧嘩の病氣だ。氣ちがひだ。

其の間に、何にがもとだつたのか、愛知縣人と石川縣人との間にごた〳〵が持ちあがつた。石川縣人は東京や其他の縣の有力者に助けを求めた。

其頃僕はいつも大きなナイフを持つてゐた。或時はそれでそばへ寄つて來ようとする軍曹をおどしつけた。皆んなはそれを知つてゐるので、敵の四五名も其のナイフを研ぎだした。

夕方僕は味方の四五人と誘つて、敵に結びついた東京の一番有力な何とか云ふ男を、擊劍場の前へ呼び出した。彼れは來ると直ぐナイフを出した。味方の四五名は後しざりした。僕がナイフを出さうかと思つて、一たんポケットに手を入れたが、思ひ返して素手のまゝ向つて行つた。僕の研いだばかりのナイフを出せば、きつと彼を殺して了ふだらうと思つたのだ。

僕はナイフを振り上げて來る彼れの腕をつかまへて、彼れを前に倒した。彼れは倒れながら、下からめつた打ちに僕を刺した。

僕は全身が急に冷たくなつたのと、左の手が動かなくなつたのとで、格闘をやめて起ちあがつた。彼れも起きて來て、びつくりした顏をして僕を見はつた。そこへ八九人の敵味方が來た。そして皆んな、びつくりした目を見はつて僕を見つめた。僕はからだぢう眞赤に血に塗つて突つ立つてゐたのだ。

「これから醫務室へ行かう。」

僕はさう云つて先きに立つて行つた。醫務室には年とつた看護人が一人ゐた。皆んなで僕を裸にして傷をあらためた。頭に一つ、左りの肩に一つ、左りの腕に一つ、都合三つだが、どれ

――自叙傳――

もそれも淺くはないやうだつた。

『どうだ君が内しよで療治は出來ないか。』

僕は看護人に聞いた。

『とても駄目です。大變な傷です。』

看護人はとんでもない事をと云うやうに顏をあげて答へた。

『それぢや仕方がない。直ぐ軍醫を呼んでくれ。』

僕はそこへ横になりたから云つた。そして彼れの名を呼んだ。

『仕方がない。二人で一切を負はう。』

僕は彼れのうなづくの見て、そのまゝ眠つて了つた。

二週間ばかりして、僕が漸く立ちあがるやうになつた時、父が來た。

父は最近の僕の行狀を聞いて、『そんな不埒な奴は私の方で學校に置けません』と云つて、即座に退校屆を出して僕を連れて歸つた。

が、歸つて暫くすると、『願の趣さし許さず、退校を命ず』と云ふ書状が來た。

彼れも同時に退校を命ぜられた。

新發田にはもう雪が降り出した十一月の末だつた。

第一篇をこれで終る。あとは毎月少しづゝ雜誌に出して行くんでは、書く方でも飽きが來、讀む方も、載せる方もいやになつて了ふだらうと先見して、一氣に書きあげて單行本にするつもりだ。もう二篇か三篇書いて、最近の事にまで及ぶ。四五月頃には本になるだらう。又其時の御愛讀を願ふ。

自傳

片山潜



洋上の漂浪二箇月

ストラテネヴワスは貨物船に造られたもので船籍は蘇國グラスゴーで船長始め船員は悉く蘇國人であつた。船中乗客の設備なく船の本甲板の後部へ假棚を急造して僕等は其處に寢起するのであつた、如何にも不愉快千萬の航海を始めた譯であつた、夫でも僕も杉田も歸國の希望と樂しみで胸が一杯であつた。此の位ひの不快を何とも思はなかつた。日本人は三十六名支那人は何でも百名ばかりであつた、タコマ出帆後第八日目の未明に一大響音と一瞬間全船體の震動が起つた。此激震と共に船の進行も汽罐の活動も停止した、船は動搖するばかりで少しも進まない。僕はガバと跳ね起きて豫ねて懇意になつて居た二等機關士を訪ねると船員の誰れも青くなつて騷いで居る、プロペラが折斷して海底に沈んだ、船は全く無能になつて、最早や前途は何うなるか分らないとの事であつた。僕も、些か驚いたが併し知らぬが佛で急に船中に水が這入る譯でもなく又轉覆するのでもない、只進行も逆行もせぬ、浮草同然浪に任して漂浪するのみであつた。風のない日は殆んど一つ所をグルグルと廻る位いなことであつて、何うなることか資本主義制度の下に於ける人生と同じく眞に一寸先は暗であつた。船員等も斯る難船は汽船航海史中之が第二回目だと云つて全く手の附けようがないとあきらめてゐた。船長の意見では其の心配は北方へ流さるる事で、別に寒防の用意がないから若しも北海へ流さるれば非常の困難を感ずるであろうと云ふのであつた。南方へ押流さるれば心配はないが、日本人は何れも心配の色であつたが只船乘の經驗のある人々は何とも思はないようであつた。所が支那人等は全く平氣の平左で日夜賭博に熱中し又ヲピユムを飲んで一向難

船を氣にかけないようであつた。

僕は愈度胸を極めて先づ勉强を始めたが仲々勉强も出來ない、只日夜無駄話をして日を暮した。時には日本人中喧嘩をやることもあつて之を見聞して時間を潰した。杉田からは色々世間の經驗や彼の裁判所に罪人取扱ひをした經驗話を聞いて大に益する所があつた。

毎日〱同一の生活狀態を續けたのであるが船の方でも段々と食料を減じて後ちには只食パンを與ふるのみになつた。食料の事は心配ではあつたが船にメリケン粉が積んであつたから饑餓に迫つて餓死することはなからうと思つたが、仲々食事には困難を感じた。或る日の事であつた非常の暴風雨が來て船は非常に動搖して殆んど立つて居ることは出來ない位いであつた。杉田と一所に食事をして居つた、船の動搖の爲に食物が甲板上へ飛んだ、普通ならば放棄して顧みぬが此の時僕等は之を拾つて塵埃を拭ふて食つて、杉田云ふ「毒にならぬ物は食ふと云ふ事にせねば斯うなつては仕方がない」と僕も之に賛成したが難船中の經驗を追想すると斯樣なことが最も印象を深く刻み込んだ一つである。

人間も一朝諦らめれば呑氣なものだ、僕は十二年振りで歸國せんと、云はゞ學業を卒はつたから歸國して何か爲さんとして而かも太平洋の眞中迄歸航し今八日間で横濱に着くと喜んで居た所、不計も難船して前途暗憺たるものであつて、之を思ふと遺憾に堪へないが、しかし僕は諦らめた、最う何うならうとも致方はないのだ。其れからは別に心配もせず、又苦痛とも考へず、只ワイ〱と云つて暮すのみ、海上を眺めても何も見る物はない、船に見當ると好いがと云つても仲々一つも出合はない。約四十日ばかりは毎日〱殆んど同一の事を云ひ合つたり爲したりして暮らした、風波の都合で船が少し北方へ流れる、今にも北海に吹き流されて氷に包まれて死ぬのではないかと心配もしたが又少し南方へ向つて流れるとハワイ邊へ行くのではないかと陽氣に感じたりして、何んでも四十日餘りしてから一艘の帆船に出合つて非常に喜んだ。之は砂糖船でジヤハから米國へ歸航中であるので之も仲々の難航で船足が惡くなつて居るとて我々を乘せて行くと云はなかつたがそれとも我々の船長が拒むだのか二三俵の砂糖をもらつたのみで其船は我々を殘して去つて仕舞つた。僕等は船員の言を信じて日々暮した、海岸に近寄らねば危險な事はない、只海岸近くなると暗礁に乘り上げるか又は岩壁に打ち着けるかの危險がある、何千哩かの海の眞中に漂浪してるのだから命に心配はないと云ふて云はゞ呑氣の生活只毎日〱食料が減ぜられるので之には益々閉口した。併

し船は何時となく段々と東方へ流されて行つた、從つて氣候は漸次に温暖になつて來た、時々暴風雨に出逢ふとゴロ〳〵甲板上をコケ廻はされたりしたが其れでも永い間の船生活で段々調子を取つて船が幾何傾いても歩けるようになつた。

六十日餘り、タコマを出帆してからは七十日餘りになつてから僕等は始めて遠く山を見出した。今にも上陸が出來るように喜んだが、實は此の陸地に近づくと始めて新しい心配が持ち上つた。それは若しも暴風雨が起れば我々は海岸に打ち着けられるか又は暗礁に乘り上るかの危險が豫想されたからである。所が一日濠洲通ひの一汽船に見附けられて此の船が我がストラテネヴワスを牽いて行つて呉れると云ふことになつてから、船員も船客も皆大元氣になつた。大きな繩を以つて引き張ろうとするが仲々船が云ふ事をきかない繩がボツン〳〵と切れる、而かも金綱が切れる、其内に大暴風雨が起つて、例の汽船は再び我々を見棄てゝ去つた。最う今度は助からないと云ふので船長始め船員等は逃げ仕度をした。船客には全く秘密にして只板や長い材木を甲板上に引き出して愈船が岩礁に打附けて破船したらば憐れな船客等は此等の材木につかまつて命を終るの外はない。僕は機關士に懇意な爲めに内情を知らされたので一層の心配をした、夜中段々と風は激烈になる海岸には近よる船は非常に動搖する僕は此時は死を決心した、海岸に近寄つたので碇を下ろした、一つの碇り綱は餘り海が深いので綱其者の重さと碇の重さとでボツンと切れて飛んで仕舞つた。今一つの碇り綱が切れると船は礁邊に打着けられる心配がある、船は始めて大いなる篝火を焼いて救ひを求めた。未明頃になつて風波が平になつた、見ると燈臺の直ぐ下に在る、此處は有名なる危險の海中でデヴヒルスアイランドと云ふ島の傍であつた。後で聞くと燈臺は此の數日の暴風雨の爲めに電線が切斷して通信をする事が出來ないのだと、愈風雨が止んで朝船長は燈臺へ會計掛が行く誰か舟をコギ行くものはないかと募集した。日本人が三人應じて行つた、が此船が見えなくなる頃に一艘の石炭船がやつて來て、心好く承諾して引張ることになつた、一本の繩で引くとグウ〳〵とストラテネヴツスは小供の如く引張られて進んだ其時の氣持と云ふものは何とも云へない愉快であつた。船は元のタコマへ着いた。上陸して一時は樂しんだ、クリスマスの時で仲々寒くあつたが難船からのがれて助かつたと云ふので皆歡迎して呉れた、僕は再び米國へ歸り上陸したので所持金の大部分を費したので歸國後が心配になつた、

數日してヴヒクトリア號に乘つて十八日間かゝつてやつと横濱に着いた、正月早々であつた。

十三年振の歸朝

僕は足かけ十三年目で故國に歸つた。久しいので東京に歸つても殆んど文通をしてる者さへない、國元との音信も殆んど絶へて居つた、二人の兄はあるが、母が死んでからは殆んど音信も不通であつた、僕は日本へ歸つて嬉いと云ふよりも一種異様な感を持つた。別に僕の歸るのを待つて居るものはない、外の日本人等は皆意氣揚々として迎いに來た人々と談笑する。僕は何となく手持不沙汰の感じがした、一昨夏英國に行つた時クインスタウンに近き又リヴワプール港上陸の際の方が、何の位い愉快であつたか知れない。

横濱に着いて始めて最も深く印象を與へた一事は、船が碇を下ろすや否や蟻塚が倒れたかの如く木葉船に乘つた人足や小商人等が艀船を漕ぎ我々の船へやつて來た事である、二三百もあつたように思ふ。其風體は種々で久しぶりに日本の風俗を見るのと共に何よりも三ケ月以上も大洋に住んで居つた僕には如何にも艀船も日本人も少さく見へた、小人島へでも歸つたような氣持がした。

上陸早々杉田と共の友人の所へ行つた、寒中に拘はらず障子を明け放して而かも小さな火鉢を以つてあしらつたのに一寸驚いた。それでも米國西部を旅行し九、十の二ケ月と海上住居三ケ月殆んど青い草葉を見ない、柏木は一本も見なかつた、僕が横濱に着いて生垣や庭木の青々として居るのを見て非常に愉快を感じた。

僕は永い間日本に居らず普通の言葉は船中日本人と接して大抵馴れて居つたがそれでも宿屋に着いて女中を何んと呼んでよいか分らなかつた。萬事總でであつた、併し杉田と同行したので色々と教へられて赤毛布を演ずる迄には行かなかつた。僕は杉田と一所に東京に出た、暫らく或る宿屋に泊つて舊友を探した、岩崎と村田半次郎氏とは渡米の際非常に世話になつた故、訪問した、村田氏は當時米相場をなし、蠣殻町に住んでゐたが非常に心配でもしたものか病氣となり、病床に在つた、氏は非常に僕の歸つたのを喜んで呉れたが、間もなく死亡した。

故國の山河

僕は東京に來たが別に澤山の友人があるでもなく、又何らして生活の道を立てるかも未だ定まつて居らず、只岩崎の郷里、野州藤岡に行き彼て非常の世話になつた舊師森鴎村先生に面會したりして再び東京に歸り少し立つて一先づ郷里作州に歸つた。

郷里を出たのは明治十四年の夏で、足掛十六年振りで歸るので何となく愉快と懷舊の情に堪へないような氣持で西方に向つて足を進めた、明治十四年に郷里を出た時には直に出で旅をし

たが今度は東海道と山陽線に依り岡山まで全く汽車旅行をして歸つた。岡山からは又中國線が完成せぬので徒歩旅行をして幾度か通つた道を歸つた。愈郷里の村、今は大字となつて居る、に歸つて見ると知らない者が多い、僕と同年輩の人々も白髪の老男女となつて居つた、僕の先輩等は腰が屈むで皺だらけの顔になつて居た。一寸僕には誰であつたか見る計りでは識別がつかなかつた、其でも言葉を取り交はすと、小供時代に聞き馴れた聲は忘ぬ者と見へて僕は直ぐに其者を呼んだ。人相は年と共に變化するが、聲音は變らぬから僕は餘りに失禮をしなかつた。

村の人々は多少時勢に連れて進歩しては居つたが、それでも十六年前の昔と餘り變りはなかつた。其談話は同じく誰の麥は生立がよいとか、誰の茶種子は大きくなつたとか、何處其處では薪を最う充分に樵つたとか、何處の山は最う殆んど炭に燒き盡したとか、十六年前と少しも違ふたことはない。只青年男女の華美になつて居ることは著しい變化である、村民間の經濟狀態は幾分發展しては居るが、非常に窮屈になつて居つた。魚を取るにも蕈を取るにも自分の所有の山の外にも入つて取るは出來なくなつて居つた、十六年以前には全たく自由であつたのに。

僕の舊友の一人家本正武氏は最うよい壯年盛りで、村内の人望と富とを一手に集めて仲々盛大に勢力を振つて居られたが、其思想に至つては十六年前と餘りの大差を見なかつた、併し僕等は少年時代を語つて愉快を極めた。

數日の後僕は津山に老父を訪問した、老父は當年六十一歳であつた。彼にも逢ふのは十六年振りである、老父は普請好で何時あつても家の建造とか建替とか新築とかで熱中して居られたから仲々勢力のある方であつた。僕は老父を訪問し同時に舊友の一人で曾つて郷里で營業して居つた鍛冶の友横浦松次郎氏にも面會して舊交を溫めた。斯樣な風で津山でも亦數週間を費やして再び郷里弓削村の羽出木に歸り、二三日して東京に向つて出發した。今度は道を替へて東川を大戸村から下つて片上より山陽線を取り神戸に出て東海道線で歸京した。

(前篇完結)

國際經濟會議は成效するか

堀江歸一

ブラッセル會議から巴里會議

歐洲戰爭以來歐洲諸國の通貨流通の狀態は非常に攪亂され、今日に至つて未だ復舊の曙光に接しない。通貨問題の紛糾、斯くの如きに至つたのは、一に財政上の關係に基くのであつて、財政の狀況を健全なる基礎の上に置かなければ、通貨問題を解決することも出來ず、而して此解決を全うするには、國際間の協力を要する。國際間の協力を遂行するに就ては、財力に餘裕ある國が之に不足した國に援助を與へる形式に向はなければならぬ。此共同的援助を必要とする說は次第に關係諸國殊に援助を受けようとする國の間に醸成されつゝあるのであつて、ブラッセル財政會議の如きは正に其一端を發したものと見られる。

私は本誌昨年十二月號に於て、ブラッセル財政會議の議事や、決議を基礎として、歐洲諸國の財政并に金融の狀況が如何なる潮流に動かされてゐるかを說明した。此會議の決議が實行されたならば、歐洲の財政并に金融上の面目は一新される譯であるが、今日まで其運びに至らない。何故決議が實行されないかと云へば、財政上の援助を受けなければならぬ地位に居る歐洲諸國ばかりが會商して、決議をしたのであつて、援助を與へ可き肝腎の合衆國が之れに參加して居らなかつたからである。是れでは幾ら立派な決議が成立したとした所で、所謂畫ける餅と同じであつて、何等の効果を期待し得られない。此般の事情から、今春巴里に歐米諸國を網羅する國際會議の開催される所以であつて、詰りブラッセル會議の遣り直しであり、合衆國を參加させただけ、以前の決議が潤色され、實行し難きものが實行し得るものと爲ることゝ思はれる。華聖頓會議に於て、軍備縮小の計畫が存外圓滑に關係諸國の同意を得るように爲つたのも、諸國の財政狀態の窮迫、之を然らしめた次第であり、而して其素地を作つたものは、實にブラッセル財政會議の決議に外ならないのであるから、實に同會議の決議は今後歐洲諸國の財政や、金融に復興の機運を誘導する指針を以て、見ることが出

來る。私は之に關する諸問題の内で、通貨に關する方面に就て研究する一端として、英國通貨の流通狀態に關する議論から着手する。

英國通貨制度の誇り

英吉利は千八百十六年を以つて金貨本位制を制定し、千八百二十三年五月完全なる狀態に於て、正貨兌換を開始して以來、九十餘年の永き歳月を通じて、兌換制度を維持し、何時と雖も、英蘭銀行は正貨を以つて銀行券を兌換することを辭さないし、金貨の輸出入に對しても、何等の制限を加へなかつた。正貨兌換の維持と金貨出入の自由とは相頼り、相助けて、英國貨幣制度の基礎を堅實にするに資する所の多かつたのは、明白の事實であつて、斯くて英國の磅貨は世界諸國を通じて、最も價値の確實なる貨幣と爲り、此一事を以つてして、自ら世界の取引を倫敦に集中し、倫敦をして世界金融の中心點たらしめるを得たのである。

磅貨の價値の確實であり、又倫敦に持つて居る債權であれば、何時でも金貨で其決濟を受け、然も金貨を好む所に依つて債權者自身の本國に齎し得るが、馬克や、法や、弗貨の價値は不確實であり、又米獨佛の諸國に於ては、金貨を得ることも、其金貨を輸出することも、共に不自由であると云ふ事實は從來英國の金融組織や、金融機關を稱揚する者の誇りとする所であつて、之に對しては何人も承認を與へなければならなかつた。獨逸人の如きは多くの場合に於て、英國の制度文物を貶稱して已まない傾きがあつたが、其れでも通貨制度や、金融組織に就ては、獨逸自ら英國に一籌を輸することを知り、多年一日英國に追隨し、更に之を凌駕する競爭心の熾烈であつたことを否定するを得ないであらう。又之を日本に就て見ても、日露戰爭當時から戰後七八年の間を通じて、日本が常に倫敦に外債を起し、其外債に依つて收め得た正貨は其儘之を倫敦に置いて、諸外國に對する債務を決濟する用に供したことの如き、要するに磅貨の價値なり、金融市場としての倫敦の地位なりに信用を置いた結果であつて、日本ばかりでなく、他の多くの諸國が倫敦に對して同一の關係を結ぶことは倫敦をして期せずして國際金融の中心點ならしめなければ、已まないことゝ爲つたのである。

磅貨の下落と其影響

此點から考へると、如何に戰爭の打撃とは云へ、英國の磅貨の價値が日本とか、北米合衆國とか云ふような戰爭の壓迫の少なかつた、寧ろ戰爭によつて、財政上に經濟上に好都合の地位に居つた國の通貨に比較して低落し來つたことは、英國の經濟的立國から考へて、慘憺たる事實であるとしなければならぬ。

試に磅貨の他の諸國の貨幣に對する價値の高低を知る爲めに、左に千九百二十一年十一月十八日倫敦に於ける諸外國宛電信爲替相場を掲げる。

	平準相場	一九二一年十一月十八日相場
巴里	二五法二二五	五五法三五
伯林	二〇馬四三	一一〇〇馬
ブラッセル	二五法二二五	五七法一〇一
ストックホルム	一八克一五九	一七克一〇
羅馬	二五法二二五	九五法五〇
瑞西	同	二一法二五
紐育	四弗八六六	三弗九九
横濱	二四片五八二	二八片六二

爲替相場を以つて、大體に於て貨幣價値の高低を國際的に比較する規準として考へると、英國の磅貨は佛、獨、白、伊諸國の如き戰爭に依つて、財政や、通貨に非常の混亂を來した國の貨幣に比較すれば、價値が高く、爲替相場も亦有利であるが、瑞典、瑞西の如き中立國や合衆國又は日本の如き交戰國であつても、有利な地位に居つた國に比較すれば、爲替相場は英國に取つて逆に爲つて居り、其逆に爲つて居ることは、其れだけ磅貨の價値の低落を大體に於て示すべきものと考へられる。斯く磅貨の價値の低落したと云ふことは、英國に取つて如何なる經濟上の影響を生ずるであらうか。其重なるものは、

第一、磅貨の價値は今後引續いて低落するかも知れないが、英國の財力の恢復するに隨い、平準爲替相場に近づくまで、騰貴するものと見るのを穩當とする。然らば今日の如き低廉なる價格で磅貨を買つて、他日其騰貴した價格に之を引換へる、日本の例を以つて云へば、今日磅貨は八圓五十八錢の邦貨を以つて購へるが、爲替相場の恢復した曉には、此磅貨を以つて、右の價格以上の邦貨を回收することを得ることと爲る勢が明であれば、磅爲替は勢、投機取引の目的物として取扱はれざるを得ない。

第二、磅爲替が斯く投機取引の目的物に供されると云ふことは、從來の如き國際的價値の標準と爲る地位を離れる所以であつて、國際間の金融中心點としての倫敦の地歩は自ら傷けられざるを得ない。

第三、英國は獨逸其他の諸國が爲替相場の下落を利用して、其れ等諸國の物資が盛に英國市場に輸入され自國同種産物に對して、不法の競爭を試みることを理由として、是等諸國の物資に差別的輸入税を賦課するが、何ぞ知らん、英國の物資も合衆國、日本、瑞西、瑞典諸國に於ては爲替の關係に基く不正廉賣品として取扱れるを免かれない。

第四、通貨の價値は單に三四外國に對して下落して、居るばかりでなく、內國の物資に對しても亦下落して居る以上は、其爲めに物價全體に不自然の騰貴を來すであらう。

との諸點であつて、通貨價値の低落は誠に英吉利に取つて、經濟的立國の難關たらざれば已まないのである。

磅貨低落の原因如何――不自然なる正貨增殖

然らば多年確實を以つて、誇りとして居つた英國磅貨の價値が斯の如く低落したのは何故であらうか。單に英蘭銀行の銀行券だけに就て云へば、英國の通貨流通狀態は常固の度を加へたと云へる。即ち千九百二十一年十一月十六日に終る同銀行發行部の週報に據ると、銀行券發行高一億四千五百五萬五千磅に對して、正貨準備たる金貨金塊は一億二千六百六十萬五千磅であつて、兩者の比率は八割七分二厘に當る。八割以上の準備比率は此種の比率としては、餘程高いものである。若しも此比率が生ずるに至るまで經濟上自然の關係に依つて、英蘭銀行に金貨が吸收されたのであるとしたならば、斯る狀態は兌換制度の當開を致したものとして、慶せざるを得ない譯であるが、戰前三千數百萬磅を上下するに止まつた正貨準備が戰後の今日、殆ど其四倍近くに增加したのは、決して自然の關係に基いたものではない。自然の成行に任されたならば、開戰以來英國の國際貸借が輸入超過額の劇增した結果、英國の正貨は散々に外國から取付けられ、正貨の減少に依つて、通貨に收縮を來す可き道理であつた。若しも平時の倫敦金融市場であつたならば、或る程度の金貨に對する取付の如きは、毫も意に介しない、或る程度を超へた取付であつても、必ずしも之を憂慮しない、一旦金貨の取付に依つて、通貨が縮小したとしても、近き將來に於て、金貨を國內に回收し得る望みの確實なるものがあるから、國民をして自ら意を安んぜしめるのである。然るに歐洲戰爭の如き大規模の禍亂が國際間に起り、世界中殆ど總ての國々を戰爭の渦中に捲き込み、然も戰爭が何時終熄するか、測り知るを得ない狀態と爲つては、若しも英國が自由金市場たる在來の地位に終始する考の下に、金貨をして對外債務決濟の爲めに、其海外に流出する儘に、任さしめたならば、如何なる結果を生ずるであらうか。金貨は總て海外に流出し盡しても、尙ほ平時に於て望まれるが如く、通貨の收縮に依つて、自動的に正貨の國內に吸收される働きは之を見るを得ない。是れは戰時經濟上の變態の然らしめる所であつて、結局兌換制度の根本的破壞を生ぜざるを得ない。英國の恐れたのは、即ち此一事であつて、斯る憂慎を回避する爲めに、英國は金貨の輸出を禁止し、國內に流通する金貨は擧げて之を英蘭銀行に集中し、更に對外債務を決濟する方

便として、或は外債を募集したり、英國の所有に係る外國有價證券を其發行國に賣戾したりして、正貨の海外に輸送されることを避けたばかりでなく、外國から英國に輸送され可き譯でありながら、尙ほ輸送の途中の危險に遮られて居る金貨を加奈陀印度若しくは南阿非利加の特種銀行に預託することを許し、其預託された金貨は英蘭銀行に於て、正貨準備として取扱うことを認めた。即ち英國が對外債務を負い、金貨を取付けられ可き地位に居りながら、却つて英蘭銀行に於て、多額の金貨を蒐集し之に對して銀行券の增發を維持して居るのは、斯る不自然の關係に基くのである。

旣に英蘭銀行が銀行券を增發して居る以上は、其發行が正貨を準備として居らうが、證券類を準備として居らうが、孰れにしても通貨の膨脹たるを失はない。而して斯く增發された銀行券の一部分は世間に流通し、他の一部分は英蘭銀行自身の營業部に入つて、殘る一部分は市中諸銀行の手に入つて、其れ〲支拂準備金を增加し、自ら預金を膨脹させ、斯く膨脹した預金に對して、小切手が振出されることゝなれば、銀行券の增發は啻に通貨を膨脹させるばかりでなく、信用の膨脹を助長するに至らざるを得ないのである。

政府紙幣の增發

更に英國に於て、通貨膨脹の勢を甚だしからしめて已まないものは、政府紙幣の發行である。始め政府は一方には市中に流通する額面一磅並に半磅の金貨を回收して、英蘭銀行に集中させる爲めに、又他の一方には市中諸銀行に對して、其支拂準備金を豐富にさせる爲めに、政府紙幣を發行したのであつて、要するに臨時非常の手段を以つて、目されたが、今日に至るまで、銷却されず、依然として多額の政府紙幣が發行されて居る。今日に於ては市中に在る限りの金貨は旣に英蘭銀行に回收されたし、又市中諸銀行も開戰當時に市場に襲い來つた恐慌に對しては、相當に苦痛も感じたし、惶惑する所もあつたようであつたが、今日は特に政府紙幣を借入れて、支拂準備金を潤澤にさせる方便の必要を認めないようである。其れにも拘はらず、尙ほ政府紙幣が多額に發行されつゝあるのは、何故であるかと云へば、其れは公債發行の必要に關聯するのであつて、實に政府紙幣の大部分は公債引受高に振替へられて居る。即ち千九百二十一年十一月十六日の政府紙幣勘定に據ると、政府紙幣の發行高は三億一千三百六萬六千磅であつて、一方に之に對する正貨準備は二千八百五十萬磅であり、又保證準備中公債の所有高は二億七千六百五萬三千磅の多きに上つて居るのである。即ち知る、政府紙幣は政府の發行する公債に應募する必要か

ら、發行されるものであることを。政府は公債を發行すれば、之を政府紙幣勘定で引受けさせ、斯くて受取つた政府紙幣を收入に繰入れて、勞力や物資の購入に投ずる、而して一部は市中諸銀行に回收されて、其支拂準備金と爲り、預金を膨脹させるものとしたならば、政府紙幣の發行が通貨流通の狀態を攪亂する弊も亦甚だしとしなければならぬ。國家が收支の適合を確實なる基礎の上に求めない、年々歲々公債を發行し、然も其發行される公債は國民の新に起される貯蓄金に依つて、應募される分量を超越したならば、必ず通貨の膨脹を招かざるを得ないと云ふ原則は如何なる場合に於ても、其眞理であることを失はない。今や英國も此眞理に支配されて、通貨流通狀態を攪亂し、通貨の價値を不確實にして、經濟的立國の基礎を動搖しつゝあることは、爭う可からざる所である。

英國將來の金融通貨政策

斯の如く論じ來つたならば、英國が今後如何にして經濟社會を攪亂しつゝある禍根を排除し得るものであるかと云ふことの一斑は明瞭と爲るであらう。財政上に於て、收支の適合を正しくし、公債發行の必要なからしめるは、其第一であり、進んで歲計に餘裕を求めて、政府紙幣勘定に於て所有される公債を銷却し、之に對する政府紙幣を回收するは、其第二であり、金貨の出入を戰前に於ける通り自由にし、戰時非常の手段に依つて、吸收蓄積された金貨を自由に解放し、金貨の減少するに隨つて、英蘭銀行券の回收縮小を謀るのは、其第三である。是等の內第一、第二の兩者は從來英國が財政の戰時狀態を平時の財政狀態に引直すことに努力して居る一方に、華盛頓會議の決議も無事に成立して、軍備の縮小に依つて、軍事費が削減され、斯くて財政に餘裕を生ずるに至つたならば、次第に解決の緒に就くであらう。是等は比較的容易な問題であるが最も困難なるものは、金貨の出入を自由にして、通貨の收縮を謀る一事である。旣に述べた通り、英蘭銀行の兌換制度の基礎は金貨の人爲的に蒐集されたことの結果として、幾分堅固に爲つたようにも考へられるが、是れは大なる誤解であつて、政府紙幣に關する勘定を合計すれば、

英蘭銀行券	一四五、五〇五千磅	正貨準備	一二六、六〇五千磅
政府紙幣	三一三、〇六六	同	二八、五〇〇
合計	四五八、五七一		一五五、一〇五

であつて、正貨準備率は三割三分の低きに降下するのである。斯くの如く正貨準備の減少したのに對して、銀行券や、政府紙幣の發行高が著しく膨脹して居る場合に、英國が無制限に兌換制度を復興し、同時に金貨の輸出入を自由にしたならば、終に

して金貨に對する取付は諸外國から殺到し、自由金市場たる地位を破壞するのは勿論、永く其地位に復舊するを許されないことゝなるであらう。英國政府なり、英蘭銀行なりの憂慮する所は實に此點であつて、自由金市場を再興しようとしても、容易に其目的を達し得られないのである。

斯う云ふ狀況であるとすれば、英國は他國から財的援助を藉りることを以つて、最も便利なりとする。如何なる形で援助を受けるかと云へば、

第一、外國から「クレヂット」を得て、對外債務決濟の資に充てるなり、

第二、外國から直接に金貨の分賦を受けるなり、

第三、現在の短期債務を長期の債務に借換へ、之に代つて更に短期債務を外國に起して、對外債務の決濟に充てるなり。

することは英國が自由金市場を再興して、尚ほ金貨本位制の基礎を確實にする方便と爲るのである。然しながら今日諸外國の内で、何れの國が能く英國に右の如き援助を與へ得るかと云へば、其れは北米合衆國の一あるのみである。

合衆國の財政的覇權如何

合衆國の永遠の經濟的利害から考へたならば、同國自ら斯る財政的援助を他國に與へて、經濟的復興の機運を速ならしめることは、自他の共に利益する道と解されるであらう。即ち一時合衆國自ら對歐債權を廢棄することを以つて、得策であるとする議論の行はれた所以であるが、合衆國は必ずしも之を受入れるまで、虚心なるを得ない。同國の政治家ボーラ氏の如きは、軍備擴張を計畫するような國に對しては、合衆國は將來財政上に援助を與へないばかりでなく、從來の債權をも速刻回收すると云ふような説を唱へて、歐洲諸國を威嚇したり、對歐債權棒引き説に對しては、結局「合衆國は將來自國の參加することのある可き一切の國際財政會議に於て、諸外國政府の對米戰時負債棒引き問題を討議しないと云ふ堅固な約束を外國政府に要求する」と云ふ情報に接した。（一月九日東京朝日新聞夕刊所載外國電報參照）果して然らば、合衆國政府は國際財政會議に對して、諸外國の期待して居る所を裏切るものであつて、諸外國としては、失望の外ないと共に、國際財政會議は正に其眼目とする所を逸し去ることゝならざるを得ないであらう。既に合衆國が對外債權の棒引きを峻拒する位に、厳重な態度に出る以上は、其他の點に於て、果して幾何の援助を諸國に與へるかと云ふことも、一個の疑問たらざるを得ない次第である。

斯る狀勢となつては、歐洲諸國も結局其財政通貨金融の狀況を復舊するには、他力本願を排して、自力成佛の方針に就かな

ければならぬ。此點に就て私は英吉利に行はれつゝある通貨論に對して、大なる贊成を拂はざるを得ない。如何にも今日英吉利には通貨の縮小を不可なりとする論者もある。大藏大臣の職を辭してから、市中大銀行の頭取に早變りしたマッケンナ氏の如きは、其の代表的論者であるが、輿論の赴く所を察すると、確に通貨縮小論の頗る有力なるものがある。即ち通貨を收縮するには、先づ財政の整理に着手し、公債應募の必要から、政府紙幣の増發を促す弊なからしめ、更に進んでは公債を償還して、公債を保證とする政府紙幣を銷却することの必要が認められ、同時に英蘭銀行をして成る可く高い金利歩合を維持させようといふ説が盛んである。既に此種の説はブラッセル財政會議に於て、英國を代表した專門家に依つて主張されて居るばかりでなく、戰後の通貨并に爲替に關する委員會の見る所も、略ぼ同樣である。或は斯の如く通貨を收縮したならば、益々物價を下落させて、不景氣を甚だしからしめると云ふ説があるかも知れない。蓋し經濟上に俗論の行はれることは、日本ほど甚だしくないとしても、英國にも相當に其形跡はある。然も物價を騰貴させた儘にし、殊に將來自然の働きで、下落を來すと云ふ狀態に置いて、何として事業の振興を期し得られるであらうか、之を求めるには、先づ通貨の人爲的に膨脹した部分を收縮し、物價を其ドン底まで低落させ、事業家をして之を標準として生産費の計算を立てさせ、依つて以つて事業の經營を改造せしめなければならない。

合衆國が歐洲の經濟的復興に對して、大なる援助を與へないと云ふことは、歐洲に取つて、苦痛であるやうなもの丶、一方に援助が與へられたとしたならば、矢張り歐洲に取つて、大に警戒す可き事情に接せざるを得ない。財政的援助が前記債權引きの形で與へられるとすれば、合衆國は無條件で之を敢てすることゝは考へられない。此程紐育ガランテー信託會社の調査した所に據ると、合衆國の歐洲其他に對する債權は

アルメニア	一一、九六〇、〇〇〇弗
墺地利	二四、〇五六、〇〇〇
白耳義	三七五、二八〇、〇〇〇
玖瑪	九、〇二六、〇〇〇
チェッコ、スロヴァキア	九一、一八〇、〇〇〇
エソニア	一三、九九九、〇〇〇
芬蘭	八、二八二、〇〇〇
佛蘭西	三、三五〇、七六三、〇〇〇
英吉利	四、一六六、三一八、〇〇〇
希臘	一五、〇〇〇、〇〇〇
匈牙利	一、六八六、〇〇〇
伊太利	一、六四八、〇三四、〇〇〇

ラトヴィア	五、一三二、〇〇〇
リベリア	二六、〇〇〇
波蘭	四、九八二、〇〇〇
羅馬尼亞	一三五、六六二、〇〇〇
露西亞	一九二、六〇一、〇〇〇
塞耳比亞	五一、一五三、〇〇〇
合計	一〇、一四一、二六八、〇〇〇

であつて、此外に利子の延滯額十億弗もあるから、結局合衆國の對歐其他の債權は百十一億弗に上るのである。而して斯る巨額なる債權が戰時極めて短日月の間に、成立したのは一に國民努力の結晶の發揮されたものに外ならないとすれば、故なく之を拋棄すると云ふことは、輿論政治を重しとする合衆國政府の到底爲し能はざる所に屬し、必ず何等かの代償を債務國に要求することゝ爲る。更に合衆國をして歐洲諸國の爲めに、クレヂキットを設けさせるとか、外債に應募させるとかしたならば、結局合衆國をして國際經濟上に於ける覇上たらしめるに至るかも知れない。合衆國が歐洲諸國に經濟的復興に要する援助を與へるに吝であり、又債權棒引などには頭から反對すると云ふ態度に出るのは、歐洲諸國をして目前に苦痛を覺へしめるかも知れないが、永遠には却つて有利なる結果を生じる所以となるか、測り難いのである。合衆國は歐洲戰爭に際して、自國物資の販路を擴張する必要に驅られて、外國の公債に應募し、其代金を諸外國の合衆國から輸入する物資の代金決濟に振替へさせたのであるが、何分國民が對外放資に慣熟しないことの結果、是等外國の有價證券は廣く全國に撒布するに至らない、自ら銀行の脊負い込みと爲る部分があり、現に戰爭の酣なる際、聯邦準備金局をして聯邦準備金銀行をして今日以上に外國公債を所有することの他日に危險を齎す所以であることを警告するに至らしめた。斯の如きも偶々合衆國が外國有價證券に對する恐怖性を脫却するを得ざる一端と見ることが出來るであらう。果して然らば戰後の今日、尙ほ合衆國が思ひ切つて外國の證劵を引受け、窮迫した歐洲諸國に財政的援助を與へると云ふような乾坤一擲の快擧を斷じ、自國をして國際經濟の支配權を掌握するに至らしめるを得ないことも、當然の成行としなければならぬ。羅馬の城の一日にして成つたものでないが如く、世界經濟の覇者たることも、一朝夕に之を期し得られないものと思はれる。

英國貿易の好趨勢

英吉利が戰時財政を支持するに就て、財源の一部を公債に仰ぎ其公債の應募を容易ならしめる爲めに、通貨を膨脹させたと云ふことは、國民に對して、戰爭に伴ふ負擔を蒙らせることを暗からしめる所以と爲つたのに相違ない、少くとも國民は政府が

租稅の收入に、戰時財源の多くを得た場合に比較して、負擔の輕きを覺へたであらう。然し是れは一時的關係に過ぎないのであつて一旦膨脹した通貨が戰後の整理時代に爲つて、收縮される時期に達したならば、曩に負擔の輕かつたと同じく、負擔の重きを國民に加へざるを得ない。然も此の負擔を成る可く永遠の時期に及ぼさしめるには、急劇に通貨を收縮することを避け、一方に正貨を增殖するか、少くとも其取付の來る勢を緩和し、正貨と調和を保ちつゝ、徐々に通貨を縮小することを必要とする。英國の期する所も亦此點に繋がつて居つたかも知れないが此の事は國際經濟會議に對する合衆國の態度如何に依つて定まる所であつて、今日に於ては其望み甚だ乏しいのである。英國は獨力を以つて、通貨を縮小し、又之を縮小する方便として、財政の整理、經費の緊縮を行ふであらう。而して、此際英國の輸出貿易が近年大に增進して、輸入超過の勢を次第に抑制しつゝある一事は經濟復興の途上に於て、喜ぶ可き所としなければならぬ。即ち英國の輸入超過は戰爭前には一億數千萬磅に止まつて居つたのに、開戰以來輸入の割增に對するに、輸出の不振を以つてして、入超額は次第に增加し、千九百十八年には輸出入十三億一千六百萬磅に對して、輸出五億三千二百萬磅であつて、輸入超過は七億八千四百萬磅に上つたが、是れが其最高の記錄であつて、千九百十九年には六億六千三百萬磅に千九百二十年には三億七千八百萬磅に減少した。而して千九百二十一年に於ては、一月から十月に至る十個月間の入超額は二億四千三百萬磅であつて、前年同時期の三億三千四百萬磅に比較して、九千萬磅以上を減じた計算を示して居ると云ふが如きは、貿易の方面に於ては、良好であり、又健全である機運の動きつゝある證左として、見るに足る。即ち英國の對外債權から生ずる收入の減少した今日に於ては、輸入が減少して、輸出が增加し、輸入超過額をして、現に減少した對外債權の收入額と均衡を保たしめることが必要であつて、此狀態の現出しない限り、英國經濟的立國の基礎は危しとせざるを得ない。英國に於て、近頃輸入超過減縮の勢を生じて已まない所以は主として國内に於ける物價の不落しつゝある一事に歸しなければならぬ。

他の諸國は然らず

然しながら他の諸國に就て云へば、英國と同じ程度まで經濟的復興の機運に向つて居るものは、一として之を見るを得ない。佛白伊の諸國に對しては、財政上の援助を與へることが必要であり、又產業恢復に必要なる原料や機械を供給する爲めには、先づ其輸入代金を決濟する財源を調達して遣らなければならず獨逸に對しては、斯る援助を與へる以前に、賠償金の義務に

就て、緩和を施す道を設けることが先決問題たらざるを得ない。聯合諸國と獨逸との間に於ては、千九百二十一年五月十一日の取極めに依つて、償金授受の方法が定まつたのであつて、結局獨逸は千三百二十億馬克（金貨）の債務を聯合諸國に交付し之を年々二十億馬克の金額と輸出貿易に對する二割五分の稅金收入に依つて、濟崩しに支拂つて行く次第であるが、元來聯合諸國の對獨經濟政策たる、獨逸の輸出貿易が旺盛と爲るまでに、內國の事業を振興させようとか、輸出超過に依つて、自然に償金に伴ふ義務の決濟される道を付けようとか、事業振興、輸出繁榮を實現させるだけの資金を供給しようとか云ふような公明なる考に基くものでなく、寧ろ獨逸を壓迫しつゝ尙ほ金貨拂の債務を決濟させようと云ふ非常な矛盾を敢てするものである。是れでは獨逸が償金支拂の義務を履行するに支障を訴へるのが當然である。此事は償金支拂に關する取極めの成立した當初から、識者の間に略ぼ洞察されて居つた所であつたが、（拙著「世界の經濟は如何に動くか」第七章參照）聯合諸國殊に佛蘭西の政治家は獨逸を何處までも迫害しよう、又償金の回收に依つて、自國に殺到する財政難を緩和しようと云ふ考から、騎虎の勢に驅られて、經濟上の道理に外れた政策を實行するに至つた。然も獨逸の何としても義務を履行するを得ない事情の明かに爲つた今日に於ては、實行し得る程度に改訂することは、當然であつて、此事も獨逸を加入させた國際經濟會議に於て、當然付議されなければならぬ所に屬する。

國際間の經濟關係が孤立の境遇を脫して、次第に協同の域に進まうとするは、一見喜ぶ可きに似て居るが其協同なるものは、質の對等を基礎としたものでなく、强國をして弱國を助けしめると云ふ方法で、果して協同の實が擧げられるであらうか。强國が國家に特有なる偏私や、我慾を去り、個人間に於て强者が弱者を助けると同じ博愛の精神を以つて、弱國に對するならば兎に角、然らざる限り、國際間の經濟的方面に於ける協同の如き、名あつて實なきに終りはしないであらうか、私の疑を挾む所である。

（附記）本稿執筆後會議地をゼネバとすべき新聞電報ありたるも、其何れたるも論旨に何等の變りなきものなれば其儘となす。

空想政治家としての大隈侯

長谷川如是閑

（一）

大隈侯が、日本の偉大な政治家と稱せらるゝに至つたことを寧ろ不思議な現象と考へてゐる人も多い。政治家としてなし遂げた事功に於ては、殆ど云ふに足るものがなく、革命的の事業に與つてゐた譯でもなし、其後の建設にも　した功績を舉げたと云ふでもなし、目論むだ事は大底失敗に歸し、只、平常大言壯語を事として居るばかりで、どこにその偉大があるのか判らないとも云はれてゐる。

通常政治家と云はるゝ人々は、その現實政治に對する事功をもつて評價されてゐるから、大政治家と云へば、政治的に偉大な仕事を仕遂げた人間と云ふことになつてゐる。大隈はたしかにそれには當つてゐないにも拘らず、大政治家のように稱へられてゐるのは、不思議と云へば不思議である。而かも、そう云ふ大隈がやゝもすれば偉人視さるゝと云ふ事實は、社會心理的に考へると或る重要な意味を暗示してゐるのである。

（二）

元來政治と云ふことは、現實の支配事業であつて、哲學や科學の思想宣傳などとは全く性質を異にしてゐるのである。現實的支配の優越を持ち來すことが政治の目的である。で、そう云ふ仕事に成功したものが政治家として偉大なるものと云はれてゐるのは當然で、次にはそう云ふ支配に對して思想的背景を與へる哲學者なり技術家なりが、同じ圏内に於ける有力にして名譽ある地位を占めることの出來るのも當然である。大隈はその何れでもない。所謂『高遠の理想』と云ふものも一向思想的に高遠なものがあるのではなく、只『實行不可能』の別名に過ぎない。ウィルソンやバルフォアのやうに別段優れた政治哲學を持つてゐると云ふ譯でもなし、有ゆる問題について議論をすることが出來ると云はれてゐるが、侯自身のものは何にもないことは知れ亘つてゐる。啻に議論の上で自分のものがないばかりでなく、實行についても何等一貫した獨自の精神がないことも

誰れにでも知られてゐる。侯のどこに偉大と呼ばなければならないものがあるか全く捕捉し難いのである。それでゐて今日本に殘つてゐる舊式政治家中の最も偉大なる人のように考へられてゐると云ふのは、巧利的には考へ得られないことである。云ひ換へれば極めて不合理な話である。

而かも大隈の偉大はこゝの不合理性に投じた處にあるのである。世の中には譯の分らないことが多い、そしてこれは譯の分つてゐることよりも實際に於て重大な地を占めることが常である。而もそう云ふ事情は所謂社會過程に於て最も多い、合理的にはまことにつまらぬと考へるより仕方のないことが、非常に尊敬され、理智的には承認出來ないことが、立派になり立つて行く、總てのものがそう云ふ狀態のもとに置かれてゐるが、殊に人格の社會的地位がそうである。無論立派な仕事をしたものが巧利的計算の上から尊重さるゝことは云ふ迄もない、が、それが比較的正確にそう行つてをらぬに拘らず、他方の巧利的に計算の出來ない人物が却つてより確かに持て囃やされる場合が多い。宗教家なぞには殊にそう云ふ事情が多いが、もつと現實的な政治家のようなものゝ間にもそう云ふ事情は働いてゐるのである。大隈はこの機微を無意識に捉らへた一人である。

（三）

侯は確かに失敗によつて成功した人である。もし侯が公の生涯の出發點に於てより成功してゐたとすると、恐らく今日の大隈侯とはならずに仕舞つたであらう。侯は今の言葉で云ふ官僚出身である。維新の元勳が實際的の事務に不得意なのに乘じて召上げられてその頃にあつては寧ろ事務的と考へられた極めて大雜把な事務を、頗る非事務的に扱つて成功したことが出身の始りである。今日の事務家とは無論云へないが、當時にあつては有りな事務家だつたのである。若しそう云ふ仕事が侯の生涯を束縛してしまつたとすると、侯は普通の官僚政治家として一國家的人物と稱へらるゝことはあつても、「世界的人物」とは稱へらるゝには至らなかつたであろう。その畢生の事業であつた條約改正も失敗したればこそ幸であつたが、もし成功したらばとんでもない淺薄な政治家として寧ろ永久に輕侮されたかも知れない。侯が政黨組織を思ひ付いたのも、學校創設を思付いたのも、その後の大言壯語も悉く失敗の果ての余儀ない結果である。そうしてその中で成功したのは學校と大言壯語とである。

侯の改進黨は板垣の自由黨の故智を襲つたに過ぎない、そうして貴族的な、非民主的な、英國の保守黨を學むだものが出來上つて仕舞つて、もしそれが今日まで有力に發展したなら、侯は侯の今日の盛名とは大分違つた方向のものになつたに違ひな

い、それが滅茶々々に變形して殆んど侯と沒交渉見たようなものになつたことは、矢張失敗の成功である。

失敗の連續であつた處の侯の盛名は何がそれを作り上げたのであらうか、それを説明するには社會心理的考察による外はない。

（四）

維新後の社會過程を考へて見ると、一般に信じられてゐるような日本特有の現象と云ふものは余りに力强く認められない、王政の復古と云ふことも、數世紀前の歐羅巴の歴史を繰返したのであつて、その後の政治的建設は全く西洋の三權分立主義により、英國を中心として起つた立憲政治への過程を襲踏したのである。佛蘭西革命がアングロサクソン主義の政治に胚胎したように、日本の維新後の政治も佛蘭西革命の精神に刺戟された云はゞ孫弟子のような關係にある。

唯日本では革命家が皆封建武士の子弟であつた爲めに、封建的精神が頑固に新政治の根柢に喰ひ込むで、零落した親達と沒交渉に小供等の間に封建的の爭が爭はれた、無勢力な封建貴族が隱退すると、その小供等が封建的爭の主腦者となつたのである。夫等の人々は政治的理想に於ては大差のある譯ではなかつたが、封建的の爭を爭ふ爲めに夫々作爲的に差異を求めて政治的分野を形作つたのである。その場合民間で比較的多數の傾向を捉へたのは板垣等の佛蘭西派でありこれに對して小數派は大隈の英吉利派であつた、當時の政府者はどちらかと云へば、佛蘭西派に傾ひて居つたのであるが、藩閥の爭によつて政府を獨占した連中は自然守成的の態度を取るべく余義なくされて所謂保守黨の地位を採つて自分達の革命事業の當然の結果であるところの政黨政治への發展を防がうとしたのである。而かも藩閥政治の沒落に伴ふ民心の傾向は政府者の弱點を別の方面から打ち壞くことになつたのであるそれは即ち舊文化の破壞に伴ふ新文化の勃興であつた。それが政治的に保守である筈の政治家達をも一とくるめにして征服して仕舞つたのである。明治の中頃の歐化政策が夫れであつた。それは畢竟民衆的傾向がそうさせたものであつたが、その民衆と云ふのは比較的有力な階級であつて、より多數な反抗的民衆の間にはそれに對抗する民族的精神の勃興を見たのである。而してそれは二つの傾向に於て現はれた。一つは佛蘭西革命の精神を汲み入れた自由黨一派の民族的傳統の尊重であつた。佛蘭西革命が非常に民族的色彩の強いものであつたと云ふことは日本に於ける佛蘭西主義者の間にも繰返されたのである。一方で傳統破壞を絶叫したから、他方で他國の傳統に對する輕侮をもつと云ふ態度は佛蘭西派の特徴であ

つた。これはハイカラと蠻カラとの奇妙な混和であつた。政治的に佛蘭西式を主張してゐる人々、が衣は腕に至ると云ふような風采態度であつたことは如何にも過度時代の性質を具象したものである。この民族的精神の殘存と併行してもつと純粹なそして固有の民族的精神を現はしたものが歐化主義の反動として起つた國粹主義であつた。

國粹主義は維新後に於て破壞された固有文化の復興と云ふよりは寧ろ封建制度によつて破壞された王政時代の精神の復興を意味して居つたと見るが至當である。從つてそれは、自由黨の佛蘭西式も、改進黨の英吉利式も一樣に排斥して純民族的立場を取らうとしたのである斯樣な精神は革命によつて混亂した國民が、その混亂から立ち直ると必ずその新鋭の氣焔をもつて勃興せしめて行くところの精神である。夫れは佛蘭西革命がナポレオン戰爭にまで進展した事情なのである。日本でも維新の事業が一と先完成すると直ちに征韓論が起つた、革命國の近所にゐる弱國の迷惑は今日のロシアですらも繰返してゐることであるが、日本の征韓論はその時には成り立すに不成功の臺灣征伐に安全辯を求めてお仕舞になつたが、後に起つた民族的精神は畢竟この過程の延長に外ならない。夫れは必然に外國侵界にまで發展すべきもので、遂に日清戰爭となり、日露戰爭となり、征韓事業の完成となつた。

大隈一派の立場がこの民族的勃興に對して頗る冷淡な立場を採り、場合によつてはそれと正反對の態度をとつたのは明治史上に於て大隈一派を極めて評判の惡い繼子とした所以であるが、而かもそのことが大隈の今日の地位を作り上げたものであることを考へると、失敗とか成功とか云ふようなことが、一向當てにならないものであることを思はせる。

大隈一派の英吉利風は寧ろ英吉利の保守黨の精神所謂トーリズムと稱せられてゐるものに近いのであるが、而かも時代の要求はその政策を同國の自由黨の夫れに近けない譯に行かなかつた、英國の憲法史は自由黨發達史と云ふべきものであるが、大隈一派がその教訓を金科玉條としたことは英吉利風の傳統的精神を取り入れる妨げとなつたに違ひない。彼等は氣分に於てトーリー的で實行に於てはホイッグ的であつた。而かも少しも責任者の地位を取らなかつたために所謂『高遠の理想』を組立てるに都合がよかつた、而して唯一の實際的効果——即ち條約改正——を目論見た時には『高遠の理想』たる英國的自尊とは頗る掛け離れた御都合主義の國策をとつて反動的民族精神を呼び起す役に立つただけで往生して仕舞つた。

而かも大隈一派は最近までその空想的の立場を大事に盛り立

て丶實行に於ては屢々夫れを裏切りながら、兎も角も、一貫して英國式の立場を守り、相手の佛蘭西派のように反動的民族精神に吞込まれるようなことは仕なかつた。云はゞ、維新後の歐化主義の最も忠實な繼承者であつた。後の政治的進化の影響を受けて、英吉利派と云ふものも佛蘭西派と云ふものも、夫々責任者の地位を取る度にその空想的根據――好く云へば其理想的立場――を失つて――現實政治の渦中に盗動することになつたが、夫れでもまだ漠然と空想的の立場が殘つてゐてそれを政治的理想などと呼ぶことになつてゐた。今の現實政治家の中で尚多少共この空想的　場を把持してゐるのは大隈と尾崎とだけである。二人とも實際の行動、滅茶々々であるが、その空想の把持が現實政治家の間の稀有のものである爲めに、夫れだけを生命として多くの實行家に輕蔑されながら或意味で彼等の及びもつかない地位を占めてゐるのである。

大隈は百二十五才まで生たらどうであつたか知らないが、今日まで生きて居たことは確かにその名聲の爲めには仕合であつた。民族的精神勃興の時代に爆烈彈で生命を失つたならばそのことだけは唱はれても、國民的にも『世界的』にも今日の大隈とは別人のように扱はれたに違ひない。西郷隆盛が民族的英雄として尊崇されたのも畢竟當時勃興しかゝつてその後旺盛になつた民族的精神を代表した形だつたからである。人格的に尊敬すべきものがあつた事は無論計算に入れなければならないが、そのことだけでは民族的英雄に祭り上げらるゝことはない。彼も矢張り民衆の精神に投じた英雄だつたのである。ところが民族的精神の昂奮が止むだ今日に於ては、西郷隆盛と云つても明治十年代當時の青年が感じた様な昂奮を今の青年に與ふるとは出來ない。彼が今まで生きてゐて八十九十で死だなら恐らく大隈程にも唱はれなかつたであらう。大隈が反動時代の不評判を切拔けて今日まで生き永らへたばかりでなく、反動的精神の衰退に次で起つた民衆的傾向を代辨するだけの能力――夫れは内容空虚なものであつたにしろ――を發揮してゐたと云ふとは、あの老年で時代の人であるが如き感を一般に與へた所以である。

（五）

その意味に於て侯は外の誰れとも違つてゐた。伊藤は日本を獨逸風の法治國に仕上げようとして幾分成功した點で偉大視されたので、民衆的には極めて不評判な人であつた。山縣も軍國々家を建設した點で國家の功臣として認められながら非軍國的精神の勃興につれて極端に不評判な人物となつて仕舞つた。國家的事功を擧げたものが民衆的に受け入れられないと云ふことは、民衆が全く…………のものではない場合には止むを得

ないことである。木戸でも、大久保でもそれを免れなかつた。暗殺者や謀反人はその反對に持て囃された。大隈も事功を擧げようとすれば何時も同じような不評判に陷つた。侯の國家に對する奉仕が斷續的であつたのは健忘症な社會をして侯を尊崇せしむるに都合のよいことであつた、國家に持てなかつた點で比較的不評判の度合の少ない點で稍侯に似てゐるのは西園寺である。西園寺も亦事功の點では殆んど何をしたか判らないことが其評判の左程惡くない所似である。唯西園寺は大隈よりも通人である爲めに稱氣に乏しく民衆の喝采などを苦々しく思ふので一向その爲の努力をしないが、內容は却つて大隈よりも充實してゐるかの如くに思はれてゐる。これは大隈と反對に、默つてゐる爲めに得をしてゐると云ふ形である。

（六）

兎に角一應現實政治家の仕事も出來る資格を持ち、首相の地位も占め而して一つぱし書生論もやると云ふ政治家は西洋では珍らしくなかろうが、日本では未だそう數多くはない。需要供給の法則丈けでも大隈は珍重されてゐた譯である。けれ共八十以上の老人が時代の代辯者であると云ふのは余りに時代を見縊つた話である。

大隈の盛名は畢竟侯の言論が時代を代辯してゐると考へてゐる人々の間に唱れてゐる名なのである。何等空想的の根據を持つて居らない現實政治家の間では侯の空想は驚くべきものであるかも知れない、然かし、今日の社會的空想から大隈の空想を見ると實に貧弱な現實的の產物に過ぎない。最も進步した政治思想を云ふものか元來舊世界の遺物であると考へられてゐる今日、果して最も進步した政治思想まで到達してゐるかどうか疑はしい大隈の空想が、どれだけの價値を空想界にもち得るものであるかは、察するに足るのである。今日の最も貧弱な文學者でも空想の點では大隈の夫れを凌駕すること、時代にしたら少なく共一世紀以上であろう。政治家が大隈の空想を大した空想であるかの如くに持て囃すことを見ても、彼等が如何に今日の社會的空想を理解する資格のないものであるかを知るに足るのである。時代は既に大隈式空想を骨董化してゐるのである、今日の政治家は大隈の死を現實の或るものを失つたかの如くに感ずるのであるが、今日の青年は侯の死を過去のものを失つたと感ずる外はないのである。この點が稍々西洋の高級の政治家と違ふところである。西洋にもそう云ふ政治家は數多くはなかろうが、現實政治の立場以外の立場の極めて貧弱である點に於て日本の政治家程甚しいものは少ない。日本では大政治が失脚すると獨立の生活を營むことが出來なくなるのである。彼等は現

實政治と云ふ商賣外の商賣の外何の取柄もないので生計を立てることが出來ないのである。で全く意味の判らない金をどこからか得て來て堂々たる生活を營むでゐるのである。大隈もその一人であるが、國家の年金で食つてゐると云ふような大政治家は殆んで一人もあるまい、そこへ行くと西洋の政治家はそう云ふ曖昧な生計を必要としないものが多い。ロイド・ジョージでも辯護士位は出來る、タフトは大學敎授をやり、ウイルソンもその資格もあるが辯護士をやつてゐる。バアルホオアやハォルデンやは立派な哲學敎授の資格があり、新聞記者位なら出來るのはいくらでも居る。大隈も新聞記者なら出來るであろうが尾崎、犬養等の記者生活時代の記者が最も適任であるようにも思はれる。

然し、八十五歳で新聞記者の資格があると云ふだけでも日本の元老政治家では唯一人である。珍らしい人を日本の政治界が産むだと云つても差支あるまい。夫れは畢竟反動的精神の時代を切拔けて進步的方向を取らうとした時代まで生延び且其時代を自己流に諒解し得るだけの能力をもつてゐたと云ふことによるのである。今の青年が大隈に對して確かに及び難しとせざるを得ない點は侯が經驗した時間の長さである。その空想に於ては、大きさも深さも新らしさも今の青年の夫れと比較にならないのは云ふまでもあるまい。

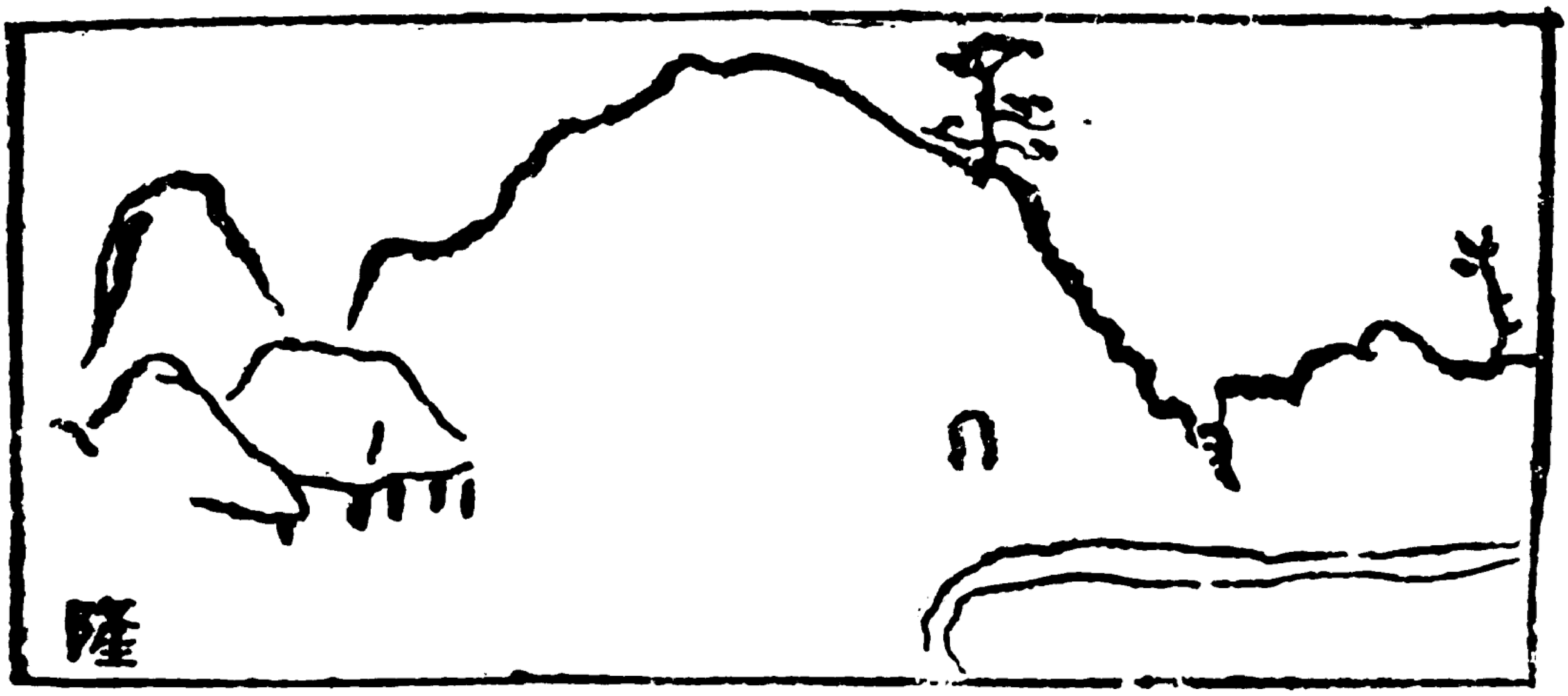
（七）

要するに大隈侯は一方に於て民族的精神の反動的勢力の衰へたお蔭を蒙つたものであることは拒まれないが、而かも他方に於て民衆が余りに貧弱な現實に生活の憧憬を求めることが出來なのいので空想的の生活をあこがれてゐると云ふことを說明してゐるのである、現實政治家は常に空想家を輕蔑してゐるが、現實政治が民衆化するに從つて空想を計算に入れない譯に行かないことは明かである。維新後の政治は常に現實政治家の手に取扱はれてゐたが、その政治的傾向はどう云ふ風に進展して行つたかと云へば、現實政治の責任ある思惟を裏切つて明治初年の空想家の空想の方への進展して行きつゝあるのである。何等實際上の事功を擧げたと云ふことの出來ない人々が國士とか志士とか呼ばれて崇敎の的となつてゐるのは彼等の描いた民族的ユウトピアの方へと民族が動いて行つたからである。反動的精神の勃興が反動的人物を偉大にしたのも、その反動に對抗した人物が反動の止むと同時に尊崇されるのも民衆の波動が運び廻る仕事に過ぎない。そうして其動力は空想と呼ばれてゐる憧憬そのものなのである。

民衆的空想は、私達研究者の眼からは必しも不可思議な神秘

的起源をもつものではなく、その因果關係を生活事實の上に求めることが出來るのである、空想が力強いのはそれが空から湧いた思想でない點にある、云ひ換へれば空想は現實の相である場合に現實に對する動力として働くものである。この事實が一般に空想に對する憧憬を呼起す社會心理的動機なのである。この心理が昂進して何等現實的根據もない空想も夫れが空想であることの爲めに却つて憧憬の的となるのである。空想をもつた政治家が民衆的に有力であるのは其理由によるので其空想の內容如何は大した問題ではない。事實多くは下らない空想であるだらう。唯夫れが多少驚くべき形式で現はれさへすれば好いのである、ウヰルソンの國際聯盟も、日本の政治家が唱へ出したのでは全くの空想で終つて仕舞ふが、ウヰルソンであつた爲めに稍々現實的な事實となつた、空想の內容は問題ではなく唯一般が求めてゐるものに觸れると云ふ事で現實よりも力強いことを得るのである。大隈の空想は日本の現實政治よりは或る時代の一般的要求を滿してゐた爲めに珍重されたのであるが、もう其時代は過去となつた爲めにその珍味も骨董的の意味となつたのである。

二月號創作



空しく歎く

佐藤春夫

……ものを書きたいなどとは更に思ひはしないし、無理にさう努めて見たところで書けさうなことと言つては何もない。——いや、何もないのぢやない。その日頃、私の心のなかには或る結局どうしても自分自身の力では統治しきれないそれ故ここで一言では言ひ現し難い或る感情が胸一ぱいあつた。あまりに胸一ぱいで全く取りみだされたその私の心についてはどうそれを書いていゝのやら解らないし、その上にそれを直ぐには無理に書いてしまつてはいけないやうな心持もあつた。——しかも、どうしてもその事について外に洩らさないでは、私の心のなかはそのために今にも彈ぜさうにふくれ上つてそのために息がつまるかと思へるほど苦しくなることもあつた。これはただのたとへでは無い。私は死を企てる人間の狀態をやつとその時に初めて理解したやうに思ふ。人間は恐らく誰しもそれがまだ單に精神的の苦しさである間は決して自分で自分を殺すものではなくて、その精神的な苦しみがその極度になつた時に何か生理的といふやうなものになつて來て、ちやうど最も激烈

な病苦の頂點で病人がその看護の人たちに向つて頭や胸をもどかしさうに指さして、こゝのところへ早く穴を開けてくれと叫ぶ時の心持と全く同じもので、しかもその同じことを自分自身の手でしてしまうのではなからうか――私はさういふ状態に近いものを味ははなければならないやうなことが、ほんの瞬間的にではあつたが屢々あつた。それほどに私の心のなかに生きて蟠まつてゐる氣持を、私は殘らず吐き出してしまつたなら、きつといくらかは氣が樂になり、もしさうならなかつたならば私はその時にこそ私が書き上げたものを遺書にして死ぬことも出來るだらう、とそんなことをさへ、ふと考へたこともあつた。實際、私は今、世に問はうなどといふつもりではない純粋な手記をつくつて置かうと考へたりもした。――さうして直ぐさまそんなやすつぽいロマンティシズムの自分を嘲笑ふことで一時の心をともかくもどうやら取り返しもした。私は自分に對しては自重しながら自嘲するといふ方法やら、また私が怨恨のやうなものを彼に宿してゐる或る男に對しては極度に侮蔑してしまつて何の敵意をも持たなくなるといふ方法やら、さういふことを私の心がいつの間にかおのづと學んでゐた。但、私が彼の女のことをどうして忘れやうかといふことだけがいつまでも私にとつてその方法のない事であつた。私は最初、どうかしてその女を憎むことによつて疎んじやうと試みた。けれども私にはその女には憎んでいいやうな何ごとかがあるとはどうしても思ひ込めなかつた。その緒をさへ見出せなかつた。その女のことを思ひ出すと私は思ひつめて憎めるどころではない反つて益々思ひ慕つて來るだけであつた。さうしてその時の私の心はただ單純な愛戀のものだけになつてしまつて、ペンを取つて書き出すものは彼の女への手紙であつた。が、その手紙は決して相手の手に這入りはしない。さうして其には何の不思議もない。私は其をポストのなかへ入れる代りには、封をして自分の机の抽き出しへ入れて置くからである。私は自分の情癡を知りながらも、その恐らくは生涯、決して相手の手に這入るともないであらう手紙が短いのやら長いのやら少くとも二十通近く書いたかもしれない。

――「このごろのわが戀ごころ記しあつめ切に申せば五位の冠」とそんな歌が、どんな人がどんな時に殘したのであらう？萬葉集のなかにあるやうに覺えてゐるが、私はそんな手紙を書き終へて二十分ほども考へ込んだのちに、ふと今言つた萬葉集のうたを思ひだして、さて机の前にある手紙を見つめながらこれが原稿ならこの間からよほど原稿料を思つたらうな――とそんなつまらない品のよくない冗談を自分自身に言ひながら無理に笑つても見た。そんなふうで熱心に私が書くものは原稿ではないので、しかし私は何か書かなければいけないので、――世間では私のことを衣食の爲めに書く必要のない人と言つてくれるやうであるが、それは何かの誤聞である。まあ假りに私の父に何か恒產のやうなものがあると假定して見てもいゝ。ところで、この場合、私がもう十九や二十でもあらうことか、しかもまあどんな入り組んだ譯け合ひからどんな間違つてないつもりでであらうとも夫のある女、しかもその夫は私の友達である女と戀に陷つて、そのために仕事が出來ないからと言つて父母や兄弟に金の無心を誰が出來やうか。その上に、それらの動搖のために私は久しい間、殆んど全く文筆から遠ざかつたやうな形にもなつてゐるのを、私の六十になつた父や母などはそつと案じてゐてくれるのであつた。父や母は私の部屋をちらと覗つて見て私が机でものを書いてゐると喜んでゐる樣子であつた。紙が原稿用紙だから一途にそれを何かの作品であらうとでも思つてゐるのであらう。しかもそれが例の手紙だつたのである。

「何か出來ますかな」

父が食事の時などに、何氣なささうにそんなことを言ひ出すことがあると、私はうろたへながら、

「え、いや、どうもうまく書けないから破いて仕舞つたが……」

と、ひとり言のやうにあいまいな句調で言ひわけの嘘を突いたりした。さうしてこんなことをして居るうちには何れ

何も書くことは出來なくなるだらう。だがそんな事が何だ。私はさう思つて妙に誰にともなく反抗心を起してゐる傍、だがやはり何か書かなくてはなるまいといふ見えや意地や又は父や母やそれからその後の私をだつていくらかは心配してゐてくれるだらうとも未だ自惚られる彼の女に對する氣やすめなどもいくらはあり、それに私にはいつかも別の機會に別のところにも書いたやうに、そのころから莫迦々々しい品物を買つて無駄費ひをする癖などが新らしく出來てしまつてそのためには未完成な三四年以前の舊稿などをとり出して賣るやうな淺ましいことまでもする程に、そんな小使錢がないと心までが萎び果てゝ來るといふわけでもあつたし、その上にまたその頃から天氣がじめ〳〵とした雨つゞきで今までのやうに市街を見かけだけ元氣よく歩きまわつて暮すといふことにも適しなくなつて見ると、私の悲涼な――いやそんな立派な昂揚的な言葉は決して使へないであらう、たゞ困憊し切つて佗しく味氣ないだけのその私の籠居を少しでも私が私自らで慰めるには、私はどうもやはり何か書きでもするよりよんどころなくもあつた。けれども私は所謂小說――主として人間同志の意志が糾叫し合つたりしてゐるところを描くものである小說なるものを、もともと書けもしないが上に、それでなくとも今日のあたりに自分が人生そのものに壓しつぶされかゝつてゐるこのやうな日ごろに私は、どうしてそんな小說などを書けるものではない。言はゞ私は自分の身邊に現出した小說的事實に中毒してゐるではないか。一たい小說などといふものはどんな人生の悲しい事實に向つても決して目をそむけもしなければ又輕々しく笑つたり怒つたり歎いたりしないやうなそんな眞直ぐな男々しい心を持つてこそ出來もしよう。と言つて、私が今までによく時々に書いたやうな全くたゞへんなメルヘンであるやうな世界を描かうにも、困憊しきつて不統一にされてゐる私がどうしてそんな世界のなかへことわりなくすつぽりと這入り切つて行けようか。――かう思つてくれば、これはどうもやはり結局何も書けさうにはないといふことになつて來るのであつた。しかも私はどうかして何かを書かなければと自分

で努めて見なければならない。またしても私は何ごともどうでもいゝやうな氣にもなつて來る。が、もう一度、さまざまと自ら思ひ勵ました揚句に、私はやつと紀行文でも書いて見ようかなと思ひ立つたのであつた。これならば思ひ出すがまゝに——さうして思ひ出して見ても樂しくはあらうとも苦しくはなさゝうだし、その思ひ出すまゝを一つ氣まぐれに書きなぐつてやらうとも、さうしてその結果どんな纏りのないものになつてしまつてもいゝわけのやうでもある。それに若しまたうまくその一年前の旅の思ひ出にすつかり思ひ耽ることでも出來たとしたら、少くともそれを書いてゐる時間だけでも今日といふ日を忘れてもゐられよう。さうしてそんなふうに何か頭でも使つてゐれば自然と疲れてよく眠ることも出來るかも知れない。然うだ、然うだ！私はさう無理にも自分の氣を煽り立てゝ見て、さて「厦門採訪冊」といふ紀行文を起草し出して見たのであつた。

——その「厦門採訪冊」を私は自暴自棄ともいふ調子で書きなぐつた。思ひ返すと過ぎ去つたことは皆美しくたのしいように見えたし、書かれることは私が愛してる異境ででもあつたから、今日といふ日を忘れようといふ私の考はどうやら成功したように思へた。けれどもそれらの思ひ出のどこかに隙間でもあり、ちよつとでも筆が滯るやうな事があつたらそれこそその日はもうおしまひであつた——私はいつのまにやら直ぐにその旅のことからどういふきつかけがあるのやら直ぐに今日のことを思ひ出すのであつた。一たい私をこれほどなやませる出來事は、私がその旅から歸ると直ぐに起つた事でこそあれ旅とは直接にはまづ何の關聯のしようもなかつたのだのに——。私はなるべく現實を忘れたいから、文章の前後がどういふ具合にならうが一切かまわずに、とつとと書いた。狩り立てられるものゝやうにせかせかと懸命に書いた。さうして人に賴んでわざと出來るだけ頻々と居催促をして貰ふ方法で、出來たゞけのものはどんどん私のそばから持去つてしまつてもらふといふことにした——何故かといふのに、氣の弱い男である私はかうすれば成る

可くその使を空手では歸せないと思つて厭でも應でも書くやうに努力しもするし、又氣まぐれなくせにものにくだわり過ぎる男である私は、その書きとばしたものをもう一度讀み返して氣にしたりその結果はうんざりして中途で止すやうなことのなるべく少ない爲めには書き貯へた原稿などは手近かにないのがよいからである。何と！　こんなさまざまなことをしながら私は自暴自棄的に書くのであつた……

記憶といふものは、一たい、心や頭のどんなところに殘つてしまひ込まれてゐるものやら私は知らないが、今さらにこれは不思議な作用である――私はその不思議な作用である自分の記憶のさまで古くもないものから、私自身の氣に入つたことゞもやらそれを喚び起すに當然な順序となるものなどをごた／＼と書き流してしだらもなく「厦門採訪冊」の稿を急ぎながら――はかばかしく行かないのに喘ぎながら、自分の頭のなかやら心のなかやらをあちらこちらと彷徨してゐるうちに、其處で或る夜、私はふと一人の人物に出會したと思つてもらひたい。初め、私はその人物のことを何のつもりもなく思ひ出して、さてその人物のことをちよつと書きつけたのであつた……

……………朱雨亭といふのがその人物の名前であつた。ちようど私が厦門からその當時その地方の內亂の中心地であつた漳州へ見物を志した時であつたが、私はそれまで私がつれてゐた案內者と別れてしまつて、それ故、漳州へ行くについても私にはいゝ案內者がなかつた。やつと二人ほど同行者があつた。それも出發の前日に決つたのであつたが、その同じ日に、厦門で私を親切に取扱つてくれた人のひとりである周といふ人が、私に次のやうな意味のことを言つて一枚の名刺を渡した――

「この人に紹介しよう。二十四五の青年だが、漳州中學校の教師だ。彼は二三年來漳州に居住してゐて、その地方の

ことなら地理的にも歴史的にも亦現在のあらゆる方面のことにも精通してゐる眞面目な新思想家で、それに日本のことに就て興味を持つてゐるさうで、私が彼に君の話をしたところが彼も君に會へるのを大へん喜んでゐた。彼は今日廈門へ出て來てゐる。さうして明朝君が乘つて行かうとその同じ小蒸汽船で彼も漳州へ歸る。きつと君は明朝小蒸汽船のなかで彼を見出すだらう。――彼の方から君を認めて君に聲をかけるだらう。私がさう彼に言つて置いたから。その男は朱雨亭といふのだ」さう言つて周君は、その彼自身の名刺に記入した朱雨亭先生といふ文字を指さしてから「英語の教師だ。だから、貴國の言葉は知らないがきつと、その言葉で君と話すことが出來るだらう」さう周君も英語で私に言つてくれた。私は大へん好都合に思つた。といふのは私はその日に同行者を二人約束をしたけれども、その二人は漳州へは始めて行く人たちである上に、どうもいろいろの點であまり氣の利いた同行者ではないように私に彼等を觀察してゐたからである。彼等は二人とも臺灣人でそれ故いくらか日本語に通じる。まあその點だけがいくらか取柄ではあるがその日本語もよほどもどかしくつて、或は私の英語の會話の方が未だしも役に立つかも知れないと思へる程だと言つたらその貧弱の度は判るだらう。

その翌日、私は漳州の方へ溯つて行く小蒸汽船に乘つた。それは危いほど一ぱいに人を乘せてゐた。さうして船は我々が豫想したよりは二時間以上も出帆が遲かつた。私はその船が出帆するまでの間、どこに朱雨亭がゐるであらうか――それにしても私の方から彼を見わける事は全く出來ないのだから、船中唯一の日本人たる私は、朱雨亭が早く見つけてくれゝばいゝと思ひながら、自分自身を廣告するやうに時々座席から立上つて四方を見まわしたりした。さうして二人の同行者に向つては私に捜す人があることを告げて、もし彼等に好意さへあつたら、朱雨亭君の有無を群集のなかで呼んで貰ひたいと思つた。しかし同行者たちは――彼等は小學校の先生であつたが、そんなことをするのは不作法でも

あり又彼自身で好ましい事でもなかつたからであらう。「こんな人込みで解るものちやない」と呟いて外の話題の方を彼等同志でつゞけてゐた。この場合私が若し日常自分が使ふ言葉――即ち日本語で叫んでいゝのなら多分、立ち上つて「朱雨亭君といふのはどなたでせう」とわめいて見たであらうと思ふ。私はそれほど朱雨亭君を心頼みにしてゐた、しかし誰も私を見つけてくれさうにもないので、私は朱雨亭が今日船へ乗らなかつたのかも知れない、仕方がなければ漳州へ着いてから中學校へ行つて見よう――私はさう思つて船中ではあきらめてしまつた。さてその日は船中でも其の外のどこででも私は朱雨亭から認められもせず、私も朱雨亭を知ることも出來なかつた。さうしてその次の日になつて、私は朝早く中學校へ朱雨亭を訪ねて行つた。しかし夏期休暇中である學校へは、朱雨亭は出勤してはゐなかつた。それならば彼の家はと訪ねると城外のかなり遠いところだと言つた、私は全く思ひ諦めて、けれども朱雨亭が私に會つて日本の事情なども知りたいと言つたといふ周君の言葉をも思ひ出したものだから、かたがた、私がその日多分そこにゐるであらう或る家と私自身の名とを名告つて、若し朱雨亭君が學校に出て來るかも知れないと言はれるなら、さうして果して出て來たら、さう私の言傳てを頼みたいと言ひ殘して中學校から歸つて來た。私と私の二人の同行者とは中學校から歸ると、偶々昨日この街に同行したもう一人のこの地に居住の臺灣人の息子――彼は未だほんの少年であつたが、その少年に、もう一度昨日の夕方のつゞきの案内を頼むことにした。この少年は怜悧な目つきをした氣の利いた童子で私たちは、昨日も漳州に着くが早いか、まだ日かげがあつたから私たちのこの短い日數を僅の時間でも無駄に費すまいと心がけて、この少年につれられて市街の古城門や新設の市場や公園などを見て歩いたのであつた。この少年の態度は私の同行者二人よりはずつとてきぱきしたものであつた。けれども彼と私とはたとひ一言でも通じ合ふやうな言葉は一語も互に持ち合さなかつた。少年が何かの前に立つたり或は遠く指さしたりして永々と說明をする場合にも、私の同

行者はほんの少しばかりそれも不得要領なことを私に通譯するだけであつた。それをあの怜悧な少年が傍にゐて或る好奇的な目つきで私の目をぢつと見つめて、「私の言つたことがそんなにあつさりであなたにはのみ込めますか」と言ひたさうに私には感じられたりした。私はこの少年の案内振りが氣に入りながらも、しかも私がこの少年と直接問答出來ないのがもどかしくもあり、また私の同行者たちがあまりぼんやりなのが腹立しくもあつて、明日はどうかして朱雨亭君に案内して貰ひたいものだと願つてゐたのに、やはり朱雨亭君とは逢へなかつたのであつた。さうしてその一日もやはりあの少年の案内で、あまり見るところと言つて澤山もない漳州城の内外を殆んど見物して日盛りのなかを、あの少年の家へ歸つて來たのであつた。さうして我々はその地方の慣例であるらしく夕刻近くまで午睡をした。

我々すべてが午睡から目を覺して、その家の入口に近いところに腰をかけて雜談してゐた時であるが二人づれの青年がそこに這入つて來た。その一人は私の同行者の知り合ひであると見えて直ぐに彼等は言葉をかけ合つた。さうして私の同行者は私に、「朱雨亭が來たさうだ」と告げた。私は今來てゐる二人のうちの一人が朱雨亭だと知ると彼を迎へようと腰かけから立つた。朱と私とは立つて相對した。――今まで未だ誰ともあまり口を利かない方の青年が朱雨亭であるらしい。その青年は腰かけから立つた私の顔を今別に見ようともせずに――きつとさつきから見つめてゐたからであらう――又、私には何も言はない前に同伴者であるもう一人の青年に何ごとかを支那語で呟いたかと思ふと、朱から話しかけられたその青年は、臺灣人にしてはかなり流暢な日本語で私に話しかけた――

「朱君はあなたにならもう今までに二度も會つてゐると言つて驚いてゐますよ。」

「へえ！　今までに二度。どこででせう？……一度は船でですか、それにしても二度とは!?」

私もひどく訝しい氣がして、思はず他の言葉を平常語る人間に對つてのやうではない自然な輕い調子でかう言つた。

かし、相手から一度は公園で昨日の夕方に、一度は小蒸汽船のなかで、然も二度とも私たちは互に一間とは離れてゐないところで顏を見合つてゐた筈だといふことを說明された時に、さうして私がもう一度つくづくと朱雨亭の顏を不思議がつて瞬視した時に、いかにも！私があれほど搜し求めてゐた人、朱雨亭にはなるほど私はもう二度までも會つてゐて、言はれて見れば互に一間とは距ならないところで、それぱかりか船のなかはもとより公園ででも二十分ももつと以上も互に相對してゐたことは全く事實である。なほ私になつて見れば、それぱかりか小蒸汽船では朱雨亭がまだそれに乘り込まないうちから、乘り込まうとして艀の舢舨にゐる間から私は彼に注目をしてゐたのであつた――といふのは此青年は小蒸汽船が出帆の合圖をしてしまつてから危くも乘りそこねようとして大急ぎに舢舨を急がせたあの小蒸汽船の最後の乘客こそ自分が今見てゐる彼であつたからだ。彼はちやうど舷に近く腰を下してゐた私のそばへ舢舨から慌しく乘りうつて、彼の白い洋服の袖は私の方にふれて私の側をすり拔けた。こんなぎつしりの人込みのなかで、今ごろ來てどこへ腰をかけるつもりだらうか、そんな考へもあつた私はふり返つてその青年を見た。彼は私の斜めうしろの二三列うしろに割り込んで行つた。そこにはやはり一人の洋服の青年がゐてこの青年と慌しく乘り込んだ青年とは友達同士らしかつた。そこには先刻から青年とその同伴の二人の處子とがゐた。この十五六ぐらゐの娘たちはこの荒涼たる船中に於ての一番目に立つ娘たちで、この地方では極く稀に見るやうな女學生とも思はれる風俗であつた。それが先刻から船の出帆が手間どる退屈しのぎに時々私の觀察の目を注がせてゐたのであつた。きつと彼の女たちはこの地方に於ける急進的新思想の地だと噂に聞くその漳州の娘たちであつたらう。たゞに彼の女たちの髮容だけではなくその表情や動作などのなかにもどこと言つてとり立ててでもない潑剌たるところがあつた。それ故に船が動き出してからも時々自然とその方へ目が向くことがあつた。從つて遲ればせに乘込んで來て彼の女たちのそばに腰を下したあの青年をも自然と注目し

てゐた。——その彼が今になつて目のあたり彼が名告るのを見ると、朱雨亭その人であつたのだ。それはかりではない。私たち——私と朱雨亭とは二十分以上も隣り同士に並んで腰をかけもしたのではないか。それは昨日の夕方である。私は私の二人の同行者と一緒にあの怜悧な少年の案内で公園を歩いてゐた時であつた。私の同行者たちは偶然、公園の芝生で一人の彼の知り人に會つたらしく立話を初めた。見知らない青年は台灣人らしかつたが上手な日本語を使つた。私の同伴者たちは厦門語で語るのに彼はいつも日本語ばかりで答へてゐた。——この青年は何でも「今までの仕事はつまらないからやめた。これから蜜蜂を飼つて見るつもりだ」といふようなことやその他のことを二十近くも話してゐた。私は聞くともなしに彼等の語るのに耳を傾けてゐたが、話はなかなか永さうだから近くにあつた共同ベンチに腰を下した。するとその蜜蜂を飼はふと心がけてゐるといふ青年とつれだつてゐた青年が、彼もやはり三人の熱心な立ち話とは關係がなかつたと見えて、私の腰を下した共同ベンチへ來て腰を下した。その彼、私の隣りにその時腰をかけた青年が、今になつて先方からさう言はれて見るとなるほどやはり朱雨亭であつた。さうしてあの時蜜蜂を飼はふと語つた青年は、今、朱雨亭と私との對談の通譯に餘程役立つてゐるこの青年と同一人であつた。朱雨亭は勿論船中でも私に日本人である私にすぐ目をつけたさうである。しかし朱雨亭は周の言葉で私が全くの一人で、同伴者も何もなしで漳州見物をするものと思ひ込んでゐた。それ故、同行者のある私を見つけても、彼は周から聞いてゐた私とはどこか違ふような氣がして別人だと決めてしまつてゐたのだといふ事であつた。——私たちすべては互に、日本語やら英語やら厦門語やらを相手の便宜によつて交々使ひ分けながら、やつと朱雨亭と私とのこの妙な行き違ひを一しきり話し合つた。

「それで、もう見物は終つたか。」

から朱雨亭が私に問ひかけた——問ひかけたらしかつた。私は今までの對談の間でも朱雨亭と私との直接でする問答

には全く困難を感じてゐた。といふのは朱雨亭の英語はどうも私には殊に聞きづらい發音であつた。いかにも重苦しい日本の東北人のやうな音聲でとぎれとぎれに言ふのである。英語の先生で學力はあるのだらうがこの發音はいかにも惡いと私は思つた。朱雨亭に言はせれば私の發音がいかにも惡く、聞きづらいと言つたらう。さうして英語に慣れた外の人から聞けば私も朱雨亭も同じ程度だと言ふかも知れない。なるほど、私は英語は事實出來ない。しかし周となり鄰となりその外の人々なりとともかくも英語で一とほりは用が辨じて來たのである。しかし朱雨亭とはどうも互に相通じさうにはないのであつた。そこで私は誰かの通譯を豫期して日本語で言つた――

「大抵は見たつもりです。南院といふお寺は未だですが、」

例の「蜜蜂を飼はふといふ青年」がそれを朱雨亭に通辯しながら、朱雨亭の返事を待たずに彼自身で答へた。――

「では、これから御一緒にそこへ行きませう。近いところです。夕飯までに行つて歸つて來ませう。」

私達はこの青年の案内で、今はこの地に駐屯してゐる授閩粤軍の赤十字病院になつてゐるといふ南院を見物した。もとより朱雨亭もそこに從いて行つてはくれた。しかし言葉が通はないといふことはやがて、私達が相異つた二つの世界に住んでゐて、しかも互に渡るべき道もないといふことに外ならない。さうして私と朱雨亭とは南院の行きにも歸りにも殆んど**ろく**には口を利き合はなかつた。

朱雨亭と私とがこの通りであつたのに引きかへて全く偶然に行き合つたあの「蜜蜂を飼はふと言つた青年」は、彼が日本語に巧であつたといふわけで私にさまざまな話を聞かせた。道すがらあそこの舊橋を渡りながら、この舊橋の南半は又の名を仰徳橋ともいふ――それは正徳君の滑稽な傳說から出てゐる。正徳君といふ人は民情に精しくなければならないといふので、天子でありながら平民に姿を代へて四百餘州を歩いた人である。この漳州地方へも來た。さうしてこ

の橋を渡つてゐると、その時、一人の貧しさうな婦女がこの橋のたもにゐて、とぼとぼと橋を渡つてくる正徳君に對つて幾百度も敬禮をしながら彼を迎へてゐた。正徳君はこの下賤な女が一向名告りもしない彼を見分け得てこのとほりに彼を尊敬してゐるのを且つ驚き且つ喜んで、その後この橋を彼自ら仰駕橋と呼んだ。この民情に通じた筈の天子は、橋のたもとで幾百度も彼に御辭儀をしてゐた女といふのは實はただ水邊の洗濯女であつたのを知らなかつたのだ……。この正徳君のことはその外にもさまざまに或は小説に或は芝居になつて傳はつてゐる。「正徳君蘇州に遊ぶ」といふのがある。芝居だが、蘇州の或る旗亭に白牡丹といふ一人の美女があつた。その身はそんななりはひをしてゐたが、世に珍らしい貞操のある女で、今まで誰にもなびいた事は一度もなかつた。偶々この時もやはり平民の姿をして蘇州に遊んだ正徳君はこの女の噂を聞いて、その女を召んで見ると聞いたにも優る美女である。正徳君はその容色に迷うて言ひ寄つた。しかし女は決して身を任せようとはしない。女の操の堅いことを知つて益々彼女を愛するやうになつた正徳君は、自分で天子だと名告つた上で、なほも疑つてゐる女の面前でその外袍を脱ぎ捨てると、その下には袞龍の衣が現はれる。后にしようといふ勅があつて白牡丹は正徳君に手をとられて都の方へ行く。その途上で激しい雷雨があつて白牡丹はその時雷光に打たれて死ぬといふ筋である。なるほど白牡丹は容色も徳望も具備してはゐた、けれども皇后になるだけの何物かが缺けてゐた。それを敢てしようとして彼の女は死んだといふのがその芝居の教訓だ……。そんな事をも彼「蜜蜂を飼はふと言つた青年」は話して聞かせた。私はその話はたゞいかにも支那人らしい莫迦な話として覺えてゐたが、今になつてそれを思ひ出すとその話はなるほど莫迦々々しい。しかし身の程を知ることや運命に盲從することなどを極端に教へてゐるその卑屈なモラルのなかに、私は或るそれは但に人間の微小をばかり考へてゐた支那人にふさはしい悲しいものがあるのを今やつと氣がつくように思ふ――。

……さて、朱雨亭と私とはあんな奇妙な具合でやつと互に捜しあてたかと思ふと、言葉が思はしく通じないといふ事のために會はなかつたも同然なやうなことになつたし、かも朱雨亭と私との縁がなかつたのはたゞにそれだけではない。あの夕方、街のどの家にももう灯のともるころに、南院から歸つた時に、朱雨亭は私に向つて言つた――

「今夜私は友人を訪ねなければならない。その代り私は明日君と一緒に厦門へもう一度行かう。さうすれば又船のなかで話が出來るから」

私もそれに對して言葉を番へて別れた。しかし言葉のよく通じ合はないふたりは言葉を惜しんで約束をしてゐたことを、その翌日の朝になつて私はやつと氣がついて迷うた――私は一たいどこで彼を待つたらいゝだらうか。河岸に近いこの家へ朱雨亭が私を誘ひに來るだらうか、それとも河岸へ行けば自然と彼に逢ふだらうか。そこで私は私の同行者にそのことを相談した。彼等はともかくも河岸へ行かうと言つた。しかしそこには朱雨亭が今見あたらないばかりか、その河岸一面に二町ばかりも並んでゐ列つてゐるこの川船のどこに朱雨亭が私を尋ね、或は私がどこへ朱雨亭を尋ねたものであるか判る筈もない。しかし私の同行者たちは私の氣持ちなどには一向無關心に一艘の船のなかへどんと這入つて行く。私が朱雨亭と約束をしたことを彼等に告げても彼等はどういふわけか、朱雨亭に反感でももつてゐるかと思へるほど無愛想な態度で、朱雨亭が果して來るかどうか解るものではないと言ふ。また川船で會はなくとも石碼まで下つて行つて小蒸汽船に乘れば、川船は無數だが小蒸汽船は一つだからきつとそこで落ち合ふといふ。なるほどそれに違ひない。けれどもあのごたごたした小蒸汽船のなかで誰がゆつくり話し合へるものか。それに川船のなかは二時間近くかゝるのに小蒸汽船は四十分ぐらゐで厦門へついて仕舞ふではないか。私は人の氣心を知らない私の同行者に少し腹を立てて、ひとり船の上に立つてもしや朱雨亭らしい人でも見えないかと、あたりを見まわした。そのうちにこの乘合船は滿

員になつて、岸から離れた。私はもし朱雨亭がわざわざ私のために厦門へ來るのだつたら、かうして出し拔いたやうな事になるのではないかとも考へ、いや彼は多分厦門へ用事があるのだらうとも考へて朱雨亭はもうどうでもいいと思つた。それよりはこの時に限らず、この三日の間何かにつけて私の氣持ちの邪魔にはなつたかと言つても決してさう便宜にはならなかつた且つどことなく打とけ難い私の同行者を、私は少しいまいましくも思つた。

わざわざ私のためではないとしたら、朱雨亭は多分ひとりでも來るであらう。さう思つてゐた私は、小蒸汽船のなかから果して朱雨亭の姿を見とめた。――今私たちと同じく川船を下りたのであらうさうして艀舨で小蒸汽船に乘らうと水の上にゐる彼である。彼の艀舨は私達のとは反對に小蒸汽船の艫の方の舷へ着けられた。けれども朱雨亭と私とは今度は互に注意しあつた。彼の方から人を押しわけて私の傍へやつて來てくれた。しかし私たちにはお互に不慣れな外國語でまで喋らなければならないほどの用事は何もなかつた。私と彼とは互に目を見合つて親愛の情を無言で表白しただけであつた。彼は私の同行者に向つて厦門語で何か喋り、私の同行者に向つて日本語で時々用事を喋つた。彼は一たいに口の重い人らしかつた。さうして彼が私に船中で話しかけた事は僅に「漳州は面白かつたか」とか「何時日本へ歸るか」とかいふやうな數語であつた。私は漳州の近況などに就て朱雨亭から聞いて置きたい話題を幾つか念頭に浮べはしたけれども其はやゝ精密なことではあり、私は私の同行者の不得要領な通辯でそれを聞かうとは思はなかつた。私はたゞ眉の太い色の淺黒い支那人といふよりは東京の學生などに得てかういふタイプのある丸顔の朱雨亭を見つめながら、この男性的な風貌の青年が時々ちよつとはにかむやうな相手にひるむやうな表情をするのを一種の好意を持つて眺めつゞけてゐた。私は何か一言彼にお愛想を言ひたいと思ひながら、しかし適當なやうな辭柄はどれ一つも英語では思ひ浮ばなかつた。かうして私と彼とは船中では殆んど互に語り合はなかつた。そのうちに小蒸汽船は厦門へ着いた。艀

江はその日はひどく波立つてゐた——何でも、その翌日は舊曆の六月十九日で「陸月十九日無風海亦鳴」とその地方の諺にもあるやうな厄日であつた。灣内に着いた我々の小蒸汽船のまわりには上陸する人たちを客にしようといふ艀飯がうぢやうぢやと群がりながら波に揉まれ合つて浮き上つたり沈み込んだりしてゐた。小蒸汽船の客たちは何も爭ふ必要もないのに爭うて艀飯へ乘りうつてゐる。私の二人の同行者も一隻の艀飯なかへつゞいて飛び乘つた。私もそれに飛び乘つた。朱雨亭が私につゞいて乘らうと身構した。その時である。一つの大きな波が來て、それでなくとも既に三人の人間が飛びうつつたはづみに本船からやゝ遠退いてしまつてゐた私たちの船は、その大きた波の表を滑つて急に遠く本船から離れてしまつた。小さな舟に三人の客を得た舟人は、朱雨亭が乘らうとしてゐたことを知つてはゐたが、それだけの客に滿足して、その浪の間をもう一度本船の方へ漕ぎ返さうともしなかつた。ひとり甲板にとりのこされた朱雨亭を私は見た——さて、それつきり私はもう朱雨亭を見ない。

——唯、それだけの事である。それだけの事を、しかしそのころ——この文章の初めに書き記したやうなあんな心態で、無理に自分で自分の氣を引き立てながら「厦門探訪冊」の稿を强いて綴つてゐた私は、自分の記憶をさぐつてその底に埋もれてゐた朱雨亭を見出して、彼のことを一とほり考へつづけてゐるうちに、今まではたゞ互にまづい英語で數語を交しただけの人と思つてゐた朱雨亭には、どうやら何かしらの意味があるやうに私には思はれて來た。私と朱雨亭とが互に名告り合ふまであの妙な行きちがひや、やつと會つてからの言葉の通じない爲めのもどかしさや、それの私と朱雨亭とのさまざまな無緣は、最後にあの浪のために一言の「左樣なら」さへ言はずに永久に別れたことによつて全く完成されたやうに思ふ。あの旅の間私は行く先き先きの土地で少しでも自分に因緣のあつた人々に對しては、旅人らしい心持ちで或は約し難い再會を約したり、或はそれぞれに fare well を告げて來た。それを言ふ暇のなかつたのはただ

朱雨亭だけであつた。何でもない事ではある。だが、それが私のその頃の心に漂ふてゐる或る心持ちとしつくり結びつくのを私は感じた。私は、それ故せめては紀行文のなかへだけでも朱雨亭のことを出來るだけ精しく書いて置きたいと思ひ立つた。それにしても私はいろいろなことを忘れてゐる――あの「蜜蜂を飼ふのだと言つた青年」私にいろいろのことを聞かせた青年、正德君と白牡丹との話やら、漳州軍は本當に廣東軍と決戰するだらう――參謀長の林季商も昨日德化から本營に出て來たなどといふ消息を私に敎へたあの青年は何といふ名だつたらう。確あの青年にも名刺は貰つた筈だ。さう言へば朱雨亭の雨亭は雅號で本名は何とか言つた筈だ。又その私にくれた名刺には、何處とかの人だといふことも書かれてあつたと覺えてゐる――彼の名刺は、旅中に自然と集つた名刺のなかでも一番大形で又肉筆のやうた特色のある活字で大きく刷られたもので、最も支那的の氣持のあるものであつた。それにしてもの一束の名刺はどこかへしまつて置いた筈だが、どこにあつたらうか。――私はこのごろどうもひどく物覺えが惡くなつて仕舞つたが。これからさきも紀行文を書きつづけるにはどうしてもあの澤山の名刺の必要な場合が出て來る。さう氣がついて私は寢床のなかから起き出た。――言ひ忘れてゐたが私はそのころ、雨もふるしそれに起きて見たところで何をするといふこともないから、夏の蒸せるころだといふのに夜も晝も部屋をうす暗くして寢床のなかにもぐつたきりであつた。さうして原稿も枕もとを鼠の巢のやうにとり散して書いて居た。さて私は起き上つて、その名刺類を搜さうとした。兼ねて注意をしてしまつてある筈だから、それは直ぐ見つかるつもりであつたのにどうしたものかどこにも見當らなかつた。私は心あたりの場所をそれからそれへと引つかきまわして、或はスウツケースやら鞄やら嘉義で買つた籐のバスケツトやらをのこらずひつくり返した。それが私の心持をだんだんいらいらさせて來た。そんなものなどが無ければ無くとも書けることだと思ひながらも、私はどうしてもそれを搜し出さない上は何も手につかないやうなヒステリカルな氣持ちにな

つた。さうして最後に私は考へた——こんなに捜して見ても見つからない以上は、これはきつとあの鞄のなかへまぎれ込んで居るに相違ない。さて私はそのあの鞄を開けようかどうしようかと迷ふのであつた。

私には一つの鞄がある。そのころ私は萬一その鞄を人に見られるやうなことがあつては——見られても悪いことは何もない。ただ見られたくはない。といふ氣持ちからその鞄の鍵は、私が外へ出る時にはいつもチツキのポケツトに入れて置くし、また家のなかにゐる時でも長押の上の壁の中などへ載せて置くのであつたが、私はその鞄のなかにさまざまな手紙やら或は寫眞やらその他、さうただその他といふだけにして私はやはりその目錄書をここへ書き出すことはやめるが、ともかくもそんなものがぎつしりと一ぱいに這入つてゐた。それは私があの滿洲や廈門から歸る早々まだ私が旅裝をもまだ解かないうちに偶然起つたところの或出來事に關するそれぞれの思ひ出を持つてゐる品物ばかりであつた。私は支那で買つて來たこの支那流の鞄がその大きさやまたがつしりと鍵が出來るといふ理由から、特にこの鞄を撰んでそのなかに前に述べたやうな品物を持つてゐたのである。さうして私はこの鞄を自分でも心がけて開けないやうにしてゐた。この鞄はなるべく開けてはいけないものと、さう自分の心へも自分の意志で鍵を下して置いたのであつた。さて私はもう一月以上もこの鞄を開けることなしに來た。すべての事を思ひ諦めて忘れるには一切それに關係のあるものを見ないのがいいではないか。私があの鞄と心のなかで言つたのは實にその鞄を指してゐるのである。私は今その鞄を開けようかどうしようかと迷つてゐる。私にはそれを今開けるのはただの情癡からではない。必要があるからだ、さう自分で自分に言ひわけをした。私は實際その夜はそれを開けて見たいようなセンチメントに襲はれて來てもゐた。それにもう夜も更けてしまつて家人は誰も彼れも眠つてゐるやうであつた。私は押入れのなかからあのあまり大きくはない鞄をとり出した。さて私は、長押の上をまさぐつて妙に嚴そかに不細工な形に出來てゐるその鞄の鍵をそこにまさぐると、自分自身の枕もとに私は座つて、この鞄のなかに、旅で出會つた人々の名刺が果してまぎれ入つてゐるかどうかを見るのだ、だからただそれだけにしよう——決して手紙などを讀み返しては見まい。そんなことは今更心を掻き亂されるのに役立つばかりだから……。私はかう自分で自分に相談をすると鞄の鍵をこぜ返した。私は一種ひどく氣が沈んだ人の

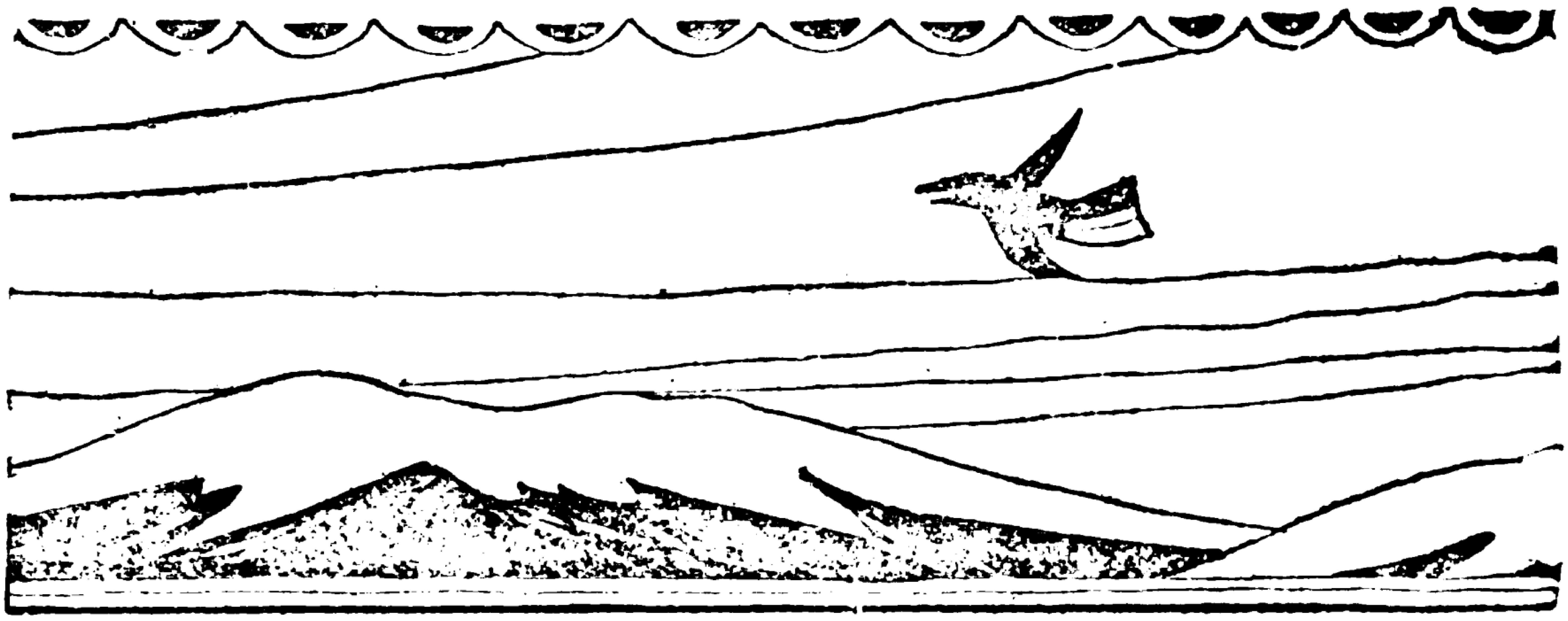
心地をしながら、その鞄のなかをそつと掻きまわした。決して月日の經つたものではないのに連日の雨で鞄のなかはかびの匂ひがした。私はそのなかのものをまぜ返しながら。手に觸れるもの一つ一つは今更に思ひ出すひまもなく悉く思ひ出のあるそれらの品物――或るものは或る時に彼の女が私に持つて行つてくれと言つてくれた。或るものは又或る時に私が彼の女にくれと頼んで貰つた。それらの品物は大きく二つに開かれた鞄の上で入り雜つた。私のこころはその鞄と全く同じように掻き亂されるのを感じた。「……あまり果敢ない。あまり果敢ない」さう言つて聞きわけもなく泣き入つた彼の女の聲が。私の心に沁み入つてゐたものが再び私の心のなかから湧き出して來た。泣き伏してしまつて、もう私を玄關までも見送つてくれることも出來なくなつた彼の女は、私がその家の門前を車に乘らうとしてゐる時、慌しくあの二階のガラス障子を開けるとそこに立ちつくして彼の女と私との間に町角の家が現れるまで私は見返つたし、彼女はいつまでも泣いて立つてゐた…さまざまの場合のいろ／＼な聲やらまぼろしやらが一度に私の身のまわりに苦しく落ちかかつて來る―「名刺はここにもない。――どこへ無くしたのだらうな」

私は言はでものこと／＼にひとりで呟いて、その鞄――ただ二つの箱を合せさへすれば殆んど自然と鍵のかかつてしまふその木の鞄を閉めた。カチンと金屬の音がしてその鞄はひとりでに閉まつた。私はその既に鍵の下りてしまつたその鞄をそこに横たへて投げ出したまま、心のなかで靜かに叫んだ――

「朱雨亭！朱雨亭！」

それは彼の女の名と、ふたりのすべてとをひつくるめて呼ぶことの代りででもあつたやうに――。

氣がついて見ると私は、どういふわけからであつたか、そこに蚊張の隅に端座してゐた。さて私は自分の胸が妙にすがすがしいのを感じながら、いつまでも端座をして、あの常には決して耳に聞くことの出來ない或る大きな翼「時」が、我等すべてのものの上を翔つて行くのを感じながら、私はもう幾日か掃除をしないために白く塵のつもつてゐる部屋の一隅を、青い蚊張越しに凝つと見入つた………。



暗夜行路

志賀直哉

六

石本とは橫濱で別れ、其所で乘換へ、大森へ着いた時は、もう日が暮れて居たが、慣れた路で、彼は小さな手さげ一つ下げ、歩いて歸つて來た。

急いで玄關に出迎えたお榮は何よりも、謙作の今度の話に喜びを云つた。それがもう決まつたかのやうに喜んで居るのが、謙作には不安心でもあつたが、兎も角、左う喜んで呉れるお榮が嬉しかつた。

お才といふ女は丁度東京へ出て居て、居なかつた。二人は久しぶりで食台に向かひ合ひ、夜の食事をした。

「一體まあ、どんな方？」とお榮が云ふ。

「どんなつて……」

「知つてる人で云つたら、まあ誰つて云ふやうな人？」

「左うね、知つてる人では一寸憶ひ出せないが、高井は鳥毛立屛風の美人だといつ

てましたよ。」

謙作は其爲めわざ／＼二階から東洋美術史稿を持ち出して來て、その繪を見せたが、相惜と、それに出て居たのは、何枚かある内の餘り似てない一つだつた。

「これとも異うな。兎も角もつといゝんです」

「まあ、大變なのね」

こんな風に二人は其事はよく話し合つたが、然しお榮自身の方の事は何となく互に口に出しにくかつた。そして餘りにそれの出ない事が變になつて來た時にお榮は漸く、云ひ出した。

「……でもね、貴方や信さんが贊成して下すたんで、私、本統に安心しました。」

こんなに云つた。かういはれると謙作は弱つた。彼は信行の傳へた事が嘘でないまでも、自分の氣持を本統には傳へてない事を知つた。其信行の上手な所が一寸いやな氣がした。

「あのね……、信さんはどう云つたか知りませんが、本統を云ふと、僕は餘り贊成してないんです。不贊成がいへないから贊成したので、實はいや／＼なのです」

これを聞くとお榮は一寸意外な顏をした。

「此話がうまく行つたとしても、二三年は自家の事を貴女に見て頂きたいんです。左うだと僕には非常にいゝんです」

「左う？……それは私だつて、今、貴方とお別れするのはつらいのよ。だけども仕方がないと思つて居る。それに、左う云つちやあ、何んだけれど、私、矢つ張り本郷のお父樣がこわいのよ。近頃段々左うなつて來た。其後は御遠慮して、何はないけど、こわい眼で何時でも凝然とから睨まれてるやうな氣がして仕方がない」

「そんな事ないさ。それは貴女の氣のせいだ。乾度何所か身體が惡いんだ」

「えゝ、若しかしたら、左うかも知れない」

「乾度左うだ。第一貴女は本郷のお父さんを恐れる事は何んにもないんだ。本郷のお父さんとの事は對僕の問題で、貴女の知つた事ではありませんもの」

「左うも云へないわ。お祖父さんの居らした頃から、私はお父さんの嫌はれ者でしたわ」

「然しそれでもいゝぢやあ、ありませんか。それより、身體が惡いやうなら醫者に診て貰つて、それから直してかゝらなければ駄目ぢやありませんか。兎も角、こんな事はもつとよく考へてから決める方がよかつたんです」

お榮は今更の反對に當惑して居た。そして、愚痴つぽい調子で贊成といふ事だつたからお才にも左う返事をし、其支度で今もお才は東京に出てゐるのだといふやうな事を云つた。

謙作の方も最初はそれ程に云ふ氣はなかつたが、云ひ出すと矢張り其所まで云つて了つて、今は幾らか後悔して居た。それに、こんな事を云ふ自分の心持が、自分でも一寸はつきりしなかつた。お榮の爲めに云つてゐるのか、自分の爲に云つてゐるのか、左う考へると、何しろ、お榮に對する、變な未練氣から、こんなにして別かれて了ふのは、つまらないと云ふ駄々つ兒のやうな我儘な氣持が起こつて居るのであつた。お榮の方だつて、もう少し自分に執着していゝ筈だといふやうな不滿があつた。離れて居るとそれ程に露はれなかつたかういふ氣持が、會ふと急に出て來たのである。

然しこれはいゝ事ではないと、彼は思つた。かういふ幼稚な我儘に自身を渡し切つてはならないと考へた。で、彼は今云つた言葉を取消すやうな意味で、もぞ〳〵とまづい調子で何か繰返して居た。

お才と云ふ女が大きな風呂敷包を抱え、俥で歸つて來た。痩せた脊の高い、そして顏に險のある案外年をとつた女だつた。謙作は最初から厭やな印象を受けた。

「こちら、謙さん？」から一度お榮の方を向いて、「私、才。初めて、お眼にかゝります」からいつて年に似合はぬ鄭寧なお辭儀をした。

そしてお才は眼尻に小皺を作り、色の惡い齒ぐきを露はし、笑ひかけ、臆面もなく親しげに謙作の顏へ眺め入つた。謙作は參つた。お才に好意のある事が感じられるだけに尚、彼は一種壓迫を感じた。兎も角お才は彼の想像以上に下品な女だつた。

彼は自分の好惡感が、其儘にお榮で、働かない事を歯がゆく思つた。余りにそれがお榮にはなさ過ぎる氣がした。そしてこんな女と一緒に何しようといふお榮の氣が知れなかつた。

お才は風呂敷包を解き、何枚かの華美な女着物を出して見せた。何れも古着らしく、何所か垢染みて居た。お才は時々、

「これがね……」こんな風に云つて、起つて、それを自分の胸に當てゝ垂らし、お榮に説明した。

謙作は少し疲れても居たし、其場に居にくい氣持もし、挨拶して一人二階へ上がつて行つた。そして彼は床の中に寢そべりながら、今、抱えて來た、東洋美術史稿の挿畫を見た。古い時代のものが殊になつかしかつた。中には今度の旅で見て來たものもあり、今までになく彼はそれらに惹き入れられた。かうして自分には今までになかつた世界が展らけて來、そして結婚によつて新しい生活が始まるだらう、など考へると、彼の胸には靜かな幸福な氣持が自然に湧き上つて來た。それにつけても、今階下で何か小聲で話してゐる二人を想ふと、丁度反對な世界が今、お榮に展らけつゝある

のではないかと云ふ氣がし、此儘にして居ていいのだらうか、といふ氣がした。
久しぶりで、自身の寢床はよかつた。暫くして彼は電燈を消し、快い眠りに沈んで行つた。
翌朝彼が起きた時にはお才はもう東京へ出て居なかつた。古着に就いては、女に彼地でも直ぐ呼ぶ事が出來るけれど、それに着せる衣裳は夏冬一と通りの物を揃えて行かねばならぬさうだといふ事をお榮が話した。總てがお才任かせらしかつた。かう、どん〳〵と事が運びつゝあるのを見ると今更どうもならない氣がした。
彼は自分の方もそろ〳〵支度せねばならぬと思ひ、借りた本を別にし、自分の本を行李幾つかにつめてみた。
午后彼は牛込の石本を訪れた。電話をかけずに行つたので丁度今出たといふ所へ行つた。別に用もなかつたので、彼は其儘銀座の方へ引き返へしたが、不圖石本が京都で明後日用があると云つてゐた、それを全く忘れて居た事に心附いた。
彼は何となくお才と會ひたくなかつた。お才は彼がお榮に結婚を申込んだ事を聞き、それに變な興味を持つて居さうな氣がした。そして陰でお榮にどんな事を云つて居るか、それさえ大概見當のつくやうな氣がした。
久しく東京言葉を聽かなかつたやうな氣持から、一つはお才と一緒になりたくない氣持から、彼は夜になつて落語の寄席へ行き、晩くなつて大森の家へ歸つて來た
お榮とお才は未だ起きて、茶の間の電燈の下で何か話し込んで居た。
お才はその話で興奮して居るらしく、前夜のやうな世辭も云はず、自分で急須へ湯をさし、それを茶碗へしたむと、謙作の前へ置いて、直ぐ、話を續けた。
「それが、お前さん、ちつとも私は知らなかつた。その春から、これだつたんだ…」から荒つぽく云つて、お才はそ

の拵せこけた片手の親指と小指の先をお榮の鼻先きで二三度忙しくくつ附けて見せた。

お榮は眼を伏せ、默つて居た。

「口惜しいつちや、ない。旦那も何んだけれど、妹の奴、食はして貰つて居て、そんな事をしやがるかと思ふと、滿更本氣でもなかつたが、私は出双庖刀を振り廻はしてやつた」

謙作は何だか居たゝまらない氣持になつて來た。茶を飲みながら、腰を浮かしてゐると、それと察したお榮が急に顔を擧げ、

「お菓子でも出しませうか」と云つた。

「もう澤山」かういつて起ちかけると、お才も氣がついて、

「いやな話で、濟みません。」と殊更に作り笑ひをして謙作の方を向いた。

「石本さん、居らしたの？」とお榮が云つた。

「居なかつた。今日居ない事は知つてたんですが、すつかり忘れてたんです。仕方がないから、はなしかを聽いて來ました」謙作は火鉢の傍へいつて、腰を下ろした。

「謙さんは左う云ふものがお好きなんですか。私も好きな方だが、彼地ぢやあ、いゝのが來ませんからね。――えゝあれは何んて云つたかしら。落語家の方は忘れたが、かみさんが、旭榮孃といふ琵琶弾きで、暫く二人共家へ置いてやつた事がありますよ。却々いゝ聲で、梁元洪に字を書いて貰つた琵琶を持つて居ました」

お才は食臺に兩肘を突き、米嚙の所に兩の掌を當て、電燈の光りから顔を陰にしながらそんな話をした。それは左うする事で顔の小皺が見えなくなり、艶を失つた皮膚の色が分からなくなる爲めに幾らか美しく見えた。勿論お才は其効

果を十二分に知つて、仕て居るので、そして謙作にも實際それが美しく見えた。少なくも此女が若かつた頃は相當に美しかつたかも知れないといふ氣を起こさせた。

お才は翌朝岐阜の方へ起つて行つた。岐阜は郷里でもあり、其所に何か用もあるらしく、お榮とは日を決めて、京都で會ひ、一緒に彼地へ行く事にして行つた。起ち際に、

「お榮さんの事は御心配なく」こんなに云はれても謙作は挨拶が出來なかつた。

停車場へはお榮と女中とが送つて行つた。

其日午後になつて、謙作は鎌倉の信行を訪ねた。其所に昨日會へなかつた石本が來て居て、そして信行の方は風邪をひき、喉に濕布をして床へ入つて居た。

「未だ何んとも云つて來ないよ」

謙作も勿論左う早く返事を聽けるとは思つて居ないが、石本は彼の顏を見ると直ぐ云つた。そして其事に就いて二人は少し話して居たが、信行は熱があるらしく、眼の中がとろんとして、話を聞いて居るさへ苦しい樣子だつた。

「本郷から誰れか呼んだら、どうだい。歸つて左う電話をかけようか」と謙作は少し心配になつて聞いてみた。

「いゝよ。經過が分かつてるから、もう二三日かうして居れば直るよ」

「誰れか呼ぶ方がいゝだらう。そして吸入でもどしどしやつて貰ふ方が早いだらう」

「うむ」

「吸入器もないんだね？」

「そんなら吸入器だけ買つて來て貰はうか」

謙作は早速、町の方へいつて其機械を買つて來た。信行のうつら〳〵眠つて居る枕元で石本は退屈さうに榊門何とかいふ洋綴の厚い本を拾ひ讀みして居た。

謙作は信行に寝た儘、吸入を仕掛けてやつた。そして丁度來た大家のかみさんに其仕掛け方を教えて、後を頼み、夕方になつて石本と一緒に其所を出た。

停車場へ來た。其所には東京へ歸る石本の知つた醫者がゐて、翌日又此方へ來るといふので、其人に石本は信行の事を頼んだ。

汽車の中では、謙作は一人ぼんやりと薄暮の景色を眺めて居たが、氣が沈んで仕方がなかつた。矢張りお榮と別れる事が淋しかつたのだ。自身の爲めにも淋しかつたが、お榮の爲めにも淋しい氣がした。窓外の薄暮が彼を一層左ういふ氣持に誘つてゐた。

七

謙作は近かく別れねばならぬお榮と一緒にゐながら、今までにない一種の氣づまりを感じた。かうしてゐる事も左う長くないと思ふと、彼はなるべく外出らひかへるやうにしてゐるのだが、それが不思議に氣づまりで、且つ退屈でかなはなかつた。第一、一緒にゐて、話の種が急になくなつたやうな氣がした。

お榮の方は、然し忙しかつた。その忙しさから左う云ふ氣持には遠いらしく見えた。お榮は女らしい心持で、謙作の着物は一つでも汚れたものを殘したくなかつた。それらを洗張りにやり、縫直し、それに餘念なかつた。

或る朝、謙作はいつになく早く眼を覺ました。彼は理もなく變に落ちつかない氣持になつて、朝の食事もせずに其儘自家を出た。

停車場へ、來た汽車までは時間があるので、京濱電車の方へいつて乘つた。そして品川まで行くその間に彼は不圖、明け方夢を見て居たと云ふ事を憶ひ出した。そしてその夢が彼の落ちつかない氣持の源因だつた事は分かつたが、それを思ひ出さうとすると、不安な氣持だけが、はつきりして居て、どういふ夢だつたか、その事實の方は却つてぼんやりして居た。

何んでも近頃西洋から歸つたTを訪ねた所から始まる。所中體操場のやうな雜な大きな建物の中に、丁度曲馬團の樂屋に見る猛獸を入れた檻のやうなものが澤山あつて、その一つに何十疋といふ栗鼠くらいの小さな獅々が、目白押しに泊り木にとまつてゐるのが、甚く彼には面白かつた。

急に不安な氣持に襲はれると、そわ〳〵としてTと別かれ、上野の博物館のあの大きい古風な門、あすこへ彼は逃がれて來た。遠卷に何人かの刑事が取り卷いてゐる事が姿は見えないが分かつてゐるのだ。で、彼自身は反逆人といふ事になつてゐる。

彼はそつと扉の陰から外を覗いてゐると日曜かなんぞのやうに兵隊が三々伍々、前を通り過ぎる。その一人に「君は脱營する氣はないか」から訊いたらしい。直ぐ承知して二人は扉の陰で、急いで和服と軍服とを取りかへて着た。「これでいゝ」彼は思つた。兩方にいゝ事を考へたものだと思つた。そしてその和服の兵隊と別かれ、彼は何氣ない顏で、兵隊になり濟まし、一人淋しい方へ歩いて行つた。道幅の狹い兩側が堤の樣になつた所へ來ると、曜長のやうな制服を着た男が前から來て、いきなり彼を捕えて了つた。忽ち見破られたのである。見破られるのも道理、彼は自分で氣がつくと、軍服の着方が全然いけなかつた。襟のホックを一つもかけずに其所がだらしなく展ろがつてゐる。それからズボンが、ずり下がり、誰れの眼にも借り着といふ事は直ぐ分かる、ひどい格好をしてゐるのである。彼は我れながら餘り

の不手際に苦笑し、同時に、捕へられた事に戰慄した。大體こんな夢だつた。然し憶ひ出してよかつたと彼は思つた。變な落ちつかぬ氣持の出所が知れなければ、それだけでも終日いやな氣持のする事だつた。

はつきりした的てもなしに出て來たが、矢張り若しやといふ氣持から、彼は石本を訪ねる事にした。

石本は起きたばかりの所らしく、謙作は椽の籐椅子で石本の出て來るのを待つてゐた。少し秋めいた靜かないゝ朝で、苔のついた日本風の庭に朝日が斜に差してゐた。軒に下げられた白い文鳥が一寸濁つたやうな丸味のある聲でしきりと啼き立てた。

「御機嫌よう」石本の六つばかりになる上の娘が長く疊んだ三四枚の新聞を持つて來て彼に手渡した。すると、その下の二つか三つの肥つた女の兒が、一束の手紙を持つてよち／＼と歩いて來て、「はい。はい」かういつて同じやうにこれを彼に手渡した。

「ありがたう」彼はその兒の頭をなぜてやつた。

上の兒が駈けて行くと、下の兒もよち／＼と後から歸つて行つた。

彼は新聞を膝の上へ置き、手を延べて、そのまだ開封してない石本への手紙を前のテーブルへのせた。一番上になつてゐる子爵石本道隆樣としてある厚味のあるのが、S氏からのらしく、何となく彼にはそんな氣がした。

水で奇麗に髮を分けた、石本が出て來た。

「それはSさんからの手紙ぢやないかしら?」

謙作は一番上のそれを指して云つた。

「左う」石本は直ぐ取り上げ、「左うだ」と云つた。

石本は默つてそれを讀み始めた。謙作は其僅かな間が待遠しい氣がした。

「いゝ返事だ」長い手紙を卷き返えしながら石本がいふ。謙作はそれを受取つた。

それは實際氣持のいゝ手紙だつた。女の人には大分年の異つた兄があり、母親あり、それらによく相談して返事をするといふ事だつた。そして何よりも謙作を感動させたのは彼の不純な出生に就いて、Nといふあの老人が云つた言葉で、「…………それは其人物の問題にて、却つてその爲め奮發する底の人物なれば左樣な事は少しも差支えなきものと信ずる由申され候」とかう書いてあつた事である。尙、謙作の最近の寫眞と、何か書いたものがあれば、それを早速送つて貰ひたいと書いてあつた。

「何しろ、年寄りにしては余程、解かつた人らしい」石本は其老人を讃めた。

「…………」謙作はそれに返事をしなかつたが、腹の底では甚く興奮してゐた。淚ぐみさうになるのを出來るだけ堪らえた。

二人が一緒に朝の食事をしてゐる所に用の客があつた。それをしほに謙作は直ぐ歸る事にした。別れる時、石本は其手紙を直ぐ信行の方へ廻はして置くから、と云つた。

謙作は急ぎ足に歩いた。自然に急ぎ足になつた。十中七分通りもう大丈夫だと考へた。左う決めていゝと思つた。寧ろ左う決めなければ駄目だと考へた。それ程に珍らしく彼には自信が持てた。そして彼の頭では其人が急に近かくに來て居た。それまで東京へ歸ると同時にお榮の事が餘計考へられ、其人の方は不知遠退いた形であつたが、今急にそれが近づき等身大に見えて來ると、結婚後の生活までが不意と斷片的に浮んだりした。何時の間にか町には風が吹いて居

た。

彼はお榮への餞別の品を見る爲めに銀座の方へ行つた。時計に何か短かい、いゝ言葉を彫らせても面白いと考へたが、左ういふいゝ言葉が却々浮ばなかつた。二三軒時計屋を念入りに見て廻はつた。そしてその中から割りに氣持のいゝ流行遅れの型の物を選んだが、金を少しゝか持つて居なかつたので、それを屆けて貰う事にして、豊度彼は大森の家へ歸つて來た。

お榮はS氏の手紙の話を聞き、感動して泣きさうな顏をした。

謙作は其日奈良の高井にその後の事を知らす手紙を書いた。それからS氏へも禮手紙と、それから自分の寫眞と二三冊の自分のものゝ載つた雜誌とを送つた。自身の作物が藝術品としてよりも、もつと實際的な目的で讀まれるのだと思ふと、余りいゝ氣がしなかつた。しかも、これが自分の藝術だと云つて見せるにしては、何れも貧弱な氣が今更にされるのであつた。

それが屆いたと云ふS氏の手紙が來たのはそれから五日程後ちの事であつた。それに、若し兩三日内に京都へおいでになれるやうだと大變に好都合だが、と書いてあつた。N老人は貴方が何時又當地へ來られるかといふ事を再三訊く、それは自分が郷里へ歸る前に若し貴方が當地へ見えるやうなら是非お會ひして行きたいと云ふ氣らしい。貴方の方の御都合もあること故、强いてはいへないが、四五日内に老人はたつ筈で、それまでにおいでになれるやうだと此上なく好都合だといふ意味だつた。

尙、直子（女の人）さんは昨日歸國されたが、寫眞は兄さんから直接貴方の方へお送りする都合になつてゐる、とも書いてあつた。

彼はその手紙をお榮に見せた。そして、

「どうするかな」と云ふた。彼は迷つた。

「是非いらつしやい」とお榮は云ふ。

「お目見得に行くやうなものだ」彼は自分の作物を送つて見せるさへ多少拘泥した所に、わざわざ自身左う云ふ風に呼び出されて行く事が何んとなく自尊心を傷けた。

「どうせ十日程したら、行く所です。今更そんな事に拘泥(こだわ)るのはよくありませんわ。●さんでも石本さんでも本氣で心配してゐて下さるんですもの」

「うん、……」それも左うだと謙作は考へた。そして行かうと思つた。「然し僕がゐなくても、あとは大丈夫ですか？」

「何、云つてるの……」とお榮は笑ひ出した「此所へ來る時だつて、何んにも役に立たなかつた癖に。謙さんなんか居ない方が、餘程邪魔にならなくつていゝ」

謙作も笑ひ出した。

「よろしい。それぢやあ、出掛けませう。邪魔と云ふ事なら仕方がない」

「えゝ邪魔々々」とお榮は謙作が案外素直に承知した事を喜んだ。

謙作の家は一年以上借りる約束で、幾らか家賃が割引きしてあつた。然し今、一年經たぬ内に引き上げるとなると、その計算をしなければならなかつた。毎月女中ばかりやつて居たが、彼はそれをしに、自身山王の方の大家の家へ行き、ついでに電話を借りて、翌朝たつ事を石本へ知らせた。

京都の停車場へはS氏が出迎へて居た。前日、「あす朝たつ」と云ふ電報を打つたゞけで、左う云ふ豫期を少しもして居なかつた謙作は一寸恐縮し、そして小さい自尊心から色々拘泥して居た自分を恥じた。

N老人を尋ねるのは翌日といふ事で、その前にS氏が誘ひに來る筈で、彼は壞れ物などを持つて來てゐたから、其處でS氏とは別かれ、一人俥で東三本木へ向つた。

翌日約束の時間にS氏は尋ねて來た。そして二人は直ぐ近かい東三樓へ行く事にした。謙作は余り社交馴れない自分が幾らか不安でもあつた。然し前夜よく眠つて居たし、氣分はよかつた。

女中がS氏の名刺を持つて入ると、何時も河原からばかり見てゐた、老人の細君が、其日は常よりいゝ着物を着て、玄關へ出て來た。

「さあ、どうぞ」細い薄暗い廊下を先へ立つて歩きながら、「えらい、むさい所で……」などゝいつた。

一重羽織を着たN老人が河原の方を背にして、きちんと坐つて居た。謙作はいつもの癖で袴も穿かずに來たが、それが一寸氣になつた。

「初めまして、………」老人は痩せた身體に似合はぬ幅のある、はつきりした聲を出した。

「此度はこちらにお住ひやさうで………」こんな風に云はれると、謙作は只

「えゝ」と答へる。後は大概S氏が要領よく續けて呉れるのである。

謙作は様子では窮屈らしく自然なつてゐたが、氣持はもつとづつと樂だつた。彼はN老人がそれとなく自分をじろじろと見でもしさうに豫想して來たが、左う云ふ所は少しもなく、寧ろそれを避けると思はれる程に見なかつた。その事を氣持よく思つた。

割りに質素な食事が運ばれ、女中でなく、細君自身がお酌をして廻はつた。が、酒は誰れも余り飲まなかつた。

話は極く普通の世間話しかしなかつた。山崎醫學士の噂などが出た。敦賀の魚業の話から、昔は大概鹽魚にして出したもので、それを貯藏して置く倉が澤山あつて、維新前の事、筑波山の武田耕雲齊一味のものが、東海道が通れぬ爲め、北陸を廻はつて、京都へ入らうとする所を、敦賀で捕え、その鹽魚を入れる倉へとぢ込めた事があるといふやうな話を老人はした。日のさゝぬ、じめじめした倉で、それに鹽氣が浸込んで居るから、浪士の人達は皆、しつにかゝり、それが身體中に弘まつて、其樣子が實に見てゐられなかつた。………

「おい、一寸その袋を持つて來い」N老人は謙作の背後の違ひ棚を指し、話を少時きつた。

「御免やす」細君は謙作のうしろを通り、その袋を取つて老人の前へ置いた。古代紫といふ色が、實際いゝ具合に古びた羅紗の「火の用心」やうな袋だつた。老人は中から眼鏡や財布やマッチや小刀や磁石などを出してから、

「此根付けが、其時の浪士で、佐々木重藏といふ磐城相馬藩の男でしたが、世話になつたといふので、記念に呉れた物です、………」かういつて其袋を二人の前へ出した。

「はゝあ……」S氏は一寸見て、直ぐ謙作へ渡した。水牛の角にしてはもつと肌理の細かい割りに輕い質のもので、應擧の繪に見るやうな狗兒が四五疋かためて、彫つてある。

「其男なぞも話すと、却々しつかりした男でしたが、可哀想に寒さに向つて、皆死んで了ひました」

謙作は自分が一週間程前に見た夢を憶ひ起こし、自分の場合幾分、愛嬌味のある反逆人だつたが、それでも覺めてまで變な恐怖が殘つた事を想ひ、左ういふ連中が暗い、じめじめした鹽魚の倉で、全身しつに惱まされ、寒さに向つて一人々々仲間が死んで行くのを見てゐる時の氣持を考へると、一寸かなわない氣がした。

最初その連中は福井に隱れてゐて、福井なら大丈夫のつもりてゐたのを、左ういふ時代で福井でもはつきりした態度が取れず、お爲めごかしに領内を立退かせ、敦賀で捕えさしたのだといふ。

「あの頃の事を考へると、此先どうなる事か、まるで、分かりませんでしたからな」と老人は云つた。

其日結婚の話は誰れの口からも出なかつた。それは謙作にも氣持がよかつた。そしてS氏が歸りかけた時、老人は

「お近かうムります。如何です」と謙作だけを止めた。

謙作は老人の好意を嬉しく思つた。それは普通のお世辭でなく、本統にもう少し居て貰ひたいらしかつたからで、謙作は殘る事にした。

老人はそれからも維新時分の左ういふ話を聽かした。無頼漢が寄り集まつて尊王論を唱へ、金を集めては贅澤をしてゐた。が、間もなく捕へられ、白洲で尊王とはどう云ふ事かと訊かれ、尊い王樣といふ事だと答へたと云ふやうな話などが出た。

兎も角、謙作は此老人夫婦に對し、大變親しい感じを持つた。そして暫くして暇をつげた。

翌日老人夫婦は世話になつた醫者その他の禮廻はりやら、買物などに忙しいらしかつた。それでも門まで謙作の所を訪ねるのを忘れなかつた。

其翌日老人達は敦賀へたつた。謙作は停車場まで送つた。其所にはS氏、山崎醫學士、看護婦、その他見送りの人達が來てゐた。

老人達を送つて了つた謙作は急に用がなくなつたやうな氣がした。お榮が來るまでの一週間が待遠しく、その間の何んとなく氣の落ちつかない無爲な日が想はれた。高井を誘つて橋立か小豆島か左もなければ伊勢參りでもしようと思つ

た。

翌日、それは氣持よく晴れた日だつた。彼は高井が何處かへ出掛けぬ内に行くつもりで京都を早く出た。そして奈良の淺茅ケ原の茶店の離れに居る筈の其友を訪ねたが、高井は既に二三日前、郷里へ引き上げて、ゐなかつた。謙作は一寸がつかりした。彼は室生寺へでも行かうかと考へた。只、室生寺が何處で汽車を下り、どう行くのか、左ういふ事を精しく知らず、それを調べるのも億劫な氣がし、で、矢張り一番手近かい伊勢參りをする事にして、奈良では博物館だけを見て、直ぐ停車場へ引きかへした。

伊勢參りは思つたより面白かつた。神馬といふ白い馬にお辭儀をさせられるといふ話を聽いてゐたが、まさかにそれは噓だつた。五十鈴川の淸い流れ、完全に育つた杉の大木など見てみなければわからぬ氣持のいゝ所があつた。それから古市の伊勢音頭も面白く思つた。

芝居で馴染ある油屋といふ宿屋に泊り、其伊勢音頭を見に行く事にしてゐると隣室の客が一緒に行きたいと云ひ、食事も一緒にしたいからと境の唐紙を開け放なさした。「丁度縣會の方が暇になつたものですから」こんな風に、其人は云ひたがる人だつた。鳥取縣の人で彼より三つ四つ年上の人だつたが、縣會議員が、何の程度に自慢の種になる事か全く知らない謙作は縣會が出る度、氣の毒なやうな輕い當惑を感じた。

山陰に溫泉の多い事、それから、何とかいふ高い山が、叡山に次ぐ天台での靈場で、非常に大きなそして立派な景色の所だといふやうな話をした。

下座敷の客も二組程一緒に行く事になつて、七人程になつた、宿の女中に案内され、夜の遊女屋町を皆でその家へ行つた。

染めたのか、くすぶつたのか、兎も角、黑づんだ、ひどく古風な座敷へ通された。深い大きな床を背にして、皆が段通へ直かに坐つてゐると、その前の三寶に番組やらの刷物と他に菓子か何かが積んであつて、前三方は御簾をへだてゝ、やがて舞台となるべき花道程の廊下に向つてゐる。

「あなたは偉い、一人でこれを見ようとされたのだから」と鳥取縣の人が謙作を顧みて笑つた。謙作は別に左ういふ事は考へずにゐたが、成程左ういへば此廣い座敷に一人ぽつ然としてゐて、十何人かの女が出て來たら、一寸具合の惡い事だつたかも知れないと思つた。

下方が四五人坐り、太掉とも細掉ともつかぬ三味線を彈き出すと、木が入り、三方の御簾が上がり、電氣がつき、廊下が一尺ばかりせり上り、それに低い欄干がつき、そして兩方から四人づゝの女が出て來て、至極單調な踊りを、至極無心に踊るのである。十五分位で濟んだ。その單調な調子も、その余りに無心な處も、それから、太とも細ともつかぬ三味線の悠長な音色も面白かつた。それに時代離れのした座敷の樣子も、總てが謙作にはよかつた。これは一人でぽつ然と見てゐたら尙面白かつたかも知れないと考へた。

別の座敷に導かれ、肥つた五十位の女から、もつと殘るやう勸められた。が、誰れも殘らなかつた。一緒に又宿の女中について、歸つて來た。

翌朝、彼は俥で內宮から徵古館、それから外宮へ廻はつた。外宮では林の中の池に何百となく野生の鴛鴦が水面に、又岸の木の水へ差し出した大きな枝に一杯にゐるのを見て、夢の中の場面のやうに思ひ、興じた。

二見から鳥羽へ行き、一泊して、京都へ歸る事にしたが、その歸途、彼は龜山に降り、次の列車までの一時間半ばかりを俥で一ト通り町を見て廻はつた。

鞆山は彼の亡き母の郷里だつた。それは高台の在つて見すぼらしい町で、町見物は直ぐ済み、それから、神社の建つてゐる城跡の方へ行つて見た。廣重の五十三次にある大きい斜面の鞆山を想つてゐる謙作は、その景色でも見て行きたいと考へたが、よく場所が分からなかつた。
俥を鳥居の前に待たし、いゝ加減にその邊を歩いて見た。下の方に古い幽邃な池があり、その彼方が又同じ位の山になつてゐた。彼はその方へ降り、そして、急な山路をその高台へ登つて行つた。上は公園のやうになつてゐて、遊びに來てゐる風の人は一人もゐなかつたが、身なりの悪い、然し何處か品のいゝ五十余りの女が一人、其處で掃除をしてゐた。彼が登て行くと、其女も掃く手を止めて此方を見て居た。その穏やかな眼差しが、親しい氣持を彼に起こさせた。そして丁度亡き母と同じ年頃である事が、そして昔の侍の家の人であらうといふ想像が、彼に何かその女と話してみたいと云ふ氣を起こさせた。
「此所は？」こんな事を云ひながら彼は近寄つて行つた。「矢張りお城の中ですか？」
「左うでムります。こちらは二の丸で、あちらが昔の御本丸でムります」左う云つて女の人は神社のある方を指した。
「昔、此所に居た人で佐伯といふ人を御存知ありませんか」
「佐伯さん。御舊臣ですやろ」
「左うです」謙作はわけもなく赤い顔をしながら、「佐伯新といふんですが、丁度あなた位の年です」謙作は當然「知つてゐる」といふ返事を豫期しながら少し焦き込んでいつた。
「はあ！」とその女の人は呑込めない顔をして首を傾けた。「お新さんと云はれたお方はよう覺えまへんが、お勝さんと、そのお妹御でお慶さんといはれるお方はよう存じとりますが」

「女同胞(をんなきやうだい)はないのです。――多分なかつたんだらうと思ふんです。もつと他にありませんか、佐伯と云ふ家は……」

「さあ、どうですやろ？　私共の覺えて居るのは御維新から後の事ですよつて、他土地(ほかとち)へ出られたお方やと存じませんのやが。今申しました、佐伯さんでお訊ねやしたら、大方知れん事もムりますまい」

結局謙作の豫期に外れた。それに彼は左う云ふ機會もなく、母の幼時の事などを全で知らなかつた。母が何時から東京へ出て來たのか、母方の親類にどういふ家があるのか、第一母の父の名さへ彼は知らなかつた。「芝のお祖父樣」で事が足りて居たので、其祖父を自家の祖父よりも心から尊敬し愛して居たにも拘らず名を知らなかつた。

女の人は此土地の佐伯といふ家を教えて呉れたが、彼は別に行く氣もなく、禮を云つて別かれた。彼は自分が余りに左ういふ事を知らなかつた事を――知る機會が自分になかつた事を今更に心附いた。

夕日が本丸の森を照らして居た。ぬるでだけがもう紅葉して靑い中に美しく眼立つて居た。

「然しそれでいゝのだ。その方がいゝのだ。總ては自分から始まる。俺が先祖だ」こんな事を思ひながら、彼はうるさく折れ曲がる急な山路を、既に秋らしく澄んだ池の方へ、トン／＼と小刻みに駈け降りて行つた。

九

京都には謙作の留守の間に石本が來てゐた。

「大變いゝ具合なんだね」と石本が云つた。

「左うかね」謙作は何か具體的ないゝ話でもあつたのかと一寸思つた。

「老人夫婦は君に隨分好意を持つてゐたさうだ。」

「……此方でも隨分好意を持つた」

「左う。それはよかつた」

「…………」

「後へ殘つて、何か少しは左う云ふ話をしたの？」

「いや」

謙作は其日の事を簡單に話し、そして今度は珍らしく自分でも大丈夫な氣がしてゐる事などを話した。

「然し遠い所を度々ありがたう」から謙作は禮をいつた。

「何んでもないよ」

「わざ〳〵、本統にありがたう」謙作はこれまで、こんなにはつきり石本に禮を云つた事などなかつたやうな氣がした。然しそれが少しも變でなく口から出た。

「まあ、間違ないと見て、これから先の事はどうしよう。君一人では迚も駄目だらう？」

「うん」

「Sにやつて貰はないと困る事もあるが、大體、信行と相談して、此方で決めていゝかい？」

「左うして呉れ玉へ」

「決めた事はなるべく君の承認を受けるやうにはするが………」

「一々それをして貰はなくていゝよ。大變だ。――――矢張りSさんの方へな返事は來るんだね？」

「左うだ。然しそれはまあ心配ないよ」

石本の口ぶりではN老人は或る程度に、はつきりした返事をして行つたらしかつた。石本は其晩の急行で歸つて行つ

た。

先發の荷が着いたので、謙作は人を頼み、入る家を掃除させ、其所で荷造りをほどさせた。

福吉町以來の女中は暇を取る事になつたので、彼は代りを宿に頼んで置いた。そして間もなくそれが見つかり、其日も謙作から知らせたわけではなかつたが、手傳ひに來て居た。瘠せた婆さんで、引込んだ眼や、こけた頰や、それが謙作に目差しを想はせた。仙と云ふ名だつた。そして其晩からお仙だけ其所へ泊る事になつた。

それから三日程して、朝、お榮が着いた。お榮は家の方をすつかり片附けて行きたがつた。

「澤山です」と謙作はいつた。「後の荷も未だ着かないし、僕の世話より、ゆつくり見物をなさい。その方が此方も嬉しいんです。幾日位ゐられるのですか？」

「四五日したら岐阜から來る筈」

「そんなら尙、引越しなんか、どうでもいゝ。まあ、僕に任せて下さい」左う云つて宿へ落ちつくと、直ぐ彼はお榮を見物に連れ出した。

その前、お榮は旅鞄から奉書の紙に包んだキャビネの寫眞を彼の前へ出して、

「一昨日屆いたの」と云つた。

「うむ、これです。餘り鳥毛立ちでもないな」と謙作は云つた。

お榮は愛子と比較して一寸何か云つた。それには古い不愉快に對する女らしい反感が響いてゐた。それを愛子で云つたのが謙作には不愉快だつたが、然し矢張りあの頃の色々いやな事が憶ひ浮んで來ると、一寸腹立たしい氣持にもなり、彼は默つて居た。

倖で、黒谷、眞如堂から銀閣寺、法然院、松蟲鈴蟲の寺などを廻はり、南禪寺北の坊の今度の家へ寄つた。そこで俥を返へし、暫く休む事にする。

「本統にいゝ家だこと」お榮はしきりに家を讃めた。そして「あれは何？」若王子の裏のこんもりした松山の上に赤い旗が何本もピラ〳〵動いてゐるのを謙作に訊いた。

「茸狩しやはるとこどすえ」仙が次の間から勝手に答へた。

お榮は東京とは様子の變つた、路次のやうな細長い臺所に興味を持ち、仙に説明させ、隈なく其處を見てゐた。法然院の庭などよりもお榮にはこの方が興味が深かつた。

若王子も永觀堂もやめて南禪寺へ行つた。

謙作はお榮がうるさく思ふだらうと自分でも思へる程、見る物、見る物に説明したくなつて弱つた。子供らしい氣持だと思ひながら止められなかつた。殊に對手がお榮だと、自然臆面なく自分の子供らしさが出るのであつた。

南禪寺の裏山の中腹から、疏水の上へ出て、それからインクラインを見、瓢亭といふ家に寄つて夜の食事をした。

暗くなつて二人は宿へ歸つて來た。其所には狹い座敷に掛蒲團の端しを重ね合はして二つの寢床がとられてあつた。出掛けに、それを訊かれ、謙作は何氣なく、「いゝえ、此部屋でかまひません」と答へたのだが、今それを見ると彼は永年一緒に暮して來て、(極く子供の頃は別として)お榮と二人から一つ部屋に寢た場合を一度も憶ひ出せなかつた。

「少し窮屈だな」彼は一寸顏しかめ、獨言のやうにいつた。お榮は又それとは全で別な心持で、枕元の僅かな空地に、疲れた身體を据えるやうに坐はり、

「おかげで、思ひがけない見物をしました」と、もう見物が皆、濟んだやうな事をいつた。

「これで、かまひませんか？」
「えゝ、結構」
「もう、直ぐ寢るんでせう？」
「謙さんは？」
「僕は少し町を散歩して來ます」
「左う、それぢやあね、私、昨晩汽車でよく眠むれなかつたから、お先きへ失禮します」
「えゝ。そんなら直ぐお休みなさい」

謙作は町へ出れば大概寺町を眞直ぐに下がるのが癖のやうになつてゐた。そして今もその道を歩きながら、矢張り、彼は全く無心ではなかつた。

晩くなつて歸つて來た。お榮は明かるい電燈の下でよく眠入つて居た。最初彼が歸つて來た事も知らぬ風だつたが、少時して、まぶしさうに薄眼を開くと、一寸醜い顏して、「今、お歸り？」と云ひ、直ぐ寢返りを打つてうしろを向いて了つた。

謙作は誰にしろ、同じ部屋に人が居ると安眠出來ない方だつた。かういふ時、疲れ切るまで本を讀む癖から、彼は紐を延ばし、電燈を頭の上へ引き、「から騷ぎ」と云ふ、今、古本屋から買つて來た喜劇の譯本を讀み始めた。先日活動寫眞の「眞夏の夜の夢」を面白く思つて以來、彼はしきりに左う云ふ喜劇類を讀んだ。それは今の彼にとつて、丁度、東洋の古美術が、全く異つた其時代へ彼を連れて行つて呉れるやうに、そしてそれが彼に大きな慰めとなるやうに、それらの喜劇に接する事が一時的にもせよ、彼を今までとは全く反對な、左ういふ輕い自由な氣分へ誘ひ出して呉れる、

それが彼にはありがたかつた。兎も角悲劇類は今の彼には閉口だつたのである。

半分程讀んだ。そして彼は電燈を消し、案外早く眠りに沈んで行つた。が、どれだけか經つて、彼は不意と、丁度人に揺り起されたかのやうに、暗い中ではつきりと眼を覺まして了つた。そしてもう眠れなくなた。眠らうと幾ら努めても眠むれなかつた。直ぐ側にお榮の安らかな呼吸が聞こえて居る。

それでも頭が疲れて來、ぼんやりと、熱を持つたやうになると、實際部屋の空氣も濁り、暑苦しくもなつてゐたが、彼は矢張り苦しさから、自分の腕をドサリとその方へ投げ出したりした。

翌朝彼が眼を覺した時には、身仕舞を濟ましたお榮が椽側で戸外の景色を眺めながら一人茶を飲んでゐた。

「お眼覺め？」謙作が床の中で伸びをすると、お榮はこんな風に聲をかけた。

「何時ですか？」

「かれこれ九時でせう。もう起きられるの？」

「起きませう」

「此座敷は二人ぢやあ、矢張り狹いのね」

「今日變へませう」

「若し謙さんにお仕事でもあるなら、別に借りてもいゝ。今どうなるの？」

「何んにも仕てません」謙作はお榮のかう云ふ言葉をどう解していゝか分らなかつた。單に云つてるだけの意味のものか、もつと考へて云つてゐるのか見當がつかなかつた。然し何れにしろ、彼は別に困らなかつた。前夜の彼の苦しみを知つてゐて云つてるとしても、お榮に對し、彼は殆ど耻かしいと云ふ氣は起こらなかつた。それは耻知らずの氣持では

なかつた。總てを許してゐて呉れるだらうと云ふ寧ろ安心からであつた。若しそれがお榮に知られたとしても、その爲め、お榮は怒りもせず、又自分を輕蔑しもしないだらうと云ふ氣がはつきりしてゐたからであつた。

「向ふに、もう一つ、一寸した小さい座敷があるんです。今夜から其所へいらつしやい」

「左うしませう――――昨日行つた所は大概此所から見へるのね」

晝から二人は嵐山へ行つた。歸途金閣寺の方へ廻らうなど云つてゐたのだが、お榮がもう澤山だといひ、時間も少しおそくなつて、その儘歸つた。

「明日は奈良へ行きませう。それから電車で大阪へ廻はつてもいゝ」

謙作は暫く會へないと思ふと、かう云ふ機會に出來るだけ色々な所へ案内したい氣になるのだ。然しお榮は遠慮なのか又實際それ程歩きたくないのか、「もう本統に充分ですわ」とよく云つた。

「明日ひる通る。間に合うよう」かういふお才からの電話が翌日來た。自然奈良行きも大阪行きも沙汰止みになつて、其日はお榮の買物に謙作も一緒について行つた。

その翌日二人は時間を早めに停車場へ行つた。

「多分二等だらうと思ふの」かう云つてお榮は下關までの汽車賃を謙作に渡した。

あの人だけですか？」

「岐阜から、こどもを連れて來るでせう」

「こどもがあるんですか」

「本統の子供の事ぢや、ないの……」お榮は仕方なしに苦笑した。「――京都からも一緒になるのがあるかも知れない」

年のよく分からない脊の低い、眼瞼のたるんだ一人の女が華美なりをし、大きな男の人形を抱いて、先刻から、そ

の邊をうろついてゐた。それに二人の連れだか見送りだかの女がついてゐた。謙作は何といふ事なし、それが京都からの所謂こどもに違ひないと思つた。

皆がプラットフォームに出てゐる所に下りの汽車がついた。三等客車の、一つからお才と他に二人の若い女が顏を出してゐた。そして、眼瞼のたるんだ女は五十餘りの女に手を惹かれながらその方へ急いでゐた。お榮がかういふ連中の一人になる事は謙作には一寸堪らない氣がした。彼は見知らぬ二人の見送り人と一緒に三等客車の窓の前に一足退がつて變に空虚な心持で立つてゐた。

見送りの若い方の女が一人で、しきりとはしやいでゐた。先年は泣かない約束で來て、泣いて了つたが、今から自分がはしやげるのは今度こそ成功なさる前兆だらう、などと云つた。こんな話を聽くにつけ謙作はお榮の爲めに危つつかしい氣がした。

「そんな附景氣ばかり云つてないで、ちつと、お前さんの資本を此方へお廻はしなさい」お才は其若い女にからかつた。「お前さんの六百圓の電話を賣つて、それだけでもいゝからお廻はしなさい」

つけ〳〵いはれて若い女は不安さうな顏をした。お榮はお才の後ろで、默つて穩やかに微笑して居た。そして、それが見かけは大變よかつたが、同じやうな心持でお才から勸められ、それにうま〳〵乘せられ、これから冬へ向かつて天津くんだりまで金を失ひに出掛けて行くのだと思ふと、謙作はその若い女よりも「馬鹿だな」と頭ごなしに云つてやりたいやうな氣持になつた。

眼瞼の女は窓に倚りかゝり、その前に立つてゐる五十ばかりの女の手を兩手で握り、その甲へ自分の頰をしきりと擦りつけて居た。

「ちよいと、これは上へのせた方がいゝよ」お才にかう云はれると無智らしい其女は默つて、その手を離し、大きい男人形を上の網棚へのせ、そして直ぐ又、元のやうに坐つて、年寄つた女の手を取上げ、さも、離せないものゝやうに、それへ頰を擦りつけて居た。」（つゞく）



或る男

武者小路實篤

九十八

彼は學習院をびりから四番で卒業した。

卒業式の時に學校へゆくと、彼より一つ下の人が一人來てゐるだけで、あとの人は皆すかして來なかつた。卒業の時は席順で列をつくつて前にならぶので、あまり成績のよくない人は不名譽と思つて來ないのがくせだ。

彼より一つ下の人も、自分が一番びりではきまりがわるいから歸ると言ひ出した。彼は「君に歸られると、僕がびりだから、歸つては困るよ」と云つた。しかしびりも面白いとも思つた。しかしびりでない方がなほいゝので、友達の歸るのをとめてゐたら、第二部の人が一人、一番あとにくつゝいたので、彼の友達はすつかり安心した。

やがて彼等の番が來て、びりから先にたつて皆の前を歩いて行列した時、六七十人ゐる内、彼は先登から三番目に歩いていつたので小さい學生たちはおどろいた。

「武者さんはもつと出來る方かと思つた」

などと云つてゐるのが聞へた。

彼は反つてそれを滑稽に思つた。三年前に彼の兄が一番で、祝辭をよんだ時、彼は傲りを感じてゐたが、今彼はびりから三番で、得意になつて歩いてゐた。

彼はよく演説をした。そして偉らさうなことを云ふので、小さい人達は彼を出來る人と思つてゐた。しかし彼は出來ない人だつた。

木下は二番だつたらう。志賀や正親町は彼よりは十番以上上だつたらう。

彼は三人とは益々仲よくしてゐた。

その夏休みに、彼は志賀にたのまれて、學習院の水泳に行つた。今度は、彼は、彼がゐることによつて風儀が自づとよくなる故に出かけた。實際、彼の前では誰も下等なことを云ひもせず、行ひもしなかつた。彼は其處で、始めて自分の勉强家なことを知つた。彼程、のべつ本をよんでゐるものは他にはなかつた。彼は少しの暇をぬすんで本をよんだ。散歩したり、話したりもしたが。今度も木下が彼の一番仲のいゝ友達であつた。水泳して、くたびれて彼が上つてくると、彼より前に濱に上つてゐる者はたつた一人切り居なかつた。そしてそのたつた一人が木下だつた。二人は海岸にはらばつていろいろ話してゐた。

彼はその時の生活を志賀に報告したハガキが見つかつたからかいて見やう。

「朝六時のラッパがなれば僕達は起きねばならないのです。(無論、僕は早起きですから五時頃から散歩に行きます。)その次ぎ二十分程たつとラッパがなります。そうすると人員けんさ、同時に又ラッパがなります、すると朝飯です。七時

になると又ラッパがなります。すると稽古が始まります。一時間たつと又ラッパがなります。これから三十分程自由!?次ぎに游泳準備のラッパが鳴ります。九時からラッパで海に入ります。又ラッパで砂で身體を温め、ラッパで入り、かくて十時ラッパがなつて游泳はこれで終ります。又二時間たつとラッパで晝飯、あとは之れでおして下さい。その他のことは無事として於てさしつかへはありません。モリツの神話をよむつもりです。アンナ、カレニナは讀みおはりましたが、終りの六十頁計りはよみなほさなければだめ、かくことなきを無理にかきつけ候、君の近狀お知らせ下さい」

この夏休みは雨がよく降つて、彼は江之島まはりや、江之島、鎌倉間の遠游を氣にしてゐたが、およがずにすんだので私かによろこんだ。

彼はその時分身體を大事にしなかつた。運動もあまりせず、本許りよんでゐたので、身體がつかれやすくなつてゐた。彼の體格は前にかいたかも知れないが、學校でよくない方の表本に寫眞をとられかけた。大病はしたことはないが、無理はきかなかつた。そしてもう身體の方の痩我慢をする氣になれなくなつてゐた。

だから遠游しないことは彼にとつてよろこびであつた。

學校の水泳のすんだ時、彼は氣がのび／＼して、よろこんで例の金田に行つた。

彼はもう子供ではなかつた。兄達の仲間はもう金田には來なかつた。彼は今、金田に集る仲間の中では一番の年長者であつて、そして從妹達をつかまへてノラの話などをきかせてよろこぶ年になつてゐた。彼は又叔父と一緒に土呂運びの手つだいしたり、又いろいろ宗教上の話、殊にトルストイの話などをした。

九十九

大學は豫定以上に彼をよろこばさなかつた。彼は毎日麹町の家から大學まで歩いて通つた。何となく彼は電車にのる

ことを嫌つた。倹約してレクラムを買ひたかつた爲でもあつた。又滿員の電車を待つのがいやでもあつた。又トルストイやトローやなんかの影響を知らずにうけて、電車にのると云ふことを何となくいやになつたからでもあつた。ともかく歩いて五十分程の道を彼は一ぺんも電車にのらずに通つた。それが一つの興味になつて、どんな雨の日も歩いてかよつた。午前と午後に四時間程の間がある日は二度、雨のなかを往復したことも少くなかつた。彼は身體はよくなかつたが、歩くことだけは早かつた。走けることは實におそかつたが。そして一人で物を考へながら歩く時には、性急な彼はよく汗みどろになり、息を切らして歩いた。

彼は學校の稽古をしてゐる內に不意に、彼女が學校から歸る時分になるとおちつかなくつて學校をすかして歸つたこともあつたが、うまく出こはすことは滅多になかつた。

彼は始めつから大學を卒業する氣はなかつた。たゞ大學をやめる機會をまつてゐた。

母にはよくその氣持ちをうちあけては、母を困らした。しまいには母はあきらめてしまつた。しかしやめて、やめただけのことが出來る決心がまだはつ切りもてなかつたのと、兄に云ひ出す勇氣もなかつたので、ずるずるに學校にかよつてゐた。

大學の先生の講義は、一つも彼をよろこばさなかつた。彼は席を社會學においておいたが、社會學の講義は彼を怒らせるのに十分だつた。あまりに內容がなかつた。倫理の先生の不熱心なのにも彼は閉口した。心理の先生の熱のないのや、美學の先生の氣のぬけたやうな講義の仕方や、その他どれ一つ彼をよろこばすものはなかつた。

英文科に行つた志賀や正親町や木下は夏目さんの講義に隨分感心し、又よろこんでゐた。殊に志賀はすつかり夏目さんすきになつて、よく夏目さんの云つた言葉を彼に話した。

彼も志賀にすゝめられて二回許り講義をぬすみ聞きしたが、その時はさう面白い時ではなかつた。しかし彼は夏目さんを尊敬してゐた。坊ちやん、草枕、猫、なぞは彼は西洋にも類のない賢いものとして感心した。

夏目さんの文章の自由で、云ひたいことを自由に云つて、內容と文章がぴつたりして、皮肉や警句の痛快なのが自由に出てくるのには實に感心した。日本語も實に自由なものだと思つた。彼は志賀と同じく日本で夏目さんに一番感心してゐた。

しかし講義は別にきゝたいとは思はなかつた。演說は感心した。內村さんと夏目さんの演說はいつも彼は感心した。そのことはあとでいふとして、彼は大學を嫌つた。講義が一つも面白くなかつた。その面白くない講義を筆記しなければならないのが情けなかつた。

彼は字をかくことは下手で、キタナクつて、遲かつた。それもまだいゝとして、筆記してゐる間、頭の自由を失なふのがつらかつた。我を忘れてひきこまれるやうな講義がなく、家にゐて本をよんでゐる方が遙かに有益のやうに思へる講義を、筆記されるのは、なんだか自分の生命を無視されてゐるやうな氣がした。殊に彼は誰ともつきあはなかつた。志賀や正親町、木下の外には一人も話相手をつくらなかつた。ノートを借りる相手もなく、見知らぬ人のなかに自分一人を見出すのは、あまり氣持のいゝものではなかつた。

彼は大學に通つてゆく間だけ、無駄な時間を費やすのだから、それだけ長が生きでも出來るならいゝが、さうは思へない以上、學校へ通ふのは、時間にたいしてすまない氣がして來た。たゞ彼は大學へ通つて得をしたと云ふ點があれば、それは大學と云ふものはくだらないものゝあつまり所だと云ふことを知ることが出來た點だ。

彼は學習院にゐる間は井の內の蛙のやうな氣がして、大學へ行けば、少しは恐ろしい人がゐる のだらうと思つてゐ

た。しかしそんな空想のまちがつてゐることを彼は本當に知つた。そして人間と云ふものにはあまり利口なものはゐない、居ても實に少ない、それに反してわからず屋は實に少くないと云ふことを知つた。大學の先生なぞと云ふものは、殊に當時の文科はひどかつたのだらうが、頭のよくないものゝあつまりだと云ふことを知つた。美學の先生は頭がいゝのださうだが、彼はどうもすきになれなかつた。之は彼に自分の頭を信用せよと云ふことを教へてくれた。

　このことはよかつたと思つてゐる。

　さうしてさう云ふ講義を熱心に聞いてゐる人々をあまり利口とは思へなかつた。彼はよき人を私かに求めてゐたが、その人を見出すことは出來なかつた。よく逢ふ人で一人善良な顏してゐる人と、一人負けん氣の強さうな顏してゐる人が目についたが、その人ともつきあはずにすんだ。名も知らない、今どうしてゐるか。

一〇〇

　彼がその時分かいたものゝ内に、新しき村に似たものを想像したものがある。それは彼の二十二の時だつた。その内には今彼が見ると隨分冷汗ものな所が多いが、その内にはこんなことがかいてある。

「僕は變な夢を見た(中略)『いゝえ皆勝手な着物を着てゐます。着物もすき〴〵がありますからね。あれを御覧なさい』老人は骨太な頑丈な手でもつて前に半圓をかいた。

僕は指さす方を見ると百人許りの人が色々の着物を着て一心に働いてゐる。

「この村の人は何人ぐらいですか」と老人に聞いた。

「さうです百五六十人はゐます」

「皆農業をやつておいでゞすか」

『いえ、さうでもありません。子供はやつてゐません。その他病氣でなければ働きます』(中略)『實は私が二三の人と話をした時、かう云ふ村をつくつたらいゝだらうと冗談を云つたのです。すると友が非常に贊成してくれて是非やらうと云ふのです。しかし僕は空想家で實際家ではないのでしたが、二人の友は實際家で意志の强い人でしたから、その人にはげまされてこの村に來たのです。始めは三人でした。二年程働きました。勿論食糧は他から運んで來たのです。するとやうやくこゝで食物がとれるやうになりました。そこで三人の一家はこゝに引越すやうになつたのです』

『この村の人は皆親子兄弟姉妹なのです。バイブルを御讀になつたら御承知でせうが、それ神の旨に從ふ者は是、わが兄弟、わが姉妹、わが母なり。とキリストが云はれたのを元としたのです。それで今でも私達と同じ考へを持つてゐる人は歡迎してゐるのです。この場所は狹いのですが、段々廣げてゆく心算なのです。しかし廣げる内に内をよくしなければなりませんから、この村には誘惑物はないのです。(中略)』

『こゝは圖書館とも云ふべき所です。』

『この本は買つて來たのですか。』

『えゝ。』

『金がなくなつてよく買つてこられますね。』

『この村に金はないのですが、この村で食ひ切れない程いろ／＼のものが出來ます。それに草花なぞも餘る程出來ます。それをよそに運んでゆくのです。それでその十分の九は、困つてゐる人に上げるのですが、十分の一だけは市へ持つて行つて賣つて本の他、いろ／＼のものを買つてくるのです……あなたはこゝにお住みになつたらどうです』

僕の心は動いた、しかし僕の血をわけた親兄弟の心にそむく勇氣はなかつた。親兄弟をすてないものは御心に叶はな

いことは知つてゐるが、それに菓子のないのと御馳走のないのにも閉口してゐた。
『無理におすゝめもしませんが、何時でも氣の向いた時御出で下さい』
『肉類は一切食はないのですか』
『誰れも生きたものを殺すのを好みませんし、菜食の方が精神や、肉體の爲にいゝやうですから』と答へた。
厄介な理想郷だと思つた。
『ぬすむ人はゐませんかね』
『自分のものは誰もぬすめないぢやありませんか』
僕は實に耻かしく思つた。（中略）
すると北の方の山から先きの歌が聞へる、田畑にはもう誰もゐない。その山の方へ行つた。百人許りの男女が、集つていろ〳〵のことをやつてゐる。大きな木を切つてゐるもの枝をはらつてゐるもの、皮をはぐもの、忽ちにして百本許りの木の皮はむかれたかと思ふとかけ聲勇ましくそれを運ぶ。見てゐる内に村の北端に運ばれた。
『なにするのです』と聞いたら
『家を建てるのです』と云ふ。
さうだ一人の人が家の圖のかいてある紙を見ながら何か皆なに云つてゐる。すると村の方からやさしい歌を唄ひながら麥藁帽をかぶつた少女が、湯だの梨だのを持つて來た。皆無邪氣なことを云合つて笑ひながら食ふ、實に樂しさうだ。
しかし僕は自分のゐる所と此處を比較して氣持ちよく思はなかつたから、餘りに得手勝手の人間の集りと思つて腹が

立つた。そこで少し小高い所に立つて、『諸君』と一言云つた。すると目が覺めた。その續きを見ようと思つたが、もう見ることは出來なかつた。」（一九〇六年一一月二〇日）

これはトルストイの影響をうけてかいたものらしい。しかし彼が新しき村の仕事を始めた時より十二三年前にかいたものだ。

彼が新しき村の仕事を始めだす前に十何年の間、たへず何處かでさう云ふ仕事をしたいと考へてゐたことは之でもはつ切りすると思つてゐる。彼にとつては文學をやらうと思つたのと、新しき世界を生み出したいと思つたのとは、殆んど同時である。それは彼の雙生兒である。

新しき村は彼の胎内には十何年ゐた。人類の胎内には何千年、何萬年ゐたか、彼は知らないが。（續く）



朝詣り

葛西善藏

私はまた徹夜をした。しない譯に行かないのだ。×社のH氏が町の旅館に泊つて、明朝の六時の一番で原稿を持つて歸ると云ふのだ。昨夜からの雪が、今朝六七寸も積つてゐた。さうした雪の中を、H氏は髯にしづくを垂れ、額に汗を流して朝早くやつて來た。原稿は一枚も出來てゐなかつた。午後四時頃までと云ふ堅い約束でH氏は逗子の方一二軒廻つて來ると云つて行つたが、それからも私はやはり一二枚の書き損じをこしらへたゞけで、迚も書けさうにはないのだ。三時頃たうとう投げ出して、私は子供の空氣銃を持ち出し、部屋借りの寺の石段を下りて、建長寺の境内をブラ〳〵やつた。佛殿の近くの餘り高くない松の樹に、アヲジが二羽すばしこく枝から枝をチヽと啼き交はしながら移り歩るいてるのを見出し、一羽のスキを覘つて引金をひいたが、うまく雪の上に落ちて來た。少しばかりの紅い血が雪を染めた。やはり小說と云ふ惡魔に呪はれた、運の惡るい小鳥だつたのだ。私はそれを片手にさげて、今度はまた自分の寺の石段の上の杉の樹立の中に鴨の聲を聽いて

登つて行つたが、ふと下の方を見ると、オーバー姿のH氏が駈けるやうな步調でやつて來たので、私はハツとして其場に立ちすくんだ。所詮免かれ難い、今の運の惡い小鳥のやうなものだつた。私は今度はどうかして堪忍して貰ひたいと思つたのだが、H氏の眞劍らしい顏を見ると、迚もそんなことは云ひ出せるどころではなかつた。

『お出來になりましたでせうか？』

『いや、……それで何とも申譯ありませんが、今夜は徹夜をして、明日の朝早く屹度間違ひなく持つて行きますから……』

『いやそれが間違ひございませんのでしたら、私は今夜町の旅館へ泊つて明日の朝の一番列車で頂戴して歸ることに致しますから、……私もこのまゝでは實際社へ歸れんのですから』

『それでは何とも恐縮な譯ですが、さう云ふことにしていたゞきませうか……』と、私としてはほかに何とも云ふことが出來ない義理合だつた。呑氣らしく空氣銃など擔ぎ出してゐた間の惡るさも顧みられた。

この一週間ほどは、私は毎日のやうに×社から使ひや電報を受けてゐた。今夜は三度目の徹夜だつた。年暮に東京で引いて來た寒冒が脫けてゐないのに、胸脊の神經痛が手傳つた。が何よりも、冬と云ふ季節が私にはいけないのだ。頭腦も身體も、まつたく冬眠狀態だつた。下等動物の方に近い人間なんだらうと、私はほんとにそんな氣がする。氣分も神經もまるで働かないのだ。

年暮も押詰つた二十六日に、年中行事の年末の金策に、何ケ月ぶりかで東京に出て行つた。歲晩の東京は素晴らしい勢ひで活動してゐる。自分は墓場の中から迷ひ出た亡靈のやうなものだつた。大體私は四百圓位ゐ掻き集めるつもりだつたのだが、そしてそれがどうやら掻き集められたのだが、掻き集める下からボロ〳〵落こつて、大晦日の終列車で歸

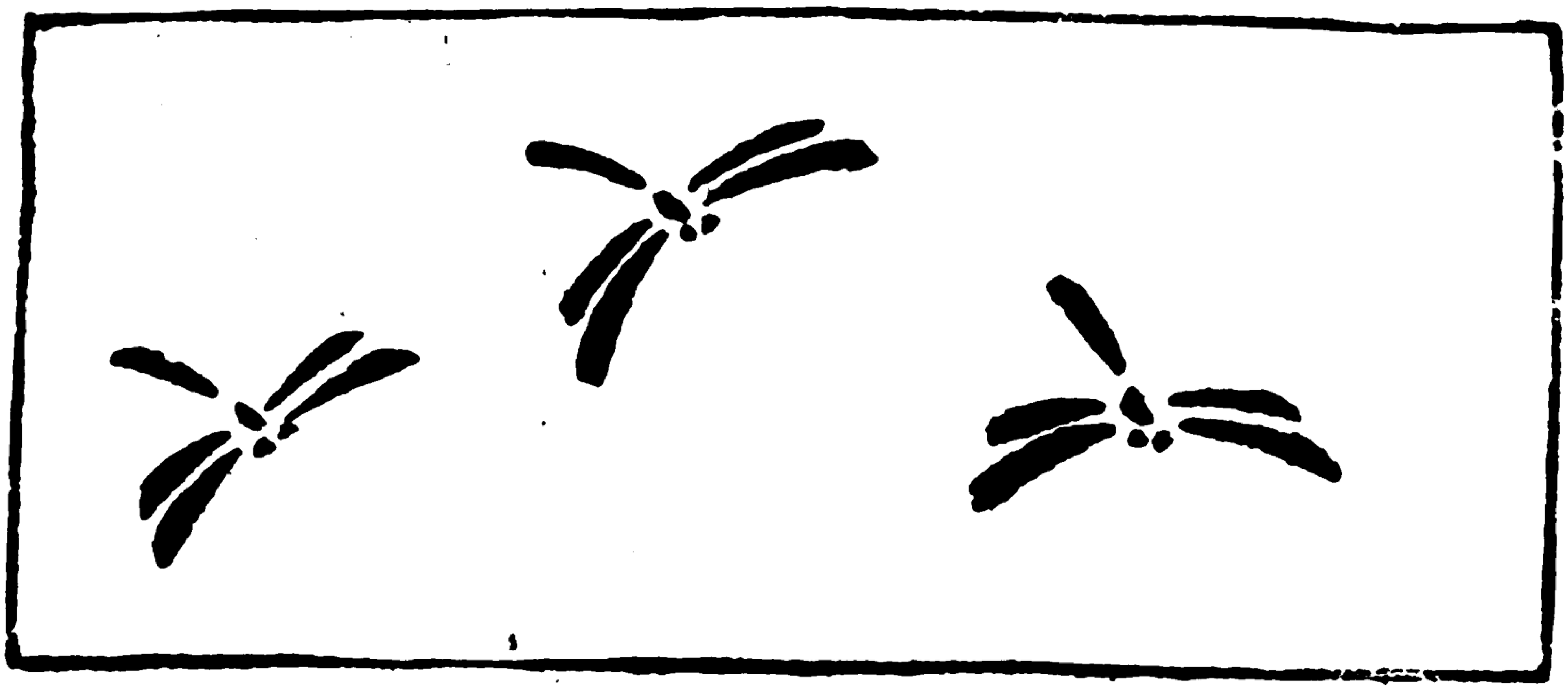
つて來た時は私の懐ろには百五十圓しか殘つてゐなかつた。柄にもなく私は都會の活動ぶりにあやかりたい氣持になつて、二十六日から五日の間、晝夜の差別もなく東京市中を縱横無盡――にタクシーを驅つた。このまゝ地獄の火の車となつたら、それも面白いと云ふ氣がした。クロイロフの梟が盲目の驢馬を乘り廻した勢ひで、そら本郷！　そら青山！　そら芝！　牛込！　銀座！　淺草！　吉原！……私の梟も夜も晝もなかつた。どん詰りの三十一日の午前三時と云ふ時刻に私は吉原に驅けつけて、午後の三時まで大きな建物の三階であひかたの女相手に酒を飲んだ。それからまたタクシーを驅つて洪水のやうな巷を東京驛發終列車の時刻まで西に東に、闇雲に駈け廻つた。後一時間半で除夜の鐘を聽くと云ふ時刻に、濃い霧の流れの底を若鮎かのやうに無數の自動車、俥、自轉車、電車の間に泥つて、多少朦朧めいた感じながら私のタクシーも威勢よく走つてゐた。小石川！　日本橋！　新橋！……梟の私は絶えず叫び續けたが、がタクシーは盲目の驢馬ではなかつた。彼は私の期待を裏切つて、何物にも衝突せず、地獄へまでは引張らうとしなかつた。

……………

十時、十一時――雨になつた。茅葺屋根の雨だれの音、思ひ出したやうに時々鳴る崖の上の樹木、雪のすべり落ちる音――山寺のガランとした天井の高い部屋の寒さは骨身に泌みて來る。私は炬燵の上に原稿紙を擴げて、さうした年暮のことでも書いてお茶を濁したいと思つたが、どうしても書けない。愚かしい自分の行爲が耻ぢられるばかしだ。さうした阿呆らしい感興まで賴らねばならぬと云ふのなら、むしろ生きながら墓場の人間になりきつたつていゝではないだらうか。私は物が書けなかつたり考へ事をしたりする時の癖で、掌や指を強くこすつて垢をより出すのだが、この數日で掌が眞赤になり、ヒリ〳〵痛むほどだ。今夜も火鉢の中や炬燵の搔卷の上にだいぶ垢がより出されたのだが、三時四

時の時刻が來ても原稿紙の上には一字の記錄の垢も絞り出されなかつた。四時カッキリで私は思ひ切つてペンを棄てた。一月十六日——私の三十六才の誕生日であつた。私はマントを着洋傘をさして、かなり強い降りの暗い外へ出て行つた。雪明りで高い石段を下りて半僧坊道を犬にも吠えられず、寢靜まつた茶店の前を通つて半僧坊の幾曲かの曲折した急な石段を登つて行つた。雨と雪解けの水で階段は流れをなしてゐた。最後の一番急な石段を登る時は目が眩みさうで、すつかり汗になつた。やう／＼神殿の前に立つて昂ぶる動悸を押鎭めて禮拜を濟ませたが、そこから眺められる四邊の暗澹とした光景が、やはり私の今年の誕生の朝にはふさはしいものだと云ふ氣がされて、私は雨に裾を吹きまくられながら濛々とした空や谷を前にしてしばらく立つてゐた。

——十一年一月——



父、母、妻、子

父

菊池寛

家康は、嫡子の信康を殺すことを、餘儀なく決心した。決心しなければならない羽目になつてゐると、自分で思つた。

彼は、勇猛果敢な信康を、どんなに愛してゐたか分らない。天下に志のある家康としては、親身の子に信康のやうな闘將を、持つて居ることを、どんなに心頼しく思つたか分らない。

むろん、彼は信康の荒々しい振舞を、苦々しく思はないではなかつた。が、苦々しく思ふ心の直ぐ下から、一本氣な人を人とも思はない。我子の勇猛な性格を、ほくそ笑まずには居られなかつた。

お萬の方が、武田勝頼に内通して、三河から甲州へ逃れて、武田方の大將、小山田兵衛に再嫁しようと云ふ計畫が、發覺したとき、家康は無論、不快でないことはなかつた。お萬の方に對して、愛情は少しも殘つて居なかつたが。それでも自分の

妻であつた女が、自分を裏切つて、敵方の男に身を委ねようと云ふ考へ方が、甚しく家康の矜持を傷けた。が、本當の意味では、家康の心に取つては、それほど大きい打撃ではなかつた。彼は、割合平靜な心で、お萬の方を幽閉し、やがてお萬の方を殺すことを、家臣に云ひ付けることが出來た。

が、彼は信康丈は、その生母の陰謀から、救つてやりたいと思つてゐた。又、信康が、母にそゝのかされて、武田方に内通するやうな男でないことは、家康にはよく分つてゐた。が、事情は家康の心に反して、信康の血をも流さずには居ないやうに發展して行つた。

信康の妻の徳姫は、信長の娘であつた。信康に嫁してから、女子を二人設けてゐたが、伉儷睦じくはなかつた。その上妬婦であつた信康が、妾を蓄へてゐるのを、日夜のやうに責めた。その妾の一人が、折あしく勝頼の家人日向大和守の妾腹の子であつた。ある夜、夫妻がいさかひを續けた後に、徳姫は

「なう。小侍從、そなたはさうは思はぬか」

と、清洲から連れて來て居る氣に入りの侍女に、賛意を求めた。

「仰せのやうに妾は…………」

半分云ひかけたとき、信康は座を立つたかと思ふと、妻の傍に坐してゐる小侍從の襟首を摑んでゐた。

「おのれ！　主を何と思ふぞ」

言葉が終るか終らぬかに信康の右の手に握られて居た匕首は、小侍從の口を、耳の附根まで、剜いてゐた。

最愛の侍女を、目前で刺された徳姫は、夫婦の愛情などは、全然忘れて憤つた。彼女は、父の信長の下に夫の暴狀を殘るところなく云ひ送つた。武田の家の子を妾に容れて、武田家と内通してゐると云ふことが、重要な項目であつた。

信長は、娘の讒を容れて、信康を除くことを考へた。德川の長臣、酒井左衞門丈忠次を、安土に呼び寄せた。そして、內意を傳へた。

忠次は、信長の意を體して、濱松へ歸つて來た。そして、信康の罪狀十二個條を揭げて、家康に訴へた。織田殿の內意があると云ふことを、家康に傳へた。

家康は、德川家萬代のためと云つたやうな口實で、忠次が信長の內意を、唯々諾々して受け、しかも得々として、信康の罪狀を擧げてあるのが、不快で堪らなかつた。彼は、忠次としてはもつと、どうにか織田殿に取做しやうがあるのではないかと思つた。が、忠次ばかりでなく、大久保忠世までが、信康のために、一言の取做しをしないのを見ると、家康はあきらめた。

「家の長臣たる御身達が、そのやうに申すならば、信康はとても物になるまじ。腹を切らせらるべし」

家康は、さう宣言する外はなかつた。

信康は、岡崎から遠州二股へ移された。そこで天正七年九月十六日、生害した。

家康は、愈々といふ間際まで、信康の生命に未練を持つてゐた。彼は、二股の城主である大久保忠世が、何うにかして信康の命丈は、助けて與れるかも知れぬと考へてゐた。彼は、源仲光が、美女丸の、命を救つたやうに、屹度家臣の內の誰かゞ、信康の命を助けるだらうと云ふやうな空頼みをしてゐた。

檢使の役は、渡邊半藏守綱と、天方山城守通興の二人であつた。殊に、半藏守綱は、大天龍の迫合に勇名を轟かして以來、鎗半藏の名は、東海の隱れもなき剛强の士であつた。

家康のかすかな期待を裏切つて、検使は信康の首級を持つて歸つて來た。

濱松城の奥殿へ、家康は二人を引いた。家康は、苦り切つてゐた。信康が、最後に、

「我謀反して、勝頼に一味せしことは、さら〳〵思ひかけぬことなり。そのことは、わが死後にも、父上に汝等よりよく〳〵申上げよ」と、云つたことを聞くと、家康は激しく目をしばたゝいた。

検使の報告が、済んだとき、正使であつた半蔵は、一間ばかり身を退つた。

「半蔵め！　お咎めを受けたら御座ります」

半蔵は、必死の顔をして平伏した。

「なぜぢや。なぜぢや」

家康はいぶかしげに聞いた。

「半蔵め、今度のお役、見事にしくじりました」

「なぜぢや」

「三郎様御生害の折、半蔵め御介錯致さうと思ひましたところ、お腹を召すのと同時に、身に顫ひ出で太刀とること能はず、山城守に御介錯を頼み申しました」

「そちが、顫えたのか」

家康は事もなげに云つた。が、彼の眸には今まで湛めてゐた涙が、一杯に溢れてゐるのを感じた。多くの家臣達の間で半蔵丈が父としての彼の心に觸れてくれたやうに思つた。

「山城守が、見事介錯なされました。拙者めは、如何様のおとがめにも」

半藏は、顔色を更へて恐縮した。

「いやよい！　孰れも大儀ぢや」

家康は、半藏がうれしくて堪らなかつた。二人の檢使達の姿が見えなくなると、彼は並んで居る酒井忠次などに、當てこりのやうに云つた。

「半藏ほどの大剛の者も、主の首打には腰をぬかせしぞ。はゝ、はゝ」

家康は、愛子を失つた寂びしさを、さうした笑ひによつて、漸く洩すことが出來た。

關ケ原の陣の時であつた。家康が、馬を勝山に立てたとき、彼の老體は、數日來の不眠と過勞とで、綿のやうに疲れてゐた。戰爭の慘苦と云つたものが、陣羽織の上から、ひし／＼と身體に徹へた。

「悴が居れば、年老いてかやうな苦勞はせまじきを」

家康はふと傍に居る水野勝成に呟いた。勝成は、それを山道を上つて居る秀忠のことかと思つた。

「もう、直ぐお旗先が見えるで御座りませう」

彼は遲れて居る秀忠を取做すやうに云つた。それを聞くと、家康は、前よりも、もつと不機嫌な顏をした。

「たはけ奴！　三郎が居ればと云ふのぢや、三郎が……」

さう云つて、家康は松尾山の方角を見てゐた眼をかすかにうるませた。

母

母は奥の六疊の部屋に、鼠小紋の小袖を、逆さまに着せられて、横つて居た。その小袖の襟の處から、凋びた小さい兩足の先が、わづかばかり、ハミ出してゐた。

歸つて來る十何時間と云ふ汽車の中で、母が死んだと云ふことは心の中で考へられる丈は、考へて來た。悲しむ丈は悲しんで來た。出來る丈の涙は出して來た。が、そのハミ出して居る小さい兩足の爪先を見た丈で、清三は胸が、一杯になつた。涙なんか、滾さないで、澄んだ秋の空のやうな心持で、殊勝に振舞つてやらう、そんな汽車の中の覺悟が、滅茶々々になつて、小袖の裾を捲くつて、母の死顔を見たときには、熱い涙が、目頭から溢れかゝつてゐた。

「清三か、お母が死んで、お前も氣の毒ぢやのう」

彼は、部屋には入つて來る時から、親類の誰彼が、母の周圍を取捲いて居るのを見た。竹内の伯母の泣き脹らした眼が一番に眼に付いた。正木の伯父の鼈甲縁の眼鏡にも氣がついた。が、かうして、門司の伯父が、自分よりも先に歸つて來て居り、誰よりも先に自分に、聲をかけようとは思はなかつた。

彼は、その伯父の聲を聞くと、母に對する哀悼の心持が、忽ちにして掻き擾され、いつまでも見詰めて居ようと思つてゐた母の顏を、手早く小袖の裾で、掩ふてしまつた。伯父の前で母の顏を見るのが、彼には口惜しかつた。

清三は、母を嫌つてはゐなかつた。母は一人息子の清三を愛し切つてゐた。が、清三は凡ての子が、母に親しむやう

に、母には親しめなかつた。彼は、何うかして、母を信じ、母に親しみ切らうと思つてゐた。が、清三の眼に映る母は、いつが來ても除れない暗い影を引いてゐた。その暗い影のために、清三は何うしても、母の懐には入れなかつた。母が、死んだと云ふ電報を受取つたとき、清三は悲しみ嘆いた。もう、今度こそは何のこだはりもなしに、その死床で悲しむことが出來ると思つてゐた。それが、門司の伯父の一言で、滅茶々々になつてしまつた。

清三は、それが夢ではなかつたかと思ふ。夢だ、夢に違ないと時々は思つて見た。が、夢にしては、その記憶があまりに、マザ／＼と殘つてゐる。

五つの時だつたか、それとも六つの時だつたか、清三にはハツキリと判らない。夏で、庭には赤い猿すべりの花が咲いてゐた。夜は、毎夜のやうに月が冴えた。父は商用で、大阪へ行つて留守だつた。店には、小僧を二人使つてゐた。母は、小僧達と留守を守つてゐた。

門司の伯父が、――その頃、町の實業新聞と云ふ小さい新聞の記者をして、他へ下宿をしてゐたが――、毎夜のやうに來て遲くまで話してゐた。清三は、伯父にせがんで、よくいろ／＼な話を聽いた。その中でも、大阪城の天守に、淀君の亡靈が住んでゐると云ふ話、彼はその話をいつまでも忘れることが、出來なかつた。

「光さん、まだ早いやないか」

母は、伯父が歸らうとすると、幾度もさう云つて止めた。

父が居ないために、蚊帳は廣かつた。清三は、母と二人で寢てゐることが、寂しいやうな、その癖樂しいやうな氣がした。櫺子窓を明け放つてあるので、蚊帳ごしに蒼白い月光が蚊帳の中へ入つて來た。

ふと、氣が付くと母が立ち上つて、窓の戸を閉めてゐた。夏だつたから、障子は、取り切りに取つてあつた。

「お母さん。戸を閉めるの」

まだ眠り付いてゐない淸三は、母に訊いた。

「あゝ蚊がブン〳〵云つては入つて來る」

母は、さう答へて薄暗くなつた蚊帳の中へは入つて來た。

暑くるしいので、母の身體とは、三尺も離れて寢た。

淸三は、夜中に眼を覺した。

「お母さん。お便所」

淸三は、寢て居る母を搖り起した。母は駭いたやうに立ち上つた。

母に寄り添ふて蚊帳を潜るとき、淸三はふと母の寢床を見た。その時彼は薄暗い中に、長々と橫はつて居る人の姿を見た。

「あゝ父が歸つたな」

淸三は、さう思つた。母は、さう思つて躊躇してゐる淸三を、抱へるやうに引きづつた。

「早う、早う。眠いのに」

いつもの母とは、思はれない險しさが、寢ぼけてゐる淸三の耳にも、判つた。

便所を出て、月の光に見上げた母の顏は、凄いやうに白かつた。

「お父ちゃんが歸つたの」

綠側をよろけるやうに歩きながら母に訊いた。
「お前は夢を見たんやらう」
母は、何氣なくさう答へた。蚊張の中へ、は入つて見ると、父はやつぱり歸つてはゐなかつた。
淸三は、最初その晩のことを思ひ出すと、それが夢のやうにもあり、幻のやうにも思つた。が、淸三が七つになり十になり、十五になるに從つて、それが段々事實として、頭にこびり付いて來た。時が經ち、理性が生ずるに連れて、夢ではなかつたと思ふ心が、段々强くなつて來た。
とにかく、その晩から、伯父が話して呉れると云つても、欣んでは聽かなかつた。そして、伯父が、歸らない裡は、眼を皿のやうにして、何時までも起きてゐた。
四五日して、父は歸つて來た。
伯父が、町の藝者と關係して、手を取つて奔出したのはその年の秋であつた。その前日だつた。淸三は、父と伯父とが、店の間で激しく口論してゐるのを聞いたのは。
伯父は、新潟へ行つて、十幾年歸つて來なかつた。門司へ歸つて、石炭商をやり出してから、まだ二三年にしかなつてゐない。
母と淸三との間隙は、淸三が成長するに、從つて、段々大きくなつてゐた。
「よく、この兒は、お母さんの顏を、見つめるんぢやのう」
母は、淸三が、いつまでも、ぢつと母の顏を見詰めて居ると、嫌かつた。淸三は、母が嫌がるのを承知で、ぢつと見

詰めて居るのが、好きだつた。

清三は、母を愛しながら、母の何處かに、汚れた處があるやうな氣がして、仕方がなかつた。母が、父と睦じさうに語つてゐるときなど、妙な反感が、心の裡に湧いて來た。父が死んでからも、母に對する心持は變らなかつた。

彼は、それでも時々、その晩のことが、夢ではなかつたかと思ふ。そんな少年時代の、寢ぼけ眼で見た幻視から、母を疑ふのは、惡いと思ふ。さう思ひながらも、月の光を浴びながら、戶を閉めた母の姿が、なやましく頭の裡に、甦つて來るのを何うともすることも出來なかつた。

その記憶が、二十一になるまで、清三を惱しつゞけて來た。

母が死んだと云ふことを悲しみながらも、死に依つて、母のさうした暗い影が、永久に消えてしまふのを、清三はせめてもの欣びに思つてゐた。今でこそ、母を心の底から、悲しめることが出來ると思つてゐた。それだのに、門司の伯父が來て居る。伯父の聲で、彼は胸の底を搔き廻はされるやうな、嫌惡と不快とを感じた。

「お母はえゝお母さんぢやつたらう。死んだ兄貴にやつて、えゝ女房ぢやつたからのう」

伯父は、死者の德を讃へるかのやうに、誰にともなく話し出した。それに合槌を打つ者が、二三人ゐた。

清三は、居たゝまれなくなつて、六疊の部屋を飛び出して茶の間へ來た。が、其處には、母が十幾年前、月光の夜に戶を閉めた櫺子窓があつた。その頃は眞新しかつた格子が所々曲つて居たけれども。

清三は、その格子に手をかけて、二三度力委せに、搖り動した。

妻

「昔の方が、いくら幸福だつたか分りやしない。室町時代や武島町時代の方が」

彼の妻は、口癖のやうに昔をなつかしみ始めた。

「あの頃は、お小遣ひを五十錢宛しか下さらないんですもの。お湯へ行くお金が、なくつて困まつたことさへあつた。それでも、あの頃がたのしかつた」

「俺の月給が、三十二圓か、よく暮せたものだね。」

「だつて。お米が二十五錢でせう。間代が七圓五十錢でしたもの。それでも、いつか私がセルの袴を買つたとき、あんまり高いものを買つたと云つて、お怒りになつたわね、でもたつた十四圓だつたのよ」

妻は、昔のことを話し出すと、その苦しさを誇張しながら、而も昔の幸福をなつかしがつた。

夫の出世は、必ずしも妻の幸福を意味してはゐない。彼は、それな主題の米國の劇を、學生時代に讀んだことがある。海軍將官の妻が、夫が立身出世する毎に、段々家庭の人でなくなるのを悲しんでゐる。おしまひには、夫の榮達を呪ふやうになる。自分の欲するものは、家庭の良人である。國家の高官ではない。妻は、夫を家庭の人として、專占したいと思ふ。そして、夫の榮達を妨げようとして、夫が保管して居る重要な秘密書類を、紛失させる。書類の紛失を知つた夫は、職責上自殺してしまふ。

彼の家庭も、小規模のそれだつた。貧乏してゐた頃、夫は完全に妻のものであつた。勤めてゐる社が退けると、一直線

へ家へ歸つた。妻のこさへた晩餐を歓んで喰つた。夜は、毎晩のやうに散歩に出た。夫は完全に、妻のものであつた。が彼が社會的に名を成し、收入が增すに從つて、段々妻一人の夫ではなくなつた。妻と一緒に、散歩することなども月に一度か二度になつてしまつた。夫の名前が有名になり、收入が殖えれば殖えるほど、妻は不安と寂寥とを感じた。元から違つてゐる教養の差違が、妻には今更のやうに、痛感され始めた。

「妾、かうしてゐてもいゝのかしら、お父ちやんは段々エラくなるし、妾との違がこんなになるんだもの」

妻はさう云つて、右の手と左の手とを、上下に出來る丈開いて見せた。

「何か勉強しようかしら、何がいゝかしら。今から始めるのには」

妻は、口癖のやうに、そんなことを云つた。

「憐人の愛つて、何のこと」

彼女は又、少しでも學問するつもりで、突拍子もなくいろ／＼なことを訊いた。

そんなことを訊かれても、一言で説明してやるいゝ言葉もないし、それかと云つて、根本的に説明し始めるのも、馬鹿々々しいので、彼は默つてゐた。

「こんなことを教へて下さらないから、何時までも馬鹿なのよ」

妻は少し怒つた。

「妾、單語でもよいから、英語を少しづゝ覺えるのよ」

妻はそんなことを云ひ出した。

二三日して、妻が買物の控へをして居るノートを、何氣なく開いて居ると、一番おしまひの頁に、片假名で、何か書い

てあつた。

エゴイスト（利己主義の人）

ジレツト（剃刀の名）

ジレツト（剃刀の名）と讀むと彼は、吹き出さずに居られなかつた。

「そんなもの見ちやいや。」

妻は、彼の手からそのノートを、ひつたくつてかくした、

十日ばかり經つた。彼は、妻のノートが妻の机の上に置き忘れてあるのを取り上げた。もう、よつぽど單語の數が殖えて居るに違ないと思つて開いて見た。

アミイ（友達）

ブリアン（金剛石）

ドロオ（お可笑な）

ラヴヰ（世の中）

デイネエ（食事）

「おい、何だい。何だい！これは」

少し勝手が違つた彼は、部屋の中へは入つて來た妻に云つた。

「有島さんの「死ぬほど」の中にあつたのよ」

と、妻は笑ひながら答へた。さう云ふと、彼は二三日前、妻が「有島さんの本の中の英語は、可笑しな英語ね。金剛石のことを、ブリヤンと云ふの？」と訊いてゐたのを思ひ出した。

「馬鹿！あれは、フランス語だと云つてやつたぢやないか」

彼は、吹き出しながらさう云つた。

「だから、ちやんと佛語と書いてあるのぢやないの」

なるほど、よく注意して見ると、ジレツト（剃刀の名）とアミイ（友達）との間に、小さく佛語と書いてあつた。

「馬鹿！英語の單語なんか覺えて、何うするんだい」

彼は、口でさう云ひながらも、妻に對するいぢらしさで、胸が閉がるのを覺えた。

子

「何うぢやね、みんなに西洋料理を御馳走してやらうかね」

お客の大川が、藝妓たちに云つた。

「えゝ行きませう、何處がいゝかしら」

「村井の地下室！」

「いや、七階がいゝわ」

銘々に知つて居る西洋料理店の名前を云つた。

「靜榮さん、何處がいゝ。あんた一番年上ぢやからきめて下さい！」

大川は直ぐ横に坐つて居る靜榮に云つた。何處だつていゝぢやないか、何を食べるとか、何處へ行かうとか、何時もそんな何うでもいゝことを、大事さうに決める、人生の些末事をいかにも大仰にやつて行く、さう云ふ生活の淺はかさを、靜榮は考へながら、それでも

「精養軒は何う？」と、彼女は思ひ付いた名前を云つて見た。

「精養軒、結構！」

大川は直ぐ決めた。靜榮は、大川が嫌だつた。角力取りから、實業家になつて、相當な成功をしたと云ふ丈に、角力取言葉が、まだ拔け切らないやうに、性格にもある卑しさが、付き纒つてゐた。靜榮は、大川が彼女の歡心を得やうとして、彼女の云ひ分を、一も二もなく承諾するのが、無氣味でかつ不快だつた。

精養軒、靜榮は自分でさう云ひ出したものゝ、自動車に乘つてそれが上野の方へ動き出すと、直ぐ後悔してゐた。彼女は、藝妓に出る前、二三度父に連れられて、其處へ行つた。父がよく其處へ行き付けてゐるのを知つてゐた。さうした場所へ、こんな姿で行く、それが彼女には、あさましく耻しいやうに思はれた。父と一緒に來たときのボーイが居て、今でも自分の顏を覺えて居やしないか、と云ふ、輕い不安さへ感じた。そんなことを考へて居る裡に、車は御徒町から廣小路に出て、初秋の夜の新鮮な燈火の海を走しつてゐた。

精養軒の明るい控間に入つたとき、角力上りの醜い大男と、華美な友禪縮緬を着た三人の雛妓と、じみなお召を着た靜榮の五人の姿は、周圍の洋風の家具や裝飾と、少しもそぐはなかつた。

食堂に案内せられるとき、その入口で、食事を濟せて來る五人の會社員らしい男に會つた。が、食堂の中はガランとして、たゞ一組の客が、食事が丁度終つたと見え、緣側へ出て、コーヒを飲んでゐた。

靜榮は、ボーイが、直して具れた椅子に腰をかけようとして、ふとその二人の客の一人の方を見た。その刹那、彼女の顔は燒けるやうに熱くなつた。彼女は、緣側へ出るまでの五間ばかりの距離を、何う歩いたか分らなかつた。彼女が氣が付いたとき、彼女の父の青白い顔が、咫尺の間に彼女を見上げてゐた。眼が、驚きのためにオド／＼と顫えて居るのが、彼女には悲しかつた。二年ばかり會はない間に、白髪が電燈のほの暗い光にさへハッキリと見えた。

「靜子ぢやないか」

しはがれた低い聲で父は云つた。

「えゝ、お久し振りで御座います。」

靜榮は、いろ／＼の事が口に出かゝつた。父も、口の周圍を、もぐ／＼させてゐたが、何も云はなかつた。

靜榮は、ふとそのとき、父と話して居た客が、彼女の顔を見てゐるのを知つた。「藝者だな。藝者のくせに」さう云つた嘲が顔中に動いてゐるのを感じた。熱くなつてゐた顔が、急にさめてしまつた。彼女は逃げるやうにして自分の席へ歸つて來た。

父、母が死んでからは、父が何となく懷しまれた。十年前に、疑獄事件に座して、失脚して以來、もう一度浮び上らうとしてあせつてゐる父、彼女にはそれがいた／＼しかつた。三年前、彼女は父に賴まれて、母が殘して死んだ金の過半を盗み出すやうにして貢いだ。すると、一月も經たない内に、父が詐欺にかゝつて、金を取られたことが、新聞に出てゐた。その被害の金額が、彼女の貢いだ金額と同額だつた。

あせりぬいて居るのだなと彼女は思つた。一度實業界で、切り廻してゐた丈に、もう一度盛り返さう〳〵とあせつて居る父、さうあせりながら、段々年を取つて行く父のみじめな有樣が、始終頭の中にあつた。それを今、目のあたりに見る。乾度、何か事業の相談に違ない。その事業と云つたつて、どうせ又詐欺にでもかゝりさうな、ロクでもない話に違ない。が、現在の父には、とにかくそんな話をするために客を昔よく來つけてゐる妓へ案内して、食事をする位が、唯一の慰めに違ない。

「えい、何を喰べるのぢや。何を喰べるのぢや、定食がえいぢやらう。あんた達、定食が喰べ切れるかい」

「お客の大川が、大きい聲で、雛妓達にさう云つた。靜榮は、ふと父の心になつてゐた。娘が、――戶籍上はさうでなくとも。藝妓として、客に接して居るのを目前に見て居る父の心を思つて見た。一時は榮えた父失脚以來も體面丈は保つて來た父にそれがどんなに苦痛であるかは分つた。しかも、客、こんな卑しい、誰が見ても、輕蔑したくなる客に接してゐるのを。

靜榮は、父の落魄して居る姿を見る自分も、自分の藝者になつた姿を見てゐる父も、兩方ともあさましいやうな氣がした。父子がこんなあさましい會方をするのも、――さう思ふと父が恨めしかつた。家の事情から、愈々藝者に出なければならなくなつたとき、彼女は速達で、父に事情を告げた。どんなに、困つてゐても、こんな場合には、何うにかして吳れさうなものだ。さう思つて、父の返事を、何日も空しく待ちあかした。こんな所であつて、あさましい思ひをするのも、父が不甲斐ないからだ。父には、いゝ見せしめなんだ。もつと、こんな姿を見せてやれ、もつと〳〵藝者らしくなつてやれ、もつと下品に、あさましくなつてやれ。靜榮は、さう思つた。

「お飮み物は、何になさいますか。」

ボーイが、さう云つて訪ねたとき、彼女け眞先に云つた。

「妾ウヰスキイ」

それを、父に聞えよがしに、聲高く叫んだ。

靜榮が、玻璃盃（リキュール）でなしに、普通のコップに、並々と注いだ生のまゝのウイスキーを、半分以上飲み乾して

「あなた、これ丈助けてよ」

と、蓮葉に大川の口のあたりに持つて行つたとき、人並より背の低い彼女の父が、そのいかり肩を更に聳かしながら、客の後から食堂を出て行くのが、彼女の酒のためにあつくなりかけた眼に、ちらりと映つた。

山川均著

レーニンとトロツキー

大哲人にして、稀世の英雄たる彼レーニンの險竦比ひなき半生涯の生立記を兼ねたる痛快なる思想評傳である。著者が思想家として卓然として一頭地を拔き彼等二英雄を品隲するに最適任者なるは呶々を要せず。

七版

東京芝櫻田備前町
改造社
振替東京八四〇二

價壹圓九拾錢
送料金拾六錢

中澤臨川著

嵐の前

彼ニイチエの情熱に情死したとまで稱せらるる我論壇の第一人者たりし臨川が彼の失戀をモデルにして描き出した涙ににじむ思想小說を見よ。

拾貳版

東京芝櫻田備前町
改造社
振替東京八四〇二

定價金貳圓
送料金拾六錢

ラッセル著 ドラ・ラッセル著

たる我國民性を基礎とせる彼の理想、哲學を述べたるものにして、彼の『愛國心の功過』の一文の如き、空前の大論文として單り思想界のみならず、官僚、軍閥の徒に至る迄一大刺戟を與へ、異常の感動を與へたるものたるは、今尚世人の記憶に新なる所である。我社は玆に此世界的大思想家の來朝を記念せむが爲めに、敢て此貴重なる一書を江湖に薦めむとするものである。

「文明の再建」として發行豫定の所都合上書名を「愛國心の功過」と改め發行いたします、勿論內容には少しも變更ありません。

新刊發賣

四六版布裝函入
定價壹圓八拾錢
送料金拾六錢

東京芝櫻田備前町
改造社
振替東京八四〇二

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY. TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 SAKURADABIZEN-CHO SHIBA, TOKIO

大正八年三月廿一日第三種郵便物認可
大正拾壹年貳月壹日發行（毎月一回一日）
大正拾壹年壹月廿日印刷納本 第四卷 第貳號 貳月號 定價金八拾錢